

改訂・増補『橘高薰風川柳句集』全句索引

栗原道夫 編

この索引は、平成14年にまとめた『橘高薫風川柳句集』全句索引の改訂・増補版である。

『橘高薫風川柳句集』は、平成13年の春の叙勲記念に、それまでの川柳人生の集大成として、同年9月20日に沖積舎から刊行された句集である。四六判・三五四頁。定価八千円。装釘は、伊丹啓子。

序文・あとがき・帯文を載せておく。

序

視野無限

この言葉に尽く

昭和四十年初夏のころ

麻生路郎識

あとがき

吉田茂首相が長生きの秘訣を問われ、「人を喰っているからだ」と答えられたと聞き、イギリス仕込みのユーモアの見事な切れ味を認識いたしました。が、その伝でいくと、私は「川柳を食べているお蔭で七十五歳までも長生き出来た」と言えそうです。

まして川柳生活四十六年、今年の春の叙勲で木杯一組台付を賜与されました。思いもかけぬことで、これは川柳塔社にとつても、先の西尾葉先生に続く慶事です。川柳界の組織の力、先輩のお導きと仲間のご支援が無ければ叶うことではありません。この喜びのお礼の意味で、私は川柳活動の集約的な句文集を編み、関係各位に贈呈することに致しました。先ずは上巻の句集成をお届け致します。

初心時代から書き散らした自選句の完全な収集もままならず、このようになりまして。

しかしながら、今年は恩師麻生路郎・葎乃両先生の比翼塚を、先生の故里尾道市に建立する念願も達成出来、二重の喜びに浸っております。心からの感謝あるのみです。

このたびも沖積舎の沖山隆久社長のお力添えに負うところ大で、これも心からのお礼を申し上げます。

平成十三年七月十一日

橘高 薫風

函の帯文は、次のとおりである。

〔本の背側〕

半世紀記念出版 沖積舎

〔本の表紙側〕

川柳は人間陶冶の詩である。——麻生路郎

川柳は穿ちだ。真理や権力をうがち、生活と人情をうがち、恋や感性、死までもうがち。穿ちの精神を発揮する薫風句の真骨頂を集成!!

〔本の裏表紙側〕

〔収録句集〕

乱れ髪

有情

檸檬

肉眼

愛染

花径

『橘高薫風川柳句集』の編集について、生前の薫風から次のように伺った。この句集を編むに当たり、過去の句集の句を選句していくと一〇〇〇句を切ってしまった。そこで、句を拾い直し、さらに「乱れ髪」の章をもうけたということだ。

「乱れ髪」の章は、初心時代から現在に至るまでの句会作品を中心に収録。「有情」「檸檬」「肉眼」の章は、元の句集『有情』『檸檬』『肉眼』から収録。「愛染」の章は、句集『愛染』の作品を中心に、『古稀薫風』及び『古稀薫風』以後の作品も収録。

「花径」の章は、『古稀薫風』及び『古稀薫風』以後の作品を収録。

結果、

「乱れ髪」の章——二六三句収録

重複して収録している〈長年の欲〉〈読む限り〉の二句は、「愛染」の作品として残す。

「有情」の章——三一八句収録

重複して収録している〈蛇行して〉は「檸檬」の句、〈地震にも〉は「乱れ髪」の作品として残す。

「檸檬」の章——一七〇句収録

「肉眼」の章——三五一句収録

「愛染」の章——四六七句収録  
重複して収録している〈父の苦悩に裸の煙草が散らばっている〉は、〈裸の煙草が散らばっている父の苦悩に〉を「乱れ髪」の作品として残す。

「花径」の章——二九三句収録

重複して収録している〈弟も〉〈証明書〉の二句は、「乱れ髪」の作品として残す。

以上、重複した七句を除いて、全部で一八六二句収録している。

薫風句集には、『檸檬』を除いて、『有情』『肉眼』『愛染』『古稀薫風』すべてに初句索引が付けられているのに、『橘高薫風川柳句集』には索引がない。疑問に思いお聞きすると、時間がなかったからだとのご返事であった。それなら、私がさせて戴こうということで、平成14年に全句索引(総ルビ付)をまとめた。

索引をまとめて三年も経たないうちに、薫風は平成17年4月24日(日)、幽冥境を異にした。以来、私と川柳との繋がりは、「川柳塔わかやま」の課題吟の選と、何度か「川柳塔」に原稿を書いた程度である。

ところが、平成十九年に、薫風と親しかった方の推薦で『川柳総合大事典』の執筆のお手伝いをさせて戴き、資料を活字として残すことの大切さを再認識させられた。それで、今回の改訂・増補版の作成を思い立った次第である。

当初は、薫風作品の初出を調べて記録しようと思っていたのだが、そのうちに、これもしなければあれもしなければと思うようになり、次のような方針を立てた。

- (1) 前索引の読みや字の誤りを訂正する。
  - (2) 初出を確認する。
  - (3) 初出時の句形が『橘高薫風川柳句集』と異なる句については、その異同を記録する。
  - (4) もとの句集、『有情』『檸檬』『肉眼』『愛染』『古稀薫風』『師弟』にはあるが、『橘高薫風川柳句集』には収録されなかった句について記録する。それらの句の初出も記録する。
  - (5) 薫風作品は、複数の句集に収録されたものも多いので、どの句集に収録されているかを記録する。
  - (6) 必要な句については、補注をつける。
- 以上、多くの方の御協力を得て、ひとまず完成させることができた。初出未詳の句や誤りについて、御教示・御指摘戴ければ幸甚である。

平成二十年七月十一日(金)、薫風生誕82年目の日に

栗原道夫

【資料提供・調査等お世話になった方】

- ・井伊東吉、岩佐ダン吉―岸和田市民川柳大会
- ・石橋優明―「雨笠煙蓑」「万丈光」の補注
- ・牛尾緑良―川柳（塔）わかやま、薫風書簡
- ・江見見清―故田中正坊御家族の紹介
- ・大木俊秀―川柳春秋（NHK学園）
- ・奥田みつ子―朝日新聞夕刊、サークル檸檬、西宮北口句会、翠洋会
- ・片岡智恵子―サークル檸檬（No.12〜55）
- ・川上大輪―みか月記念川柳大会
- ・橘高充―川柳えんぴつが今も送られていることを教わった。
- ・木本朱夏―三幸川柳教室、各大会での薫風作品
- ・小島蘭幸―たけはら川柳会大会、昭和56年岡山県川柳大会、たましま30周年大会、法名「静水（じょうすい）」の読み
- ・小寺花峯、福士慕情―川柳塔あおもり、川柳塔みちのく、東奥日報
- ・小西雄々―松露川柳（昭和35年11月号）
- ・高杉千歩―朝日なにお柳壇、鬼遊宛葉書、川柳（構造社）、新聞記事
- ・故田中正坊御家族―もくせい川柳会、サークル檸檬（No.101〜）、豊中川柳大会、京都塔の会、西宮北口句会、翠洋会、日川協通信
- ・高田博泉―三井ヶ丘川柳会、川柳ねやがわ、寝屋川市民川柳大会
- ・竹治ちかし―いずも川柳会
- ・中原諷人―みか月記念川柳大会
- ・西出楓葉―山倉洋子の紹介
- ・仁部四郎―川柳塔唐津支部川柳大会、唐津市文化祭川柳大会
- ・藤田泰子―片岡智恵子の紹介
- ・政岡日枝子―川柳塔きやらぼく忘年句会、みか月川柳大会、茗人忌川柳大会、鳥取県川柳大会、「鷲峰（じゅうぼう）」の読み
- ・山倉洋子、故山田加勢男御家族―柳都、加勢男宛年賀状、書簡
- ・吉田秀哉―北陸小松川柳大会

【資料を調査して送って下さった図書館・役所】

- ・久米南町図書館（國忠成子・大家千栄美）―西日本川柳大会、川柳風

物語、紋土（昭和48年5月号）

- ・高知県立図書館―川柳木馬創刊号
  - ・小松市立図書館―川柳わかまつ16号（昭和47年9月、北陸小松川柳大会）
  - ・青森県外ヶ浜町役場（佐々木慎）―川柳風物語（第8回〜10回）の提供
  - ・埼玉県立浦和図書館―川柳さいたま（昭和52年7月号）
- 【編者が訪れた図書館・資料館と調査した資料】

以下に挙げる図書館を訪れたが、資料をすべての年代に亘って見たわけではない。欠号の多い図書館も多々あること、また編者の時間的余裕のなさと、すべてを見られなかったものもあることをお断りしておく。

- ・大阪府立中央図書館―川柳雑誌、川柳塔、川柳番傘、合同句集明和、全日本川柳大会作品集、平成柳多留、日本川柳秀句・推薦句集、サンケイ新聞夕刊、川柳文学、吉備団子、オール川柳
- ・大阪府立中之島図書館―川柳番傘、川柳せんば
- ・京都府立図書館―川柳ジャーナル
- ・京都府立総合資料館―川柳平安、川柳新京都、川柳都大路、川柳ノート
- ・堺市立中央図書館―川柳年鑑、愛染、全国川柳作家年鑑
- ・兵庫県立図書館―川柳ふあうすと、時の川柳、全国川柳作家年鑑、吉備団子、川柳ささやま
- ・神戸市立中央図書館―全国川柳作家年鑑
- ・岡山県立図書館―川柳岡山、川柳ますかつと、川柳塾、川柳いづみ、吉備団子、はだか（西大寺川柳社）、川柳玉島、川柳大原、寺尾俊平句集『風の中』、藤川良子句集『さくらちりぢり』
- ・国立国会図書館東京本館―川柳ジャーナル、柳都、ねぶた（青森川柳社）、川柳公論、川柳高知、川柳木馬、川柳研究、川柳さつぽろ、日川協、日川協通信、川柳きやり、川柳しなの、川柳えんぴつ、川柳春秋（NHK学園）、オール川柳、川柳マガジン、川柳新聞、NHK学園全国川柳大会作品集、川柳塔みちのく、川柳たけはら
- ・俳句文学館―三溝又三（薫風の伯父）句集『句集沙美』（昭和57年1月15日発行・みちのく発行所）
- ・鳥取県立図書館―川柳（構造社）、川柳いづみ、川柳文学、川柳菜の花、

川柳堺、川柳天守閣、八尾市文化祭川柳大会、大阪文化祭第19回川柳大会作品集、全国川柳作家自句自解集（川柳路吟社）、全国川柳作家年鑑、気高町制施行四〇周年記念誌上川柳大会入選作品集、森田若人追悼川柳大会（昭和51年11月21日）、うみなり川柳十五周年・加藤貞山喜寿祝賀川柳大会（昭和53年4月23日）、佐伯越子第四回全日本川柳大会大会賞受賞記念川柳大会（昭和55年11月3日）、茗人忌川柳大会、みか月記念川柳大会、大陸柳人同窓会（第8・9回）、川柳塔勉強室（No.5〜11）、大萬川柳（昭和29年〜31年）、平成柳多留第三集、川柳鳥取、川柳うみなり、打吹川柳、川柳松露

・島根県立図書館―川柳いずも、川柳塔まつえ、松江番傘

#### 【その他参考資料】

有情、檸檬、肉眼、愛染、師弟、古稀薫風、喜寿薫風、橘高薫風川柳句集、橘高薫風川柳文集、川柳展望、川柳大学、川柳（塔）わかやま、俳句現代、川柳総合事典、川柳総合大事典（用語編）（人物編）、川柳の群像、山陽日々新聞HP、広辞苑・日本国語大辞典等各種辞書、各ホームページ

以上敬称略

### 本索引の構成について

#### ㊦ 全句索引（P6〜P101）

この索引は、『橘高薫風川柳句集』所収の句を五十音順に並べて、ルビをふったものである。ルビをふったのは、薫風作品が正しく広く読まれることを願う気持ちからである。濁音が句頭にある句は、その項の最後に配列してある。また、「七」を大阪弁では「ヒチ」と発音し、薫風もそう発音したので、「七（シチ）」で始まる句は、「ヒチ」の所にある。

① 各句の上に、句の番号を付した。

② 句集の誤字については、句中に正しいものを（ ）内に示した。また、薫風の意向により、句集とは異なる表記にするものも同様に（ ）内に示した。

③ 句の下の数字は、『橘高薫風川柳句集』のその頁に収録されていることを示す。その下の「」は、「乱れ髪」「有情」「檸檬」「肉眼」「愛染」「花

径」のどの章の句かを示す。

④ 句集には、同じ句が何句か重複して収められている。薫風の意向により削除する句を×印で示した。つまり、×印がついていない句を薫風作品として残す。

#### ㊦ 脚注（P6〜P101）

それぞれの頁の下に、脚注を付けた。脚注の番号は、句の番号と同じである。

① その句の初出をまず示した。

五三五 「川柳雑誌」昭和31年3月号。「近作柳樽」欄。

五三五の（毛皮着て貧しい心とは見えず）は、「川柳雑誌」の誌友投句欄近作柳樽に掲載されたものであることを示す。薫風子が不朽洞会員になったのは昭和32年2月だが、3月号までは近作柳樽欄に掲載されている。4月号からは、川柳塔欄での掲載となる。

② 初出時、一字空白のある句について、次のように示した。

二二二 「川柳塔」昭和46年12月号。「来て」の後、一字空白あり。  
二二二の（秋が来て 笛は太鼓を恋しがる）は、「川柳塔」に発表したとき  
には、（秋が来て 笛は太鼓を恋しがる）であったことを示している。

薫風句集で一字空白の表記を多用しているのは、『有情』『肉眼』『橘高薫風川柳句集』『喜寿薫風』である。『有情』に一字空白の表記が多いのは、路郎の指導によるものである。『檸檬』は、薫風一人で編集をした句集である。『有情』の句も再録しているが、句の天地を揃えた編集のせいもあつてか、一字空白のある句は皆無である。『肉眼』（薫風句集で唯一過去の句集の作品を再録していない句集）に一字空白の表記が多いのは、路郎亡き後、路郎精神を頑なに守つていこうという気持ちの現れではないだろうか。『肉眼』に続く『愛染』『古稀薫風』『師弟』は、『有情』『肉眼』の句も多く再録しているのに、一字空白の表記をしていない。『愛染』以降、一字空白の表記に対して疑問を感じたのではないかと、編者は推測する。『橘高薫風川柳句集』に一字空白の表記が多いのは、川柳活動の集約ということ、元の句集の表記を尊重したのだと考えられる。『橘高薫風川柳句集』以後の『喜寿薫風』に一字空白の表記が多いのも同様だろう。

③ 初出時との句の異同を、次のように示した。

二一六 「炎天に」↑「七月に」。

④ 二一六（炎天に寒疣立てて師を葬送る）は、初出時（七月に寒疣立てて師を葬送る）であったことを示している。収録されている句集を、次のように示した。

五五八 『肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。

五五八（恋人がいま肉眼に入り来る）は、『橘高薫風川柳句集』以外に、『肉眼』『愛染』『古稀薫風』『師弟』『喜寿薫風』に収録されていることを示している。句集『有情』は『有』、『樺標』は『樺』、『肉眼』は『肉』、『愛染』は『愛』、『古稀薫風』は『古』、『師弟』は『師』、『喜寿薫風』は『喜』で示す。

⑤ 初出時の前書・句集での前書

a 初出時と異なる場合、次のように示した。

六一八 「川柳雑誌」昭和35年10月号。「或る恋」の前書あり。『有』『樺』にあり。『有』『句集』とも前書なし。『樺』には、「恋」の前書あり。

六一八（独楽二つ回りいることは息苦し）は、「川柳雑誌」に発表されたときには「或る恋」の前書があり、『有情』では省かれ、『樺標』では「恋」の前書を付け、『橘高薫風川柳句集』では、また省かれたことを示している。『橘高薫風川柳句集』は『句集』で示す。

b 初出時と同じ場合、次のように示した。

一〇 「川柳塔」昭和63年6月号。「高鷲亜鈍さんへ」の前書あり。『古』にあり。句集も同じ前書。

この場合の句集とは『古稀薫風』『橘高薫風川柳句集』のことを指す。一〇（赤いベレー老いてますますフオーヴィズム）は、「川柳塔」に『高鷲亜鈍さんへ』の前書付で発表され、『古稀薫風』『橘高薫風川柳句集』にも同じ前書が付いていることを示している。

c 複数の作品を前書付で収録している場合、どのような順に収録しているかを、次のように示した。

八 初出未詳。『句集』では、「能登から佐渡へ 八句」の8句目で

「佐渡を去る」の前書あり。他7句は、一一四一、九四三、二八

三、一八一、一三三七、一五六一、二六八の順に収録。

⑥ 語釈・補足説明など、脚注欄に記した。脚注欄に収まらないものについては、補注の頁に説明があることを、↓補注。で示した。

⑦ その句に関連する事項や説明が、脚注の他の箇所や補注の頁にあるものを次のように示した。

八七八 八七九参照。補注二七九参照。

八七八（水郷の微風から雨に移る候）の関連事項や説明が、八七九の脚注と補注二七九にあることを示している。

⑧ 前索引（平成14年9月発行）を作成する過程で、句の読みや解釈について薫風から多くのことを教わった。※印を付けたものは、その時に付けた注であり、今回もそのまま残した。ただし、説明をさらに付け加えたものもある。

⑨ 脚注に、明和病院青蛙川柳会とあるのは、薫風が療養なさっていた頃の、真の初心時代の句。『橘高薫風川柳句集』で言えば、P13の冒頭句（乱れ髪式部の世より恋は憂き）から、（乱れ髪恋の甘さは遠い過去）（カナリヤもいてアパートの新世帯）（病める子に母は茶断ちの思いやり）（苦勞人孫には甘い爺であり）（肋骨のふくらむ程の若い夢）（葉つ葉服着て春泥をためらわず）（地震にも煙草を吸うて居った父）（悲しさに酔う幕切れの紙の雪）までの九句。

⑩ 補注（P102）（P125）

補注の見出し番号は、通し番号ではなくて、それぞれの句の番号である。

⑪ 句集『有情』『樺標』『肉眼』『愛染』『古稀薫風』『師弟』『喜寿薫風』について（P126）（P163）

⑫ それぞれの句集の序文・あとがき・鑑賞文などを記した。

⑬ それぞれの句集所収の句で、『橘高薫風川柳句集』未収録のものを記録した。『喜寿薫風』については、『橘高薫風川柳句集』以後の句を記録した。

【あ】

- 一 ああ五十妻が悔る子が叛く 2 5 3 「愛染」
- 二 阿難尊者に遠し恩師の忌 2 2 8 「愛染」
- 三 哀歎の底に穴ある植木鉢 2 1 2 「肉眼」
- 四 愛読書青春以来ツルゲネフ 1 4 7 「檸檬」
- 五 愛の巢という可憐さはすでになし 5 5 「乱れ髪」
- 六 会い別れ恙無くあれ句碑と友 2 9 9 「花径」
- 七 青い葉は花よりすがし晶子の忌 2 5 2 「愛染」
- 八 青佐渡を墓と思いは只今なり 1 8 1 「肉眼」
- 九 青芝にQ クウオーターバツクウしわかまる B牛若丸の生まれかわり 2 8 3 「愛染」
- 一〇 赤いベレー老いてますますフオーヴィズム 2 8 0 「愛染」
- 一一 阿か咩か混濁の世に処する身は 3 1 7 「花径」
- 一二 赤鬼も煩惱を持つ臍を持ち 2 2 9 「愛染」
- 一三 赤電話髭の殿下じやなかつたか 2 6 0 「愛染」
- 一四 赤トンボ悲運の人を悲しませ 2 6 「乱れ髪」
- 一五 あかねさす※白鳥宮に初詣 2 8 7 「愛染」
- 一六 赤鼻の軒佳境に入りたり 2 1 4 「肉眼」
- 一七 赤帽もそのうちみんな齢をとり 1 6 7 「肉眼」
- 一八 赤星の誠心誠意赤き星 1 3 6 「檸檬」
- 一九 秋風に傷なきものはなかりけり 1 8 2 「肉眼」

- 一 「川柳展望」3号(昭和50年11月1日発行)。「愛」「古」「師」にあり。薰風は大正15年生まれなので満49歳の時の作。
- 二 初出未詳。「愛」「古」にあり。阿難は、釈迦の従弟で十大弟子の一。釈迦滅後、教団の統率者となる。
- 三 「川柳ジャーナル」昭和48年3月号。招待作品「二兵の生」8句の2句目。「肉」「愛」「古」にあり。↓補注。
- 四 「川柳雑誌」昭和39年1月号。各地柳壇「明和川柳研究会」にあり。「ツルゲネフ」↑「ツルゲネフ」。「檸檬」「愛」「古」「師」にあり。ツルゲネフ(1838〜1883)は、ロシアの小説家。「初恋」が有名。
- 五 初出未詳。
- 六 「川柳塔」平成6年2月号。↓補注。
- 七 「川柳展望」2号(昭和50年8月1日発行)。「愛」「古」にあり。与謝野晶子は、明治11年12月7日(土)に生まれ、昭和17年5月29日(金)、64歳で死去。
- 八 初出未詳。「句集」では、「能登から佐渡へ 八句」の8句目で「佐渡を去る」の前書あり。他7句は、一一四一、九四三、二八三、一八一、一三三七、一五六一、二六八の順に収録。「肉」「愛」「古」にあり。「肉」には、他に(さい果ての旅に見し滝 海へ落つ)、「川柳塔」昭和43年8月号)と(灯台と神の塗らせし花との白(初出未詳)の2句収録。「愛」「古」には、(灯台と)の句がなく、9句収録。↓補注。
- 九 「川柳塔」平成2年6月号。「牛若丸の」↑「牛若の」。「古」にあり。長男充氏の試合を観戦して作った句。アメリカカンファットボールを詠んだ句は5句あり、七一、一五一、九、一五〇一、一五一八の順に収録。
- 一〇 「川柳塔」昭和63年6月号。「高鷲亜純さんへ」の前書あり。「古」にあり。句集も同じ前書。フオーヴィズムは、20世紀初めにフランスで起こった絵画運動。原色の対比と大胆な筆触による形態の単純化を特徴とする。
- 一一 「川柳塔」平成9年6月号。
- 一二 初出未詳。「愛」「古」にあり。
- 一三 「川柳塔」昭和57年6月号。「愛」「古」にあり。三笠宮寛人(ともひと)親王(昭和21年1月5日生まれ)は、「髭の殿下」として親しまれる。
- 一四 「川柳塔」平成元年9月号。「悲運の人」↑「悲しい人」。
- 一五 「川柳塔」平成6年2月号。「古」にあり。※白鳥宮：香川県大川郡白鳥町(しろとりちょう)の白鳥神社。白鳥八幡宮。補注六参照。
- 一六 「川柳塔」昭和48年6月号。「肉」にあり。

- 二〇 秋風の吾妻言問秋の橋  
 二一 秋風の天神様の細道じや  
 二二 秋が来て笛は太鼓を恋しがる  
 二三 秋空に遠い景色を思い出し  
 二四 商いのラムネ一本抜く暑さ  
 二五 秋なれば酒買ひ 仏パリーまで  
 二六 秋の雨 しずかに粥がこなれゆく  
 二七 秋の月餅 春 風点心店にありや  
 二八 秋の恋 受話器の奥で時計鳴る  
 二九 秋深し位牌に秋の一字あり  
 三〇 秋ふたりまるで果物静物画  
 三一 秋吉台 石の饒舌 雲の黙  
 三二 秋よりも爽やかな日よ誕生日  
 三三 握手して生き延びる血を貰いけり  
 三四 握手して猫ほど柔らかい手あり  
 三五 握手好きこの政治家の汚れた手  
 三六 悪銭を分かち淋しさを分かち  
 三七 悪筆も墨痕淋漓年賀状  
 三八 悪名も売ればよしとボスらしい  
 三九 明け方の火事を病人知っていた

3	0	8	「花径」
1	6	5	「肉眼」
2	0	3	「肉眼」
1	4	7	「檸檬」
8	7		「有情」
3	2	1	「花径」
1	9	6	「肉眼」
2	7	1	「愛染」
2	1	0	「肉眼」
2	8	9	「愛染」
3	2	0	「花径」
1	7	8	「肉眼」
4	2		「乱れ髪」
3	3	8	「花径」
3	4	2	「花径」
3	9		「乱れ髪」
1	3	9	「檸檬」
2	4	1	「愛染」
4	6		「乱れ髪」
6	4		「有情」

- 一七 「川柳塔」昭和42年5月号。「肉」「愛」「古」にあり。  
 一八 初出未詳。「檸檬」にあり。句集には、「句集」「新子」出版を祝し時実新子さんへの前書あり。「新子」は昭和38年12月1日発行。B6判122頁。定価三百円。↓補注。  
 一九 初出未詳。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。  
 二〇 「川柳塔」平成7年12月号。  
 二一 初出未詳。「肉」「愛」「古」にあり。  
 二二 「川柳塔」昭和46年12月号。「来て」の後、一字空白あり。  
 二三 「愛」「古」「師」にあり。↓補注。  
 二四 「川柳雑誌」昭和38年2月号。「檸檬」「愛」「古」にあり。  
 二五 初出未詳。「有」「檸檬」「愛」「古」にあり。  
 二六 「川柳塔」平成9年11月号。「百済観音」の前書あり。「師」「喜」にあり。句集も同じ前書。平成9年（一九九七）は、「フランスにおける日本年」に当たり、日本の文化や特産品がフランスで紹介された。百済観音は、パリのルーブル美術館で展観された。  
 二七 「川柳塔」昭和46年2月号。「胃手術（五句）」の前書あり。「肉」「愛」「古」にあり。「肉」「句集」とも「入院手術十句」の前書あり。「愛」「古」には、三七七、七四五、一四七、一七〇六の4句がなく、6句収録。どの句集にも収録していない句は、（浩然と漢詩読みおり手術前）（川柳塔）昭和45年12月号。（切り除りし肝に秋心を贈るのみ）（川柳塔）昭和46年1月号）の2句。↓補注。  
 二八 「川柳塔」昭和59年12月号。「愛」「古」にあり。「愛」「句集」とも「中国吟行 十句」の前書あり。「古」には、（奇巖重畳影かと見れば影の山）がなく、9句収録。↓補注。  
 二九 「川柳塔」昭和47年11月号。「肉」にあり。  
 三〇 「川柳塔」平成6年12月号。「古」「師」「喜」にあり。  
 三一 「川柳塔」平成9年10月号。「師」「喜」にあり。  
 三二 「川柳塔」昭和43年6月号。「秋吉台」「饒舌」の後、一字空白あり。「肉」「愛」「古」にあり。6月号の「柳界展望」に、三月三十一日 母と安芸の宮島から秋吉台へ。とある。  
 三三 初出未詳。  
 三四 「川柳塔」平成13年5月号。  
 三五 サークル檸檬句会。平成6年2月13日（日）。「猫」小林ゆかり選。  
 三六 初出未詳。  
 三六 「川柳雑誌」昭和38年11月号。「分かち」↑「分ち」。「檸檬」「愛」「古」にあり。  
 三七 「川柳塔」昭和54年1月号。「愛」「古」「師」にあり。

四〇	明けましておめでとう無言電話にも	2	7	6	「愛染」
四一	揚雲雀迎陵頻伽となりおおせ	2	6	3	「愛染」
四二	阿古屋貝売る鋪いつも朝焼けぬ	1	3	6	「檸檬」
四三	朝々を羯諦羯諦と悔いつづけ	2	5	9	「愛染」
四四	朝顔のファンファアレの中僕は生れた	2	3	5	「愛染」
四五	朝粥へ在りし日の師のおちよぼ口	3	1	0	「花径」
四六	足摺の雨は遍路へ地から降る	2	1	4	「肉眼」
四七	足弱の師なり天女に手を引かれ	2	9	3	「愛染」
四八	紫陽花の最後の色に梅雨が明け	3	6		「乱れ髪」
四九	あじさいの七変化して不垢不淨	2	9	5	「愛染」
五〇	あじさいのふつくらさんとてんと虫(てんと虫)	3	1	8	「花径」
五一	紫陽花の炎群愛染不動かな	2	3	6	「愛染」
五二	明日落ちる木の実同士のさんざめき	1	7		「乱れ髪」
五三	暖い書齋 麻疹の子にとられ	6	5		「有情」
五四	あたたかし 孟母のような母ならで	8	3		「有情」
五五	扱いのこんなにならぬ塩砂糖	2	6		「乱れ髪」
五六	あと一歩あと一歩よき言葉なり	2	9	9	「花径」
五七	姉あけびに目鼻栗のおつむ	3	1	3	「花径」
五八	姉の紅黙って借りて魔女になる	2	5		「乱れ髪」
五九	あの女ほたほた炎 落し行く	2	4	5	「愛染」

- 三八 初出未詳。
- 三九 「川柳雑誌」昭和33年10月号。『有』にあり。
- 四〇 「川柳塔」昭和62年1月号。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品「老司祭」25句の3句目。『古』『師』にあり。
- 四一 「川柳塔」昭和58年5月号。『愛』『古』『師』『喜』にあり。迎陵頻伽は、仏教で極楽に在るといふ想像上の鳥。妙な鳴き声を持つとされる。「川柳塔」昭和59年1月号「私の一句」にも発表。「私の一句」は、前年度の自信作を載せる特集。
- 四二 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。
- 四三 「川柳塔」昭和56年10月号。『愛』『古』にあり。
- 四四 「川柳塔」昭和53年7月号。各地柳壇「菜の花句会」にあり。『愛』『古』にあり。
- 四五 「川柳塔」平成8年1月号。「海潮(うしお)荘」の前書あり。『句集』には「海潮温泉 四句」の前書で、一四五、一五五、一七一、四五の順に収録。「師」は西尾菜のこと。補注一四五参照。
- 四六 「川柳塔」昭和48年8月号。「肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。7月号の「同人動向」に、「母堂と二度目の四国遍路へ行き本社句会の八日(6月句会―編者注)に帰阪。出席。親孝行をつづけられている。」とある。
- 四七 「川柳塔」平成7年7月号。「哀悼」の前書あり。『古』にあり。『古』では「哀悼 西尾菜先生」の前書。『句集』では、それに「五句」の但書。いずれも、一三三〇、四七、二二〇、一六七九、一二二八の順に収録。西尾菜は、明治42年3月6日(土)生まれ。「川柳塔」二代目主幹。平成7年5月15日(月)、87歳で死去。17日の葬儀の薫風の弔辞に、「傘いらぬ旅へ 卯の花くたし哉」がある。
- 四八 初出未詳。
- 四九 「川柳塔」平成9年8月号。『師』『喜』にあり。↓補注。
- 五〇 「川柳塔」平成9年8月号。補注四九参照。
- 五一 「川柳塔」昭和53年9月号。『愛』『古』にあり。句集『愛染』の題名となった句。↓補注。
- 五二 初出未詳。
- 五三 初出未詳。『有』にあり。
- 五四 「川柳雑誌」昭和34年12月号。『有』にあり。
- 五五 もくせい川柳会。平成4年4月20日(月)。「塩」春城武庫坊選。
- 五六 「川柳塔」平成6年2月号。補注六参照。
- 五七 「川柳塔」平成8年12月号。「匠とみのり」の前書あり。

- 六〇 あの年の祇園囃子が雲に住む
- 六一 あの髭は黒 縄地獄からの使者
- 六二 あの世からこの世は見えてさし向かい
- 六三 溢れる湯先ず爺が溶け孫が溶け
- 六四 あぶら足安サラリーを象徴し
- 六五 天城峠のフライドチキン缶コーラ
- 六六 天降りしたばかりなるお元日
- 六七 雨垂れへ 錦を飾ること誓う
- 六八 海女の墓 日は海に出て 海に没る
- 六九 雨上り 猫はや歩く石 畳
- 七〇 飴口に黙禱したを言わぬなり
- 七一 アメリカンフットボールは麻薬かな
- 七二 争いはない地球儀の海の青
- 七三 蟻たちよ三三五五と帰りなさい
- 七四 歩き初めの子を元旦の地へおろす
- 七五 アルバムに明治の笑う顔がない
- 七六 あわててもあわてなくても熊の顔
- 七七 淡雪のいつから君を知りそめし
- 七八 鮫鱈も汗かきならん鮫鱈鍋
- 七九 庵主古希百楽庵を目指しませ

5 4	「乱れ髪」
3 0 7	「花径」
2 8 2	「愛染」
3 4 3	「花径」
1 4 1	「檸檬」
4 7	「乱れ髪」
3 3 4	「花径」
2 0	「乱れ髪」
1 1 7	「有情」
2 0 2	「肉眼」
3 9	「乱れ髪」
2 8 3	「愛染」
5 1	「乱れ髪」
3 3 2	「花径」
1 6 0	「肉眼」
2 5	「乱れ髪」
3 2 7	「花径」
1 3 6	「檸檬」
2 8 8	「愛染」
3 2 6	「花径」

『句集』には前書なし。

五八 もくせい川柳会。昭和60年3月18日（月）。「姉」安藤寿美子選。

五九 「川柳塔」昭和54年10月号。『愛』『古』にあり。

六〇 三井が丘川柳会。昭和54年7月15日（日）。「自由吟」軸吟。

六一 「川柳塔」平成7年9月号。『古』にあり。黒繩地獄は、八大地獄の第二。灼熱の鉄の繩で縛られ、熱鉄の斧で切り裂かれるという。

六二 「川柳塔」平成2年4月号。「栗谷春子さんのご夫君を悼む」の前書あり。「この世は」↑「香華は」。『古』『喜』にあり。句集には、「二句」の但書。この句の前が六一五の句。

六三 サークル檸檬。平成6年3月6日（日）。「湯」片岡智恵子選。

六四 「川柳雑誌」昭和38年7月号。『檸檬』『愛』にあり。

六五 第14回鳥取県川柳大会。平成3年3月31日（日）。「峠」軸吟。

六六 初出未詳。

六七 「川柳塔」平成6年6月号。各地柳壇「ほたる川柳同好会」にあり。「雨垂れへ」↑「雨垂れに」。「雨垂れへ」の後、一字空白あり。

六八 せんば川柳社本社句会。昭和34年7月4日（土）。「自由吟」岡橋宣介選。『有』『檸檬』『喜』にあり。

六九 「川柳塔」昭和46年10月号。「馬籠・妻籠にて三句」の前書あり。『肉』にあり。句集も同じ前書。いずれも三〇六、四九五、六九の順に収録。10月号の「柳界展望」に、「八月十九日（木曜―編者注）二十日、名古屋から馬籠・妻籠への木曽路の一人旅を楽しんだ。」とある。三〇六参照。

七〇 初出未詳。

七一 「川柳塔」平成2年6月号。『古』にあり。九参照。

七二 三井が丘川柳会。昭和53年3月19日（日）。「地球」互選。

七三 「俳句現代」平成12年6月1日発行。「タツノオトシゴの家」10句の6句目。10句のうち、8句目の（もつと光をもつと空気を灌仏会）は、（もつと光をもつと 空気をお元日）の形に変えて『句集』に収録。一六九二参照。

七四 「ふあうすと」昭和41年6月号。「第11回全国川柳作家合同句集」にあり。「歩き初めの子を元旦の地へおろす」↑「元旦の地へ歩き初む子をおろす」。『肉』にあり。

七五 もくせい川柳会。昭和63年2月15日（月）。「アルバム」阿萬萬の選秀句。「明治の」↑「明治は」。

七六 「川柳塔」平成11年9月号。

八〇	行灯の灯は恩愛を思わしむ	1	4	5	「檸檬」
八一	言い当ててさびしいものに人の齡	1	4		「乱れ髪」
八二	いい返事してブランコを飛降りる	9	0		「有情」
八三	いい返事するお隣のお嫁さん	2	9		「乱れ髪」
八四	いい眉に床屋剃刀当てずおく	1	1	7	「有情」
八五	飯盛山 遺恨の如く雪残る	1	6	8	「肉眼」
八六	家へ帰れば襷褌も替える男だが	1	4	6	「檸檬」
八七	家元のお供で寺の昼を食べ	2	5	0	「愛染」
八八	家康も上様領収証の僕も	3	3	3	「花径」
八九	イカソーマン妻子を思うことなけれ	2	6	8	「愛染」
九〇	行きかえり 牛はおんなじ歩巾なり	9	6		「有情」
九一	生き方を青から赤に替えるなり	2	6	5	「愛染」
九二	行き先はアルサロだったとは 蛍	9	4		「有情」
九三	生きざまも縞馬のしま虎の縞	3	1	5	「花径」
九四	生き死には碁石のことでないのなり	2	0	2	「肉眼」
九五	呼吸つめていのちを合わす久しぶり	1	8	9	「肉眼」
九六	生きているうちは明かせぬ吾亦紅	2	8	2	「愛染」
九七	生きていることが運だと思ふ古稀	2	9	6	「愛染」
九八	生きるとは写経に続き賀状書く	2	8	9	「愛染」

七七 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。句集には「窪田久美子さんへ」の前書あり。

七八 「川柳塔」平成3年5月号。「水戸にて三句」の前書あり。

七九 「古』『師』『喜』にあり。『古』『句集』は初出時と同じ前書で「一八三、一八二、七八の順に収録。『師』『喜』には一八三(梅紅白義公烈公今に生き)がなく、この句と一八二の2句収録。

七九 「川柳塔」平成11年6月号。「祝 五楽庵さん古希」の前書あり。『句集』では「祝 五楽庵さんの古希」の前書。

八〇 「川柳雑誌」昭和38年1月号。『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。

八一 「川柳塔」平成4年6月号。各地柳壇「川柳若葉の会」にあり。

八二 「川柳雑誌」昭和31年6月号。「近作柳樽」欄。「いい返事」↑「いゝ返事」。「有」にあり。

八三 もくせい川柳会。昭和61年6月16日(月)。「返事」互選。

八四 初出未詳。『有』にあり。

八五 「川柳塔」昭和42年5月号。「会津行」の前書あり。『肉』『愛』『古』にあり。句集には前書なし。遺恨は、官軍と戦い、自刃した白虎隊のうらみ。補注七一〇参照。

八六 「川柳雑誌」昭和37年10月号。『檸檬』にあり。路郎句集「旅人」に「家へ帰れば社長は社長 僕は僕」がある。

八七 川柳塔本社句会。昭和55年11月7日(金)。「家元」正本水客選。『愛』『古』にあり。

八八 川柳塔本社句会。平成12年3月6日(月)。「様」軸吟。

八九 「川柳塔」昭和59年8月号。『愛』『古』にあり。句集には「函館行 三句」の前書があり、五五九、八九、八九一の順に収録。↓補注。

九〇 初出未詳。『有』にあり。

九一 「川柳塔」昭和58年12月号。『愛』にあり。

九二 川柳雑誌社本社豆秋追悼句会。昭和36年6月8日(木)。

九三 「螢」石井黙平選。『有』にあり。

九四 「川柳塔」平成9年5月号。

九五 「川柳塔」昭和46年10月号。『肉』『愛』『古』にあり。

九五 「川柳塔」昭和45年3月号。「妻病めば」の前書あり。『肉』『愛』『古』『師』にあり。『句集』には、『肉』と同じく「妻病む 十句」の前書があり、一一四〇、七四七、七四八、一五二九、九五、一四四四、二九五、一四四四、一一六一、一五二〇の順に収録。『愛』『古』では「妻病む五句」とあり、一一四〇、一五二九、二九五、一一六一、一五二〇の5句なし。『師』では、『愛』『古』の句の内、一四四四、一四四五がなく3句収録。

九 九 胃薬を買う 漱石の札の顔

一〇〇 勇の川白 秋の川恙 無きや

一〇一 居酒屋の楽書 帖に詩人の名

一〇二 いざ孫と麦藁帽に親しまん

一〇三 石くれも三つ 積んだら思惟の塔

一〇四 石の階 童話を読むにうってつけ

一〇五 慰謝料に 感傷はもう交つてず

一〇六 いじらしや揃う 百足の足見れば

一〇七 椅子蹴つて立つたに 続くものがなし

一〇八 一隅と云うは安けし猫などいて

一〇九 一芸に秀でし顔へ初明り

一一〇 一時間月の出飽かず見る波と

一一一 一日に精魂尽くす 痩せようだ

一一二 一日の重さ 軽さよ 日記帖

一一三 一番に孫の箸紙書いた新春

一一四 一番の子の健康が案じられ

一一五 一望の芒に女一人かな

一一六 一枚になれば 银杏の葉の形

一一七 一枚めぐり一枚めぐり 波と恋

一一八 银杏散る風の祭りを 見るごとし

3 0 3

2 5 4

1 0 2

1 3 2

1 7 4

1 6 5

8 1

3 1 1

6 3

1 9 2

2 3 3

2 3 3

3 3 9

2 0 6

1 6 9

2 6 6

3 2

1 3 7

1 3 8

1 7 4

1 3 0

「花径」

「愛染」

「有情」

「檸檬」

「肉眼」

「肉眼」

「肉眼」

「有情」

「花径」

「有情」

「肉眼」

「愛染」

「花径」

「肉眼」

「肉眼」

「愛染」

「乱れ髪」

「檸檬」

「檸檬」

「肉眼」

「檸檬」

「檸檬」

九六 「川柳塔」平成2年9月号。「古」にあり。

九七 初出未詳。平成7年か平成8年の作だろう。

九八 「川柳塔」平成6年1月号。「古」「師」「喜」にあり。

九九 「川柳塔」平成6年7月号。「古」にあり。

一〇〇 「川柳展望」五周年記念大会。昭和55年5月5日(月)。「川」軸吟。「愛」「古」にあり。↓補注。

一〇一 「川柳雑誌」昭和34年12月号。「有」「愛」「古」にあり。

一〇二 「川柳雑誌」昭和39年7月号。「勇退の浜田久米雄氏へ」の前置あり。「檸檬」「愛」「古」にあり。句集は「浜田久米雄氏勇退」の前置。浜田久米雄は、明治43年1月13日(木)生まれ、昭和58年2月15日(火)、73歳で死去。昭和2年に国鉄に就職。昭和8年に川柳に手を染めてから、各地に川柳の種をまいた。

一〇三 「川柳塔」昭和43年1月号。「肉」「愛」「古」「師」にあり。

一〇四 初出未詳。「肉」「愛」「古」「喜」にあり。

一〇五 「川柳雑誌」昭和37年9月号。各地柳壇「明和川柳研究会」にあり。「有」にあり。

一〇六 川柳塔本社句会。平成8年3月2日(土)。「足」軸吟。

一〇七 初出未詳。「有」「檸檬」「愛」「古」「師」にあり。

一〇八 「川柳塔」昭和45年4月号。「肉」「愛」「古」にあり。「古」では、「云う」を「いう」と表記。

一〇九 「川柳塔」昭和53年2月号。「愛」「古」にあり。

一一〇 「川柳塔」平成13年6月号。

一一一 初出未詳。「肉」「愛」「古」「師」にあり。

一一二 「川柳塔」昭和42年6月号。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。

一一三 川柳ねやがわ。昭和58年12月18日(日)。「自由吟」軸吟。「愛」「古」にあり。

一一四 もくせい川柳会。平成元年1月16日(月)。「一番」藤村メ女選。

一一五 初出未詳。「檸檬」にあり。句集には「十文字原 二句」の前置あり。この句の後に九〇一。

一一六 初出未詳。「檸檬」「愛」「古」「師」「喜」にあり。

一一七 初出未詳。「肉」にあり。

一一八 初出未詳。「檸檬」「愛」「古」「師」「喜」にあり。

一一九 「川柳塔」昭和53年12月号。各地柳壇「どんぐり川柳会」にあり。「愛」「古」にあり。

一二〇 「川柳雑誌」昭和40年1月号。「檸檬」「愛」「古」にあり。小林一茶は、宝暦13年5月5日(1763年6月15日)に生

一一九	一輪の菊は気合で咲くことし	2	3	9	「愛染」
一二〇	一茶忌の赤林檎より青林檎	1	2	8	「檸檬」
一二一	一瞬と言うは賽振る今の今	1	6		「乱れ髪」
一二二	一 生に一度の御籤 父のみくじ	2	1	0	「肉眼」
一二三	一 生を社用で飲んだ酒の量	4	0		「乱れ髪」
一二四	一 つしんに昨日を明日にした男	3	3	1	「花径」
一二五	一 線を自分で引いて 淋しがり	9	9		「有情」
一二六	一 点鐘わたしのマリヤ歎歎く	2	3	6	「愛染」
一二七	一 一つのほど背のびの背丈わが背丈	3	0	3	「花径」
一二八	一 匹の蚊に 病室の広いこと	6	6		「有情」
一二九	一 つまでも力 頂く師の手紙	4	7		「乱れ髪」
一三〇	一 つまでも 肚のくくれぬ役者かな	3	4	7	「花径」
一三一	一 糸切れた琴はある夜の女に似	1	3	5	「檸檬」
一三二	一 稲妻に 竪穴住居跡遺跡	3	1	9	「花径」
一三三	一 稲妻に 南紀州となりにけり	1	4	1	「檸檬」
一三四	一 稲光天壇瞬時帽の影	2	7	4	「愛染」
一三五	一 犬小屋にペンキで窓が描いてある	2	9	0	「愛染」
一三六	一 犬と住む都会の底の夜の底	1	7	2	「肉眼」
一三七	一 胃半分 肺半分の湯呑かな	1	9	6	「肉眼」
一三八	一 揖斐長良やんまのつるむ河の幅	2	8	5	「愛染」

- まれ、文政10年11月19日に、65歳で死去。
- 一一一 「川柳塔」平成6年4月号。各地柳壇「川柳若葉の会」(前月分)にあり。
- 一一二 「川柳塔」昭和47年11月号。「肉』『愛』『古』にあり。
- 一一三 初出未詳。
- 一一四 「川柳塔」平成12年7月号。「悼 林荒介兄」の前書あり。「句集」も同じ前書。林荒介は、昭和4年1月20日(日)に生まれ、平成12年5月10日(水)、71歳で死去。「川柳塔」きやらぼく」で、林瑞枝とのおしどり作家だった。
- 一一五 初出未詳。「有」にあり。
- 一一六 「川柳塔」昭和53年8月号。「愛』『古』『師』『喜』にあり。
- 一一七 「川柳塔」平成6年12月号。
- 一一八 「川柳雑誌」昭和36年1月号。「母入院」の前書あり。
- 一一九 「有』『檉』『愛』『古』『師』にあり。句集も同じ前書。
- 一二〇 川柳塔本社句会。平成5年9月6日(月)。「力」軸吟。
- 一二一 「川柳塔」平成13年9月号。
- 一二二 「川柳雑誌」昭和39年4月号。「檉』『愛』『古』にあり。
- 一二三 川柳塔本社句会。平成9年8月7日(木)。「稲妻」軸吟。
- 一二四 「川柳雑誌」昭和38年9月号。柳界展望「八月二日(金曜 編者注)から夫婦と子供達だけの二泊のバカンスを白浜に楽しまれたが、海水浴は苦手なので専らテントで見張り役を引受けられた。夜は仲々涼しかったですと。」の後にあり。「なりにけり」↑「なりにける」。「檉』『愛』『古』にあり。句集には「白浜」の前書あり。
- 一二五 「川柳塔」昭和61年12月号。「古」にあり。句集には「北京」の前書あり。「川柳塔」昭和62年1月号「私の一句」にも発表。↓補注。
- 一二六 川柳ねやがわ。平成6年4月17日(日)。「窓」久保田元紀選。「古』『喜』にあり。
- 一二七 初出未詳。「肉』『愛』『古』にあり。
- 一二八 「川柳塔」昭和46年2月号。「胃手術(五句)」の前書あり。「肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。句集には「入院手術」の前書。「川柳塔」平成11年5月号の巻頭言「路郎の精神精神の質的向上」に、「親しい友人が私の句に関しての発言で、『胃半分肺半分の湯呑だなあ』と作句して、後日下句を「湯呑かな」と推敲したと発言しているのを聞いて、それは間違いで、語尾のあやふやな句は忌避することはあっても納得することはできない。手術後ベッドに帰り、麻酔が覚めて意識を

- 一三九 今の世も皿を数えるのは女
- 一四〇 妹に紙の兜がよく似合う
- 一四一 芋の葉の露は仏舎利然とまるい
- 一四二 囲炉裏での話 来し方ばかりなり
- 一四三 祝膳孫の正座はままならぬ
- 一四四 鯛雲びつしり僕の歯は抜ける
- 一四五 岩風呂の岩のうしろはあの世かも
- 一四六 胃を切除つて夏冬ながし 誕生日
- 一四七 胃を切除りし秋 犬抱けばあたたかに
- 一四八 因襲は亀の甲羅の重たさだ
- 一四九 陰陽石 つつじの燃える頃となる
- 【う】
- 一五〇 雨意将に至らんとする摩天崖
- 一五一 うかうかと来た七 十の顔がこれ
- 一五二 浮世絵の白い肌にも 春と秋
- 一五三 鶯の啼く庭に来た執達吏
- 一五四 兎の目ほどのしずかな恋ごころ
- 一五五 牛尾の湯 弟子はいつまで経つても弟子
- 一五六 牛小屋に月光 美しき浪費
- 一五七 失いしものと得しもの この友に

23	「乱れ髪」
28	「愛染」
27	「花径」
17	「有情」
22	「愛染」
24	「愛染」
09	「花径」
01	「肉眼」
96	「肉眼」
41	「檸檬」
99	「肉眼」
23	「愛染」
09	「花径」
86	「有情」
02	「有情」
66	「肉眼」
09	「花径」
89	「有情」
63	「有情」

取り戻したとき、／胃半分肺半分のいのちかな／と句が出来、数日して使い慣れた湯呑で熱いお茶を飲んだとき、湯呑のいとおしさから、いのちが湯呑に転換したのだ。心境がいささか客観的に見られるようになったわけで、句集には後者を定着させたことになる。」とある。↓補注。二六参照。

一三八 「川柳塔」平成4年8月号。『古』にあり。句集には「桑名水郷」の前書あり。

一三九 第27回川柳塔きやらぼく忘年句会。平成3年12月1日(日)。「皿」軸吟。「古」にあり。

一四〇 「川柳塔」昭和51年6月号。『愛』『古』にあり。

一四一 「川柳塔」平成11年11月号。補注七六二参照。

一四二 「川柳雑誌」昭和37年1月号。『有』にあり。

一四三 「川柳塔」昭和60年1月号。一一八〇の句と共に、年賀状の句。『愛』『古』にあり。

一四四 「川柳塔」昭和50年10月号。「僕の」↑「俺の」。『愛』『古』にあり。

一四五 「川柳塔」平成8年1月号。「海潮(うしお)荘」の前書あり。『句集』には、「海潮温泉 四句」の前書。四五参照。↓補注。

一四六 「川柳塔」昭和46年9月号。『肉』にあり。

一四七 「川柳塔」昭和46年2月号。「胃手術(五句)」の前書あり。「秋」の後、一字空白あり。『肉』にあり。句集には「入院手術」の前書。二六参照。

一四八 「川柳雑誌」昭和38年7月号。『樟』『愛』『古』にあり。

一四九 「川柳塔」昭和46年6月号。『肉』『愛』『古』にあり。

一五〇 「川柳塔」昭和50年6月号。「隠岐行」の前書あり。『愛』『古』にあり。句集も同じ前書。↓補注。

一五一 もくせい川柳会。平成7年1月16日(月)。「自由吟」軸吟。阪神淡路大震災の前日の作。

一五二 初出未詳。『有』にあり。

一五三 「川柳雑誌」昭和33年8月号。『有』『樟』にあり。

一五四 「川柳塔」昭和41年12月号。『肉』『愛』『古』にあり。

一五五 「川柳塔」平成8年1月号。「海潮(うしお)荘」の前書あり。『句集』には「海潮温泉 四句」の前書。四五参照。補注一四五参照。

一五六 初出未詳。『有』『樟』『愛』『古』にあり。

一五七 「川柳雑誌」昭和36年5月号。『有』にあり。

一五八 初出未詳。『喜』にあり。↓補注。

一五九 「川柳塔」昭和41年5月号。『肉』にあり。

一六〇 「川柳塔」昭和42年7月号。『肉』にあり。

一五八	牛の背で笛吹く恋がしてみたし	1	4	「乱れ髪」	
一五九	嘘をつく人間ばかり しやれこうべ	1	6	2	「肉眼」
一六〇	歌うより踊るよりない平和かね	1	6	9	「肉眼」
一六一	うたせ湯に印結ばねど結跣蹴坐	2	8	0	「愛染」
一六二	歌枕牟婁の旅よし山と海	4	5		「乱れ髪」
一六三	家中の一番涼しいところに 猫	9	4		「有情」
一六四	美しい丘日本にキリストは出ぬ	2	3	3	「愛染」
一六五	美しい貝殻に似た若き寡婦	1	4	7	「檸檬」
一六六	美しい炭火恋しき鳴雪忌	1	3	6	「檸檬」
一六七	美しいものに雪置く美しさ	1	4	5	「檸檬」
一六八	美しき地獄牡丹の散りしける	2	5	2	「愛染」
一六九	腕の無いヴィーナスの像と黄なコート	3	3	7	「花径」
一七〇	うどんすき仲居というもなくなりぬ	5	1		「乱れ髪」
一七一	うどん好きお汁一滴残さない	5	5		「乱れ髪」
一七二	うどん好き そば好き譲ろうとしない	1	9		「乱れ髪」
一七三	乳母車 いのち育てしものなつかし	1	7	5	「肉眼」
一七四	産声のはっしはっしと聞えける	1	2	9	「檸檬」
一七五	旨いとも言わず 新聞ばかり読み	7	0		「有情」
一七六	馬で来る妹 スポーツカーの姉	3	5		「乱れ髪」
一七七	馬に乗る姿を今にあこがれる	2	7	5	「愛染」

- 一六一 「川柳塔」昭和63年2月号。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品「老司祭」25句の13句目。「古」にあり。  
 一六二 初出未詳。  
 一六三 ふあうすと本社句会。昭和34年8月8日(土)。「涼しい」河相すゝむ選。「有」にあり。  
 一六四 「川柳塔」昭和52年12月号。「丘」の後、一字空白あり。「愛」にあり。  
 一六五 「川柳雑誌」昭和37年11月号。「檸檬」にあり。  
 一六六 「川柳雑誌」昭和39年4月号。「檸檬」「愛」「古」にあり。↓補注。  
 一六七 初出未詳。「檸檬」「愛」「古」「師」「喜」にあり。句集には「兼六公園」の前書あり。↓補注。  
 一六八 「川柳展望」2号(昭和50年8月1日発行)。「愛」「古」にあり。  
 一六九 「川柳塔」平成13年4月号。「喜」にあり。↓補注。  
 一七〇 三井が丘川柳会。昭和53年2月12日(日)。「自由吟」軸吟。  
 一七一・一七二 初出未詳。  
 一七三 初出未詳。「肉」「愛」「古」「師」にあり。  
 一七四 「川柳雑誌」昭和40年1月号。「十月二十六日長男充誕生」の前書あり。「産声」↑「産ぶ声」。「檸檬」「愛」「古」にあり。昭和39年12月号「柳界展望」に、「十月二十六日(月曜)編者注」待望の長男出生、充と命名した。」とある。↓補注四五一・補注一八四七参照。1月号より、薫風子を薫風に改める。「川柳塔」昭和44年2月号の「雅号ぶっちゃげばなし」に、「姓の橋高に薫と父親が名付けたのと同様、名の薫に「風の子」を付けて、薫風子と雅号を決めたのも最も平凡な思いからで、今にして自分の雅号として名乗るのなら更に好ましい名もあるうにと思わぬでもない。当時、明和病院川柳青蛙会の指導をされていた故水谷鮎美氏が若々しい良い名前だと葉書で云って下さったことを覚えてる。後、川柳雑誌の編集室で路郎先生は、薫風とするのが良い。葎乃先生は、薫風子の方がよろしいと仰言った。柳歴十年にして子をとった。薫風は案外古臭い雅号だが、伝統を守る私の心意気だと、今では思っている。旅館業(四十二歳)」とある。  
 一七五 初出未詳。「有」「愛」「古」にあり。「有」のみ、「言わず」を「云わず」と表記。  
 一七六 「川柳塔みちのく」42号(二〇〇一年二月)。投句葉書の消印は平成12年11月25日。  
 一七七 初出未詳。「古」「喜」にあり。

- 一七八 生まれし時灯ありき死に行く時灯あらん
- 一七九 海鳴りへ標本室の貝の耳
- 一八〇 海の風 竜馬の鬣へ ふところへ
- 一八一 海渡る たかが佐渡とは言う勿れ
- 一八二 梅熱し ※ 艶 而 後 已
- 一八三 梅紅白義公烈公今に生き
- 一八四 梅田から来て新 宿の混み具合
- 一八五 梅の書斎 漱石全集揃えられ
- 一八六 梅よりも桃に魅かれる少し古い
- 一八七 梅凜と咲くを受験子見て出掛け
- 一八八 裏梅は聞えぬふりをする 女
- 一八九 裏切った方も酒 量が増えてくる
- 一九〇 裏切られあたたかきもの放 尿す
- 一九一 裏切りに思い当るは茄子のかるさ
- 一九二 裏窓は山下清画く屋根だ
- 一九三 うれしがることも老人めいてきた
- 一九四 うれしきは秋の実りが我が家にも
- 一九五 うれしさを猿は歯をむくしか出来ぬ
- 一九六 鱗雲一枚こぼれ亡母の窓
- 一九七 雲海に槍 胸 中に人尖る

1 3 3	「檸檬」
2 3 5	「愛染」
1 8 4	「肉眼」
1 8 0	「肉眼」
2 8 8	「愛染」
2 8 8	「愛染」
2 8 8	「愛染」
2 1	「乱れ髪」
2 1 3	「有情」
2 6 2	「愛染」
2 9	「乱れ髪」
2 1 2	「肉眼」
1 0 1	「有情」
2 1 3	「肉眼」
2 3 1	「愛染」
2 0 2	「肉眼」
3 1 8	「花径」
2 8 6	「愛染」
3 1	「乱れ髪」
3 0 1	「花径」
1 7 1	「肉眼」

一七八 「川柳雑誌」昭和39年7月号「人生譜」欄。河野春三選。「生まれし」↑「生れし」。「死に行く」↑「死にゆく」。「檸檬」『愛』『古』『師』『喜』にあり。

一七九 「川柳塔」昭和53年6月号。『愛』『古』にあり。

一八〇 「川柳塔」昭和44年5月号。桂浜での前書あり。『肉』『愛』『古』にあり。句集は「桂浜」の前書。一五二六参照。

一八一 「川柳塔」昭和43年8月号。「能登から佐渡への旅（四句）」の前書あり。『肉』『愛』『古』にあり。八参照。

一八二 「川柳塔」平成3年5月号。「水戸にて三句」の前書あり。※「艶而後已」は、藤田東湖の漢詩の一節。↓補注。『古』『師』『喜』にあり。『古』『句集』は初出時と同じ前書。『師』『喜』は一八三の句未収録。七八参照。

一八三 「川柳塔」平成3年5月号。「水戸にて三句」の前書。『古』にあり。句集も同じ前書。義公は徳川光圀の諡号（贈り名）。烈公は徳川斉昭の諡号。七八参照。

一八四 初出未詳。

一八五 ふあうすと本社句会。昭和34年2月14日（土）。「梅」灘与志男選。『有』にあり。

一八六 「川柳塔」昭和58年3月号。『愛』『古』にあり。

一八七 もくせい川柳会。昭和60年2月18日（月）。「梅」大路美幸選。

一八八 「川柳塔」昭和48年4月号。「裏梅は」↑「裏梅へ」。「肉』『愛』『古』にあり。「裏梅」は、梅花を裏から見た形の紋。

一八九 初出未詳。『有』にあり。

一九〇 「川柳ジャーナル」昭和48年3月号。招待作品「一兵の生」8句の4句目。『肉』『愛』『古』にあり。

一九一 「川柳塔」昭和52年10月号。『愛』『古』にあり。

一九二 「川柳塔」昭和46年11月号。『肉』にあり。

一九三 もくせい川柳会。昭和63年2月15日（月）。「うれしい」墨作二郎選。

一九四 「川柳塔おおもり」10号（平成4年11月）。「内孫誕生」の前書。「実り」↑「みのり」。『古』『喜』にあり。句集では「内孫みのり誕生」の前書。↓補注。

一九五 一九三と同じ初出。

一九六 「朝日新聞夕刊」平成5年11月13日（土）。「酔いざめの」5句の4句目。↓補注。

一九七 初出未詳。「川柳塔」昭和42年10月号で没になった句か。『肉』にあり。句集には「乗鞍 二句」の前書。この句の前に一三四四。槍は槍ヶ岳。標高3180米。補注一六六七参照。

一九八 サークル檸檬。平成7年5月7日（日）。「叫ぶ」西出

一九八	吽 <small>うんぎよう</small> 形 <small>かたち</small> の仁王 <small>におう</small> の突如 <small>とつじよさげ</small> 叫ぶ <small>よび</small> とき	2	9	1	「愛染」
	【え】				
一九九	映画 <small>えいが</small> ほど静 <small>しず</small> かではない恋 <small>こい</small> 終 <small>おわ</small> る	2	4	1	「愛染」
二〇〇	栄光 <small>えいこう</small> の日 <small>ひ</small> も一日 <small>いちにち</small> は二十四 <small>にじゅうよ</small> 時 <small>じ</small>	1	2	8	「檸檬」
二〇一	栄光 <small>えいこう</small> のマンント <small>まんと</small> の裏 <small>うら</small> は血 <small>ち</small> の色 <small>いろ</small> だ	1	6	6	「肉眼」
二〇二	栄枯 <small>えいこ</small> 盛衰 <small>せいすい</small> 暴力 <small>ぼりよく</small> 団 <small>だん</small> の表 <small>ひょう</small> 札 <small>さつ</small> も	5	2		「乱れ髪」
二〇三	英雄 <small>えいゆう</small> は花 <small>はな</small> という字 <small>じ</small> にこがれ死 <small>し</small> ぬ	2	6	7	「愛染」
二〇四	絵 <small>え</small> 双六 <small>ごうくつ</small> 妻 <small>つま</small> も子供 <small>こども</small> のとき <small>とき</small> の顔 <small>かお</small>	2	8	1	「愛染」
二〇五	枝 <small>えだ</small> のない椰子 <small>やし</small> を夕日 <small>ゆうひ</small> がすべり落 <small>お</small> つ	2	2	6	「愛染」
二〇六	絵 <small>え</small> の中 <small>なか</small> の馬車 <small>ばしや</small> にいろのは君 <small>きみ</small> と僕 <small>ぼく</small>	4	5		「乱れ髪」
二〇七	戎 <small>えびす</small> 橋 <small>はし</small> 恋 <small>こい</small> も朝飯 <small>あさめし</small> 前 <small>まえ</small> のよう	3	2	1	「花径」
二〇八	獲物 <small>えもの</small> の大き <small>おほ</small> さに蟻 <small>あり</small> うろたえる	9	4		「有情」
二〇九	エリート <small>えりーと</small> の狐 <small>きつね</small> が落 <small>お</small> ちた獄 <small>ごく</small> の顔 <small>かお</small>	2	2	7	「愛染」
二一〇	遠泳 <small>えんえい</small> の雲 <small>くも</small> まで泳 <small>およ</small> ぐ意気 <small>いき</small> を見 <small>み</small> せ	1	1	6	「有情」
二一一	閻王 <small>えんおう</small> の前 <small>まえ</small> でも飛車 <small>ひしや</small> のきつ腑 <small>ぶ</small> なり	2	4	2	「愛染」
二一二	遠景 <small>えんけい</small> に凧 <small>たこ</small> あり松 <small>まつ</small> の内 <small>うち</small> のどか	8	5		「有情」
二一三	演 <small>えん</small> 出 <small>しゅつ</small> をする齡 <small>とし</small> でない齡 <small>とし</small> でない	2	3	4	「愛染」
二一四	媿然 <small>えんぜん</small> と舞妓 <small>まいこ</small> 酔 <small>よ</small> うても襟 <small>えり</small> かたし	1	5	9	「肉眼」
二一五	遠足 <small>えんそく</small> の帰 <small>かえ</small> りはみんな無 <small>む</small> 口 <small>くち</small> なり	9	1		「有情」
二一六	炎天 <small>えんてん</small> に寒疣 <small>さふいぼた</small> 立 <small>た</small> てて師 <small>し</small> を葬 <small>おく</small> 送 <small>く</small> る	1	5	8	「肉眼」

楓葉選。「吽形」↑「呬形」。「川柳塔」平成7年8月号の特集「阪神大震災百句」にもあり。「古」にあり。句集には「阪神大震災」「川柳塔」昭和54年1月号。各地柳壇「菜の花句会」にあり。「愛」「古」にあり。

二〇〇 初出未詳。「梅」「愛」「古」「師」「喜」にあり。

二〇一 初出未詳。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。

二〇二 三井が丘川柳会。昭和53年4月16日(日)。「表札」山本三郎選。

二〇三 菜の花句会。昭和55年1月10日(木)。「英雄」の軸吟に「英雄は花と云う字がいつち好き」を発表している。「愛」「古」にあり。

二〇四 「川柳塔」平成2年1月号。「妻も」↑「妻の」。「絵双六」の後、一字空白あり。「古」にあり。

二〇五 「川柳塔」昭和51年3月号。「愛」「古」にあり。句集には「ハワイ紀行 五句」の前書あり。「ハワイ紀行 五句」は、「一三六三、一三六四、一八五九、二〇五、二二〇四」の順に収録。

二〇六 西尾采叙勲記念川柳大会。平成元年7月9日(日)。「袷」寺尾俊平選。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品「老司祭」25句の19句目。

二〇七 「川柳塔」平成9年11月号。↓補注。

二〇八 「川柳雑誌」昭和31年9月号。「近作柳樽」欄、初巻頭。「有」「樽」にあり。↓補注。

二〇九 「川柳塔」昭和51年11月号。「愛」「古」にあり。↓補注。

二一〇 川柳雑誌社本社句会。昭和36年8月8日(火)。「遠泳」麻生路郎選。「有」にあり。

二一一 「川柳塔」昭和54年3月号。「悼 大野源一九段」の前書あり。「愛」「古」にあり。句集も同じ前書。↓補注。

二一二 「川柳雑誌」昭和32年4月号。「欄」にあり。2月に不朽洞会員となり、この号から「川柳塔」欄に出句。最後から三番目に掲載された。他に、「毛鉤一つ買うに六階まで上り」(使用人と主人の区別猫も知り)の句が入選。(使用人と)の句は、「有」「句集」にも収録。

二一三 初出未詳。「愛」「古」にあり。

二一四 初出未詳。「肉」にあり。

二一五 「川柳雑誌」昭和34年8月号。「有」にあり。

二一六 「川柳雑誌」昭和40年9月号。エッセイ「噫 路郎先生」中にあり(本索引137頁参照)。「炎天」↑「七月」。

- 二二七 煙突の高さも高し 此花区
- 二二八 苑の鶯鳥のよちよち歩き卒園す
- 二二九 鉛筆の匂いは五十年同じ
- 二二〇 閻魔にも和顔愛語を説き給い
- 【お】
- 二二一 追い討をかけるは 金のことらしい
- 二二二 老いてしげしげ淫の字も姦の字も
- 二二三 老いらくに吉祥天のぬいぐるみ
- 二二四 老いらくに童心戻れ雛の前
- 二二五 老いらくに二月のシヨコラ甘すぎる
- 二二六 老いらくに襖の恋もありぬべし
- 二二七 老いらくのこぼれこぼれて続く恋
- 二二八 老いらくの新年白い曼珠沙華
- 二二九 追うことは逃げることなり走馬灯
- 二三〇 大穴は十三日の金曜日
- 二三一 大いなる硝子の如き寒気あり
- 二三二 大嘘をついて大きな笑い声
- 二三三 大きな滝になろうと思ふ父の日に
- 二三四 大國主命の国の春の雲
- 二三五 大相撲昔のことは言わぬこと

1 1 3	「有情」
1 2 6	「檸檬」
3 0 1	「花径」
2 9 4	「愛染」
1 0 3	「有情」
2 8 9	「愛染」
3 4 5	「花径」
3 1 0	「花径」
3 4 2	「花径」
2 9 6	「愛染」
3 2 9	「花径」
3 3 4	「花径」
2 7 8	「愛染」
2 1	「乱れ髪」
1 7 6	「肉眼」
1 5 8	「肉眼」
1 4 2	「檸檬」
1 6 1	「肉眼」
2 7 7	「愛染」

『肉』『愛』『古』にあり。

二一七 「川柳雑誌」昭和33年3月号。「有」にあり。3月号の、社の黒板に、「橋高薫風氏が二月から編集部へ入部された。」とある。「編集録音」中には、「旧正月の十九日、始めての編集会議に出席。私はおおむね聞き手にしてかしまる。路郎先生は牛乳、春菓氏はハイボール他はコーヒー、三色の飲み物が醸し出す雰囲気暖冬の空気は和気霽々。」とある。

二一八 「川柳雑誌」昭和40年7月号。「愛』『古』にあり。

二一九 「朝日新聞」夕刊。平成5年11月13日(土)。「酔いざめの」5句の2句目。「古』『喜』にあり。↓補注。

二二〇 「川柳塔」平成7年7月号。「哀悼」の前書あり。5月15日、西尾菜前主幹逝去。「古」にあり。「古」には「哀悼西尾菜先生」の前書、「句集」では、それに「五句」の但書。和顔愛語は仏教用語。和やかな表情と親愛の情が籠もった言葉遣い・親しみやすく温かい態度のこと。平成13年5月5日(土)、菜七回忌川柳大会に合せて、薫風編の句集「和顔愛語」刊行。句集名は、路郎の(凡聖一如元旦の心しる)を踏まえた(和顔愛語元旦の心しる)の句から取った。四七参照。

二二一 「川柳雑誌」昭和32年5月号。「追い討」↑「追討」。「金のこと」↑「金の事」。「有」にあり。

二二二 サークル檸檬。平成5年5月2日(日)。「性」小林一夫選。「古』『師』『喜』にあり。

二二三 「朝日新聞」夕刊。平成11年2月26日(金)。「師弟」7句の3句目。↓補注。

二二四 「川柳塔」平成8年3月号。

二二五 サークル檸檬。平成6年2月13日(日)「自由吟」互選。

二二六 「川柳塔」平成10年10月号。「師」にあり。

二二七 「川柳塔」平成12年5月号。

二二八 初出未詳。

二二九 「川柳塔」昭和62年9月号。「川柳展望」平成2年2月号に発表。特別作品「老司祭」25句の10句目。「古」にあり。

二三〇 初出未詳。

三三一 ふあうすと本社句会。昭和43年2月9日(金)。「鏡」光森良選。「硝子」↑「鏡」。「肉」にあり。句集には「春日大社万灯籠 三句」の前書あり。一一六一、七一一に続いて三句目の句。↓補注。

三三二 「川柳塔」昭和40年11月号。「肉」にあり。

三三三 「川柳雑誌」昭和38年8月号。「檸檬』『愛』『古』『師』にあり。

三三四 「川柳塔」昭和41年5月号。「山陰旅行」の前書あり。

二三六	大津絵の鬼 招じ入れ留守居酒	3	5	「乱れ髪」	
二三七	大鳥の羽搏くやはや姿なし	2	9	9	「花径」
二三八	大晦日老いはしずかに箱に居る	3	2	3	「花径」
二三九	おおらかに僕も初湯のジベタリアン	3	2	8	「花径」
二四〇	オーバーの襟立てさらに破魔矢立て	1	6	7	「肉眼」
二四一	オールドミス 娼婦のような手紙書く	8	2		「有情」
二四二	お元日香水匂いすぎぬこと	2	8	1	「愛染」
二四三	お元日戸締りをして飲みはじめ	3	3	4	「花径」
二四四	お元日 日本人の目の黒さ	2	0	4	「肉眼」
二四五	お元日老醜枯淡紙一重	2	8	5	「愛染」
二四六	お元日 わが家の波夷羅大将も	1	7	3	「肉眼」
二四七	送り火を極楽の火と子は信じ	2	6	1	「愛染」
二四八	幼な子も思いを遂げた顔はよし	2	7	2	「愛染」
二四九	小佐野児玉の暗い寒山拾得図	2	2	7	「愛染」
二五〇	おしなべて 銀も鉛も卒業す	6	9		「有情」
二五一	惜しみなく愛は奪えと 曼珠沙華	7	7		「有情」
二五二	おしやれな子のてるてる坊主までおしやれ	1	6	2	「肉眼」
二五三	汚染水域乙旗 (乙旗) 挙げよ海の日	3	1	2	「花径」
二五四	恐 山空焼けるととき恐 山	2	4	9	「愛染」
二五五	恐 山四人四本の死人花	2	4	8	「愛染」

- 『肉』『愛』『古』にあり。句集には前書なし。↓補注。  
 二三五 「川柳塔」昭和62年4月号。『古』にあり。  
 二三六 「川柳塔みちのく」36号(一九九八年八月)。投句葉書の消印は、平成11年5月28日。『喜』にあり。『喜』には「節分」の前書があるが、『句集』にはなし。↓補注。  
 二三七 初出未詳。  
 二三八 「川柳塔」平成10年2月号。  
 二三九 「川柳塔」平成12年2月号。ジベタリアンは、駅の通路やコンビニの前などで、地面(ジベタ)に座り込んでいる若者のこと。  
 二四〇 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。  
 二四一 初出未詳。『有』にあり。  
 二四二 「川柳塔」平成2年1月号。「香水匂いすぎぬこと」↑「香水なんぞつけぬこと」。『古』『師』にあり。  
 二四三 初出未詳。  
 二四四 「川柳塔」昭和47年2月号。「お元日」の後、一字空白あり。『肉』『愛』『古』『師』にあり。  
 二四五 「川柳塔」平成3年2月号。『古』『師』『喜』にあり。  
 二四六 初出未詳。『肉』『愛』『古』『師』にあり。波夷羅大将は、奈良新薬師寺の十二神将の一つ。十二支でいうと辰。長男充氏(昭和39年辰年生まれ)を波夷羅大将に見立てたか。  
 二四七 「川柳塔」昭和57年9月号。「亡母初盆」の前書あり。  
 二四八 「古」にあり。句集も同じ前書。  
 二四九 「川柳塔」昭和60年5月号。各地柳壇「堺川柳会」(前月分)にあり。『愛』『古』にあり。  
 二五〇 「川柳塔」昭和51年4月号。『愛』『古』『師』にあり。↓補注。  
 二五〇 「川柳雑誌」昭和36年7月号。『有』『愛』『古』にあり。↓補注。  
 二五一 「川柳雑誌」昭和31年5月号。「近作柳樽欄」『有』『樽』『愛』『古』『師』『喜』にあり。↓補注。  
 二五二 「川柳塔」昭和41年10月号。『肉』にあり。  
 二五三 「川柳塔」平成8年9月号。「挙げよ」の後、一字空白あり。↓補注。  
 二五四 「川柳塔」昭和55年9月号。『愛』『古』にあり。句集には「青森行 四句」の前書があり、一一一、一七一、二五五、二五四の順に収録。9月号に発表した「二代目津軽家すわ子さんへ」と前書のある(潮風へ涼しき津軽おはら節)は句集未収録。↓補注。

二五六	おぞましき議員の胸の赤い羽根	2	4	9	「愛染」
二五七	おたまじやくしのままでありたし少女の恋	1	6	9	「肉眼」
二五八	おたやんは大阪弁で喋りそう	1	4	2	「檸檬」
二五九	おだまきが咲いてる紫の涙	2	2	8	「愛染」
二六〇	落椿情炎未だこちら向く	2	4	2	「愛染」
二六一	落雲雀亡母の居こは地か天か	2	6	4	「愛染」
二六二	落武者の強さ 髻切れてから	2	4	9	「愛染」
二六三	お使いの継母こわし道こわし	1	5	2	「檸檬」
二六四	夫用妻用とありカレンダー	1	9		「乱れ髪」
二六五	お手植えの松枯れながら続く昭和	2	5	1	「愛染」
二六六	弟も鉄が持てるようになり	5	6		「乱れ髪」
×弟も鉄がもてるようになり					
二六七	おとがいへマスクをずらす赤電話	3	2	5	「花径」
二六八	男ありすつぱり痩せておけさ節	1	2	8	「檸檬」
二六九	男の嘘 女の嘘にしてやられ	1	8	1	「肉眼」
二七〇	男の子 臍まで濡らし戻って来	8	0		「有情」
二七一	男へもやさしい手紙書く男	9	0		「有情」
二七二	男待つ灯に春夏秋冬	1	9	9	「肉眼」
二七三	男らしい足に踏まれた霜柱	1	4	6	「檸檬」
二七四	男を磨く女を磨くやや違い	1	1	9	「有情」
		2	6	4	「愛染」

- 二五五 「川柳塔」昭和55年9月号。『愛』『古』にあり。句集には「青森行 四句」の前書あり。二五四参照。
- 二五六 「川柳塔」昭和55年12月号。『愛』『古』にあり。
- 二五七 初出未詳。『肉』にあり。
- 二五八 「川柳雑誌」昭和38年5月号。第一四六回大萬川柳「大阪弁」麻生路郎選天位。『檸檬』『愛』『古』にあり。おたやんは、「お多福」の「おた」に「やん(さん)」がついた大阪弁。「おたやん」こけても鼻打たん。でばちん打つても鼻打たん」の囃し歌があった。
- 二五九 「川柳塔」昭和51年6月号。「松本波郎夫人を悼む(二句)」の前書あり。『愛』『古』にあり。句集には、同じ前書で、この句のみ収録。句集未収録の句は、へ昨日見て来た長谷の牡丹は死だつたか。松本波郎は番傘同人。
- 二六〇 「川柳塔」昭和54年4月号。「落椿」で一字空白あり。
- 二六一 「愛』『古』にあり。
- 二六一 「川柳塔」昭和58年5月号。『愛』『古』にあり。
- 二六二 「川柳塔」昭和55年11月号。『愛』『古』にあり。川柳塔の編集をしていた不二田一三夫が、9月26日(金)夜の9時過ぎ、危篤との知らせを受けて駆けつけたときの印象を詠んだ句。↓補注。
- 二六三 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。
- 二六四 「川柳塔」平成5年2月号。各地柳壇「ほたる川柳同好会」にあり。
- 二六五 「川柳展望」創刊号(昭和50年5月1日発行)。特別作品「鎮魂」25句の18句目。『愛』『古』にあり。↓補注。
- 二六六 「川柳塔」平成11年3月号。各地柳壇「尼崎いくしま川柳会」にあり。×の方は、同11年2月号に発表。
- 二六七 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『師』にあり。
- 二六八 「川柳塔」昭和43年8月号。「能登から佐渡の旅(四句)」の前書あり。『肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。八参照。
- 二六九 「川柳雑誌」昭和33年4月号。『有』にあり。
- 二七〇 川柳雑誌社第8回川柳まつり。昭和36年7月16日(日)。(へそ)清水白柳選。『有』にあり。
- 二七一 「川柳塔」昭和46年6月号。「中尾藻介兄へ」の前書あり。『肉』『愛』『古』にあり。句集も同じ前書。
- 二七二 初出未詳。『檸檬』『愛』『喜』にあり。
- 二七三 初出未詳。『有』にあり。
- 二七四 「川柳塔」昭和58年5月号。『愛』『古』にあり。
- 二七五 「川柳塔」平成12年2月号。「たくちゃん」は、孫の匠(たくみ)君のこと。

二七五 お年玉きつたかたくちやん待つてたホイ  
 二七六 弟 橋 媛を恋せし日を覚え  
 二七七 おとといと昨日と今日の虫の声  
 二七八 お隣も炭を割つてる大晦日  
 二七九 音のみの世界またよし 水の上  
 二八〇 処女の死 鏡の中へ歩み去る  
 二八一 弟んぼが大学に入り夫婦の夜  
 二八二 長尾鶏 李白は如何に叙すならん  
 二八三 鬼あざみ 能登曇りてふ曇りあり  
 二八四 鬼の子の一番好きな鬼の面  
 二八五 男の子欲しわが為し得ざること多ければ  
 二八六 おのずから五七五の独り言  
 二八七 おのずからさびしき旅書きいたり  
 二八八 尾道や 今見下ろせし船に乗る  
 二八九 お恥かしい古稀と宿 老温 かし  
 二九〇 帯きゆつと鳴るも嬉しい見合の日  
 二九一 おふくろが呼びにくるはずないんだが  
 二九二 お前七草ここは平成のキッチン  
 二九三 お見合いに手の静 脈が目立つなり  
 二九四 おみくじにやがてとあつてよろず吉

3 2 8 「花径」  
 3 4 2 「花径」  
 1 4 8 「檸檬」  
 8 9 「有情」  
 1 6 3 「肉眼」  
 1 6 8 「肉眼」  
 2 9 「乱れ髪」  
 1 9 9 「肉眼」  
 1 8 0 「肉眼」  
 5 6 「乱れ髪」  
 1 2 9 「檸檬」  
 3 8 「乱れ髪」  
 1 3 2 「檸檬」  
 1 7 9 「肉眼」  
 2 3 3 「愛染」  
 1 0 8 「有情」  
 3 2 4 「花径」  
 2 9 6 「愛染」  
 5 0 「乱れ髪」  
 2 7 5 「愛染」

二七六 サークル檸檬。平成6年1月9日(日)「自由吟」互選。  
 「川柳塔」平成6年3月号にも発表。『古』にあり。↓補注。  
 二七七 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 二七八 「川柳雑誌」昭和34年2月号。『有』にあり。  
 二七九 「川柳塔」昭和41年7月号。「水郷(五句)」の前書あり。『肉』『愛』『古』にあり。句集には「水郷 五句」の前書あり。八七九参照。↓補注。  
 二八〇 せんば川柳社本社句会。昭和42年9月19日(火)。「自由吟」岡橋宣介選秀句。↓補注。  
 二八一 もくせい川柳会。昭和60年2月18日(月)。「自由吟」軸吟。  
 二八二 「川柳塔」昭和46年6月号。「李白は如何に叙すならん」↑「白楽天は如何に抒す」。『肉』にあり。  
 二八三 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。句集には、「能登から佐渡へ」の前書あり。八参照。  
 二八四 第46回西大寺会陽川柳大会。平成9年2月23日(日)。「面」軸吟。  
 二八五 「川柳雑誌」昭和39年8月号。「人生譜」欄。河野春三選。「わが」↑「吾が」。『檸檬』『愛』『古』にあり。  
 二八六 西宮北口句会。昭和61年10月13日(月)。「独り言」軸吟。「喜」にあり。  
 二八七 初出未詳。『檸檬』にあり。句集には「十郎兵衛屋敷 二句」の前書あり。昭和39年の作。八四二参照。  
 二八八 「川柳塔」昭和43年7月号。「尾道にて(四句)」の前書あり。『肉』『愛』『古』にあり。『句集』には「尾道にて 五句」の前書があり、七二八(初出未詳)、二八八、六三五、七九七、一六八四の順に収録。『愛』『古』には、七九七、一六八四がなく、3句収録。↓補注。  
 二八九 「川柳塔」昭和53年3月号。「亜純さんを祝う」の前書あり。『愛』『古』にあり。句集も同じ前書。  
 二九〇 「川柳雑誌」昭和31年12月号。「近作柳樽」欄。『有』にあり。  
 二九一 川柳塔本社句会。平成10年6月8日(月)。「おふくろ」軸吟。↓補注。  
 二九二 初出未詳。  
 二九三 三井が丘川柳会。昭和52年10月16日(日)。「見合い」軸吟。  
 二九四 初出未詳。『古』『師』にあり。  
 二九五 初出未詳。『肉』にあり。九五参照。  
 二九六 「川柳塔」平成7年12月号。

二九五	お見舞の三品四品は小包で	1 8 9	「肉眼」
二九六	思い出をつついてうましどぜう鍋	3 0 9	「花径」
二九七	おもしろさ雀は跳ねて鳩歩く	2 3 7	「愛染」
二九八	親捨てた仲とも見えぬ老夫婦	7 0	「有情」
二九九	親の目に先生は皆若すぎる	4 9	「乱れ髪」
三〇〇	親不孝者も七十一になり	3 2 0	「花径」
三〇一	およめさん金米糖を食べ 愛に満ち満ちてありぬ	1 7 4	「肉眼」
三〇二	オリオンに見下ろされてる初詣	1 7	「乱れ髪」
三〇三	折り畳み傘にわたしもなりそうで	3 0	「乱れ髪」
三〇四	禽檻にいる殊に寂しき海の鳥	1 4 2	「檸檬」
三〇五	檻の鶴 又 眼を閉ずるほかはなし	7 3	「有情」
三〇六	お六櫛 われを籠らすひともなし	2 0 1	「肉眼」
三〇七	恩師髪 鏢槍さびを口ずさみ	2 4 6	「愛染」
三〇八	恩師かや豊明殿の雲に声	3 4 6	「花径」
三〇九	恩師の忌 血脈豊かなる蓮花(蓮華)	1 6 4	「肉眼」
三一〇	恩師の死 蟬殻の背は断ち割られ	1 5 7	「肉眼」
三一一	恩師の死 その夜眠しとも眠し	1 5 7	「肉眼」
三一二	恩師の死 手に止まる蚊をただ見つめ	1 5 7	「肉眼」
三一三	恩師の死 油然と聞く浪花節	1 5 7	「肉眼」
三一四	※恩借に 父の容態ねぎらわれ	7 3	「有情」

二九七 「川柳塔」昭和53年10月号。「愛」「古」にあり。  
 二九八 「川柳雑誌」昭和32年9月号。路郎賞特別課題「夫婦」。  
 『有』『檸檬』『愛』『古』にあり。  
 二九九 三井が丘川柳会。昭和51年7月18日(日)。「先生」小浜牧人選。  
 三〇〇 「川柳塔」平成9年10月号。『師』『喜』にあり。『句集』『喜』には「母十七回忌」の前書。『師』には前書なし。  
 三〇一 初出未詳。『肉』にあり。句集には「安西峰代さん結婚」の前書あり。↓補注  
 三〇二 「川柳塔」平成7年4月号。各地柳壇「川柳若葉の会」(前月分)にあり。『喜』にあり。  
 三〇三 もくせい川柳会。昭和62年5月18日(月)。「自由吟」軸吟。  
 三〇四 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『師』にあり。  
 三〇五 「川柳雑誌」昭和33年1月号。『有』『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 三〇六 「川柳塔」昭和46年10月号。「馬籠・妻籠にて三句」の前書あり。『肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。『肉』『句集』とも初出時と同じ前書。『愛』『古』『師』『喜』は、同じ前書で、この1句のみ収録。つまり、「櫛の歯に秋の近づきたりけり」(雨上がり猫はや歩く石畳)の2句は未収録。六九参照  
 三〇七 川柳塔本社句会。昭和54年10月7日(日)。「恩師」軸吟。「愛』『古』にあり。↓補注。  
 三〇八 「川柳塔」平成13年7月号。「句集」には、「春の叙勲で木杯一組台賜与さる 五句」の前書があり、一六八七、五三二、三〇八、三四五、一五〇六の順に収録。平成13年5月10日(木)に国立劇場で受章した。  
 三〇九 初出未詳。「川柳塔」欄で没になった句か。「川柳ジャーナル(自選作品特集号)」昭和42年2月号に、「恩師の忌」の前書で、「路郎忌に炸裂したるカンナノ朱」(蓮の花は一茎の花 恩師の忌)「恩師の忌 血脈豊かなる蓮花」(かんとも鳴るものあるなり 恩師の忌)「路郎忌に 言葉を断る人ばかり」(雲の峰 愛憎激しかりければ)「木枯獅子 麻生路郎の横顔か)の7句を発表しているの、昭和41年の作であることが分かる。『肉』『愛』にあり。  
 三一〇 初出未詳。昭和40年の作。『肉』にあり。  
 三一一 「川柳塔」創刊号。昭和40年10月。「眠しとも眠し」↑眠むしとも眠むし」。『肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 三一二 「川柳塔」創刊号。昭和40年10月。『肉』にあり。  
 三一二 初出未詳。昭和40年の作。『肉』にあり。

三一五	温泉 <small>おんせん</small> で生まれたときの顔 <small>かお</small> になる	3	4	5	「花径」
三一六	温泉 <small>おんせん</small> で卵 <small>たまご</small> のようになる女 <small>おんな</small>	3	2	4	「花径」
三一七	温泉 <small>おんせん</small> にいて腕 <small>うで</small> 組みをしています	3	4	0	「花径」
三一八	女 <small>おんな</small> なるかなや この女 <small>じよゆう</small> 優 <small>げいしや</small> も芸者 <small>げいしや</small> が似 <small>にあ</small> 合い	6	9		「有情」
三一九	おん目 <small>めもと</small> 元 <small>もと</small> さつき明 <small>あか</small> りのし給 <small>たま</small> える	2	2	8	「愛染」
【か】					
三二〇	母 <small>か</small> さんは一 <small>いち</small> か八 <small>はち</small> かが大 <small>だい</small> 嫌 <small>きら</small> い	3	1	4	「花径」
三二一	甲斐 <small>かい</small> 駒 <small>こま</small> も木曾 <small>きそ</small> 駒 <small>こま</small> も新 <small>はる</small> 春 <small>いさ</small> 勇 <small>いさ</small> むらん	2	9		「乱れ髪」
三二二	海 <small>かい</small> 底 <small>てい</small> の都 <small>みやこ</small> は憂 <small>うれ</small> きか平 <small>へい</small> 家 <small>けがに</small> 蟹 <small>かに</small>	2	4	9	「愛染」
三二三	飼 <small>かい</small> 猫 <small>ねこ</small> へやさしき言 <small>こと</small> 葉 <small>は</small> 旅 <small>たび</small> 帰 <small>がえ</small> り	1	4	0	「檸檬」
三二四	蛙 <small>かえる</small> の降 <small>ふ</small> らす雨 <small>あめ</small> やら 龍 <small>りゆう</small> の降 <small>ふ</small> らす雨 <small>あめ</small>	2	0		「乱れ髪」
三二五	顔 <small>かお</small> が近 <small>ちか</small> づき体 <small>たい</small> 温 <small>おん</small> 計 <small>けい</small> をつまみ出 <small>だ</small> し	4	3		「乱れ髪」
三二六	顔 <small>かお</small> 見 <small>み</small> 世 <small>せ</small> の勘 <small>かん</small> 亭 <small>てい</small> 流 <small>りゆう</small> へ黄 <small>き</small> なコ <small>こ</small> ート	3	3	7	「花径」
三二七	顔 <small>かお</small> 見 <small>み</small> 世 <small>せ</small> は夫 <small>ふう</small> 婦 <small>ふ</small> 第 <small>だい</small> 九 <small>く</small> は違 <small>ちが</small> うひと	3	4		「乱れ髪」
三二八	かか <small>か</small> る時 <small>とき</small> 海 <small>うみ</small> の岬 <small>さか</small> さを持 <small>も</small> つ蚊 <small>か</small> 帳 <small>や</small> よ	6	6		「有情」
三二九	蚊 <small>か</small> が鳴 <small>な</small> いて僕 <small>ぼく</small> を探 <small>さが</small> しに來 <small>き</small> てくれた	3	4	3	「花径」
三三〇	鏡 <small>かが</small> 照 <small>て</small> り照 <small>て</small> りて花 <small>はな</small> 嫁 <small>よめ</small> はわが娘 <small>こ</small>	2	7	3	「愛染」
三三一	鏡 <small>かが</small> には美 <small>び</small> 形 <small>けい</small> 水 <small>みづ</small> には魔 <small>ま</small> 女 <small>じよ</small> の性 <small>せい</small>	1	5		「乱れ髪」
三三二	牡蠣 <small>かきがら</small> 殻 <small>がら</small> におのずからなる波 <small>なみ</small> の縞 <small>しま</small>	1	7	5	「肉眼」
三三三	火 <small>か</small> 氣 <small>き</small> 嚴 <small>げん</small> 禁 <small>きん</small> 寒 <small>さむ</small> 々 <small>さむ</small> として城 <small>しろ</small> があり	1	1	3	「有情」

三一四 初出未詳。↓補注。※「恩借」：小学館「日本国語大辞典」、角川「古語大辞典」とも。「おんじやく(おんじやく)とも」。室町時代の辞書「落葉集」に「おんじやく」とあり。『有』「愛』『古』『師』にあり。↓補注。

三一五 「朝日新聞」夕刊。平成11年2月26日(金)。「師弟」7句の1句目。『喜』にあり。補注二三参照。

三一六 川柳塔本社句会。平成10年5月7日(木)。「温泉」軸吟。

三一七 第21回鹿野みか月川柳大会。平成12年11月19日(日)。「腕」軸吟。

三一八 「川柳雑誌」昭和36年12月号。『有』にあり。

三一九 「川柳塔」昭和51年7月号。「鑑真和上像」の前書あり。『愛』『古』『師』にあり。「句集」も同じ前書。鑑真和上は、六度目にしてようやく渡日を果たし、そのときは失明していたという。「五月闇」に対する「さつき明り」は、薰風の造語だろうから。無明の闇を照らす悟りの明かりが、盲目の鑑真和上の目から感じられた、ということだろう。

三二〇 「川柳塔」平成9年1月号。『師』にあり。

三二一 初出未詳。「句集」には「午歳新春」の前書あり。

三二二 菜の花句会。昭和55年8月10日(日)。「海底」軸吟。『愛』『古』『師』にあり。平家蟹の甲の模様は、怒った人間の顔のように見える。壇ノ浦で破れた平家の怨念が乗り移ったものと見て、平家蟹と名付けた。この句では、甲の模様に海底の都の憂鬱さを見てとった。

三二三 「川柳雑誌」昭和38年11月号。『樽』『愛』『古』にあり。

三二四・三二五 初出未詳。

三二六 「川柳塔」平成13年4月号。『喜』にあり。補注一六九参照。

三二七 「川柳塔みちのく」30号(一九九八年二月)。「顔見世」↑「顔見せ」。「顔見せ」は誤植。投句葉書の消印は、平成9年12月13日。

三二八 「川柳雑誌」昭和36年2月号。「母の入院」の前書あり。「かかる時」↑「或る時は」。「有』『樽』『愛』『古』『師』にあり。句集は「母再び入院」の前書。

三二九 サークル檸檬。平成6年5月15日(日)「自由吟」五選。

三三〇 初出未詳。『愛』『古』『喜』にあり。『愛』『古』『句集』に「次女幸結婚」の前書あり。『喜』は「次女」を「二女」と表記。「川柳塔」昭和61年1月号「私の一句」にも発表。

三三一 初出未詳。

三三二 「川柳塔」昭和43年3月号。『肉』にあり。

三三四	柿 <small>かき</small> の木と蔵 <small>くら</small> に西日 <small>にしひ</small> が美 <small>うつく</small> しい	3	7	「乱れ髪」	
三三五	革命 <small>かくめい</small> さはじめてコーラ飲 <small>の</small> んだ日は	3	3	2	「花径」
三三六	革命 <small>かくめい</small> をめぐらすに湯 <small>ゆ</small> に身 <small>み</small> が浮 <small>う</small> くよ	2	0	4	「肉眼」
三三七	隠 <small>かく</small> れ家は日暮 <small>にっぽり</small> 里鶯 <small>ういすだに</small> 谷 <small>に</small> あたり	3	1	9	「花径」
三三八	陽炎 <small>かげろう</small> へチーズの如 <small>ごと</small> し黄 <small>き</small> なコート	3	3	7	「花径」
三三九	火口湖 <small>かこうこ</small> からわが眼鏡 <small>めがね</small> から霧 <small>きり</small> 生 <small>う</small> まる	1	7	3	「肉眼」
三四〇	籠 <small>かご</small> の鳥 <small>とり</small> とらわれの身 <small>み</small> の顔 <small>かお</small> してず	9	5	「有情」	
三四一	傘 <small>かさ</small> さしてやつてる方 <small>ほう</small> が刑事 <small>けいじ</small> なり	1	0	9	「有情」
三四二	風花 <small>かざばな</small> す雪子 <small>ゆきこ</small> が髪 <small>かみ</small> を梳 <small>す</small> くらしく	1	9	8	「肉眼」
三四三	風花 <small>かざばな</small> の今 <small>きょう</small> 日 <small>きょう</small> タイガースキャンプイン	1	5	3	「檸檬」
三四四	風見鶏 <small>かざみどり</small> の館 <small>やかた</small> タツノオトシゴの家 <small>いえ</small>	3	3	2	「花径」
三四五	かしこさよ陛下 <small>へいか</small> と同じ目 <small>め</small> の高 <small>たか</small> さ	3	4	6	「花径」
三四六	傳 <small>かした</small> いて笑 <small>わら</small> うことなき盲導 <small>もうどう</small> 犬 <small>けん</small>	2	8	「乱れ髪」	
三四七	風薫 <small>かぜかお</small> る歩 <small>ある</small> きながらのハーモニカ	1	6	9	「肉眼」
三四八	風薫 <small>かぜかお</small> る伽羅 <small>まやら</small> も麝香 <small>じやくかう</small> もしずかなり	3	3	9	「花径」
三四九	風薫 <small>かぜかお</small> るキューピーほどの裸 <small>はだか</small> はなし	1	6	9	「肉眼」
三五〇	風薫 <small>かぜかお</small> る鯛 <small>たい</small> 美 <small>うつく</small> しく人やさし	3	4	7	「花径」
三五一	風 <small>かぜ</small> さんがやさしい雲 <small>くも</small> の親子 <small>おやこ</small> 連れ	2	0	「乱れ髪」	
三五二	風邪熱 <small>かぜねつ</small> のみのりちゃん桃 <small>もも</small> の花 <small>はな</small> のよう	2	8	7	「愛染」
三五三	風 <small>かぜ</small> のまちにて薫風 <small>かぜふう</small> からと書く <small>か</small> いのかち	3	0	2	「花径」

- 三三三 初出未詳。『有』にあり。  
 三三四 初出未詳。  
 三三五 「俳句現代」平成12年6月1日発行。「タツノオトシゴの家」10句の1句目。『喜』にあり。日本でココロラの製造を始めたのは、一九五七(昭和32)年。大正時代から輸入されてはいた。戦後は東京のアメ横で米軍の放出品が売られ、ラーメン25円の時代に、50円で売られていたそうだ。  
 三三六 「川柳塔」昭和47年9月号。『肉』『愛』『古』にあり。  
 三三七 「川柳塔」昭和47年3月号。  
 三三八 「川柳塔」平成13年4月号。補注一六九参照。  
 三三九 初出未詳。『肉』『句集』とも「信濃の旅五句」の前書があり、四六六、四二〇、一六〇五、四六五、三三九の順に収録。『愛』『古』は、「信濃の旅 三句」の前書で、この句と四六五の2句は未収録。四六六・一六〇五によると、昭和42年12月号「川柳塔」欄で没になった句だと考えられる。  
 三四〇 初出未詳。『有』『師』『古』にあり。  
 三四一 「川柳雑誌」昭和33年2月号。『有』『愛』にあり。  
 三四二 「川柳塔」昭和46年3月号。『肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 三四三 ふあうすと本社句会。昭和34年2月14日(土)。「梅灘」志男選秀句。「風花の」↑「梅固し」。『梅』『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 三四四 「俳句現代」平成12年6月1日発行。「タツノオトシゴの家」10句の4句目。『喜』にあり。↓補注。  
 三四五 「川柳塔」平成13年7月号。『喜』にあり。『句集』には、「春の叙勲で木杯一組台付賜与さる 五句」の前書あり。7月号の「風薫る日」の文中に、「天皇陛下には豊明殿でものしずかなねざらいのお言葉頂いた。近々とお顔を拝すること園遊会の様子とあまり変らない。」とある。『喜』には、この句と一六八七の二句収録。三〇八参照。  
 三四六 もくせい川柳会。平成13年4月16日(月)。「自由吟」軸吟。「川柳塔」平成13年7月号に発表するに当たり、「盲導犬は笑わない」を「笑うことなき盲導犬」に変えた。  
 三四七 初出未詳。『肉』『愛』『古』『師』にあり。  
 三四八 「川柳塔」平成13年7月号。「川柳塔みちのく」44号(二〇〇一年八月)にも発表。投句集書の消印は、平成13年5月18日。  
 三四九 「川柳塔」昭和42年6月号。「裸はなし」↑「裸なし」。「肉」にあり。  
 三五〇 「川柳塔」平成13年8月号。『喜』にあり。

三五四 風博士ラムネの玉を鳴らしおり  
 三五五 風邪ひいただけで男の嵩だかし  
 三五六 風巻いて韋駄天となる独楽の夢  
 三五七 風渡る愛の伝わりゆくさまに  
 三五八 頑なな父の枕の固いこと  
 三五九 肩車したらはつきり他人の子  
 三六〇 肩車タンポポに風杉に風  
 三六一 片肌になり双肌を脱ぐ太鼓  
 三六二 形見分け暖かい石冷たい石  
 三六三 喝采に代えて頷くばかりなり  
 三六四 悲しさに酔う幕切れの紙の雪  
 三六五 かなしみの西より来れば西へ旅  
 三六六 カナリヤもいてアパートの新世帯  
 三六七 金貸しに蛙のごとく手をつかえ  
 三六八 金貯める主義には少し若過ぎる  
 三六九 金に嫁せしか人形を抱く如し  
 三七〇 鐘の音 さらに身のおきどころなし  
 三七一 寡婦の買う数珠のような首飾り  
 三七二 かまきりの鎌振り上げて事切れし  
 三七三 紙コップいまだに伏せたことがない

3 0 0 「花径」  
 6 4 「有情」  
 3 0 0 「花径」  
 2 4 9 「愛染」  
 3 6 「乱れ髪」  
 3 4 0 「花径」  
 3 4 4 「花径」  
 1 3 3 「檸檬」  
 2 5 6 「愛染」  
 2 2 「乱れ髪」  
 1 4 「乱れ髪」  
 2 5 7 「愛染」  
 1 3 「乱れ髪」  
 1 3 4 「檸檬」  
 1 0 4 「有情」  
 4 8 「乱れ髪」  
 1 6 4 「肉眼」  
 2 1 1 「肉眼」  
 2 5 4 「愛染」  
 1 6 「乱れ髪」

三五二 初出未詳。  
 三五三 「川柳塔」平成5年5月号。「みのりちゃん」↑「のりちゃん」。「のりちゃん」は、孫娘みのりの愛称か。六一六参照。「古」にあり。  
 三五四 「川柳塔」平成6年6月号。青森県東津軽郡蟹田町では、「風のまち川柳大賞」のイベントが催され、薫風は選者を務めた。補注六八八参照。  
 三五五 初出未詳。  
 三五六 「川柳塔」昭和34年4月号。「有」「檸檬」にあり。  
 三五七 初出未詳。「喜」にあり。  
 三五八 「川柳塔」昭和55年11月号。「愛」「古」にあり。  
 三五九 初出未詳。  
 三六〇 サークル檸檬。平成5年8月8日(日)「自由吟」互選。  
 三六一 初出未詳。「檸檬」「愛」「古」「師」「喜」にあり。  
 三六二 川柳塔本社「腹乃・古方追悼句会」。昭和56年4月7日(火)。「宝石」軸吟。「愛」「古」にあり。  
 三六三 第44回岸和田市民川柳大会。平成6年10月16日(日)。「喝采」軸吟。  
 三六四 明和病院青蛙川柳会。↓補注。  
 三六五 「川柳塔」昭和56年6月号。「愛」「古」にあり。  
 三六六 明和病院青蛙川柳会。補注三六四参照。  
 三六七 「川柳塔」昭和39年7月号。「金貸し」に↑「金借り」に。「檸檬」「愛」「古」にあり。  
 三六八 「川柳塔」昭和35年11月号。「有」にあり。  
 三六九 三井が丘川柳会。昭和50年4月29日(火)。「人形」藤村メ女選。  
 三七〇 路郎忌川柳大会。昭和41年7月10日(日)。天王寺慶沢園。三条東洋樹選佳作。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。  
 三七二 「川柳塔」昭和48年1月号。「肉」にあり。  
 三七三 「川柳展覧」3号(昭和50年11月1日発行)。「愛」「古」にあり。  
 三七四 初出未詳。  
 三七五 「川柳塔」昭和39年11月号。「熊野権現」の前書あり。の消印は、平成10年5月21日。  
 三七六 「川柳塔」昭和39年11月号。「熊野権現」の前書あり。「鳥」↑「鳥」。「鳥」は誤植。「檸檬」にあり。句集には前書に「鳥」の但書があり、この句の後に一七・一六。熊野権現といえは、神の使いとしての八咫鳥(やたがらす)が思い浮かぶ。

- 三七四 髪白うならず年寄るのも寂し  
 三七五 神澄めり鳥の羽音さえひびき  
 三七六 髪染めて心もとなき日本語  
 三七七 粥を嘔む 乳児嘔むよりおそれをなし  
 三七八 体売る女 魂売る男  
 三七九 軽い愛女の傘をさしている  
 三八〇 軽い嘘種なし葡萄食べながら  
 三八一 考える人考える雨宿り  
 三八二 考える人なかなかの痩せ我慢  
 三八三 カンガルーの袋はテレビ見るによし  
 三八四 歎喜天息をつくろう偽夫婦  
 三八五 姦計を鯛の目玉にさげすまる  
 三八六 寒月に三々五々の通夜の客  
 三八七 感心はしたものの落書を消す  
 三八八 韓人の服に最も風薫る  
 三八九 かんぜより下手の一本まぎれなし  
 三九〇 かんと鳴るもののあるなり 恩師の忌  
 三九一 棺の出たあとの夕焼 見事なり  
 三九二 寒風山男鹿の芒は背が低し  
 三九三 完璧な乳房に逢うた母以来

- 3 3 0 「花径」  
 1 3 1 「檸檬」  
 2 7 「乱れ髪」  
 1 9 5 「肉眼」  
 4 1 「乱れ髪」  
 2 8 「乱れ髪」  
 2 6 2 「愛染」  
 1 6 「乱れ髪」  
 3 1 6 「花径」  
 1 7 「乱れ髪」  
 2 7 4 「愛染」  
 2 1 3 「肉眼」  
 3 2 2 「花径」  
 3 1 「乱れ髪」  
 1 3 3 「檸檬」  
 2 7 6 「愛染」  
 1 6 5 「肉眼」  
 1 2 0 「有情」  
 2 7 9 「愛染」  
 2 8 4 「愛染」

- この句の鳥も八咫鳥を念頭に置いたものだろう。  
 三七六 もくせい川柳会。平成11年1月18日(月)。「自由吟」軸吟。  
 三七七 「川柳塔」昭和46年1月号。「胃手術(五句)」の前書あり。「肉」にあり。句集では「入院手術」の前書。二六参照。  
 三七八 初出未詳。  
 三七九 もくせい川柳会。昭和59年7月23日(月)。「愛」石川勝彦。  
 三八〇 初出未詳。「愛』『古』にあり。  
 三八一 初出未詳。  
 三八二 「川柳塔」平成9年6月号。「喜」にあり。  
 三八三 初出未詳。  
 三八四 「川柳塔」昭和59年7月号。「古』にあり。「古』には「懸空寺」の前書。「句集」は、それに「二句」の但書。この句の前に一八五五。中国の懸空寺を訪れたのは昭和61年。昭和59年作の句を合わせて、なぜ「二句」としたのか不明。  
 三八五 「川柳ジャーナル」昭和48年3月号。招待作品「一兵の生」8句の5句目。「肉』『愛』『古』にあり。  
 三八六 「川柳塔」平成10年2月号。  
 三八七 もくせい川柳会。昭和62年11月16日(月)。「消す」墨作二郎選秀句。  
 三八八 「川柳雑誌」昭和39年6月号。「檸檬』『愛』『古』にあり。  
 三八九 初出未詳。「古』にあり。  
 三九〇 「川柳塔」昭和41年10月号。「肉」にあり。  
 三九一 「川柳雑誌」昭和36年7月号。「有』『檸檬』にあり。「檸檬』には、「棺の出たるあとの夕焼」の形で収録。  
 三九二 「川柳塔」昭和62年10月号。「秋田・青森の旅」の前書あり。「古』にあり。句集は、初出時の前書に「四句」の但書。一五四五、三九二一、一〇三七、一四三七の順に収録。寒風山は、標高355米。芝生で覆われた山。↓補注。  
 三九三 「川柳展望」平成2年11月号。「淡島幻想」の前書あり。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品「老司祭」25句の23句目。「古』にあり。「句集」は、初出時と同じ前書。「古』には、それに「二句」の但書があり、「安らかな乳房の形りの土まんじゅう」も収録。「川柳塔」平成元年11月号には、他に「流し雑素朴消えたら海消えた」(男根のたけくらべには水を遣らねば)「光の過去と水の未来の中に澄み」を発表。和歌山市の淡島神社は、雑流しで有名だが、婦人病・子宝の神としても知られ、婦人の下着や張形が数多く奉納されている。  
 三九四 「川柳塔」昭和62年5月号。「辻川慶子さん還暦」の前

三九四	還暦にはたちの青春がまだ残り	2	7	7	「愛染」
三九五	還暦の妻と易々諾々と旅	2	8	1	「愛染」
三九六	還暦の人若々し五輪の年	1	3	1	「檸檬」
三九七	還暦の若水なれば若やいで	2	7	3	「愛染」
三九八	還暦は実年の花弓始	2	7	3	「愛染」
三九九	還暦や吉祥天と初詣	2	7	3	「愛染」
四〇〇	凱旋の甲へうま酒を満たす	3	3	3	「乱れ髪」
四〇一	学生を矢面に立て 国貧し	6	3	3	「有情」
四〇二	学問の跡形もなし 小商人	1	6	6	「肉眼」
四〇三	学問の灯は落ち着けり 師走にも	1	1	5	「有情」
四〇四	瓦斯タンクの傍で結構人が住み	1	1	2	「有情」
四〇五	合掌の手が焰とも見えるなり	2	5	2	「愛染」
四〇六	ガラス吹くおとぎの国の顔をして	4	6	6	「乱れ髪」
四〇七	元日の駅前広場広場となる	1	4	5	「檸檬」
四〇八	元日の恋に使いし一時間	1	6	7	「肉眼」
四〇九	元日の冬濤を率て逢いにくる	1	7	4	「肉眼」
四一〇	元日や王城の内写される	1	4	5	「檸檬」
四一一	元日を旧い家風が落ち着かせ	8	5	5	「有情」
四一二	元旦ぞルパンダ(ルパンダ) 島も元旦ぞ	2	1	1	「肉眼」
四一三	元旦の母なる川は朱金の帯	3	1	4	「花径」

書あり。『古』にあり。句集も同じ前書。

三九五 「川柳塔」平成2年1月号。『古』にあり。

三九六 初出未詳。『檸檬』にあり。句集には「河相す、む氏還暦」の前書あり。五輪の年だから、昭和39年の作。

三九七 「川柳塔」昭和61年1月号。年賀状の句。『愛』『古』にあり。

三九八 「川柳塔」昭和61年1月号。『愛』『古』にあり。弓始は、年の始め(正月七日)に、初めて弓射を試みる儀式。

三九九 「川柳塔」昭和61年1月号。年賀状の句。『愛』『古』『喜』にあり。

四〇〇 初出未詳。

四〇一 川柳雑誌社「川柳まつり」。昭和35年5月15日(日)。路郎賞特別課題「学生」麻生路郎選。『有』『檸檬』『愛』『古』『師』にあり。

四〇二 初出未詳。『肉』『愛』『古』『師』にあり。

四〇三 初出未詳。『有』『檸檬』『愛』『古』にあり。

四〇四 「川柳雑誌」昭和32年10月号。『有』にあり。

四〇五 「川柳展望」2号(昭和50年8月1日発行)。『愛』『古』にあり。

四〇六 初出未詳。

四〇七 「川柳雑誌」昭和38年2月号。『檸檬』『愛』『古』『喜』にあり。

四〇八 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。

四〇九 「川柳塔」昭和43年2月号。『肉』にあり。

四一〇 「川柳雑誌」昭和38年1月号。『元日や』↑『元旦や』。『檸檬』『愛』『古』にあり。

四一一 初出未詳。『有』にあり。

四一二 「川柳塔」昭和48年1月号。年賀状の句。『肉』『愛』『古』にあり。昭和47年1月、グアム島で横井庄一伍長が発見される。同年10月19日、フィリピンルパンダ島で日本兵が警察軍に射殺される。同年10月22日、小野田元少尉と小塚元一等兵の家族と戦友がルパンダ島に行き、小塚元七元一等兵の死体であることを確認。この句は、この事実を踏まえて詠んだ句だと思われる。同48年3月12日(月)、小野田元少尉は帰国した。

四一三 「川柳塔」平成9年1月号。「川柳塔」平成10年1月号「私的一句」にも発表。

四一四 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。

四一五 「川柳塔」昭和44年4月号。「偶頰のごとくに」↑「檸檬の如くに」。「川柳塔」昭和45年3月号。「九輪抄」清水白柳選

四一四	元旦も蜘蛛は姿を変えられず	1	3	7	「檸檬」
四一五	元旦や 偈頌のごとくに師の一句	1	9	0	「肉眼」
四一六	元旦や 歯の美しいお嬢さん	1	6	0	「肉眼」
四一七	元旦やわけて四十という齢は	1	2	7	「檸檬」
四一八	元旦を白一色の千羽鶴	3	0	4	「花径」
四一九	頑徹な鯛の頭の骨を見よ	2	3		「乱れ髪」
【き】					
四二〇	黄色い屋根の旅館に寝たり 秋の信濃の	1	7	2	「肉眼」
四二一	勢い獅子赤青金の息を吐き	3	2	1	「花径」
四二二	機関士が機関車降りるときの顔	1	8		「乱れ髪」
四二三	機関車に貴婦人ありき恋をせり	1	8		「乱れ髪」
四二四	気が付けば 恋のかけらを拾うてた	7	9		「有情」
四二五	奇巖重 豊影かと思れば影の山	2	7	1	「愛染」
四二六	桔梗寺光源氏とかたつむり	3	3	1	「花径」
四二七	菊花展 白菊黄菊暮れ残る	8	8		「有情」
四二八	菊花展 天守へやさし菊の唄	1	8	7	「肉眼」
四二九	菊大輪 雲湧き上るごとくなり	8	8		「有情」
四三〇	菊大輪 日本も支那も古い国	8	8		「有情」
四三一	菊人形 小楠公は赤い菊	8	8		「有情」
四三二	菊の香に 二十一世紀が近し	8	9		「有情」

にも「元日や」の形で入選。「偈頌」に「じゆげ」とルビあり。『肉』『古』『喜』にあり。偈頌は仏教用語。経典中で、詩句の形式をとり、仏徳の賛嘆や教理を述べたもの。

四一六 「川柳塔」昭和41年1月号。「元旦や」↑「元日や」。『肉』にあり。

四一七 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『喜』にあり。句集『檸檬』は、昭和40年7月11日発行。薫風の生年月日は大正15年7月11日なので、数え年で詠んだ句。

四一八 「川柳塔」平成7年1月号。

四一九 第35回川柳塔きやらぼく忘年句会。平成11年12月12日(日)。「頭」軸吟。俳人山口青郎の句に、「こほろぎのこの一徹の貌を見よ」(昭和23年作)がある。

四二〇 「川柳塔」昭和42年11月号「柳界展望」に、「母と長男とで黒四ダム、浅虫温泉、善光寺、湯田中温泉などを周遊。一日夜は石曾根民郎氏夫妻と愛犬を訪問。三日に中島紫痴郎氏を訪ねたが、九月十三日脳出血で倒れられて入院中とのことで、路郎先生ご夫妻逗留の無心庵も見られず辞去した。『黄色い屋根の旅館に寝たる溪谷の秋』とある。『肉』『愛』『古』にあり。句集には「信濃の旅」の前書あり。三三九参照。

四二一 「川柳塔」平成9年12月号。「唐津くんち」の前書で三句発表。『句集』には「三句」の但書。四二一、一七二七、七三六の順に収録。『勢い獅子』の後、一字空白あり。唐津くんちは、毎年11月2日から4日まで開催される。1番曳山は赤獅子、2番曳山は青獅子、8番曳山は金獅子。

四二二・四二三 初出未詳。

四二四 「川柳雑誌」昭和37年7月号。『有』にあり。

四二五 「川柳塔」昭和59年12月号。『愛』にあり。句集には「中国吟」の前書あり。↓補注。二七参照。

四二六 「川柳塔」平成12年9月号。「蘆山寺」の前書あり。『句集』では「四句」の但書。一五〇七、一三六八、五四六、四二六の順に収録。蘆山寺は、京都市上京区にある円浄宗の本山。中国の蘆山に擬して念仏の道場となる。

四二七 初出未詳。『有』にあり。

四二八 「川柳塔」昭和45年1月号。『肉』『愛』『古』にあり。

四二九 初出未詳。『有』『檸檬』『愛』『古』にあり。

四三〇 初出未詳。『有』にあり。

四三一 初出未詳。『有』『檸檬』『愛』『古』にあり。小楠公は、楠正行(1326〜1348 S.1.1.)。

四三二 「川柳雑誌」昭和34年12月号。各地柳壇「にしなり支部句会」にあり。「菊」後藤梅志選。『有』にあり。

四三三	菊の壺 薔薇の壺より物思う	1 8 8	「肉眼」
四三四	菊の露ふくんで母の針仕事	8 3	「有情」
四三五	菊の日の白い炎に焼かれける	2 4 6	「愛染」
四三六	傷ついた父 その日から髭をおく	1 8 7	「肉眼」
四三七	北国になお北のあり流 氷よ	2 8 6	「愛染」
四三八	北の旅残るさくらを妻が褒め	2 8 9	「愛染」
四三九	来た道に戻る思いに年を取り	3 3 9	「花径」
四四〇	切手にも金魚が泳ぎ風薫る	1 9 9	「肉眼」
四四一	樹に添うて力をもろう風の葬	2 3 4	「愛染」
四四二	木の柵が森に続いている牧場	1 1 6	「有情」
四四三	踵かえさん 魂青に溶けぬうち	1 4 9	「檸檬」
四四四	気まぐれと気まま夫婦でよく続き	3 8	「乱れ髪」
四四五	生真面目な戒 名貰ろて君逝くか	3 3 8	「花径」
四四六	君あらず 浅虫の日は見えながら	1 8 4	「肉眼」
四四七	君おもう熱もまじれる風邪の熱	1 3 8	「檸檬」
四四八	君にふたごころわがあらめやもモンロー忌	2 3 6	「愛染」
四四九	君の骨 栗拾うごとと拾われよ	1 8 3	「肉眼」
四五〇	君は逝きありし日のまま茶房の絵	3 2 8	「花径」
四五一	木も草も花をつけてる誕生日	6 5	「有情」
四五二	宮城のお堀端行く黄なコート	3 3 6	「花径」

- 四三三 「川柳塔」昭和45年1月号。「肉」「愛」「古」にあり。  
 四三四 「川柳雑誌」昭和32年5月号。「有」「愛」「古」「師」「喜」にあり。  
 四三五 「川柳塔」昭和54年12月号。「愛」「古」にあり。  
 四三六 「川柳塔」昭和44年10月号。「肉」にあり。  
 四三七 川柳塔本社句会。平成3年10月6日(日)。席題「北」斉藤荔選。「古」「師」「喜」にあり。  
 四三八 「川柳塔あおもり」4号(平成2年11月)。「古」にあり。  
 四三九 「川柳塔」平成13年6月号。  
 四四〇 「川柳塔」昭和46年7月号。「肉」「愛」「古」にあり。  
 四四一 「川柳塔」昭和53年5月号。「愛」「古」にあり。  
 四四二 せんば川柳社本社句会。昭和34年4月4日(土)。「牧場」伊藤静夢選。「有」にあり。  
 四四三 「川柳雑誌」昭和37年9月号。「十和田湖二句」の前書あり。「檸檬」にあり。句集では「東北行 七句」の5句目。「十和田湖」の句が三句収録されているが、「愛」「古」では「水の精」の句だけが、「十和田湖」の前書で収録されている。↓補注。  
 四四四 西宮北口句会。昭和62年4月13日(月)。「気まま」海士天樹選。  
 四四五 「川柳塔」平成13年5月号。「嗚呼 高杉鬼遊」の前書あり。「句集」では「嗚呼 高杉鬼遊さん」の前書。↓補注。  
 四四六 「川柳塔」昭和44年4月号。「悼 工藤安亭氏」の前書あり。「肉」にあり。句集も同じ前書。  
 四四七 「川柳雑誌」昭和39年1月号。「檸檬」「愛」「古」にあり。  
 四四八 昭和53年7月23日(日)、中尾藻介居「モンロー忌」句会。「愛」「古」「喜」にあり。↓補注。  
 四四九 「川柳塔」昭和43年1月号。「嗚呼清原祐志君」の前書あり。「骨」の後、「字空白あり」「肉」「愛」「古」「師」にあり。「句集」には、「嗚呼 清原祐志君 三句」の前書があり、「一三九九、一六五一、四四九」の順に収録。「肉」には、「句集」収録以外に、「菊の精を見き 童貞を見き 君に」(骸と同じ形でこの夜寝る)の句が収録されている。「愛」「古」では、「清原祐志君 二句」の前書まで、「一三九九」(棺出た跡形もなし 療養所)の句は未収録。「師」では、「清原祐志君」の前書で、この四四九の句のみ収録。  
 四五〇 「川柳塔」平成12年3月号。  
 四五一 「川柳雑誌」昭和33年6月号。「四月四日 長女生誕」の前書あり。「有」「檸檬」「愛」「古」「師」「喜」にあり。「有」

四五三 級 長の欠伸に教師気がとがり  
 四五四 今日あたり風鈴吊らん陶泓忌  
 四五五 恐懼せり紅葉と滝の神の前  
 四五六 恐妻家 どこか張子の虎に似る  
 四五七 鏡 台の前の思案はたかが知れ  
 四五八 今日の日も涼も天 神祭かな  
 四五九 今日の旅扉を閉ざしたる朱雀門  
 四六〇 今日も又一手違いで妻に負け  
 四六一 協 力はしますが彼の処世術  
 四六二 切株の俺の五年と子の五年  
 四六三 きりぎりすちよんと男は立ち上る  
 四六四 キリストの肋に似たる昼寝をし  
 四六五 霧の奥 熱が出そうな林檎の実  
 四六六 霧のダム 紺の背広の竜 神か  
 四六七 霧の夜の松の林に死後の景  
 四六八 霧這えば杉の樹間の正しさよ  
 四六九 桐一葉猫も座禅の向うむき  
 四七〇 金環蝕 そらエンゲージリングだよ  
 四七一 金柑は皮を食わるる四月馬鹿  
 四七二 きんつばが六つ箱には隙もない

1 1 5 「有情」  
 8 7 「有情」  
 2 3 8 「愛染」  
 1 1 8 「有情」  
 8 0 「有情」  
 3 3 3 「花径」  
 3 4 「乱れ髪」  
 3 9 「乱れ髪」  
 3 1 7 「花径」  
 2 0 4 「肉眼」  
 2 3 1 「愛染」  
 8 7 「有情」  
 1 7 3 「肉眼」  
 1 7 2 「肉眼」  
 1 8 2 「肉眼」  
 2 1 2 「肉眼」  
 2 7 9 「愛染」  
 1 7 0 「肉眼」  
 1 2 5 「檸檬」  
 2 7 「乱れ髪」

『愛』『師』『句集』『喜』では、四月四日「長女章子誕生」の前書。『古』では、それに「二句」の但書。『檸檬』では、日付なしで「二句」の但書。『師』『喜』には、この句の後の七六一（春闘の真つ只中に子が生まれ）の句は未収録。↓補注。  
 四五二 「川柳塔」平成13年2月号。補注一六九参照。  
 四五三 「川柳雑誌」昭和33年11月号。各地柳壇「明和研究句会」にあり。『有』にあり。  
 四五四 「川柳雑誌」昭和34年7月号。『有』にあり。「陶泓忌」食満南北忌。陶泓忌句会が、5月1日（金）、大阪美術倶楽部で催された。食満南北は、明治13年7月31日（土）生まれ。初代中村鴈治郎の座付き作者。番傘の川柳家。昭和32年5月14日（火）、76歳で死去。路郎の悼吟は（宿替えの今度は番地ないところ）。  
 四五五 「川柳塔」昭和53年12月号。「三段峡にて（二句）」の前書あり。『愛』『古』にあり。句集も同じ前書。この句の後に一七三九。三段峡は、広島県北西部、太田川支流の柴木（しわき）川の峡谷。長さ約11キロ。滝と紅葉で知られる。  
 四五六 「川柳雑誌」昭和34年12月号。『有』『愛』『古』にあり。  
 四五七 「川柳雑誌」昭和37年3月号。『有』にあり。  
 四五八 「川柳塔」平成12年8月号。『喜』にあり。  
 四五九 「川柳塔」平成10年12月13日。「二十九九年二月」。投句葉書の消印は、平成10年12月13日。「悼 片岡つとむさん」の前書。片岡つとむは、大正11年6月6日（火）に生まれ、平成10年12月14日（月）に、76歳で死去。朝日カルチャーの講師・朝日新聞にわ柳壇を、薫風と共に担当した。番傘川柳本社幹事長。  
 四六〇 初出未詳。  
 四六一 川柳塔本社句会。平成9年5月7日（水）。「協力」軸吟。  
 四六二 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。  
 四六三 「川柳塔」昭和52年10月号。『愛』『古』『師』にあり。  
 四六四 「川柳雑誌」昭和34年9月号。『有』『檸檬』『愛』『古』にあり。  
 四六五 初出未詳。昭和42年の作。『肉』『愛』にあり。句集には「信濃の旅」の前書あり。三三九参照。  
 四六六 「川柳塔」昭和42年12月号。「信濃の旅（二句）」の前書あり。『肉』『愛』『古』『師』にあり。句集には「信濃の旅」の前書あり。三三九参照。  
 四六七 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。  
 四六八 「川柳塔」昭和48年4月号。「金剛山」の前書あり。『肉』

四七三 勤勉の額もろとも家に家を売ろ  
 四七四 金ペンにふさわしき秋 灯となる  
 四七五 金脈へ力無き 蝦骨無き 蚯蚓  
 四七六 金よりも銀 ゴーイングマイウェイ  
 四七七 祇園囃子だんじり囃子街の風  
 四七八 偽証する伊藤大久保維新の名  
 四七九 ギター抱き ぼろんぼろんとこぼす俾  
 四八〇 逆臣といわれし人と同じ紋  
 四八一 逆境にいて風呂好きの父を持ち  
 四八二 仰天の写楽の首絵友危篤  
 四八三 銀漢へわれも不眠の病持つ  
 四八四 ぎんなんの水平線も遥かなり  
 【く】  
 四八五 空腹も贅の一つよ名月よ  
 四八六 食うものに限る天才型である  
 四八七 クーラーは適温天井裏の鼠  
 四八八 九月十月行き着く酒の十二月  
 四八九 草いきれ 万葉の世の相聞歌  
 四九〇 草千里私も馬になつて来る  
 四九一 草千里馬上風追う黄なコート

6 8 「有情」  
 1 6 5 「肉眼」  
 2 5 3 「愛染」  
 1 8 「乱れ髪」  
 2 8 「乱れ髪」  
 2 2 7 「愛染」  
 2 0 6 「肉眼」  
 1 0 5 「有情」  
 6 7 「有情」  
 3 0 8 「花径」  
 1 5 1 「檸檬」  
 2 5 5 「愛染」  
 2 4 6 「愛染」  
 5 1 「乱れ髪」  
 5 2 「乱れ髪」  
 3 0 1 「花径」  
 7 7 「有情」  
 2 8 「乱れ髪」  
 3 3 7 「花径」

四六九 「川柳塔」昭和62年11月号。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品「老司祭」25句の11句目。「古」「師」「喜」にあり。この句は、「古稀薫風」の帯の推薦文で、田辺聖子に取り上げられた。  
 四七〇 初出未詳。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。  
 四七一 初出未詳。「檸檬」「愛」「古」にあり。  
 四七二 もくせい川柳会。平成8年1月15日(月)。「自由吟」軸吟。  
 四七三 「川柳雑誌」昭和36年11月号。「有」「檸檬」にあり。  
 四七四 昭和41年9月23日(金)、ふあうすと本社主催・時の川柳社共賛。初代川柳忌物故川柳家慰霊句会。「灯」橋本言也選。「川柳塔」昭和41年11月号にも発表。「肉」にあり。  
 四七五 「川柳展望」3号(昭和50年11月1日発行)。「愛」「古」にあり。蝦は、がまがえる。  
 四七六 初出未詳。  
 四七七 もくせい川柳会。昭和59年7月23日(月)。「自由吟」軸吟。  
 四七八 「川柳塔」昭和51年4月号。「愛」「古」にあり。↓補注二四九参照。  
 四七九 「川柳塔」昭和47年4月号。「肉」「愛」「古」にあり。俾は、荒々しく乱暴な様子。  
 四八〇 初出未詳。「有」にあり。  
 四八一 「川柳雑誌」昭和34年7月号。各地柳壇「にしなり支部」にあり。「有」にあり。  
 四八二 「川柳塔」平成7年12月号。  
 四八三 「川柳雑誌」昭和34年9月号。「われも不眠の病持つ」↑「不眠の病われも持つ」。「檸檬」「愛」「古」にあり。  
 四八四 「川柳塔」昭和56年3月号。「愛」「古」にあり。  
 四八五 「川柳塔」昭和54年11月号。「愛」「古」にあり。  
 四八六 三井が丘川柳会。昭和53年3月19日(日)。「自由吟」軸吟。  
 四八七 三井が丘川柳会。昭和53年8月20日(日)。「クーラー」互選。「適温」↑「快適」。  
 四八八 「朝日新聞」夕刊。平成5年11月13日(土)。「酔いざめの」5句の5句目。「行き」に「ゆき」とルビあり。「古」にあり。補注二二三参照。  
 四八九 「川柳雑誌」昭和34年10月号。「有」「檸檬」「愛」「古」にあり。  
 四九〇 もくせい川柳会。平成9年8月18日(月)。「草」住谷

四九二 草の芽が出たぞ おしっこさせながら  
 四九三 草花に水をやる世は渴したり  
 四九四 草餅へ墓を並ぶる死後の縁  
 四九五 櫛の齒に秋の近づきいたりけり  
 四九六 孔雀羽根ひろげくりりと能役者  
 四九七 薬玉の中の鳩なり受験の子  
 四九八 葛の花咲き 樹下美人嫁ぎしと  
 四九九 癖のある字は面構え持っている  
 五〇〇 草臥れがどつと仁王の大わらじ  
 五〇一 口癖に言つてたことが遺書となり  
 五〇二 嘴の形に鳥の生きるべし  
 五〇三 屈辱の紋章 女史に坐りだこ  
 五〇四 靴履いた頃から旅は墮落せり  
 五〇五 口説かれてに女は箸止めず  
 五〇六 句の仏補陀落山に妻を詠み  
 五〇七 配られて毛生え薬の試供品  
 五〇八 句碑ありぬ 亡き先生の背丈程の  
 五〇九 句碑除幕先ず人 情の除幕かな  
 五一〇 句碑激し 浪ここに果て風ここよりす  
 五一一 首巻をして晩年を汚す恋

1 6 1 「肉眼」  
 2 2 1 「愛染」  
 1 2 6 「檸檬」  
 2 0 2 「肉眼」  
 2 5 2 「愛染」  
 2 2 0 「愛染」  
 2 0 3 「肉眼」  
 2 5 「乱れ髪」  
 1 8 3 「肉眼」  
 2 0 「乱れ髪」  
 3 3 0 「花径」  
 1 5 8 「肉眼」  
 4 5 「乱れ髪」  
 2 4 4 「愛染」  
 2 9 4 「愛染」  
 1 7 1 「肉眼」  
 3 4 7 「花径」  
 1 9 3 「肉眼」  
 7 9 「有情」

石舟・満仲きく子共選。  
 四九一 「川柳塔」平成13年4月号。「喜」にあり。補注一六九参照。  
 四九二 「川柳塔」昭和41年4月号。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。  
 四九三 「川柳塔」昭和49年3月号。「やる」の後、一字空白あり。「愛」「古」にあり。  
 四九四 初出未詳。「檸檬」「愛」「古」「喜」にあり。  
 四九五 「川柳塔」昭和46年10月号。「馬籠・妻籠にて三句」の前書あり。「肉」にあり。句集も同じ前書。六九・三〇六参照。  
 四九六 「川柳展望」創刊号(昭和50年5月1日発行)。特別作品「鎮魂」25句の24句目。「愛」「古」「師」「喜」にあり。  
 四九七 「川柳塔」昭和49年6月号。「鳩なり」の後、一字空白あり。「愛」「古」にあり。  
 四九八 「川柳塔」昭和47年1月号。「奈良の吉村和美さんへ」の前書あり。「肉」「愛」「古」にあり。句集では「吉村和美さんへ」の前書。  
 四九九 もくせい川柳会。昭和62年5月18日(月)。「癖」互選。  
 五〇〇 「川柳塔」昭和43年12月号。「肉」「愛」「古」にあり。  
 五〇一 「川柳塔」平成6年10月号、各地柳壇「はたる川柳同好会」にあり。「遺書となり」↑「遺書にない」。  
 五〇二 「川柳塔」平成12年5月号。「生きるべし」↑「生きるすべ」。「喜」にあり。  
 五〇三 「川柳塔」昭和40年11月号。「肉」「愛」「古」にあり。  
 五〇四 平成元年7月9日(日)、西尾菜穂勲記念川柳大会(於・なにわ会館)。「旅」小松原爽介選。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品25句「老司祭」の20句目。  
 五〇五 三井が丘川柳会。昭和54年2月18日(日)。「口説く」櫻谷寿馬選。「愛」「古」にあり。  
 五〇六 「川柳塔」平成7年10月号。「大矢十郎さんを悼む」の前書あり。「古」にあり。句集も同じ前書。大矢十郎は、大正13年10月7日(火)に生まれ、平成7年8月18日(金)、70歳で死去。川柳塔しんぐう吟社主幹。  
 五〇七 初出未詳。  
 五〇八 初出未詳。「肉」「愛」「古」にあり。↓補注。  
 五〇九 「川柳塔」平成13年9月号。「除幕かな」↑「除幕から」。  
 ↓補注。  
 五一〇 「川柳塔」昭和45年9月号。「竜飛岬」の前書あり。「肉」にあり。句集の前書には「二句」の但書。この句の後に九九八。竜飛岬には、川上三太郎の「竜飛岬立てば風浪四季を咬

五二二	雲と征くあれは唐三彩の馬	3	1	2	「花径」
五一三	雲波に波雲に似しはたちの日	2	0	2	「肉眼」
五一四	雲は巡礼菜の花の上曼珠沙華の上	3	0	0	「花径」
五一五	雲は挽歌雲は新生恩師の忌	2	2	1	「愛染」
五一六	雲ひとつ風吹峠今越えて	3	1	1	「花径」
五一七	雲行きは夕立ちらしい川向こう	2	9		「乱れ髪」
五一八	苦楽園口のさくらを見に来いと	2	4	3	「愛染」
五一九	クラブ振る作家となりぬこの人も	9	9		「有情」
五二〇	クリスマス 祈れるものは折りおり	1	9	0	「肉眼」
五二一	クリスマスカードの雪はしずかなり	1	5	3	「檸檬」
五二二	クリスマス トマトの赤も異宗めく	1	2	0	「有情」
五二三	クリスマス 豚まんを買う雨の街	3	1	3	「花径」
五二四	栗の毬孫は子よりも小さきよ	2	6	5	「愛染」
五二五	暮れ切らぬ花火 心があとさきで	1	8	1	「肉眼」
五二六	暮れるばかり暮れるばかりの木屋町や	2	1	3	「肉眼」
五二七	苦勞人孫には甘い爺であり	1	3		「乱れ髪」
五二八	勤々と水かけ不動 恋の垢	1	6	8	「肉眼」
五二九	黒百合を見てこの旅はこれでよし	2	4	8	「愛染」
五三〇	勲一等黒き旭 日大授章	2	2	7	「愛染」
五三一	勲章の欲しい七才七十才	1	5	1	「檸檬」

む)の句碑(昭和41年5月14日(土)除幕)がある。↓補注。

五一一 「川柳雑誌」昭和36年5月号、各地柳壇「にしなり支部」。「首巻をして晩年を汚す恋」↑「晩年を汚す恋 首巻をして」。『有』にあり。

五二二 「川柳塔」平成8年10月号。「嗚呼 櫻谷寿馬さん」の前書あり。『句集』も同じ前書。櫻谷寿馬(かずま)は、平成8年8月10日、78歳で死去。川柳塔同人、前雅号は漫柳。

五二三 「川柳塔」昭和46年11月号。「肉』『愛』『古』にあり。

五二四 「川柳塔」平成6年5月号。

五二五 「川柳塔」昭和49年7月号。「挽歌」「新生」の後、一字空白あり。『愛』にあり。

五二六 「川柳塔」平成8年8月号。「悼 西口忠雄氏」の前書あり。『句集』も同じ前書。西口忠雄は、平成8年7月1日、85歳で死去。川柳岩出同人。風吹峠は、和歌山県岩出市にある標高2000米の峠。和泉国とを結ぶ根来街道の途中にある。

五二七 もくせい川柳会。昭和59年8月20日(月)。「夕立」安藤寿美子選。「川向こう」↑「嵐山」。

五二八 「川柳塔」昭和54年5月号。「愛』『古』にあり。苦楽園口は、兵庫県西宮市の高級住宅街。

五二九 川柳雑誌社第8回川柳まつり。昭和36年7月16日(日)。「作家」西尾菜選。『有』にあり。

五三〇 「川柳塔」昭和45年3月号。「妻病めば」の前書あり。「肉』『愛』『古』にあり。句集では「妻病む」の前書。九五参照。

五三一 「川柳雑誌」昭和35年4月号。「クリスマスカード」↑「クリスマス・カード」。同号の各地柳壇「明和病院支部」にもあり、「静かなり」と表記。「檸檬』『愛』『古』『喜』にあり。

五三二 「川柳雑誌」昭和37年2月号。「莊嚴ミサ(豊中カソリック教会)」の前書あり。『有』『檸檬』にあり。『有』『句集』とも「莊嚴ミサ」の前書。『檸檬』は、それに「三句」の但書。九五、五二二、九二五の順に収録。

五三三 「川柳塔」平成8年10月号。

五三四 「川柳塔」昭和58年11月号。「初孫誕生」の前書あり。

五三五 『愛』『古』にあり。句集も同じ前書。この句の後に「三三五」。

五三六 「川柳塔」昭和43年9月号。「花火」の後、一字空白あり。『肉』『愛』『古』にあり。

五三七 「川柳ジャーナル」昭和48年3月号。招待作品「一兵の生」8句の8句目。「肉』『愛』『古』にあり。木屋町は、京都の高瀬川沿いにある歓楽街。

五三八 明和病院青蛙川柳会。補注三三四参照。

五三二 薰風へ大内山の風の色 3 4 6 「花径」

【け】

五三三 啓蟄の虫より先に代議士め 2 5 1 「愛染」

五三四 毛皮着た妻になじめぬものが出来 8 3 「有情」

五三五 毛皮着て貧しい心とは見えず 6 3 「有情」

五三六 今朝会うた南無帰依仏の白い蝶 3 2 4 「花径」

五三七 結婚をしてもハートのジャックたり 1 4 0 「檸檬」

五三八 建国祭 寒の卵に血がまじり 1 6 8 「肉眼」

五三九 建仁寺垣相国寺垣マドモアゼル 2 4 0 「愛染」

五四〇 ゲイバーのナンバーワンは高商出 1 1 2 「有情」

五四一 月下美人王 昭君が逝きます 2 3 2 「愛染」

五四二 月光に眠れぬ新しい墓石 1 4 2 「檸檬」

五四三 幻花一閃自転車は赤だつたな 3 1 6 「花径」

五四四 原始から 女の姿水を汲み 6 8 「有情」

五四五 現職の間は小さい家に住み 1 1 2 「有情」

五四六 源氏には夕顔がいた桔梗寺 3 3 1 「花径」

五四七 原爆忌 鳩ら火傷の脚運ぶ 1 8 7 「肉眼」

五四八 源流に一筋の滝名も知らず 3 1 4 「花径」

【こ】

五四九 恋あわれ 男が花の水を替え 7 7 「有情」

五二八 初出未詳。「ふあうすと」昭和43年6月号「第13回全国川柳作家合同句集」にあり。「肉」「愛」「古」にあり。水掛不動は大阪市中央区法善寺境内にあり、全身苔で覆われている。

五二九 「川柳塔」昭和55年8月号。「愛」にあり。

五三〇 「川柳塔」昭和51年4月号。「愛」「古」にあり。↓補注二四九参照。

五三一 初出未詳。「檸檬」「愛」「古」「師」「喜」にあり。

五三二 「川柳塔」平成13年7月号。「句集」には、「春の叙勲で木杯一組台付賜与さる 五句」の前書あり。三〇八参照。

五三三 「川柳展望」創刊号(昭和50年5月1日発行)。特別作品「鎮魂」25句の19句目。「愛」「古」にあり。

五三四 初出未詳。「有」にあり。

五三五 「川柳雑誌」昭和31年3月号。「近作柳樽」欄。「有」にあり。

五三六 「川柳塔」平成10年6月号。「悼中野樺子さん」の前書あり。「句集」には前書なし。

五三七 初出未詳。「檸檬」「愛」「古」にあり。句集には「坂根寛哉君結婚」の前書あり。

五三八 初出未詳。「川柳ジャーナル」昭和42年12月号(67自選作品集特集号)に発表している。昭和42年の作。この年から、2月11日が建国記念日として祝日となった。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。

五三九 富柳会・菜の花合同吟行句会。昭和51年12月12日(日)。「マドモアゼル」↑「京美人」。「愛」「古」にあり。建仁寺垣は、四つ割竹を皮を外にして並べ、竹の押縁を横にとりつけ、縄で結んだ垣。相国寺垣は、竹穂を縦に並べ、胴縁を掻きつけ、割竹の押縁で押さえたもの。

五四〇 「川柳雑誌」昭和33年12月号。「有」にあり。

五四一 「川柳塔」昭和52年11月号。「逝きまする」↑「咽喉見せる」。「愛」「古」にあり。王昭君は、前漢の元帝の命令で匈奴に嫁し、夫の死後その子の妻となった。王朝政治の犠牲となった女性の代表。

五四二 初出未詳。「檸檬」「愛」「古」にあり。

五四三 「川柳塔」平成9年5月号。「師」にあり。

五四四 「川柳雑誌」昭和37年1月号。「有」「檸檬」にあり。

五四五 初出未詳。「有」にあり。

五四六 初出未詳。「喜」にあり。「句集」では、「盧山寺 四句」の三句目。この句のみ「喜」に収録。四二六参照。

五四七 「川柳塔」昭和44年10月号。「肉」「愛」「古」にあり。

五四八 「川柳塔」平成8年12月号。「川柳塔」平成9年1月号

五五〇	恋遠し海は木霊を返さない	1	6	「乱れ髪」
五五一	恋なれや汝れに羽交のあるごとし	1	3	「檸檬」
五五二	恋なれやわれに鬘あるごとし	1	3	「檸檬」
五五三	恋の句を刻まれし碑の濃陽炎	1	8	「肉眼」
五五四	恋の景丸木橋から鉄橋へ	1	9	「肉眼」
五五五	鯉のぼり氏素姓なき爽やかさ	1	3	「檸檬」
五五六	鯉のぼり備前美作風播磨	3	0	「花径」
五五七	鯉のぼり囿囿の身の置きどころ	3	2	「花径」
五五八	恋人がいま肉眼に入り来る	2	0	「肉眼」
五五九	恋人の名より親しい摩周丸	2	6	「愛染」
五六〇	恋人の膝は檸檬のまるさかな	1	2	「檸檬」
五六一	恋瘦せの乳房から瘦せきしという	2	3	「愛染」
五六二	恋を待つ人座り椅子充実す	1	7	「肉眼」
五六三	耕耘機色異なれど音同じ	1	8	「肉眼」
五六四	香煙縷々いのち惜しめというごとし	1	2	「有情」
五六五	攻撃に羊の角は程遠し	5	3	「乱れ髪」
五六六	孝行の重荷になるか古稀過ぎて	3	1	「花径」
五六七	孝行の仕方兄弟みな違い	1	2	「有情」
五六八	更生の一日二日雨が降り	1	1	「有情」
五六九	光太郎智恵子が来たら砂丘晴	3	3	「花径」

「私の一句」にも発表。  
 五四九 「川柳雑誌」昭和32年11月号。「有」にあり。  
 五五〇 初出未詳。  
 五五一 初出未詳。「檸檬」「愛」「古」「師」「喜」にあり。  
 五五二 初出未詳。「檸檬」「愛」「古」「師」「喜」にあり。  
 五五三 「川柳塔」昭和44年3月号。「肉」「愛」「古」にあり。  
 五五四 初出未詳。「肉」にあり。  
 五五五 「川柳雑誌」昭和39年7月号。「檸檬」「愛」「古」にあり。  
 五五六 「川柳塔」平成6年6月号。「師」「喜」にあり。  
 五五七 「川柳塔」平成10年6月号。  
 五五八 「川柳塔」昭和47年7月号。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。「川柳塔」昭和55年11月号の「二句の背景」に、「有情・檸檬・肉眼」と、過去三冊の句集を出した私は、それぞれの題名を、その中の一句から選んでいる。第三句集は「肉眼」だった。／座五は、いりきたると読む。しかし、はいりくると読んだ方がいいと思われる方もおられるだろう。／これは恋人が突然目前に現れたのではなくて、見通しのきくところから近づいて来るような静かな感情だ。それを句のリズムから受け取って欲しい。夢や幻、頭の中で思いめぐらし続けていた恋人が現実に見えて来たわけである。その感動と、いま肉眼に入り来る以前の長い感情とを併せ表現したかったのだ。／句集の題名としての「肉眼」は、作品という行ききたいとはではなく、温かい血の通った肉眼で見つめていきたいという現在の心境を披瀝してものである。」とある。  
 五五九 「川柳塔」昭和59年8月号。「愛」「古」「師」にあり。  
 五六〇 「川柳雑誌」昭和39年2月号。「檸檬」「愛」「古」「師」「喜」には、「函館行」の前書で、「函館行」三句の前書あり。「師」には、「函館行」の前書で、この句のみ収録。八九参照。  
 五六一 「川柳塔」昭和53年11月号。「愛」「古」にあり。  
 五六二 初出未詳。「肉」にあり。  
 五六三 初出未詳。「肉」「愛」「古」にあり。  
 五六四 初出未詳。「有」「檸檬」「愛」「古」にあり。  
 五六五 三井が丘川柳会。昭和54年1月21日(日)。「羊」神谷凡九郎選。  
 五六六 初出未詳。  
 五六七 初出未詳。「有」にあり。  
 五六八 初出未詳。「有」にあり。  
 五六九 「川柳塔」平成13年6月号。「光太郎」の後、一字空白あり。

五七〇 校 長が校 長らしい松の内  
 五七一 香の銘天菊とあり亡母の闇  
 五七二 公民館冷房市役所は赤字  
 五七三 氷屋の子を預った水都祭  
 五七四 氷割る手つきぶざまな男 親  
 五七五 こおろぎのように泣いたら涅槃かな  
 五七六 娘が嫁ぎ炬燵で正座する父か  
 五七七 子が泣いて 縫目だんだん粗うなり  
 五七八 子が病んで 鑑のごとしわが妻は  
 五七九 こがるるは父母よペルーのティティカカ湖よ  
 五八〇 古稀の屠蘇 壺萬里酒羅生門  
 五八一 古稀の屠蘇生き死にもはやかそかごと  
 五八二 古稀も生きてか孫の氣韻にさえ劣り  
 五八三 ここでもた 税吏 女将にとぼけられ  
 五八四 ここに来て胎児のごとき祈りあり  
 五八五 ここは土佐河伯と河童呑みくらべ  
 五八六 志 衰えて書く立志伝  
 五八七 来し方や合縁奇縁相半ば  
 五八八 コスモスのほつたらかしの美しさ  
 五八九 炬燵から片手だけ出し 飲んでゐる

2 6 7 「愛染」  
 2 6 0 「愛染」  
 3 1 「乱れ髪」  
 1 1 2 「有情」  
 9 3 「有情」  
 2 3 7 「愛染」  
 2 6 1 「愛染」  
 1 1 8 「有情」  
 1 4 2 「檸檬」  
 3 2 9 「花径」  
 2 9 0 「愛染」  
 2 9 6 「愛染」  
 3 1 8 「花径」  
 1 0 3 「有情」  
 1 8 7 「肉眼」  
 2 4 3 「愛染」  
 2 3 2 「愛染」  
 3 2 4 「花径」  
 1 5 9 「肉眼」  
 1 0 2 「有情」

五七〇 初出未詳。『愛』『古』にあり。  
 五七一 「川柳塔」昭和57年5月号。『愛』『古』にあり。  
 五七二 もくせい川柳会。昭和63年7月18日(月)。「冷房」五選。「冷房」の後、一字空白あり。  
 五七三 「川柳雑誌」昭和34年9月号。『有』にあり。水都祭は、大阪の夏祭りである天神祭のこと。  
 五七四 初出未詳。『有』にあり。  
 五七五 「川柳塔」昭和53年10月号。『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 五七六 初出未詳。『愛』『古』にあり。  
 五七七 「川柳雑誌」昭和33年8月号。『有』『檸』にあり。  
 五七八 「川柳雑誌」昭和39年12月号。特集「妻を語る」のエッセイ「鑑の如し」中にあり。「鑑のごとし」↑「鑑の如し」。「鑑の如し」の後、一字空白あり。「鑑」は「し」「いかり」とは読まないだろう。『檸』『愛』『古』にあり。↓補注。  
 五七九 「川柳塔」平成12年3月号。  
 五八〇 「川柳塔」平成7年2月号。「古希」の前書あり。『古』にあり。句集には前書なし。※「壺萬里酒羅生門」：壺は白磁に萬里と藍で書いた魯山人の作。(無論のこと偽物)。酒は和歌山の銘酒。↓補注。  
 五八一 初出未詳。平成7年か平成8年の作か。  
 五八二 「川柳塔」平成9年7月号。  
 五八三 「川柳雑誌」昭和32年8月号。『有』にあり。  
 五八四 「川柳塔」昭和44年11月号。「広島(一句)」の前書あり。『肉』『愛』『古』にあり。句集は「広島」の前書。  
 五八五 「川柳塔」昭和54年6月号。「河伯と河童」↑「河伯と河童と」。『愛』『古』にあり。  
 五八六 「川柳塔」昭和52年11月号。『愛』『古』にあり。  
 五八七 「川柳塔」平成10年6月号。  
 五八八 「川柳塔」昭和41年1月号。『肉』『愛』『古』にあり。  
 五八九 「川柳雑誌」昭和35年2月号。『有』にあり。  
 五九〇 「川柳塔」昭和51年4月号。『愛』『古』にあり。補注二四九参照。  
 五九一 初出未詳。『有』にあり。  
 五九二 「川柳塔」昭和44年7月号。「鳥取砂丘三句」の前書あり。『肉』『愛』『古』にあり。『句集』は、一七八二、五九二、六八三の順に3句収録。『肉』は、(風紋に 電気に似たるもの走る)(川柳塔 昭和44年7月号)も収録。『愛』『古』は、この句と六八三(三人の子と玄奘のごとく砂丘)の二句を収録し、『肉』『句集』にある一七八二(四つ足を連れた足跡

五九〇	児玉誉士夫の笑い袋や金袋	2 2 7	「愛染」
五九一	小遣いが切れるとうちにいる息子	9 2	「有情」
五九二	子と来れば砂丘隅まで砂の山	1 8 6	「肉眼」
五九三	今年また燕が戻る恩に似て	5 5	「乱れ髪」
五九四	子と見れば月下美人は宇宙船	2 3 8	「愛染」
五九五	ことりともさせぬ数学教授室	1 1 5	「有情」
五九六	子供とはたった一と切れ食べ残し	8 9	「有情」
五九七	子供等にママと呼ばせる後妻が来	8 2	「有情」
五九八	子の頭虱のごとし可愛ゆし黒し	1 6 0	「肉眼」
五九九	子の会話聞きながら書く候文	3 7	「乱れ髪」
六〇〇	この甘露堂新しく仏古り	5 5	「乱れ髪」
六〇一	この句碑のはじめて会うてなつかしさ	2 1 3	「肉眼」
六〇二	子の潔癖母の枕を父にさせず	6 5	「有情」
六〇三	この頃の尿の細さよ落ちぶれぬ	6 7	「有情」
六〇四	この島も情話を抱いて寝しずまり	1 0 6	「有情」
六〇五	子の育ちぶりよキヤビンのベッドにて	1 3 7	「檸檬」
六〇六	この齢で屁糞葛の仲間入り	3 4 7	「花径」
六〇七	この齢にぺんぺん草の風が見え	3 2 3	「花径」
六〇八	このなつかしきもの母の鼻の穴	3 7	「乱れ髪」
六〇九	子の名ほど迷わず孫の名を決める	2 2 9	「愛染」

大砂丘〕は未収録。(四つ足を)の句の初出は未詳。「川柳塔」同号「柳界展望」に、「五月の連休を家族連れて鳥取砂丘・皆生温泉・出雲大社へ。」とある。

五九三 「川柳塔」平成5年6月号。各地柳壇「ほたる川柳同好会」にあり。

五九四 「川柳塔」昭和53年11月号。『愛』『古』にあり。

五九五 川柳雑誌社本社句会。昭和36年11月7日(火)。「数学」路郎選。『有』にあり。

五九六 初出未詳。『有』にあり。

五九七 「川柳雑誌」昭和32年11月号。『有』にあり。

五九八 「川柳塔」昭和41年3月号。『肉』『愛』『古』にあり。

五九九 西宮北口句会。昭和56年5月11日(月)。「自由吟」堺谷伊升選。

六〇〇 初出未詳。

六〇一 「川柳塔」昭和48年7月号。「尼緑之助氏句碑」の前書あり。『肉』にあり。句集も同じ前書。昭和48年5月13日(日)、出雲市大社町日御碕に、(灯台の夕陽神話を抱きよせる)(昭和45年作)の句碑建立。(灯台の)の句は、昭和46年10月、路郎賞受賞作。

六〇二 「川柳雑誌」昭和36年10月号。『有』にあり。

六〇三 「川柳雑誌」昭和37年5月号。『有』『檸檬』にあり。

六〇四 初出未詳。『有』にあり。

六〇五 「川柳雑誌」昭和39年3月号。「むらさき丸にて」の前書。『檸檬』にあり。句集も同じ前書。「川柳雑誌」昭和39年2月号「柳界展望」に、「一月十日(金曜)編者注」から十三日まで家族連れで別府へ。湯布院・志高湖など冬の高原の味を満喫して来ました。温泉の宿でも癖の深夜食」とある。一一〇二参照。

六〇六 「川柳塔」平成13年9月号。「腸閉塞を病む」の前書あり。「齢」↑「歳」。「句集」では、「腸閉塞検査入院」の前書。

六〇七 「川柳塔」平成10年4月号。『師』にあり。

六〇八 西宮北口句会。昭和56年8月10日(月)。「自由吟」堺谷伊升選。

六〇九 川柳わかやま 葵水忌・没句供養高野山句会。昭和51年11月3日(水)。「迷う」大矢十郎選。『愛』『古』にあり。

六一〇 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。

六一一 「川柳塔」昭和55年8月号。『愛』『古』にあり。

六一二 松露川柳句会。昭和35年10月16日(日)。「人」小西雄々選。『有』にあり。補注一〇一三参照。

六一三 「川柳塔」昭和48年2月号。『肉』『喜』にあり。

六一〇	子の寝顔汝が父母多くあやまてり	1 2 6	「檸檬」
六一一	この花にあのような実が四月馬鹿	2 4 8	「愛染」
六一二	この人も 金を持たせば愚かなり	7 3	「有情」
六一三	娘のボーイフレンドやよし お元旦	2 1 1	「肉眼」
六一四	木の実彫りおりと見てあれば鶉	1 2 8	「檸檬」
六一五	この世からあの世は見えずさし向かい	2 8 2	「愛染」
六一六	この世での初めての雪見るみのり	2 8 7	「愛染」
六一七	こぼしこぼしよばれる古いカステラ	3 6	「乱れ髪」
六一八	独楽二つ回りいることは息苦し	1 4 7	「檸檬」
六一九	顛顛と鳩尾で聞くバイオリン	3 2 5	「花径」
六二〇	これからも神戸に住むと卒寿の師	2 9 2	「愛染」
六二一	これが遺書「平平凡凡」四つの文字	2 9 0	「愛染」
六二二	これはこれは寅さん陽気草だんご	2 8 2	「愛染」
六二三	これも おやすみなさいで終つてる恋文	7 7	「有情」
六二四	怖いもの知らずで五十八になり	4 7	「乱れ髪」
六二五	子を抱けば必ず花と向い合い	1 6 1	「肉眼」
六二六	こんな恋ならと百人一首かな	2 4 7	「愛染」
六二七	金米糖 孫あげるなりもらうなり	3 0 3	「花径」
六二八	混浴のさながら古き風俗画	1 5 0	「檸檬」
六二九	金輪際 変らぬ黒縁のめがね	3 0 7	「花径」

- 六一四 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。
- 六一五 「川柳塔」平成2年4月号。「栗谷春子さんのご夫君を悼む」の前書。『古』『喜』にあり。句集は、前書に「二句」の但書。この句の後が六二二の句。
- 六一六 「川柳塔」平成5年4月号。「二月二日」の前書あり。『古』にあり。句集には前書なし。4月号には、この句の他に「初めての雪を埴輪の目で見る児」(埴輪の目雪の結晶まで見えて)「雪も目も汚れはじめてゆくこの世」を发表。3月号には、(豊頬のひきめかぎはな孫娘)「のりちゃんがつぶせじいもうつぶせに」(桃咲いてお梅の舟に箸の櫂)「花柄のサモワルの湯気いい寝息」、5月号には、(孫抱いて鶯宿梅の気分かな)「這い這いふたり不思議不思議と懺悔懺悔」(水道の洩れ目に止めたみのりちゃん)「風邪熱ののりちゃん桃の花のよう」(寝返りのどっこいしょとはじいの方)を发表。
- 六一七 初出未詳。
- 六一八 「川柳雑誌」昭和35年10月号。「或る恋」の前書あり。『有』『檸檬』にあり。『有』『句集』とも前書なし。『檸檬』には、「恋」の前書あり。
- 六一九 「川柳塔」平成11年2月号。
- 六二〇 「川柳塔」平成7年3月号。『古』にあり。句集には「阪神大震災 八句」の前書あり。「卒寿の師」は、薫風の命の恩人の武田義章博士。補注一九八参照。
- 六二一 「川柳塔」平成4年2月号。「鹿児島の旅 知覧特攻基地」の前書あり。『古』『喜』にあり。句集では「知覧特攻基地」の前書。
- 六二二 「川柳塔」平成2年3月号。「柴又帝釈天」の前書あり。
- 六二三 「川柳雑誌」昭和34年11月号。『有』『檸檬』『愛』『古』にあり。句集も同じ前書。
- 六二四 昭和59年9月2日(日)第36回西日本川柳大会「怖い」軸。『川柳塔』同59年10月号にも发表。
- 六二五 「川柳塔」昭和41年4月号。『肉』にあり。
- 六二六 「川柳塔」昭和55年2月号。『愛』『古』にあり。
- 六二七 「川柳塔」平成6年12月号。
- 六二八 「川柳雑誌」昭和37年9月号。「酸ヶ湯温泉」の前書。『檸檬』『愛』『古』にあり。句集も同じ前書。補注四四三参照。
- 六二九 「川柳塔」平成7年8月号。「石曾根民郎先生」の前書あり。『句集』も同じ前書。
- 六三〇 「川柳塔」昭和45年11月号。「藤巻昌子さんへ」の前書あり。『肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。句集も同じ前書。

- 六三〇 婚を約し 月へ帰れぬかぐや姫  
 六三一 強引な碁をうつ聲をよしとする  
 六三二 合格の朝 お隣の前も掃き  
 六三三 合格は大祖父さんの出た学舎  
 六三四 豪雪の今年つくらぬ雪だるま  
 六三五 五月の雨 尾道生駒いたるあり  
 六三六 極月やわが父の死を立話  
 六三七 極楽と地獄見分け※ぬしやれこうべ  
 六三八 五色豆の色の際立つ十二月  
 六三九 五七五阿修羅韋駄天君と僕  
 六四〇 五十年花径遙かに香爐峰  
 六四一 五十年毎年來 竹桃と蟬  
 六四二 牛頭馬頭の雲は動かす原爆忌

【次】

- 六四三 サークスに似て来た五輪大一座  
 六四四 宰相の私生児として生れ落ち  
 六四五 賽の目にわたしもお島千太郎  
 六四六 囀るは人の飼う鳥武蔵野よ  
 六四七 酒倉の佐川西町東町  
 六四八 杯を持つより志野が手に馴染む

1 9 3	「肉眼」
1 0 9	「有情」
9 1	「有情」
3 3 2	「花径」
1 4 4	「檸檬」
1 7 9	「肉眼」
1 5 0	「檸檬」
4 8	「乱れ髪」
4 7	「乱れ髪」
2 5	「乱れ髪」
3 4 8	「花径」
2 9 4	「愛染」
2 2 2	「愛染」
2 6 9	「愛染」
9 9	「有情」
1 6	「乱れ髪」
1 4 3	「檸檬」
2 9 5	「愛染」
3 2 0	「花径」

- 藤巻昌子は、柳都の同人。補注二六参照。  
 六三一 初出未詳。『有』『愛』『古』にあり。  
 六三二 「川柳雑誌」昭和32年6月号。『有』にあり。  
 六三三 「俳句現代」平成12年6月1日発行。「タツノオトシゴの家」10句の3句目。  
 六三四 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。補注一六七参照。  
 六三五 「川柳塔」昭和43年7月号。「尾道にて(4句)」の前置あり。『肉』『愛』『古』にあり。二八八参照。  
 六三六 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 六三七 川柳塔本社句会。平成7年6月6日(火)。「地獄」軸吟。※「ぬ」…打消の助動詞。「川柳平安」夏を楽しむ会(昭和37年8月18日・19日。嵐山法輪寺)。「されこうべ」葵徳三選で、(極楽の顔とは見えぬされこうべ)が入選。  
 六三八 初出未詳。  
 六三九 もくせい川柳会。昭和61年6月16日(月)。「自由吟」軸吟。  
 六四〇 「川柳塔」平成13年9月号。「遙かに」↑「迎れば」。『喜』にあり。『句集』の掉尾を飾り「花径」の章の題名となった句。香炬峰は文人墨客を魅了した山で、詩歌文芸の到達点の象徴。花径は、花の咲いている小径で川柳道の象徴。五十年間、川柳の道を邁進してきたが、到達点には程遠いという意味。  
 六四一 「川柳塔」平成7年8月号。「五十年」「毎年」の後に、一字空白あり。『古』にあり。句集には「八月十五日」の前置あり。  
 六四二 一九七五年版「川柳年鑑」昭和50年1月25日発行。『愛』『古』にあり。牛頭馬頭は仏教用語。地獄の獄卒で、牛頭人身のものと馬頭人身のもの。  
 六四三 「川柳塔」昭和59年9月号。『愛』『古』にあり。ロサンゼルスオリンピックを詠んだ句。  
 六四四 初出未詳。『有』にあり。  
 六四五 初出未詳。お島千太郎は、川口松太郎の「蛇姫様」の登場人物。千太郎は三味線弾きのお島の手引きで、旅役者として流浪の身となる。  
 六四六 「川柳雑誌」昭和38年8月号。『檸檬』『愛』『古』にあり。  
 六四七 「川柳塔」平成8年5月号。『師』にあり。佐川は、高知県高岡郡佐川町。↓補注。  
 六四八 小出智子追悼・川柳塔本社句会。平成9年9月8日(月)。「茶碗」軸吟。  
 六四九 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。  
 六五〇 第19回鹿野みか月川柳大会。平成10年11月29日(日)。

六四九 魚屋の魚いろいろ妻が病み  
 六五〇 盛んなり秋 ※ 鷺峰に雲もなし  
 六五一 砂丘有情 お前と月の出を待とう  
 六五二 鷺一羽身じろぎもせぬ 手術熱  
 六五三 作業衣に折 尺さして隙がなし  
 六五四 桜かてすかつと散ったわけでなし  
 六五五 桜が咲いたさくらが散った癌の人  
 六五六 酒の甕 以後水ばかり入れられる  
 六五七 酒の酌 不美人でよし旅ごころ  
 六五八 酒の壺花を挿されて恥ずかしい  
 六五九 酒の手のあがりしのに四十過ぐ  
 六六〇 サツチャーとアキノの違いほど違い  
 六六一 讃岐富士 一番星を 簪に  
 六六二 核のごと 艱難の歯がこぼれたり  
 六六三 裁かれるのに 座布団が敷いてある  
 六六四 鯖雲の裏を 想像しています  
 六六五 さびしいよ 極楽鳥が名だなんて  
 六六六 淋しさは 義肢に靴下履かせて出  
 六六七 淋しさは 前行く犬の足の裏  
 六六八 サボテンも 蟻も乾けり 恍惚の人

1 2 6 「檸檬」  
 3 4 0 「花径」  
 7 2 「有情」  
 1 9 5 「肉眼」  
 1 1 5 「有情」  
 3 0 6 「花径」  
 3 8 「乱れ髪」  
 3 0 3 「花径」  
 3 3 「乱れ髪」  
 3 4 4 「花径」  
 1 0 1 「有情」  
 2 7 6 「愛染」  
 1 8 5 「肉眼」  
 2 1 4 「肉眼」  
 2 2 6 「愛染」  
 3 4 1 「花径」  
 2 8 6 「愛染」  
 1 1 1 「有情」  
 2 4 8 「愛染」  
 2 1 0 「肉眼」

「盛」軸吟。※鷺峰は、鳥取県鹿野町の山で標高921米。1709米の大山(だいせん)と背比べをして勝ち、怒った大山に頭を削られて低くなったと伝えられている。  
 六五一 初出未詳。『有情』の題名となった句。一〇一三による。昭和36年の作。路郎選で没になった句か。『有』『檉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。『有』『師』『句集』『喜』は、鳥取砂丘の「前書」、『檉』『愛』『古』は、それに「二二句」の但書。この句の後に一〇一三。一〇一三参照。  
 六五二 「川柳塔」昭和46年1月号。「胃手術(5句)」の前書あり。『肉』『愛』『古』にあり。句集では「入院手術」の前書。二六参照。  
 六五三 川柳雑誌社本社句会。昭和36年11月7日(火)。「作業衣」川村好郎選。『有』にあり。  
 六五四 「川柳塔」平成7年5月号。  
 六五五 西宮北口句会。昭和62年4月13日(月)。「自由吟」軸吟。  
 六五六 「川柳塔」平成6年12月号。  
 六五七 「川柳塔あおもり」五周年記念句会。平成4年10月18日(日)。「旅愁」西尾菜選入位。  
 六五八 サークル檉。平成6年11月6日(日)。「自由吟」一五選。  
 六五九 初出未詳。『有』にあり。  
 六六〇 「川柳塔」昭和62年3月号。『古』にあり。  
 六六一 「川柳塔」昭和44年5月号。「松山にて」の前書あり。  
 六六二 「古』『師』『喜』にあり。句集には前書なし。讃岐富士は、円錐型で標高421・9米。平野にポコンと頭を出している。一五二六参照。  
 六六二 初出未詳。『肉』にあり。  
 六六三 「川柳塔」昭和51年1月号。各地柳壇「どんぐり川柳会」にあり。『愛』『古』にあり。  
 六六四 サークル檉。平成5年10月10日(日)。「裏」吉田あずき選。  
 六六五 「川柳塔みちのく」15号。投句葉書の消印は、平成6年2月19日。川柳ねやがわ、平成6年2月20日(日)。「極楽」丹波三千子選で、(さびしがる極楽鳥と名付けられ)が入選している。『古』にあり。極楽鳥は風鳥の別名。雌への求愛のダンスで有名。  
 六六六 「川柳雑誌」昭和32年6月号。『有』にあり。  
 六六七 三井が丘川柳会。昭和55年3月16日(日)。「自由吟」軸吟。『愛』『古』にあり。  
 六六八 「川柳塔」昭和47年11月号。『肉』にあり。

六六九 白湯の味喪のネクタイを解きながら  
 六七〇 サラリーマンの靴靴下にある番地  
 六七一 サルビアも思想魯迅の墓の道  
 六七二 さわやかやこんなに小さい仏さま  
 六七三 山陰に埋み火のごと三朝あり  
 六七四 参観日 この秀才の親が来ず  
 六七五 サングラス男の隠れ蓑ならず  
 六七六 三歳の孫消すことを知りはじめ  
 六七七 三歳の浴衣も処女ほう(お)ずき市  
 六七八 三十六塚さくらが咲いて桜塚  
 六七九 三代に仕えた安楽椅子という  
 六八〇 三代の寝太郎揃う松の内  
 六八一 山頂に立つと指揮官めいてくる  
 六八二 山頭火放哉寒い旅をせり  
 六八三 三人の子と玄奘のごと行く砂丘  
 六八四 三人は松竹梅よお正月  
 六八五 散髪をして 寿司を食う 地下があり  
 六八六 さんふらわあ号へ洋上初日の出  
 六八七 三文オペラ 第二幕へとかかりたり  
 六八八 算用師峠の杉と待つ木霊

3 4 3 「花径」  
 4 9 「乱れ髪」  
 2 7 0 「愛染」  
 2 8 4 「愛染」  
 1 3 5 「檸檬」  
 1 0 6 「有情」  
 1 4 4 「檸檬」  
 3 0 「乱れ髪」  
 3 1 8 「花径」  
 3 1 6 「花径」  
 2 6 8 「愛染」  
 3 1 5 「花径」  
 5 5 「乱れ髪」  
 5 1 「乱れ髪」  
 1 8 6 「肉眼」  
 3 2 5 「花径」  
 1 1 7 「有情」  
 2 8 0 「愛染」  
 7 2 「有情」  
 3 0 2 「花径」

六六九 サークル檸檬。平成6年3月6日(日)。「湯」片岡智恵子選。  
 六七〇 三井が丘川柳会。昭和51年4月18日(日)。「靴下」軸吟。  
 六七一 川柳塔本社句会。昭和59年10月7日。「道」軸吟。「愛」『古』にあり。句集では、「中国吟行」の3句目にあり。「川柳塔」昭和59年11月号の目次下エッセイ「上海」中に、「虹口公園」にある魯迅の墓は故人の好きだったサルビアの花に溢れていた」とある。二七参照。  
 六七二 「川柳塔」平成元年9月号。「嗚呼藤沢恒夫先生」の前書あり。「古」にあり。句集も同じ前書。↓補注。  
 六七三 「川柳雑誌」昭和39年5月号。「檸檬」にあり。↓補注。  
 六七四 「川柳雑誌」昭和32年10月号。「有」「愛」「古」にあり。  
 六七五 「川柳雑誌」昭和38年4月号。「檸檬」にあり。  
 六七六 もくせい川柳会。昭和62年11月16日(月)。「消す」墨作二郎選。  
 六七七 「川柳塔」平成9年9月号。「浅草四方六千日」の前書あり。「句集」では前書なし。  
 六七八 「川柳塔」平成9年5月号。「師」「喜」にあり。↓補注。  
 六七九 初出未詳。「愛」にあり。  
 六八〇 「川柳塔」平成9年3月号。「喜」にあり。  
 六八一 もくせい川柳会。平成8年1月15日(月)。「立つ」川杜的選。  
 六八二 三井が丘川柳会。昭和53年1月16日(日)。「寒い」高杉鬼遊選。  
 六八三 「川柳塔」昭和44年7月号。「鳥取砂丘三句」の前書あり。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。五九二参照。  
 六八四 「川柳塔」平成11年1月号。  
 六八五 初出未詳。「有」にあり。  
 六八六 「川柳塔」昭和63年2月号。「古」にあり。  
 六八七 「川柳雑誌」昭和37年1月号。「句集」「三文オペラ」の著者・岩井三窓君結婚「の前書あり。「有」「檸檬」「愛」「古」「師」「喜」にあり。「有」「檸檬」「愛」「古」「句集」では、「句集」「三文オペラ」の岩井三窓君結婚「二句」の前書。「師」「喜」には、「一六四六(皆君のもの 新妻の寝顔まで)」がなく、この一句のみ収録。  
 六八八 「川柳塔」平成6年6月号。「みちのく松陰道」の前書あり。「句集」も同じ前書。↓補注。  
 六八九 「川柳塔」昭和59年11月号。「愛」「古」にあり。句集

六八九	山容の変幻天地玄黄と	2	7	0	「愛染」
六九〇	三輪車 ポストへはまだ背が足らず	6	5		「有情」
六九一	ざあまずに妻もなつてる 女客	8	4		「有情」
六九二	雑種だが教えただけの芸はする	5	3		「乱れ髪」
六九三	雑踏へまぎれるときの好きな人	2	7	5	「愛染」
六九四	残酷な声 睡蓮の眠れるに	2	0	9	「肉眼」
六九五	残念 残念 残念 村山さんの眉	3	0	8	「花径」
六九六	残念の幼な駆けずり回るかな	3	2	9	「花径」
【し】					
六九七	思案まとまり雨垂れが落つ	1	4	0	「檸檬」
六九八	シーソーは問答に似る爺と孫	2	8	8	「愛染」
六九九	謝謝と菜 大人長箸で	2	7	0	「愛染」
七〇〇	潮騒も晶子曼陀羅智恵子抄	5	4		「乱れ髪」
七〇一	潮干狩 竿突つ立てて帽子掛	1	8	6	「肉眼」
七〇二	叱られた子の部屋にまだ灯が点かず	9	1		「有情」
七〇三	叱られて ブランコで 空蹴っている	9	0		「有情」
七〇四	叱るのに長いせりふとなりにけり	4	6		「乱れ髪」
七〇五	四季浄土花は歌うて鳥匂う	2	8	8	「愛染」
七〇六	シクラメン 伐折羅大将より激し	2	5	6	「愛染」
七〇七	四五人が来て瞬時句碑華やげり	1	7	1	「肉眼」

には「中国吟行」の前書あり。天地玄黄は、天は黒色、地は黄色であること。二七参照。

六九〇 初出未詳。『有』『檸檬』にあり。

六九一 初出未詳。『有』『檸檬』にあり。

六九二 三井が丘川柳会。昭和54年7月15日(日)。「教える」若柳花選天位。

六九三 初出未詳。『古』にあり。

六九四 「川柳塔」昭和47年10月号。「浄瑠璃寺にて」の前書あり。声の後、一字空白あり。『肉』にあり。句集には「浄瑠璃寺 四句」の前書があり、一六四七、一一五九、九九〇、六九四の順に収録。『愛』『古』は、この句と一一五九を省き、一六四七と九九〇の2句を収録。浄瑠璃寺は、京都府木津川市にある真言律宗の寺院。三重塔は国宝。

六九五 川柳塔本社句会。平成7年8月7日(月)。「残念」軸吟。村山富市(大正13年〜)は、平成6年6月、自民・社会・新党さきがけの連立政権の首相となる。平成7年7月参議院選挙で社会党が大きく議席を減らし辞意を漏らす、与党の慰留により続投。平成8年退陣。

六九六 「川柳塔」平成12年5月号。

六九七 「川柳雑誌」昭和38年10月号。『檸檬』『愛』『古』にあり。

六九八 サークル檸檬。平成6年12月11日(日)「自由吟」互選。

六九九 「古』『師』『喜』にあり。

七〇〇 「川柳塔」昭和59年11月号。『愛』『古』『喜』にあり。句集には「中国吟行」の前書あり。二七参照。

七〇一 平成8年9月8日(日)、竹原川柳会創立40周年記念川柳大会。「海」石原伯峯選佳作。『晶子曼茶羅』は佐藤春夫、「智恵子抄」は高村光太郎の作。

七〇二 「川柳塔」昭和44年7月号。『肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。

七〇三 「川柳雑誌」昭和34年11月号。『有』にあり。

七〇四 「川柳雑誌」昭和36年11月号。『有』にあり。

七〇五 「川柳塔」昭和58年5月号。各地柳壇「菜の花句会」にあり。

七〇六 「川柳塔」平成3年9月号。「上村松篁画伯米寿」の前書あり。『古』にあり。句集も同じ前書。↓補注。

七〇七 「川柳塔」昭和56年3月号。『愛』『古』にあり。シクラメンは和名篝火花(カガリビバナ)。5個の花弁が上に反り返るさまと、伐折羅の髪を逆立ちとを比較したのか。「伐折羅大将」を新薬師寺では、「バザラタイシヨウ」と言っている。

七〇八 初出未詳。『肉』にあり。補注五〇八参照。

七〇八 蜺 汗臍も九月に入りけり  
 七〇九 紫綬うれしインクひときわ匂い立ち  
 七一〇 紫綬やよし 詩人の胸をいろどるに  
 七一一 静かな灯三千集つてしずかなり  
 七一二 静かなる嫉妬 坐つたままで待ち  
 七一三 施設の子 盛り切り飯のほか知らず  
 七一四 志操とや 嘴にある鼻の穴  
 七一五 支度部屋横綱が来て引き締め  
 七一六 親しさはねぶたの顔でお出迎え  
 七一七 漆黒のピアノから出る海の音  
 七一一 執達吏 オーバー帰るまで脱がず  
 七一九 失恋が室戸の波を見に行けり  
 七二〇 失恋の四十九日となりけるよ  
 七二一 師弟あり一人は天に一人地に  
 七二二 師に会いし日の師の齢がわれに来る  
 七二三 死顔のなご満を持し満を持し  
 七二四 死にぞこない生きぞこないへ白い雨  
 七二五 死に行く鉢巻の尾を長垂らし  
 七二六 師の背なを流さんばかり酒供養  
 七二七 しのび寄る秋が今年は音を立て

3 0 8 「花径」  
 2 9 2 「愛染」  
 1 6 6 「肉眼」  
 1 7 6 「肉眼」  
 8 1 「有情」  
 1 0 6 「有情」  
 2 0 5 「肉眼」  
 3 8 「乱れ髪」  
 2 4 8 「愛染」  
 1 8 2 「肉眼」  
 1 0 3 「有情」  
 7 8 「有情」  
 2 2 2 「愛染」  
 3 4 5 「花径」  
 3 0 3 「花径」  
 2 3 5 「愛染」  
 2 8 1 「愛染」  
 1 9 7 「肉眼」  
 3 4 7 「花径」  
 3 2 7 「花径」

七〇八 「川柳塔」平成7年11月号。  
 七〇九 「川柳塔」平成7年6月号。「田辺聖子先生へ」の前書あり。「古」「師」「喜」にあり。句集も同じ前書。  
 七一〇 「川柳塔」昭和42年5月号。「三太郎先生への祝吟」の前書あり。「肉」「愛」「古」にあり。句集は「川上三太郎先生へ」の前書。↓補注。  
 七一一 「川柳塔」昭和43年4月号。「春日大社万灯籠」の前書あり。「肉」にあり。句集の前書には、「三句」の但書。二三参照。  
 七一二 川柳雑誌社大萬川柳八周年記念大会。昭和34年3月22日(日)。「嫉妬」「川村好郎選天位」「有」にあり。  
 七一三 「川柳雑誌」昭和34年5月号。「有」にあり。  
 七一四 「川柳塔」昭和47年3月号。「肉」「愛」「古」にあり。  
 七一五 西宮北口句会。昭和62年4月13日(月)。「支度」北山青珠選。  
 七一六 「川柳塔」昭和55年9月号。「愛」「古」にあり。句集には「青森行 四句」の前書あり。一五四参照。  
 七一一 初出未詳。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。  
 七一一 ふうあうすと姫路句会。昭和35年1月15日(金)。「執達吏」の後、一字空白あり。「有」にあり。  
 七一九 川柳雑誌社本社句会。昭和36年9月7日(木)。「波」麻生路郎選。「有」にあり。  
 七二〇 初出未詳。「愛」にあり。  
 七二一 「朝日新聞」夕刊。平成11年2月26日(金)。「師弟」7句の4句目。補注二三参照。  
 七二二 「川柳塔」平成6年7月号。「齢」↑「歳」。↓補注。  
 七二三 「川柳塔」昭和53年7月号。「牧人さんを悼む三句」の前書あり。「愛」「古」にあり。句集には、同じ前書で、この句のみ収録。「川柳塔」には、他に「静謐の人の死を急ぐ悲しかり、五月十五日白山夢幻の如く中空に浮ぶを見て」の前書で(初七日に君の越えゆく山見ゆる)の句を発表。  
 七二四 「川柳塔」平成2年3月号。「武蔵野陵」の前書あり。「古」にあり。句集の前書には「二句」の但書。この句の前が一五六四。武蔵野陵は昭和天皇陵。八王子市長房町にある。  
 七二五 「川柳ジャーナル」昭和46年2月号。「水壘集」時実新子選巻頭。「霜月悲鳴」の前書あり。↓補注。  
 七二六 「川柳塔」平成13年9月号。  
 七二七 「川柳塔」平成11年11月号。補注七六二参照。  
 七二八 初出未詳。「肉」「愛」「古」にあり。句集には「尾道に」の前書あり。二八八参照。

七二八	師はあらず 文学小径埒もなや	1	7	9	「肉眼」
七二九	鷗尾放光天 平の金昭和の金	3	7		「乱れ髪」
七三〇	四方拝 今年も旅の豊かなれ	3	2	5	「花径」
七三一	島一つ買うて暮らせば 涼しかる	8	7		「有情」
七三二	しみじみと妻の長所がわが短所	3	2	5	「花径」
七三三	四面楚歌 故郷は豆の花の頃	6	7		「有情」
七三四	釈迦牟尼も 真夏の肌にましませり	8	7		「有情」
七三五	写経して不生不滅の風まとう	3	4	3	「花径」
七三六	鮪荒く鯛のあと追う うねりかな	3	2	1	「花径」
七三七	社のホープ オールバックがよく似合い	1	1	4	「有情」
七三八	三味線も弾ける大学教授なり	1	1	5	「有情」
七三九	軍鶏抱いて 男の流転限りなし	2	6	2	「愛染」
七四〇	上海の夜と 思う夜の赤い酒	2	7	0	「愛染」
七四一	終焉や 裂けてくれない増す柘榴	1	9	8	「肉眼」
七四二	姑がまた我をと おす釘の位置	8	2		「有情」
七四三	修業とや 砥の前で小半日	2	3	0	「愛染」
七四四	宿坊の夜明け 寝相も人格だ	2	7	9	「愛染」
七四五	手術後の白髪いつまで抜かざるや	1	9	6	「肉眼」
七四六	手術台 思想も恋も捨ててのり	1	0	1	「有情」
七四七	手術なお神の譏りに似し医師ら	1	8	8	「肉眼」

- 七二九 初出未詳。鷗尾は、寺院・仏殿の瓦葺屋根の大棟の両端に付ける飾り。東大寺大仏殿を詠んだものか。
- 七三〇 「川柳塔」平成11年1月号。四方拝は、1月1日に行われる宮廷行事。天皇が天下太平、万民安寧を祈る儀式。
- 七三一 「川柳雑誌」昭和36年8月号。『有』『樺』『愛』『古』『師』『喜』にあり。平成5年8月21日（日）、香川県大川郡白鳥町に句碑建立。
- 七三二 川柳塔社本句会。平成10年11月7日（土）。「短所」軸吟。『喜』にあり。
- 七三三 「川柳雑誌」昭和34年6月号。『有』『樺』『愛』『古』『師』『喜』にあり。
- 七三四 初出未詳。『有』にあり。
- 七三五 サークル樺。平成6年4月3日（日）「自由吟」互選。不生不滅は仏教用語。生じもせず滅じもせず常住であること。
- 七三六 「川柳塔」平成9年12月号。「唐津くんち」の前書あり。『句集』には「二句」の但書。鯛は五番曳山。鮪は十三番曳山。四二一参照。
- 七三七 初出未詳。『有』にあり。
- 七三八 川柳雑誌社本句会。昭和36年2月7日（火）。「三味線」麻生路郎選。『有』『樺』『愛』『古』にあり。
- 七三九 川柳塔社本句会。昭和58年2月7日（月）。「流転」阿部柳太選。『愛』『古』にあり。
- 七四〇 「川柳塔」昭和59年11月号。目次下エッセイ「上海」の末尾にあり。『愛』『古』にあり。句集には「中国吟行」の前書あり。↓補注。二七参照。
- 七四一 「川柳ジャーナル」昭和46年2月号。「水甕集」時実新子選巻頭。『肉』『愛』『古』にあり。句集には「霜月悲唱」の前書あり。七二五参照。
- 七四二 初出未詳。『有』にあり。
- 七四三 川柳塔本社句会。昭和52年7月6日（水）。「修業」西田柳宏子選。『愛』『古』『師』『喜』にあり。
- 七四四 「川柳塔」昭和62年8月号。「高野山にて」の前書あり。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品「老司祭」25句の8句目。『古』にあり。↓補注。
- 七四五 「川柳塔」昭和46年2月号。「胃手術（五句）」の前書あり。『肉』にあり。句集には「入院手術」の前書あり。二六六参照。
- 七四六 「川柳雑誌」昭和32年1月号。「近作柳樺」欄。『有』にあり。
- 七四七 初出未詳。『肉』『愛』『古』『師』にあり。句集には「妻

七四八	手 <small>しゅじゅつ</small> 術 <small>じゆつ</small> な <small>な</small> お <small>お</small> 交 <small>こう</small> 響 <small>きやう</small> 楽 <small>がく</small> が <small>が</small> 鳴 <small>な</small> り <small>り</small> つ <small>つ</small> づ <small>づ</small> け	1	8	9	「肉眼」
七四九	出 <small>しゅつ</small> 産 <small>さん</small> 日 <small>び</small> 父 <small>ちち</small> 看 <small>かん</small> 護 <small>ご</small> 婦 <small>ふ</small> へ <small>へ</small> 少 <small>すこ</small> し <small>し</small> 媚 <small>こ</small> び	1	2	8	「檸檬」
七五〇	出 <small>しゅつ</small> 陣 <small>じん</small> の <small>の</small> ね <small>ね</small> ふ <small>ふ</small> た <small>た</small> で <small>で</small> 君 <small>きみ</small> に <small>に</small> 逢 <small>あ</small> い <small>い</small> に <small>に</small> 行 <small>い</small> く	3	3		「乱れ髪」
七五一	出 <small>しゅつ</small> 世 <small>せ</small> して <small>して</small> モ <small>モ</small> ー <small>ー</small> ニ <small>ニ</small> ン <small>ン</small> グ <small>グ</small> 着 <small>ま</small> る <small>る</small> 誕 <small>たん</small> 生 <small>じやう</small> 日 <small>び</small>	4	2		「乱れ髪」
七五二	酒 <small>しゆ</small> 徒 <small>と</small> あ <small>あ</small> ま <small>ま</small> た <small>た</small> 李 <small>り</small> 白 <small>はく</small> の <small>の</small> 氣 <small>き</small> 概 <small>がい</small> す <small>す</small> で <small>で</small> に <small>に</small> な <small>な</small> し	1	0	1	「有情」
七五三	朱 <small>しゆ</small> の <small>の</small> 社 <small>しゃ</small> 殿 <small>でん</small> 海 <small>み</small> の <small>の</small> 鳥 <small>とり</small> 居 <small>い</small> へ <small>へ</small> 黄 <small>き</small> な <small>な</small> コ <small>コ</small> ー <small>ー</small> ト	3	3	7	「花径」
七五四	朱 <small>しゆ</small> の <small>の</small> 鳥 <small>とり</small> 居 <small>い</small> 愛 <small>あい</small> 恋 <small>れん</small> 道 <small>どう</small> の <small>の</small> 入 <small>い</small> 口 <small>くち</small> か	1	7	8	「肉眼」
七五五	朱 <small>しゆ</small> の <small>の</small> 破 <small>は</small> 魔 <small>ま</small> 矢 <small>や</small> 吉 <small>よしい</small> 井 <small>い</small> 勇 <small>さむ</small> の <small>の</small> 血 <small>ち</small> も <small>も</small> 通 <small>かよ</small> い	2	8	5	「愛染」
七五六	手 <small>しゅ</small> 榴 <small>りゆう</small> 弾 <small>だん</small> か <small>か</small> つ <small>つ</small> て <small>て</small> 握 <small>にぎ</small> り <small>り</small> し <small>し</small> 掌 <small>て</small> に <small>に</small> レ <small>レ</small> モ <small>モ</small> ン	2	4	6	「愛染」
七五七	春 <small>しゅん</small> 愁 <small>しゆう</small> の <small>の</small> 階 <small>かい</small> 段 <small>だん</small> ゆ <small>ゆ</small> る <small>る</small> く <small>く</small> 螺 <small>ら</small> を <small>を</small> な <small>な</small> せ <small>せ</small> り	1	5	2	「檸檬」
七五八	春 <small>しゅん</small> 愁 <small>しゆう</small> の <small>の</small> 半 <small>はん</small> 歳 <small>さい</small> 経 <small>けい</small> た <small>た</small> る <small>る</small> か <small>か</small> な <small>な</small> 秋 <small>しゆう</small> 思 <small>し</small>	2	3	7	「愛染」
七五九	春 <small>しゅん</small> 愁 <small>しゆう</small> の <small>の</small> 無 <small>む</small> よ <small>よ</small> り <small>り</small> 淋 <small>さび</small> し <small>し</small> き <small>き</small> 無 <small>む</small> 限 <small>げん</small> 大 <small>だい</small>	1	7	8	「肉眼」
七六〇	春 <small>しゅん</small> 情 <small>じやう</small> や <small>や</small> ち <small>ち</small> ま <small>ま</small> た <small>た</small> に <small>に</small> 枝 <small>し</small> 垂 <small>た</small> る <small>る</small> もの <small>もの</small> 多 <small>おほ</small> し	2	5	2	「愛染」
七六一	春 <small>しゅん</small> 闘 <small>とう</small> の <small>の</small> 真 <small>ま</small> っ <small>っ</small> 只 <small>ただ</small> 中 <small>なか</small> に <small>に</small> 子 <small>こ</small> が <small>が</small> 生 <small>う</small> れ	6	5		「有情」
七六二	俊 <small>しゅん</small> 平 <small>へい</small> に <small>に</small> 棺 <small>ひつぎ</small> は <small>は</small> 狭 <small>せま</small> し <small>し</small> あ <small>あ</small> わ <small>わ</small> れ <small>れ</small> 哉 <small>かな</small>	3	2	7	「花径」
七六三	春 <small>しゅん</small> 眠 <small>みん</small> の <small>の</small> その <small>その</small> ま <small>ま</small> 覚 <small>さ</small> め <small>め</small> ぬ <small>ぬ</small> 死 <small>し</small> も <small>も</small> あ <small>あ</small> ら <small>ら</small> ん	2	4	4	「愛染」
七六四	正 <small>しやう</small> 月 <small>がつ</small> も <small>も</small> 梅 <small>うめ</small> よ <small>よ</small> り <small>り</small> 薔 <small>ばら</small> 薇 <small>が</small> が <small>が</small> 似 <small>に</small> 合 <small>あ</small> い <small>い</small> だ <small>だ</small> し	3	2	2	「花径」
七六五	将 <small>しやう</small> 棋 <small>ぎ</small> 指 <small>さ</small> す <small>す</small> 父 <small>ちち</small> 遊 <small>あそ</small> んで <small>で</small> る <small>る</small> 顔 <small>かお</small> で <small>で</small> な <small>な</small> し	1	7		「乱れ髪」
七六六	将 <small>しやう</small> 軍 <small>ぐん</small> に <small>に</small> 枕 <small>まくら</small> して <small>して</small> 寝 <small>ね</small> る <small>る</small> 世 <small>よ</small> が <small>が</small> 久 <small>ひさ</small> し	1	4	6	「檸檬」
七六七	正 <small>しやう</small> 直 <small>ちき</small> へ <small>へ</small> 税 <small>ぜい</small> 吏 <small>り</small> が <small>が</small> 助 <small>じゆ</small> 言 <small>げん</small> して <small>して</small> く <small>く</small> れる	1	0	3	「有情」

病む」の前書あり。昭和45年の作。九五参照。

七四八 「川柳塔」昭和45年3月号。「妻病めば」の前書あり。

七四九 「愛」「古」「師」にあり。句集では「妻病む」の前書。九五参照。

七四九 川柳雜誌社忘年川柳大会。昭和39年12月6日(日)。「媚」麻生路郎選で路郎賞不朽酒杯獲得。「檸檬」「愛」「古」「師」にあり。

七五〇 「川柳塔みちのく」28号(一九九七年八月)。投句葉書の消印は、平成9年5月24日。補注一六一六参照。

七五一 初出未詳。

七五二 「川柳雜誌」昭和38年6月号。各地柳壇「明和川柳研究会」にあり。「有」にあり。

七五三 「川柳塔」平成13年4月号。補注一六九参照。

七五四 「川柳塔」昭和43年6月号。「愛恋道」→「恋愛道」。「肉」「愛」「古」にあり。

七五五 「川柳塔」平成3年2月号。「川柳塔あおもり」5号(平成3年4月)にも発表。「古」にあり。

七五六 「川柳塔」昭和54年11月号。「愛」「古」にあり。↓補注。

七五七 「川柳雜誌」の路郎選「川柳塔」欄で没になった句。

七五八 九一〇参照。「檸檬」にあり。

七五八 「川柳塔」昭和53年10月号。「愛」にあり。

七五九 「川柳塔」昭和43年5月号。「肉」「愛」「古」にあり。

七六〇 「川柳展望」創刊号(昭和50年5月発行)。特別作品「鎮魂」25句の23句目。「愛」「古」にあり。

七六一 「川柳雜誌」昭和33年6月号。「四月四日長女生誕」の前書あり。「有」「檸檬」「愛」「古」にあり。四五参照。

七六二 「川柳塔」平成11年12月号。「句集」には「悼 寺尾俊平さん」の前書があり、七六一、八二九、八四七の順に収録。

七六三 「喜」は、この句を収録せず。↓補注。

七六三 「川柳塔」昭和54年7月号。「川柳木馬」創刊号(昭和54年7月発行)の招待作品「春眠」の7句目。「愛」「古」「師」にあり。↓補注。

七六四 「川柳塔」平成10年2月号。

七六五 初出未詳。

七六六 「川柳雜誌」昭和39年1月号。各地柳壇「明和川柳研究会」にあり。「檸檬」「愛」「古」にあり。

七六七 ふあうすと本社句会。昭和34年11月14日(土)。「正直」宮川義水選。「有」にあり。

七六八 「川柳塔」平成7年6月号。「小説」は、田辺聖子の『道

七六八	小 説の路郎うたてし事実より	3	0	6	「花径」
七六九	少年の幾人いても毬一つ	2	0	7	「肉眼」
七七〇	少年のように近頃夜が怖し	2	4	4	「愛染」
七七一	娼婦死し十字架にまた星戴く	1	4	6	「檸檬」
七七二	小便僧に 五月の風のすばらしさ	8	6		「有情」
七七三	小便を風に散らしぬ大瀬崎	2	2	3	「愛染」
七七四	消防車 前方睨む人ばかり	1	9	0	「肉眼」
七七五	消防車 火よりも赤く胴ぶるい	1	6	2	「肉眼」
七七六	証明書お辞儀の数をわびしがる	4	8		「乱れ髪」
× 証明書お辞儀の数をわびしがる					
七七七	昭和乱世 今太閤は痩せていず	3	1	6	「花径」
七七八	書斎から春夏秋冬 池が見え	2	1	1	「肉眼」
七七九	初冬の恋 鶴の面着て立ち向かう	2	4		「乱れ髪」
七八〇	使用人と主人の区別 猫も知り	1	7	3	「肉眼」
七八一	死より先ず生おそろしき玉仏寺	9	4		「有情」
七八二	白樺を削っただけの遭難碑	2	7	0	「愛染」
七八三	白菊千日仏も飽きはしませぬか	2	7	0	「愛染」
七八四	しりとりに匠みのはじめけり	1	0	8	「有情」
七八五	思慮深き一本それは折れた葦	2	6	0	「愛染」
七八六	白い山燦然とあり儀式の場	2	9	5	「愛染」
		2	7	7	「愛染」
		2	6	3	「愛染」

頓堀の雨に別れて以来なり。中央公論「平成4年1月号」平成9年9月号に連載され、平成10年3月に刊行された。

七六九 「川柳塔」昭和47年7月号。『肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。

七七〇 「川柳塔」昭和54年7月号。「川柳木馬」創刊号（昭和54年7月号）招待作品「春眠」10句の8句目。補注七六三参照。『愛』『古』にあり。

七七一 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『師』にあり。

七七二 初出未詳。『有』にあり。

七七三 「川柳塔」昭和50年7月号。『愛』『古』にあり。『古』『句集』には、「長崎行 三句」の前書があり、二〇八、九八六、七七三の順に収録。『愛』では「かまぼこと平戸未練を持ち帰る」も収録。「川柳塔」には「天草五橋遠い二つに日が当り」の句も発表。大瀬崎は、長崎県五島市玉之浦町にある。100米から150米の断崖が15キロにもわたって続く。

七七四 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。

七七五 「川柳塔」昭和41年6月号。『肉』にあり。

七七六 川柳塔本社句会。平成9年4月7日（月）。「証明」軸吟。

七七七 「川柳塔」昭和48年2月号。『肉』にあり。「今太閤」は、田名角栄のこと。昭和47年7月7日と昭和49年12月9日まで総理に在任した。

七七八 もくせい川柳会。昭和59年12月19日（水）。「自由吟」黒川紫香選。

七七九 せんば川柳社本社句会。昭和42年10月19日（木）。「面」時実新子選。（逢えば女外した面の二つ三つ）も入選。「川柳塔」昭和42年12月号にも発表。『肉』『愛』『古』にあり。

七八〇 「川柳雑誌」昭和32年4月号。2月に不朽洞会員となり、この号から「川柳塔」欄に投句。『有』にあり。

七八一 「川柳塔」昭和59年11月号。『愛』『古』『師』『喜』にあり。句集には「中国吟行」の前書あり。「川柳塔」昭和59年11月号の目次下エッセイ「上海」中に、「度胆を抜かれたのは、玉仏禅寺の釈迦牟尼座像と寝仏で、中国でも珍しい白玉雕製、現世為楽の思いをさせる。当地の参詣人を真似て膝をつき、文字通り頭を床につくほど額づいた私である。」とある。二七参照。

七八二 「川柳雑誌」昭和34年5月号。『有』にあり。

七八三 「川柳塔」昭和57年5月号。『愛』『古』にあり。

七八四 「川柳塔」平成8年12月号。「匠とみり」の前書あり。『師』『喜』にあり。句集には前書なし。

七八七	白色も一色ならず死生の裡	2	5	0	「愛染」
七八八	素人の浄瑠璃 土の匂いがし	8	6		「有情」
七八九	城うらのまてばしいの実待つ楽しさ	2	3	7	「愛染」
七九〇	白黒の次の世へこそ立たれけり	2	8	4	「愛染」
七九一	白胡麻と黒胡麻しかと差別あり	4	0		「乱れ髪」
七九二	白頭巾白涎掛け雪仏	2	7	7	「愛染」
七九三	白蝶入り 黄蝶出て来ぬ 寺の門	2	0	4	「肉眼」
七九四	城のある町への旅は恋に似る	1	3	9	「檸檬」
七九五	白は光りに光る綿帽子	2	6	1	「愛染」
七九六	死を願う氷の解けて行くような	4	9		「乱れ髪」
七九七	師を胸に置く 船と船すれ違い	1	7	9	「肉眼」
七九八	新学期 少しがたつく椅子もあり	9	1		「有情」
七九九	心眼に六十一の秋が澄み	2	1	0	「肉眼」
八〇〇	心経の無の字の多き金泥なり	2	2	1	「愛染」
八〇一	新劇の台詞めいたるプロポーズ	7	7		「有情」
八〇二	申告を散歩がてらの老教授	2	5	7	「愛染」
八〇三	新婚のスプーンに指紋つきはじめ	2	3	3	「愛染」
八〇四	震災の明日は我が身と思ふなり	3	0	5	「花径」
八〇五	新世紀汗をせぬ世がすぐに来る	3	3	5	「花径」
八〇六	新世紀霞のずいからのぞきけり	3	3	5	「花径」

- 七八五 「川柳塔」昭和62年4月号。『古』にあり。  
七八六 「川柳塔」昭和58年4月号。『愛』にあり。  
七八七 「川柳展望」創刊号（昭和50年5月1日発行）。特別作  
品「鎮魂」25句の14句目。『愛』『古』にあり。  
七八八 初出未詳。『有』にあり。  
七八九 「川柳塔」昭和53年10月号。『愛』『古』にあり。  
七九〇 「川柳塔」平成元年6月号。「高鷲垂鈍さんを悼む」の  
前書あり。「けり」↑「けれ」。係助詞「こそ」の結びは已然  
形なので、文法的には「けり（終止形）」でなく「ければ（已  
然形）」が正しい。『古』にあり。句集も同じ前書。↓補注。  
七九一 「川柳塔」平成7年5月号。  
七九二 「川柳塔」昭和62年3月号。「川柳展望」平成2年2月  
号にも発表。特別作品25句の「老司祭」の6句目。『古』にあ  
り。『古』には「寂庵二句」の前書があり、〈寂庵の庵主の笑  
みと微笑仏〉も収録。『句集』は前書なしで、この句のみ収録。  
七九三 初出未詳。「川柳塔」昭和47年1月号「川柳ゆゑもあ特  
集」にあり。『肉』『愛』『古』『師』にあり。  
七九四 「川柳雑誌」昭和39年1月号。「檸檬』『愛』『古』にあり。  
七九五 「川柳塔」昭和58年1月号。「長女章子結婚」の前書あ  
り。『愛』『古』『喜』にあり。『愛』『古』『句集』とも初出時  
の前書に「二句」の但書。『喜』は、この句に続く一五三〇（紅  
唇もまた光りに光る綿帽子）を省いて、この句のみ収録。  
七九六 初出未詳。『有』にあり。  
七九七 「川柳塔」昭和43年7月号。「尾道にて（四句）」の前  
書あり。『肉』にあり。句集は前書に「五句」の但書。二八八  
参照。  
七九八 初出未詳。『有』にあり。  
七九九 「川柳塔」昭和47年11月号。「堀江正朗氏還暦」の前書  
あり。『肉』『愛』『古』『師』にあり。句集も同じ前書。  
八〇〇 「川柳塔」昭和49年5月号。『愛』『古』にあり。金泥  
は、膠を溶いた水に金粉を混ぜたもの。  
八〇一 川柳雑誌社大萬川柳十周年記念大会。昭和36年3月19  
日（火）。「プロポーズ」軸吟。昭和35年度大萬川柳で、三位  
を獲得。『有』『檸檬』にあり。  
八〇二 初出未詳。『愛』『古』にあり。  
八〇三 川柳塔本社句会。昭和62年12月7日（日）。「スプーン」  
河野君子選。『愛』『古』にあり。  
八〇四 「川柳塔」平成7年4月号。『句集』には、「阪神淡路  
大震災 四句」の前書があり、一八二八、一四七四、一七〇  
〇、八〇四の順に収録。



八二六 寂まくと 伎芸天女に指紋なし  
 八二七 寂滅と遍路の果ての月見草  
 八二八 寂光の胡蝶蘭とはなり給い  
 八二九 十三夜俊平杉の子になった  
 八三〇 重症へ 冬の莓が届けられ  
 八三一 十二月 あしかの声につまざる  
 八三二 十一月 カナリヤの餌をまた忘れ  
 八三三 十二月 子供ばかりで飯を食べ  
 八三四 十二月子のやわらかき 黠  
 八三五 十二月三十一日も傍観者  
 八三六 十二月妻の俠気も役立たず  
 八三七 十二月の京都の良さを知りはじめ  
 八三八 十二月の粹人奇人物 語  
 八三九 十二月 宝石の美の極まれり  
 八四〇 十二月某日ブランコ揺りいたり  
 八四一 十年の歳月が澄む竹の節  
 八四二 十郎兵衛屋敷悲しや秋に満ち  
 八四三 銃を執る青春にして恋ありき  
 八四四 受験子のすでに闊う白い息  
 八四五 女中へは かけがえのない皿と言う

1 7 9 「肉眼」  
 2 1 4 「肉眼」  
 3 0 0 「花径」  
 3 2 7 「花径」  
 1 0 0 「有情」  
 1 6 7 「肉眼」  
 8 9 「有情」  
 8 9 「有情」  
 8 9 「有情」  
 1 3 7 「檸檬」  
 1 3 8 「檸檬」  
 2 8 5 「愛染」  
 5 4 「乱れ髪」  
 2 2 5 「愛染」  
 7 4 「有情」  
 1 4 6 「檸檬」  
 2 2 1 「愛染」  
 1 3 2 「檸檬」  
 4 0 「乱れ髪」  
 2 0 6 「肉眼」  
 7 0 「有情」

日(日)。「雑詠」麻生路郎選天位。『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 八二六 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。伎芸天女は、大自在の髪際から化生したという天女。容貌端正で福徳・伎芸を守護するという。奈良の秋篠寺にある。  
 八二七 「川柳塔」昭和48年6月号。『肉』『愛』『古』にあり。5月号の「柳界展望」に、「三月二十三日(金曜―編者注)から六日間母堂と四国遍路のバスツアーをされ、川竹松風氏、須藤俊江さんらとも歓談。」とある。  
 八二八 「川柳塔」平成6年5月号。「西 光子さんを悼む」の前書あり。『古』にあり。句集も同じ前書。  
 八二九 「川柳塔」平成11年12月号。『喜』にあり。句集には「悼寺尾俊平さん」の前書あり。「川柳塔」には他に、「木守りよ冬二俊平落ち尽くし」の句も発表。七六二参照。  
 八三〇 「川柳雑誌」昭和32年6月号。『有』にあり。  
 八三一 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。  
 八三二 「川柳雑誌」昭和34年12月号。エンセイ「師走」中にあり。『有』にあり。  
 八三三 「川柳雑誌」昭和36年3月号。『有』『愛』『古』にあり。  
 八三四 「川柳雑誌」昭和39年2月号。『檸檬』『愛』『古』にあり。  
 八三五 「川柳雑誌」昭和38年12月号。『檸檬』『愛』『古』にあり。  
 八三六 「川柳塔」昭和63年1月号。『古』にあり。  
 八三七 三井が丘川柳会。昭和54年12月16日(日)。「自由吟」軸吟。  
 八三八 川柳塔本社句会。昭和50年11月7日(金)。「粹人」西尾菜選。『愛』『古』にあり。  
 八三九 「川柳雑誌」昭和36年2月号。『有』『檸檬』『愛』『古』にあり。  
 八四〇 「川柳雑誌」昭和37年12月号。『檸檬』にあり。  
 八四一 「川柳塔」昭和49年7月号。『愛』『古』にあり。  
 八四二 「川柳雑誌」昭和39年10月号。「十郎兵衛屋敷」の前書あり。「悲しや」↑「恋しや」。『檸檬』にあり。句集は初出時の前書に「二句」の但書。この句の後に二八七。十郎兵衛は、浄瑠璃「傾城阿波の鳴門」(二七六八年初演)で、娘のお鶴を誤って殺す藩士阿波十郎兵衛のこと。  
 八四三 初出未詳。  
 八四四 「川柳塔」昭和47年4月号。『肉』『愛』『古』にあり。  
 八四五 「川柳塔」昭和33年11月号。「言う」↑「云う」。『有』にあり。  
 八四六 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『喜』にあり。

八四六 除夜過ぎて机上湧きくる泉あり  
 八四七 除夜の鐘俊 平星を磨いとる  
 八四八 路郎忌に言葉を飾る人ばかり  
 八四九 路郎忌に炸裂したるカンナの朱  
 八五〇 路郎忌に塔の影なす酒の壇  
 八五一 路郎忌に 松の洩れ日のなつかしさ  
 八五二 路郎忌の暑さと葭乃忌の寒さ  
 八五三 路郎忌の畏怖 仰も齢をとり  
 八五四 路郎忌の氷も白い炎かな  
 八五五 路郎忌のこれも 魂 金魚の朱  
 八五六 路郎忌の天守の鯨に見据えられ  
 八五七 路郎忌のビールの泡はあふれしめ  
 八五八 路郎忌のわれよき友と旅にあり  
 八五九 路郎忌や 瘦身力士勝名乗  
 八六〇 路郎忌や むかし僧俊 寛の壺  
 八六一 路郎の忌 形見の肉池 藍あせず  
 八六二 路郎の忌 句を 奉り 香華とす  
 八六三 路郎の忌 三十年は一つ息  
 八六四 路郎の忌 酒債なければ詩債なし  
 八六五 路郎の忌 白の鉄線一花でよし

1 2 7 「檸檬」  
 3 2 7 「花径」  
 1 6 4 「肉眼」  
 1 6 3 「肉眼」  
 2 0 1 「肉眼」  
 2 0 0 「肉眼」  
 2 6 8 「愛染」  
 3 0 2 「花径」  
 2 4 5 「愛染」  
 2 6 8 「愛染」  
 2 1 5 「肉眼」  
 1 6 4 「肉眼」  
 2 4 5 「愛染」  
 2 3 6 「愛染」  
 1 6 4 「肉眼」  
 2 0 0 「肉眼」  
 2 0 0 「肉眼」  
 2 0 0 「肉眼」  
 3 0 2 「花径」  
 2 0 7 「肉眼」  
 2 0 0 「肉眼」

八四七 「川柳塔」平成12年2月号。「喜」にあり。句集には「悼寺尾俊平さん」の前書あり。「川柳塔」の巻頭言「ああわが友」中に、「ああわが友ぬくもりを皆持ち去りて」の句あり。七六二参照。  
 八四八 初出未詳。「川柳塔」欄で没になった句か。昭和41年の作。三〇九参照。「肉」「愛」「古」「師」にあり。  
 八四九 「川柳塔」昭和41年7月号。「肉」「愛」「古」にあり。  
 八五〇 「川柳塔」昭和46年9月号。「肉」にあり。  
 八五一 「川柳塔」昭和46年7月号。「肉」「愛」「古」にあり。  
 八五二 「川柳塔」昭和59年7月号。「愛」「古」にあり。路郎忌は7月7日。葭乃忌は3月24日。  
 八五三 「川柳塔」平成6年7月号。  
 八五四 「川柳塔」昭和54年9月号。「路郎忌三句」の前書あり。「路郎忌の」↑「路郎忌は。」「愛」「古」にあり。句集には前書なし。「愛」「古」には、「路郎選集校正しおり路郎忌にも収録。」「句集」には、この句に続く八五八との2句収録。  
 八五五 「川柳塔」昭和59年7月号。「路郎忌の」↑「路郎の忌。」「愛」「古」にあり。「川柳塔」昭和60年1月号「私の一句」にも発表。  
 八五六 「川柳塔」昭和48年7月号。「肉」「愛」「古」にあり。  
 八五七 「川柳塔」昭和41年8月号。「肉」にあり。  
 八五八 「川柳塔」昭和54年9月号。「路郎忌三句」の前書あり。  
 八五九 「古」にあり。句集には前書なし。八五四参照。  
 八六〇 初出未詳。「川柳塔」欄で没になった句か。昭和41年の作だろ。」「肉」にあり。俊寛は、平氏打倒の陰謀が露顕して鬼界ヶ島に流され、当地で死んだ。  
 八六一 「川柳塔」昭和46年8月号。「忌」の後、一字空白あり。  
 八六二 「肉」にあり。「肉池」は、印肉を入れる容器。  
 八六三 「川柳塔」昭和46年9月号。「忌」の後、一字空白あり。  
 八六四 「肉」にあり。  
 八六五 「川柳塔」平成6年7月号。「忌」の後、一字空白あり。  
 八六六 「川柳塔」昭和47年7月号。「肉」「喜」にあり。↓補注。  
 八六五 「川柳塔」昭和46年8月号。「忌」の後、一字空白あり。「肉」にあり。鉄線は、キンボウゲ科の落葉蔓草。莖が針金のよう強い。  
 八六六 「川柳塔」昭和47年7月号。「忌」の後、一字空白あり。「肉」にあり。臍志は、仏教用語で三毒の一。自分の心に逆らうものを怒り恨むこと。

八六六	路郎の忌	瞋悲近づき遠ざかる
八六七	路郎の忌	睡蓮水の旅つづけ
八六八	路郎の忌	立膝癖も師父ゆずり
八六九	路郎の忌	天牛に来て落着きぬ
八七〇	人生に起承転結ありにけり	
八七一	人生の終りびつたりした棺	
八七二	人生薄暮空より降りし奴風の顔	
八七三	人生は二幕三幕ほどがよい	
八七四	人生譜柳は日々の風を見す	
八七五	人品は卑しからぬが女好き	
八七六	ジンフリーズ	美人は美德だと思ふ

【す】

八七七	水牛に雨笠煙養の情あり
八七八	水郷の微風から雨に移る候
八七九	水郷の鯉のぼりこそ泣かまほし
八八〇	水郷の胸の高さに続く水
八八一	水仙が並び口開く聖歌隊
八八二	水仙にはあたたかすぎる風邪の部屋
八八三	水仙よりスキージャンプ端正に
八八四	水中花水に疲れしごとく病む

2 0 7	「肉眼」
2 0 1	「肉眼」
2 0 0	「肉眼」
2 0 1	「肉眼」
2 1 1	「肉眼」
4 4	「乱れ髪」
1 3 9	「檸檬」
3 4 4	「花径」
1 2 5	「檸檬」
3 2	「乱れ髪」
1 9 7	「肉眼」
2 7 1	「愛染」
1 6 2	「肉眼」
1 6 3	「肉眼」
1 6 3	「肉眼」
2 4 7	「愛染」
1 9 8	「肉眼」
2 4 2	「愛染」
1 5 1	「檸檬」

八六七 「川柳塔」昭和46年8月号。「忌」の後、一字空白あり。  
 「肉」にあり。  
 八六八 「川柳塔」昭和46年8月号。「忌」の後、一字空白あり。  
 「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。  
 八六九 「川柳塔」昭和46年9月号。「忌」の後、一字空白あり。  
 「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。天牛は、大阪の老舗の古書店。↓補注。  
 八七〇 「川柳塔」昭和48年2月号。「旅館廃業堂島を去る」の前書あり。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。句集では「旅館廃業」の前書。↓補注。  
 八七一 川柳わかやま・しんぐう合同句会。昭和53年6月25日(日)。「びつたり」西尾葉選。「終り」↑「終りに」。  
 八七二 大阪文化祭 第15回川柳大会。昭和38年11月17日(日)。「人生」河野春三選特選。「檸檬」「愛」「古」にあり。  
 八七三 サークル檸檬。平成6年9月11日(日)「自由吟」互選。路郎句集「旅人」に(そろばんの三桁四桁の人生か)がある。「喜」にあり。  
 八七四 初出未詳。「檸檬」「愛」「古」「喜」にあり。  
 八七五 もくせい川柳会。平成元年3月20日(月)。「品」川島飄云児選。  
 八七六 「川柳塔」昭和43年9月号。「肉」「愛」「古」「師」にあり。  
 八七七 「川柳塔」昭和59年12月号。「愛」「古」にあり。句集には「中国吟行」の前書あり。↓補注。二七参照。  
 八七八 「川柳塔」昭和41年7月号。「水郷(五句)」の前書あり。「肉」「愛」「古」にあり。句集も同じ前書。八七九参照。補注二七九参照。  
 八七九 「川柳塔」昭和41年7月号。「水郷(五句)」の前書あり。「肉」「愛」「古」「師」にあり。「肉」「愛」「古」「句集」とも初出時と同じ前書で、八七八、八七九、一七二三、八八〇、二七九の順に収録。「師」には「水郷」の前書で、この句のみ収録。補注二七九参照。  
 八八〇 「川柳塔」昭和41年7月号。「水郷(五句)」の前書あり。「肉」「愛」「古」にあり。句集も同じ前書。八七九参照。補注二七九参照。  
 八八一 「川柳塔」昭和55年1月号。「愛」「古」「師」にあり。  
 八八二 「川柳塔」昭和46年3月号。「肉」にあり。  
 八八三 「川柳塔」昭和54年5月号。「愛」「古」にあり。  
 八八四 「川柳塔」昭和31年7月号。近作柳檸檬。「檸檬」「愛」「古」「師」にあり。

八八五 水都祭初恋の年とらず  
 八八六 水道の洩れたままなり お正月  
 八八七 水平線今にどんでん返しある  
 八八八 水平線一筋の沖仏 岩  
 八八九 睡蓮が自分の化身だとしても  
 八九〇 睡蓮に汗くさき身を遠ざける  
 八九一 睡蓮の炸裂もよし五稜郭  
 八九二 睡蓮はバラの日傘が来て眠る  
 八九三 睡蓮は万丈光の光源よ  
 八九四 睡蓮も輪廻転生の旅か  
 八九五 末っ娘も もう声上げず泣く齡に  
 八九六 清しさは秋に 衰え冬に死し  
 八九七 好きな娘に 花火持たせて 男の子  
 八九八 好きな方持って 帰れと友が言う  
 八九九 スケートを履くと 獣の姿勢とる  
 九〇〇 双六に七 十で知る 転び方  
 九〇一 芒原に実るものなし 月一顆  
 九〇二 すすき見て 目を濯ぎ いる思いあり  
 九〇三 進む時計遅れる 時計夫婦かな  
 九〇四 涼しげに 老樹一蟬点したり

1 3 4 「檸檬」  
 8 5 「有情」  
 2 5 6 「愛染」  
 3 2 8 「花径」  
 5 7 「乱れ髪」  
 1 8 2 「肉眼」  
 2 6 9 「愛染」  
 5 2 「乱れ髪」  
 2 1 5 「肉眼」  
 2 9 5 「愛染」  
 8 0 「有情」  
 2 2 4 「愛染」  
 9 0 「有情」  
 2 6 「乱れ髪」  
 1 8 3 「肉眼」  
 3 0 4 「花径」  
 1 3 7 「檸檬」  
 3 5 「乱れ髪」  
 1 4 1 「檸檬」  
 2 5 4 「愛染」

八八五 「川柳雑誌」昭和39年7月号。『檸檬』『愛』『古』にあり。  
 八八六 松露川柳句会。昭和35年10月16日(日)。「水道」河相  
 すゝむ選。『有』にあり。補注一〇一三参照。  
 八八七 「川柳塔」昭和56年3月号。『愛』『古』にあり。  
 八八八 「川柳塔」平成12年3月号。同号の巻頭言「五十の晩  
 年」中に、1月31日(月)、川上富湖の葬儀参列に新宮に行つ  
 たことが記されている。「オーシャンアローで二時間四〇分ほ  
 ど着いた新宮は、さながらに秋、空青く温暖でまるで別世  
 界だった。黒潮流れる海を越えて浄土へと目指す補陀落渡海  
 の土地柄を思わせた。途中の枯木灘辺りからの海岸線の岩  
 礁美もさりながら、串本に近い橋杭岩が、この日は仏の姿に  
 見えた。」  
 八八九 西尾菜叙勲記念川柳大会(於なにわ会館)。平成元年  
 7月9日(日)。事前投句「自分」西尾菜選。↓補注。  
 八九〇 「川柳塔」昭和43年11月号。『肉』『愛』『古』にあり。  
 八九一 「川柳塔」昭和59年8月号。『愛』『古』にあり。句集  
 には「函館行 三句」の前書あり。八九参照。  
 八九二 三井が丘川柳会。昭和53年8月20日(日)。「自由吟」  
 軸吟。  
 八九三 「川柳塔」昭和48年8月号。『肉』『愛』『古』『師』『喜』  
 にあり。「川柳塔」昭和49年7月号「私の句」にも発表。「川  
 柳塔」の表紙を永年描いた直原玉青がかつて住職をしていた  
 淡路島の国清禪寺に句碑あり。↓補注。  
 八九四 「川柳塔」平成7年10月号。『古』『師』『喜』にあり。  
 八九五 「川柳雑誌」昭和33年12月号。『有』にあり。  
 八九六 「川柳塔」昭和50年9月号。『愛』『古』にあり。  
 八九七 初出未詳。『有』にあり。  
 八九八 もくせい川柳会。平成元年9月18日(月)。「友だち」  
 互選。  
 八九九 「川柳塔」昭和43年12月号。『肉』『愛』『古』にあり。  
 ↓補注。  
 九〇〇 「川柳塔」平成7年2月号。  
 九〇一 初出未詳。『檸檬』にあり。句集には「十文字原 二句」  
 の前書あり。この句の前に一一六。  
 九〇二 「川柳塔みちのく」37号(一九九九年一月)。投句菓  
 書の消印は、平成11年8月26日。  
 九〇三 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 九〇四 「川柳展望」3号(昭和50年11月1日発行)。「愛』『古』  
 にあり。  
 九〇五 初出未詳。

- 九〇五 巢立つ日は校 長さんからお辞儀する  
 九〇六 ステツキの先でくらはは突つかれる  
 九〇七 捨猫とうなだれがちの向日葵と  
 九〇八 砂時計突如竜巻母が死ぬ  
 九〇九 砂時計目は耳よりもうたてけり
- 【せ】
- 九一〇 青雲のこころに蜜柑まだ青く  
 九一一 世紀末絵巻暗澹ダイアナ妃  
 九一二 青春のわが思い出に一神父  
 九一三 青春は 旗 翻えるごとくなり  
 九一四 聖書一冊を草分けの力とし  
 九一五 政治家の臍を比べてみたくなる  
 九一六 政治貧しく庶民の受ける巨斧の跡  
 九一七 生々流転水より長き風の章  
 九一八 晴天の霹靂 乳房黒くなり  
 九一九 聖堂のマリアに祈る黄なコート  
 九二〇 青年長髪 ピストル型のドライヤー  
 九二一 青年の歌なまぬるきお元日  
 九二二 青年の眉墨染めに 著し  
 九二三 清貧を通せば白髪透けてくる

- 4 3 「乱れ髪」  
 1 0 7 「有情」  
 1 7 0 「肉眼」  
 2 5 9 「愛染」  
 3 3 4 「花径」  
 1 5 2 「檸檬」  
 3 2 0 「花径」  
 1 4 7 「檸檬」  
 9 9 「有情」  
 2 3 2 「愛染」  
 2 9 3 「愛染」  
 3 3 「乱れ髪」  
 3 4 3 「花径」  
 7 9 「有情」  
 3 3 6 「花径」  
 1 8 8 「肉眼」  
 1 7 4 「肉眼」  
 4 4 「乱れ髪」  
 4 4 「乱れ髪」

- 九〇六 「川柳雑誌」昭和32年12月号。『有』にあり。  
 九〇七 「川柳塔」昭和42年11月号。『肉』にあり。  
 九〇八 「川柳塔」昭和56年10月号。『愛』『古』にあり。  
 九〇九 初出未詳。  
 九一〇 「川柳雑誌」の路郎選「川柳塔」欄で没になった句。七五七の句も没になった句。『檸檬』にあり。NHK学園「川柳春秋」22号(平成3年7月1日発行)の「シリウス」この人に聞くに、「最初のころ新しがりやで新しい句をつくらんならん思うて、これも路郎先生とかかわりになるんですけれども、『青雲の心に蜜柑まだ遠く』とか『春愁の階段ゆるく蝶をなせり』といった新しがりの句をつくって先生に出したけど、全然通らんですわね。逆に『傘さしてやっつてる方が刑事なり』とか、だれでもつくれるような句ばかり採られるんで、どうしたこつちやろう、ジレンマいうか、いらいらしたような時代があつたんですけれども、ところがそういうふうには押さえられると、自分の色が今度は爆発するいかふくれてきまして、自分の色は必ず出るということを路郎先生は百も承知の上でそういうふうには押さえて選をしてくださつたやと思ひます。そうして『恋人の膝は檸檬のまるさかな』というような句が出だしたときに、ばんばん採つてくださつたんですわ。それでああそうだったのかと後で思い至るわけ。』とある。↓補注。  
 九一一 「川柳塔」平成9年10月号。↓補注。  
 九一二 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。  
 九一三 初出未詳。『有』『檸檬』『愛』『古』にあり。  
 九一四 川柳塔社二賞発表句会。昭和52年10月6日(木)。「草分け」軸吟。二賞とは、同人対象の路郎賞と誌友対象の川柳塔賞のこと。『愛』にあり。  
 九一五 「川柳塔」平成6年11月号。『古』『師』『喜』にあり。  
 九一六 「川柳塔みちのく」19号。投句葉書の日付は、平成7年1月30日。  
 九一七 サークル檸檬。平成6年5月15日(日)「自由吟」五選。  
 九一八 「川柳雑誌」昭和35年8月号。『有』にあり。  
 九一九 「川柳塔」平成13年2月号。『喜』にあり。補注一六九参照。  
 九二〇 「川柳塔」昭和48年4月号。「青年長髪 ピストル型のドライヤー」→「青年にピストルならぬドライヤー」。『肉』『愛』『古』にあり。  
 九二二 「川柳塔」昭和43年2月号。『肉』『愛』『古』にあり。

九二四 制帽の汗を先ず拭き顔を拭く  
 九二五 聖夜の餐 神父の靴は常のまま  
 九二六 性欲と恋をごっちゃにして話し  
 九二七 生来の美貌に金が加わりぬ  
 九二八 青玲の気の魂と凝る館  
 九二九 清冽な泉を抱いて大樹かな  
 九三〇 セーヌ河畔の貸間で今日の画家となり  
 九三一 咳込んで名句を一つ逃がしたり  
 九三二 惜春の音の一つに昼の三味  
 九三三 積雪一丈その下の金魚の朱  
 九三四 席も変えない 酒も変えない  
 九三五 世間から見れば言うことない夫婦  
 九三六 説法を終えた教祖の菊いじり  
 九三七 背の小さい方が姉なり桜草  
 九三八 攻める扉逃げる扉を持つあいつ  
 九三九 閃光から光焰首なき兵馬俑  
 九四〇 先生に床屋の順をゆずるなり  
 九四一 先代に笑うた写真などはなし  
 九四二 先手打つおんな奥の手持つおとこ  
 九四三 銭湯に隣す 輪島映画館

1 3 3 「檸檬」  
 1 1 9 「有情」  
 7 8 「有情」  
 4 3 「乱れ髪」  
 2 8 8 「愛染」  
 2 5 8 「愛染」  
 1 1 1 「有情」  
 4 6 「乱れ髪」  
 1 4 2 「檸檬」  
 1 4 4 「檸檬」  
 3 3 6 「花径」  
 2 8 「乱れ髪」  
 1 1 9 「有情」  
 2 3 5 「愛染」  
 1 7 5 「肉眼」  
 2 9 1 「愛染」  
 9 1 「有情」  
 1 1 4 「有情」  
 3 4 4 「花径」  
 1 8 0 「肉眼」

九二二・九二三 初出未詳。  
 九二四 「川柳雑誌」昭和39年7月号。『檸檬』『愛』『古』『師』にあり。  
 九二五 「川柳雑誌」昭和37年2月号。「荘厳ミサ(豊中カソリック教会)」の前書あり。『有』『檸檬』『愛』『古』『師』にあり。句集では「荘厳ミサ」の前書。五二二参照。  
 九二六 初出未詳。『有』にあり。  
 九二七 初出未詳。  
 九二八 「川柳塔」平成3年9月号。「直原玉青先生米寿・玉青館落成」の前書あり。『古』にあり。句集の前書は「直原玉青画伯米寿・玉青館落成」。↓補注。  
 九二九 「川柳塔」昭和56年8月号。「藤沢恒夫先生喜寿」の前書あり。『愛』『古』『師』にあり。句集も同じ前書。  
 九三〇 川柳雑誌社本社句会。昭和37年3月7日(水)。席題「貸間」軸吟。『有』にあり。  
 九三一 初出未詳。  
 九三二 「川柳雑誌」昭和38年6月号。一四七回大万川柳「三味線」麻生路郎選天位。『檸檬』『愛』『古』『喜』にあり。  
 九三三 「川柳雑誌」昭和38年4月号。「北陸豪雪」の前書あり。  
 九三四 『愛』『古』にあり。補注一六七参照。  
 九三五 ↑「席も変らず酒も変らず」。  
 九三六 初出未詳。『有』にあり。  
 九三七 三井が丘川柳会。昭和53年4月16日(日)。「姉」互選。  
 九三八 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。  
 九三九 「川柳塔」平成7年3月号。「阪神大震災」『南京町』の前書あり。「光焰」↑「火焰」の後、一字空白あり。『古』にあり。句集では「阪神大震災 八句」の三句目に置かれ、「南京町」の前書あり。補注一九八参照。  
 九四〇 初出未詳。『有』『愛』『古』にあり。  
 九四一 「川柳雑誌」昭和36年9月号。『有』『愛』にあり。  
 九四二 サークル檸檬。平成6年10月9日(日)「自由吟」互選。  
 九四三 「川柳塔」昭和43年8月号。「能登から佐渡への旅(四句)」の前書あり。『肉』『愛』『古』にあり。句集も同じ前書。八参照。  
 九四四 「川柳雑誌」昭和33年2月号。『有』にあり。  
 九四五 「川柳雑誌」昭和32年11月号。『有』にあり。

- 九四四 銭湯の開くの待つも 松の内  
 九四五 煎餅を割って食べるも見合の日  
 九四六 千万の睫の中の睫かな  
 九四七 税金を甘く見ている人に会い  
 九四八 税務署出て万の毛穴を押しひろげ  
 九四九 税務署へすかたん言うて押し通し  
 九五〇 前身を知る朋輩を寄せつけず  
 九五一 禅僧の描く円に似た大根煮  
 九五二 禅僧のたたずまいもて逝かれしか
- 【そ】
- 九五三 宗祇の水柳 一葉と掬うなり  
 九五四 莊嚴ミサ 嬰兒祈らず 神に近し  
 九五五 掃苔の母の目まいが娘にうつり  
 九五六 掃苔の隣の墓の墓に帽をのせ  
 九五七 走馬灯花も犬ほど走るなり  
 九五八 走馬灯壺は肉より現なり  
 九五九 蘇州では蘇州の歩幅塔一つ  
 九六〇 牟寿翁淡々として淡ならず  
 九六一 その朝も髭を剃ることからはじめ  
 九六二 そのうちに影におびえることだろう

85	「有情」
108	「有情」
130	「檸檬」
104	「有情」
177	「肉眼」
103	「有情」
105	「有情」
255	「愛染」
325	「花径」
265	「愛染」
120	「有情」
127	「檸檬」
180	「肉眼」
278	「愛染」
239	「愛染」
270	「愛染」
318	「花径」
259	「愛染」
15	「乱れ髪」

- 九四六 初出未詳。『檸檬』にあり。句集には、「吉本青風君結婚」の前書あり。
- 九四七 初出未詳。『有』にあり。
- 九四八 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。
- 九四九 初出未詳。『有』にあり。
- 九五〇 川柳雑誌社本社句会。昭和36年10月7日(日)。「前身」路郎選。『有』にあり。
- 九五一 「川柳塔」昭和56年3月号。『愛』『古』にあり。この大根煮は、丸い聖護院大根を使っている、上京区の千本釈迦堂(大報恩寺)のものだろう。釈迦が菩提樹の下で悟りを開いた12月8日と、その前日に盛大に行われている。
- 九五二 「川柳塔」平成11年2月号。「悼 北川絢一朗氏」の前書あり。『句集』も同じ前書。北川絢一朗は、大正5年10月3日(火)に生まれ、平成11年1月13日(水)、81歳で死去。平安川柳社・川柳新京都の創立に参画。
- 九五三 「川柳塔」昭和58年11月号。「郡上八幡」の前書あり。『愛』『古』にあり。句集も同じ前書。飯尾宗祇(1421~1502)は、室町末期の連歌師。文明3年(1471)、宗祇は東常縁(とうのつねより)から「古今伝授」を受けるため郡上を訪れた。常縁の奥義の伝授は三年にわたって行われ、その間宗祇はこんこんと湧き出る泉を愛飲したという。宗祇が飲んだ湧き水を宗祇水(そうぎすい)といい、全国名水百選の第一号に選ばれた。↓補注。
- 九五四 「川柳雑誌」昭和37年2月号。「莊嚴ミサ(豊中カソリック教会)」の前書あり。『有』『檸檬』にあり。句集には「莊嚴ミサ」の前書。五二二参照。
- 九五五 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『喜』にあり。
- 九五六 初出未詳。『肉』『愛』『古』『師』にあり。
- 九五七 「川柳塔」昭和62年9月号。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品25句「老司祭」の9句目。『古』『師』『喜』にあり。
- 九五八 「川柳塔」昭和53年12月号。『愛』『古』にあり。
- 九五九 「川柳塔」昭和59年11月号。『愛』『古』『喜』にあり。句集には「中国吟行」の前書あり。二七参照。
- 九六〇 初出未詳。『喜』にあり。
- 九六一 「川柳塔」昭和56年10月号。『愛』『古』にあり。
- 九六二 初出未詳。
- 九六三 「川柳雑誌」昭和36年9月号。
- 九六四 初出未詳。『有』にあり。
- 九六五 もくせい川柳会。昭和63年2月15日(月)。「アルバム」

- 九六三 その恋も最初は歩くだけだった  
 九六四 その頃の市電 乗換券があり  
 九六五 その頃の羽振りがアルバムに残る  
 九六六 その次の船で刑事も島へ着き  
 九六七 その時の警 策に似た父の文  
 九六八 その日以後話らず書かず娘を思い  
 九六九 その人待つ 路郎忌も七回忌  
 九七〇 蕎麦の花 地球滅びるなど思えず  
 九七一 剃りあとの青さが非力とも見えず  
 九七二 そろばんの玉債権者目白押し  
 九七三 象さんとお話 出来た日の寝言  
 九七四 象の小屋 鎖ひきずる音ばかり  
 九七五 俗 中の俗 ライターを和尚持ち

【た】

- 九七六 大金を持つて見たとき 女かな  
 九七七 鯛買ったことが長屋に知れ渡り  
 九七八 隊長は依怙地に横に並ばせる  
 九七九 台風こけしの棚はしずかなり  
 九八〇 大輪のぐわらりと菊の散りざまや  
 九八一 田植歌田植えのどかなものならず

43	「乱れ髪」
107	「有情」
31	「乱れ髪」
109	「有情」
257	「愛染」
243	「愛染」
201	「肉眼」
63	「有情」
69	「有情」
148	「檸檬」
344	「花径」
96	「有情」
99	「有情」
79	「有情」
110	「有情」
16	「乱れ髪」
18	「乱れ髪」
196	「肉眼」
49	「乱れ髪」

阿萬萬の選。  
 九六六 初出未詳。『有』にあり。  
 九六七 初出未詳。『愛』『古』『師』『喜』にあり。警策は、禅寺で、座禪の時に情気・眠気をさまさせるため打つのに用いる、長さ四尺余りの扁平な棒状の板。  
 九六八 「川柳塔」昭和54年5月号。『愛』『古』にあり。  
 九六九 「川柳塔」昭和46年7月号。「戦傷盲人の堀江正朗氏は、かつて路郎忌句会上に上阪を欠かせしことなければ」の前書あり。『肉』にあり。句集も同じ前書だが、「堀江正朗氏は、」の読点なし。  
 九七〇 初出未詳。『有』『檸檬』『愛』『古』にあり。  
 九七一 「川柳雑誌」昭和33年4月号。『有』『檸檬』にあり。  
 九七二 初出未詳。『檸檬』にあり。  
 九七三 サークル檸檬。平成6年10月9日(日)。「話」田中正坊選。  
 九七四 初出未詳。『有』にあり。  
 九七五 「川柳雑誌」昭和33年11月号。『有』にあり。  
 九七六 初出未詳。『有』にあり。『有情』では、「持ってみたて」。  
 九七七 初出未詳。『有』にあり。  
 九七八 初出未詳。  
 九七九 初出未詳。  
 九八〇 「川柳塔」昭和46年1月号。「九輪抄」欄。「嗚呼清水白柳さん二句」の前書あり。「川柳塔」には、この句と(菊の香よ親切心は引継がん)の2句入選。『肉』には、この2句以外に(悲報来 金魚 鮎 鯉 水の底)(病床に聞く計へ水を飲んですまず)を収録。2句とも「川柳塔」欄で没になった句か。『句集』には、この句、一四二四、一四五〇の順に3句収録。『愛』『古』には、この(大輪の)の句のみ収録。『句集』で、この句の前に「入院手術 十句」があるように、薫風は胃手術のため入院中であった。「川柳塔」昭和45年12月号「柳界展望」に、「十一月十六日(月曜―編者注)大阪年金病院を退院。」とある。清水白柳は、明治38年3月21日(火)生まれ。昭和45年11月12日(木)午前10時、大阪市立桃山市民病院にて65歳で死去。  
 九八一 三井が丘川柳会。昭和51年2月11日(水)。「歌」戸田古方選。「田植えのどかなものならず」↑「田植えは楽なものならず」。  
 九八二 初出未詳。『有』にあり。  
 九八三 「川柳塔」昭和41年1月号。『肉』『愛』『古』にあり。

九八二 高島田 猫背のくせが出てしまひ  
 九八三 滝氷る 信ずべからぬささめごと  
 九八四 滝の白 雨は斜めに降りかわり  
 九八五 滝の前自転車帰る方※を向け  
 九八六 磔像へつるべ落しに夕日落つ  
 九八七 竹植えて 雨うつ音を楽しめり  
 九八八 風の糸妹 ついで持たされず  
 九八九 但馬牛美し百 獣の王よりも  
 九九〇 立たせたき人 睡蓮と塔の間  
 九九一 踏鞠踏む阿形 畔形人間座  
 九九二 正しき死 その夜莊嚴 山焼かれ  
 九九三 立ちたくて立ちたくて蛇木に登り  
 九九四 立話 長うて犬も坐り換え  
 九九五 達人の笛名人が聞いている  
 九九六 達人は喋り名人物言わず  
 九九七 立つたまま眠るペンギン迷亭忌  
 九九八 竜飛岬 地に這う蟻も疾風の圏  
 九九九 たてがみの白髪は父の反骨だ  
 一〇〇〇 七夕にアルタイルベガの名もゆかし  
 一〇〇一 七夕の赤い色紙へ 釈路郎

8 2 「有情」  
 1 5 9 「肉眼」  
 1 7 6 「肉眼」  
 4 9 「乱れ髪」  
 2 2 3 「愛染」  
 7 1 「有情」  
 2 7 4 「愛染」  
 2 7 1 「愛染」  
 2 0 8 「肉眼」  
 3 0 1 「花径」  
 1 9 2 「肉眼」  
 1 7 4 「肉眼」  
 9 5 「有情」  
 2 2 「乱れ髪」  
 3 3 7 「花径」  
 1 2 7 「檸檬」  
 1 9 3 「肉眼」  
 3 4 1 「花径」  
 3 2 「乱れ髪」  
 2 7 3 「愛染」

九八四 「川柳塔」昭和43年4月号。「那智の滝」の前書あり。  
 『肉』『愛』にあり。句集には前書なし。↓補注。  
 九八五 三井が丘川柳会。昭和51年8月22日(日)。「自転車」  
 大路美幸選。※「を」…特殊用法。  
 九八六 「川柳塔」昭和50年7月号。『愛』『古』にあり。句集  
 には「長崎行 三句」の前書あり。七七三参照。  
 九八七 「川柳雑誌」昭和31年5月号。「近作柳博」欄。『有』『愛』  
 『古』にあり。  
 九八八 「川柳塔」昭和59年3月号。『古』にあり。  
 九八九 「川柳塔」昭和60年1月号。『愛』『古』にあり。  
 九九〇 「川柳塔」昭和47年9月号。「浄瑠璃寺にて」の前書あ  
 り。「人」の後、一字空白あり。『肉』『愛』『古』にあり。六  
 九四参照。  
 九九一 「朝日新聞」夕刊。平成5年11月13日(土)。「酔いざ  
 めの」5句の3句目。「川柳塔」平成6年1月号「私の一句」  
 にも発表。『古』『師』『喜』にあり。補注二一九参照。  
 九九二 「川柳塔」昭和45年3月号。「梅志さんの死」と題する  
 弔文の末尾に、一七三三の句と共に発表。『肉』にあり。句集  
 には、「悼 後藤梅志氏 二句」の前書あり。↓補注。  
 九九三 「川柳塔」昭和43年2月号。『肉』『愛』『古』『師』に  
 あり。  
 九九四 「川柳雑誌」昭和31年11月号。「近作柳博」欄。『有』『博』  
 『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 九九五 第40回岸和田市民川柳大会。平成2年10月21日(日)。  
 「名人」軸吟。  
 九九六 川柳塔本社句会。平成13年3月7日(水)。「達人」河  
 内天笑選。  
 九九七 初出未詳。『博』『愛』『古』にあり。↓補注。  
 九九八 「川柳塔」昭和45年9月号。「竜飛岬」の前書あり。『肉』  
 にあり。句集には「二句」の但書。五二〇参照。  
 九九九 サークル檸檬。平成5年9月12日(日)「自由吟」互選。  
 一〇〇〇 川柳えんびつさわらび十周年・合同句集「さわらび」  
 発刊記念句会。平成4年7月5日(日)。事前投句「名」軸吟。  
 「アルタイルベガ」↑「アルタイベガ」。アルタイルは、わし  
 座の星。彗星。ベガは、こと座の星。織姫。  
 一〇〇一 「川柳塔」昭和60年8月号。『愛』『古』にあり。  
 一〇〇二 川柳塔本社句会。平成5年6月7日(月)。「朱」軸  
 吟。「古」にあり。鈴木春信(1725～1770)は、美人画浮世  
 絵師。「錦絵」技法の大成者。  
 一〇〇三 初出未詳。『有』にあり。

一〇〇二	七夕や春信の朱と路郎の朱	2	8	6	「愛染」
一〇〇三	種蒔きへ 夕日安心して沈み	8	6		「有情」
一〇〇四	楽しげは怨嗟の声の小鳥たち	2	5	2	「愛染」
一〇〇五	煙草のけむりも窓から出て行けり春	7	1		「有情」
一〇〇六	旅ごころ旅の前夜を慎むも	1	3	8	「檸檬」
一〇〇七	旅先の動物園のフラミンゴ	1	8	5	「肉眼」
一〇〇八	旅に出たし 子に画く絵にも汽車電車	7	1		「有情」
一〇〇九	旅に出て雀の声も新しや	1	4	0	「檸檬」
一〇一〇	旅に出て迷いは深くなるばかり	3	1	9	「花径」
一〇一一	旅人は焚火を借りて別れけり	3	2	2	「花径」
一〇一二	旅人へ何と親しい駅だこと	2	5	3	「愛染」
一〇一三	旅人も 月も やがては去る砂丘	7	2		「有情」
一〇一四	食べ初めのピリケンさんの足の裏	3	1	3	「花径」
一〇一五	誕生の馬の額の白い星	2	0	5	「肉眼」
一〇一六	誕生日朝日も花のようにあり	4	2		「乱れ髪」
一〇一七	誕生日ひとりひとときが至福	3	2	6	「花径」
一〇一八	誕生日マシマロ二つ(つ)掌に至福	3	1	9	「花径」
一〇一九	端然と墓のようななる書家の墨	2	2	0	「愛染」
一〇二〇	探梅に大楠公という地酒	2	7	2	「愛染」
一〇二一	タンポポの架と僕との宇宙観	2	4	4	「愛染」

- 一〇〇四 「川柳展望」2号(昭和50年8月1日発行)。「愛』『古』にあり。「楽しげは」↑「楽しげな」。
- 一〇〇五 「川柳雑誌」昭和36年6月号。「有』『檸檬』にあり。
- 一〇〇六 昭和38年11月10日(日)、せんば川柳社創立15周年記念川柳大会。席題「旅」軸吟。「檸檬』『愛』『古』にあり。
- 一〇〇七 初出未詳。「肉」にあり。
- 一〇〇八 「川柳雑誌」昭和36年5月号。「画く」↑「書く」。「有」にあり。
- 一〇〇九 「川柳雑誌」昭和38年10月号。「檸檬」にあり。
- 一〇一〇 サークル檸檬。平成9年7月13日(日)。「迷う」吉田あずき選。
- 一〇一一 「川柳塔」平成10年2月号。「喜」にあり。
- 一〇一二 「川柳展望」2号(昭和50年8月1日発行)。「愛』『古』にあり。「川柳塔」昭和61年12月号編集後記に、「七日の本社会で愛染の祝福を受けた翌朝、唐津への旅に出た。昨年は初対面で、よそゆきの感じがしたけれど、今回は仲間としての応待が出来た。昨年『茶碗』という題を選んだ記念に唐津焼の飯茶碗を買った。毎日使っているので一年の艶を加えた筈である。それが歴史というものだ。今年は湯呑に句を書いた。『旅人へ何と※やさしい駅だこと』虹の松原の無人駅を思ったのだ。」とある。虹の松原は、静岡の美保の松原、敦賀の気比の松原と並ぶ三大松原。※「やさしい」は蕪風の記憶違いか。
- 一〇一三 「川柳雑誌」昭和36年1月号。「鳥取砂丘」の前書あり。「有』『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。句集も同じ前書。「川柳雑誌」昭和35年12月号に、西宮支部の6名(橋高薫風子・本城絃月・菱田満秋・樋口舟遊・辻川和子・河相すゝむ)が、10月15日(土)から3日間山陰を旅し、鳥取・米子両句会に出席した記事がある。鳥取砂丘は、15日に見物した。この句の前が六五一。↓補注。
- 一〇一四 「川柳塔」平成8年11月号。「匠とみのり」の前書あり。「喜」にあり。「句集」は初出時と同じ前書。「喜」は「匠」の前書で、この句に続く「一五八〇(まあおもしろしてと三歳姉の顔)は未収録。↓補注。
- 一〇一五 「川柳塔」昭和47年2月号。「肉』『愛』『古』にあり。初出未詳。
- 一〇一六 初出未詳。
- 一〇一七 「川柳塔」平成11年6月号。
- 一〇一八 「川柳塔」平成9年9月号。
- 一〇一九 「川柳塔」昭和49年4月号。「愛』『古』にあり。
- 一〇二〇 サークル檸檬観心寺観梅句会。昭和60年3月12日

一〇二二	タンポポの絮 <small>わた</small> に意 <small>い</small> 志 <small>し</small> ありわが怯 <small>きようた</small> 懦 <small>だ</small>	2	4	2	「愛染」
一〇二三	タンポポはタンポポという河内弁 <small>かわちべん</small>	2	4	4	「愛染」
一〇二四	第一番大吉 <small>だいいちばんだいきち</small> とあり初 <small>はつ</small> みくじ	5	0	0	「乱れ髪」
一〇二五	ダイエツトとてご先祖 <small>せんぞ</small> の飢 <small>き</small> 餓 <small>が</small> の食 <small>しょく</small>	3	0	3	「花径」
一〇二六	大寒 <small>だいかん</small> も明治 <small>めいじ</small> 大正 <small>たいしょう</small> 昭和 <small>しやうわ</small> 平成 <small>へいせい</small>	2	9	3	「愛染」
一〇二七	代議士 <small>だいいぎし</small> にお願 <small>ねが</small> いされる阿呆 <small>あほう</small> らしさ	3	7	0	「乱れ髪」
一〇二八	大臣 <small>だいじん</small> の読 <small>よ</small> む新聞 <small>しんぶん</small> を妻 <small>つま</small> も読 <small>よ</small> む	4	4	0	「乱れ髪」
一〇二九	大山 <small>だいせん</small> も影 <small>かげ</small> 大山 <small>だいせん</small> も盆 <small>ぼん</small> に入り	2	6	9	「愛染」
一〇三〇	大文字 <small>だいちもんじ</small> 聞 <small>き</small> えぬ音 <small>おと</small> と見 <small>み</small> えぬ影 <small>かげ</small>	2	0	9	「肉眼」
一〇三一	大文字 <small>だいちもんじ</small> 恋 <small>こい</small> のはじめのごとく点 <small>つ</small> く	2	0	9	「肉眼」
一〇三二	大文字 <small>だいちもんじ</small> はや消 <small>き</small> えかかると第二 <small>だいに</small> 劃 <small>かく</small>	2	0	9	「肉眼」
一〇三三	大文字 <small>だいちもんじ</small> 額 <small>ひたい</small> の焼 <small>や</small> ける火 <small>ひ</small> なりけり	1	9	4	「肉眼」
一〇三四	大文字 <small>だいちもんじ</small> 夢 <small>ゆめ</small> の多 <small>おほ</small> くは夢 <small>ゆめ</small> で終 <small>おわ</small> る	1	9	4	「肉眼」
一〇三五	大文字 <small>だいちもんじ</small> 酔 <small>よ</small> 醒 <small>さ</small> めるよりはかなしや	1	9	4	「肉眼」
× 蛇行して 蛇行して 川淋 <small>かわさび</small> しけれ					
一〇三六	蛇行 <small>だこう</small> して蛇行 <small>だこう</small> して川淋 <small>かわさび</small> しけれ	1	5	0	「檸檬」
一〇三七	太宰 <small>だざい</small> 真 <small>ま</small> 似 <small>ね</small> て頬杖 <small>ほおづえ</small> をつく斜陽館 <small>しゃやうかん</small>	2	7	9	「愛染」
一〇三八	随 <small>だじ</small> 地 <small>じ</small> 獄 <small>ごく</small> のいのちもたつた一つきり	2	5	4	「愛染」
一〇三九	騙 <small>だま</small> されるにも狸 <small>たぬき</small> 型 <small>がた</small> 狐 <small>きつね</small> 型 <small>がた</small>	3	5	0	「乱れ髪」
一〇四〇	誰 <small>だれ</small> に似 <small>に</small> る誰 <small>だれ</small> にも似 <small>に</small> てず天使 <small>てんし</small> なり	3	1	2	「花径」

(火)。「梅」上田登志実選天位。『愛』『古』にあり。句集には「観心寺」の前書あり。観心寺は、大阪府河内長野市にある真言宗の寺。楠正成ゆかりの寺。

一〇二一 竹原川柳会創立45周年記念大会。平成13年8月26日(日)。「宇宙」軸吟。「絮と僕との宇宙観」↑「絮とよう似た宇宙観」。

一〇二二 「川柳塔」昭和54年5月号。『愛』『古』にあり。

一〇二三 児島与呂志「地下鉄」刊行記念川柳塔本社句会。昭和54年6月7日(木)。「河内弁」軸吟。『愛』『古』にあり。

一〇二四 三井が丘川柳会。昭和52年1月16日(日)。「一番」軸吟。

一〇二五 「川柳塔」平成6年11月号。

一〇二六 もくせい川柳会。平成9年1月20日(月)。「自由吟」軸吟。

一〇二七・一〇二八 初出未詳。

一〇二九 川柳ねやがわ。昭和57年8月22日(日)。「自由吟」軸吟。『愛』『古』にあり。

一〇三〇 「川柳塔」昭和47年10月号。「聞えぬ音と」↑「聞えぬ音に」。「肉」にあり。

一〇三一 「川柳塔」昭和47年10月号。「大文字」の後、一字空白あり。『肉』『愛』『古』にあり。

一〇三二 「川柳塔」昭和47年10月号。「大文字」の後、一字空白あり。「第二劃」↑「第二画」。「肉』『愛』『古』にあり。

一〇三三 「川柳塔」昭和45年10月号。『肉』『愛』『古』『師』にあり。同じ10月号発表の「遠き火の小さく濃ゆし大文字」は句集未収録。

一〇三四 「川柳塔」昭和45年10月号。『肉』『愛』『古』『師』にあり。

一〇三五 「川柳塔」昭和45年10月号。『肉』にあり。

一〇三六 初出未詳。『檸檬』にあり。×は「有」に収録された形。

一〇三七 「川柳塔」昭和62年10月号。「秋田・青森の旅」の前書あり。『古』にあり。句集では前書に「四句」の但書。三九二参照。

一〇三八 「川柳展望」3号(昭和50年11月1日発行)。「愛』『古』にあり。

一〇三九 「川柳塔みちのく」39号(二〇〇〇年五月)。投句葉書の消印は、平成12年2月29日。

一〇四〇 「川柳塔」平成8年9月号。「孫宮参り」の前書あり。

一〇四一 「句集」も同じ前書。「川柳塔」昭和40年12月号。『肉』『愛』『古』『師』

一〇四一 断崖絶壁 断崖絶壁 冬の恋 1 5 9 「肉眼」

【ち】

一〇四二 知恵の輪を抜くよう汚職無罪なり 1 0 4 「有情」

一〇四三 チェホフの卵を生みそうな眼鏡 1 9 2 「肉眼」

一〇四四 地下鉄に勤め持つなりメーデー歌 2 1 3 「肉眼」

一〇四五 近道を本人だけがしたつもり 1 0 5 「有情」

一〇四六 竹山を聴くうつむいて顔上げて 3 4 「乱れ髪」

一〇四七 地図と一緒に夢を畳めり 7 2 「有情」

一〇四八 父親が優しいうなった左り前 6 7 「有情」

一〇四九 父親になつても膝を抱く癖が 9 2 「有情」

一〇五〇 父親の財布の中味嘗て見ず 9 3 「有情」

一〇五一 父親の徳が少うしずつ分かり 4 5 「乱れ髪」

一〇五二 父親の懐 ふかき風の糸 2 5 0 「愛染」

一〇五三 父恋しわれも経読み鳥として 1 5 0 「檸檬」

一〇五四 父だけは口を開けずに笑うなり 3 0 5 「花径」

一〇五五 父と来て ずっと風呂敷持たされる 9 3 「有情」

一〇五六 父と子と手をつなぎ行く盆の窪 2 5 3 「愛染」

一〇五七 父の愛娘にあつし 富士桜 1 9 9 「肉眼」

一〇五八 父の忌に障子の部屋もなくなりぬ 2 1 1 「肉眼」

× 父の苦悩に 裸の煙草が散らばっている

一〇四二 「川柳雑誌」昭和34年4月号。「有』『愛』『古』にあり。

一〇四三 「川柳塔」昭和45年6月号。「万博ソ連館」の前書あり。「肉」にあり。句集も同じ前書。チェーホフ(1860-1904)は、ロシアの作家。「卵を生みそうな眼鏡」とは、チェーホフの鼻眼鏡の丸いレンズからの連想か。

一〇四四 初出未詳。「肉」にあり。

一〇四五 「川柳雑誌」昭和37年5月号。各地柳壇「にしなり支部句会」にあり。「有」にあり。

一〇四六 川柳塔みちのく10周年記念句会。平成9年8月2日(土)。「うつむく」森中恵美子選。高橋竹山は、明治43年6月に生まれ、平成10年2月5日(木)、87歳で死去。全盲の津軽三味線演奏家。

一〇四七 「川柳雑誌」昭和37年3月号。「有』『檸檬』にあり。

一〇四八 初出未詳。「有」にあり。

一〇四九 「川柳雑誌」昭和36年4月号。「有』『檸檬』『愛』『古』にあり。

一〇五〇 初出未詳。「有」にあり。「有」では「且つて」。

一〇五一 尼縁之助主宰出雲市文化奨励賞受賞祝賀川柳大会。昭和62年10月18日(日)。「徳」黒川紫香選天位。

一〇五二 「川柳展望」創刊号(昭和50年5月1日発行)。特別作品「鎮魂」25句の8句目。「愛』『古』『師』『喜』にあり。堺市立中央図書館所蔵の句集『愛染』の見返しには、「父親の懐ふかき奴風」と揮毫している。

一〇五三 初出未詳。「檸檬』『愛』『古』にあり。ウグイスの鳴き声のホーホケキョーが「法華経」に似ているところから、ウグイスを経読み鳥というようになった。

一〇五四 川柳塔本社句会。平成7年1月7日(土)。「笑う」軸吟。

一〇五五 初出未詳。「有』『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。

一〇五六 「川柳展望」2号(昭和50年8月1日発行)。「愛』『古』『師』にあり。

一〇五七 「川柳塔」昭和46年7月号。「あつし」の後、一字空白あり。「肉」にあり。

一〇五八 「川柳塔」昭和48年1月号。「肉』『愛』『古』にあり。

× (父の苦悩に裸の煙草が散らばっている)「愛』『古』(あり)を削除し、一三〇九(裸の煙草が散らばっている)父の苦悩に)の句を残す。一三〇九は、三井が丘川柳会で発表されたものである。(父の苦悩に)は、この形に推敲して句

一〇五九	父の恋茶飲み友達などという	4	「乱れ髪」
一〇六〇	父の手の太さは手品にはむかず	9	「有情」
一〇六一	父の乗る船の模様が応接間	2	「肉眼」
一〇六二	父の日か秋にはおじいちゃんになる	2	「愛染」
一〇六三	乳飲ます顔は尊し 猫さえも	1	「有情」
一〇六四	父は古里をその子は国を捨て	2	「愛染」
一〇六五	地にひそむ魔の天空へ駆け抜けし	2	「愛染」
一〇六六	地の果ての如山 頂を引き返す	1	「檸檬」
一〇六七	茶の間では書斎の頑固ほどでなし	2	「愛染」
一〇六八	茶 島によし杉によし鯉のぼり	2	「愛染」
一〇六九	中華料理のテーブル前にした器量	2	「乱れ髪」
一〇七〇	中国で久方ぶりの土煙	3	「乱れ髪」
一〇七一	チューリップ胡蝶の奈落かも知れず	2	「愛染」
一〇七二	朝刊の音のさらりと今日も晴	2	「愛染」
一〇七三	蝶がいて石に老若男女あり	2	「愛染」
一〇七四	頂上に汗ひく顔の謝霊運	2	「愛染」
一〇七五	腸詰が繋がっている母子家庭	2	「肉眼」
一〇七六	長男の頭へ手を載せやすき背丈	1	「肉眼」
一〇七七	蝶の妍極まれわが誕生日	1	「檸檬」
一〇七八	猪口を持つ手つき恩師に似て来たり	2	「愛染」

- 集『愛染』『古稀薫風』に収録したものである。もとが句会の句だから「乱れ髪」の章の句にすると生前伺ったが、疑問の残るところである。もとの形の方がいいと考え直したのだから。
- 一〇五九 初出未詳。
- 一〇六〇 初出未詳。「有」にあり。
- 一〇六一 初出未詳。「肉」「愛」「古」にあり。
- 一〇六二 川柳ねやがわ。昭和58年6月19日(日)。「自由吟」軸吟。「愛」「古」にあり。
- 一〇六三 「川柳雑誌」昭和33年1月号。「有」にあり。
- 一〇六四 「川柳塔」平成9年3月号。「師」にあり。
- 一〇六五 「川柳塔」平成7年3月号。「阪神大震災」の前書あり。「古」にあり。句集の前書には「八句」の但書。補注一九八参照。
- 一〇六六 初出未詳。「檸檬」「愛」「古」「師」「喜」にあり。
- 一〇六七 初出未詳。「愛」「古」にあり。
- 一〇六八 「川柳塔」平成7年6月号。「大井川鉄道」の前書あり。「古」にあり。句集も同じ前書。
- 一〇六九 第41回岸和田市民川柳大会。平成3年10月27日(日)。「賞禄」軸吟。
- 一〇七〇 西宮北口句会。昭和61年10月13日(月)。「煙」吉田笑女選。
- 一〇七一 「川柳塔」昭和51年9月号。「愛」「古」「師」にあり。
- 一〇七二 「川柳塔」昭和49年12月号。各地柳壇「どんぐり川柳会」にあり。「愛」「古」にあり。
- 一〇七三 「川柳塔」昭和49年7月号。「愛」「古」にあり。
- 一〇七四 「川柳塔」昭和51年11月号。「愛」「古」にあり。句集には「板尾岳人兄へ」の前書あり。謝霊運(385-43)は、六朝時代の宋の詩人。美しい詩風で山水詩の開祖とされる。板尾岳人は、当時金剛山に数多く登り、山の句をたくさん作っていた。
- 一〇七五 「川柳塔」昭和47年8月号。「肉」にあり。
- 一〇七六 「川柳塔」昭和46年3月号。「肉」「愛」「古」にあり。
- 一〇七七 「川柳雑誌」昭和40年7月号。「檸檬」「愛」「古」にあり。妍は、美しさ。↓補注。
- 一〇七八 初出未詳。「愛」「古」にあり。
- 一〇七九 「川柳塔」平成6年11月号。「息子一家と 2句」の前書あり。「古」にあり。句集は「長男と」の前書で、一〇九〇の句の後にあり。
- 一〇八〇 初出未詳。「有」にあり。

一〇七九 千代紙にはや好きな色孫娘  
一〇八〇 血を分けたわが子にしては覇気がなし

【一】

一〇八一 通信簿 父が真顔になってくる  
一〇八二 使い込み 女に甘い人だった  
一〇八三 つきあいで踏まれていきます邪鬼の顔  
一〇八四 月赤しわれも傾く三宮  
一〇八五 月冴えてくる酒冴えてくる独り  
一〇八六 付き添いが戻り表の寒さ言う  
一〇八七 月天心男が会おうたのは男  
一〇八八 月見草貨物列車は黒く長し  
一〇八九 月を見ていると確かな死者の影  
一〇九〇 酌ぎ交わし而立と古稀は一瞬ぞ  
一〇九一 土に字を書き残し入る試験場  
一〇九二 土の中 土の埴輪が埋められ  
一〇九三 つつ立ったままで物言う弟子になり  
一〇九四 つとさした 夫の傘の大きさを  
一〇九五 椿咲く浅き夢見じ白椿  
一〇九六 椿咲く有為の奥山紅椿  
一〇九七 翼やや異なる北帰行南帰行

2 9 2 「愛染」  
9 2 「有情」  
9 1 「有情」  
1 0 9 「有情」  
2 4 2 「愛染」  
2 9 2 「愛染」  
4 6 「乱れ髪」  
5 1 「乱れ髪」  
2 6 1 「愛染」  
5 3 「乱れ髪」  
4 0 「乱れ髪」  
2 9 2 「愛染」  
1 3 5 「檸檬」  
1 7 6 「肉眼」  
1 0 5 「有情」  
6 6 「有情」  
2 9 1 「愛染」  
2 9 0 「愛染」  
1 5 「乱れ髪」

一〇八一 初出未詳。「有」にあり。  
一〇八二 初出未詳。「有」にあり。  
一〇八三 「川柳塔」昭和54年3月号。各地柳壇「どんぐり川柳会」にあり。「愛」にあり。四天王(持国天・增長天・広目天・多聞天)は、それぞれ邪鬼を踏まえている。例えば、東大寺の戒壇院の多聞天が踏んでいる邪鬼は太々しい顔をしていて、いかにも「つきあいで踏まれています」という感じだ。  
一〇八四 「川柳塔」平成7年5月号。「震災 2句」の前書があり、もう一句は「豆撒いて豆拾いおる家がある」。「月赤し」↑「ルナロッサ」。「古」にあり。句集では「阪神大震災 8句」の前書。補注一九八参照。  
一〇八五 「川柳塔」昭和59年11月号。各地柳壇「菜の花句会」にあり。  
一〇八六 三井が丘川柳会。昭和53年1月16日(日)。「寒い」高杉鬼遊選。「戻り」↑「掃り」。  
一〇八七 川柳塔本社句会。昭和57年6月7日(月)。「出会い」軸吟。「愛」「古」にあり。  
一〇八八 三井が丘川柳会。昭和53年12月17日(日)。「列車」羽原静歩選。  
一〇八九 初出未詳。  
一〇九〇 「川柳塔」平成6年11月号。「息子一家と 2句」の前書あり。「古」「師」「喜」にあり。句集では「長男と」の前書。一〇七九参照。「川柳塔」平成7年1月号、目次下のエッセイ欄では、「酌みかわし而立と古稀は一瞬ぞ」の形で発表。  
一〇九一 「川柳雑誌」昭和39年2月号。「椿」「愛」「古」「喜」にあり。  
一〇九二 初出未詳。「肉」にあり。  
一〇九三 「川柳雑誌」昭和35年12月号。「物言う」↑「物云う」。「有」にあり。  
一〇九四 「川柳雑誌」昭和35年10月号。「有」「椿」にあり。  
一〇九五 「川柳塔」平成7年2月号。「見じ」↑「見ぬ」。「古」「喜」にあり。「浅き夢見じ」は、浅はかな夢などとも見ない悟りを開いた境地なので、「白椿」がふさわしい。  
一〇九六 「川柳塔」平成7年2月号。「古」「喜」にあり。「有為の奥山」は、有為転変の迷いの只中なので、「紅椿」がふさわしい。  
一〇九七 初出未詳。  
一〇九八 「川柳雑誌」昭和32年1月号。「近作柳樽」欄。「寝るようになり」↑「寝る様になり」。「有」にあり。  
一〇九九 もくせい川柳会。平成10年7月20日(月)。「船(舟)」

一〇九八	妻がもう口あけて寝るようになり	8	3	「有情」
一〇九九	妻と来た琵琶湖の船の今昔	2	7	「乱れ髪」
一一〇〇	妻に買う小さい翡翠の色定め	2	7	「愛染」
一一〇一	妻に病まれ 壺中をのぞく 日に幾度	1	9	「肉眼」
一一〇二	妻の乳房ゆらゆら温泉の広さ	1	3	「檸檬」
一一〇三	妻の日記 もう子供等のことばかり	8	4	「有情」
一一〇四	妻の留守 食パン真っ直ぐに切れず	6	6	「有情」
一一〇五	妻よ子よ水の深さが臍を越す	1	2	「檸檬」
一一〇六	妻若し 産衣すら縫うことをせず	8	4	「有情」
一一〇七	妻若し 水道一っぱいにひねり	8	4	「有情」
一一〇八	梅雨明けの雷 どんと 路郎の忌	2	0	「肉眼」
一一〇九	梅雨荒し 許せぬもののある如く	1	9	「肉眼」
一一一〇	露草よ額 田 王が袖を振る	2	2	「愛染」
一一一一	梅雨ついてブルートレイン青深め	2	4	「愛染」
一一一二	梅雨の街碧眼灯すごとく行く	2	5	「愛染」
一一一三	強いのは大上段に構えない	3	9	「乱れ髪」
一一一四	つらつら椿つらつら大和郡山	2	8	「愛染」
一一一五	つらら解けTipTopTapCoffee館	3	2	「花径」
一一一六	つり合ぬ恋にかじかむ女の手	1	4	「檸檬」
一一一七	吊皮に横溝正史片手読み	2	6	「愛染」

満仲きく子選。『喜』にあり。

一一〇〇 「川柳塔」 昭和59年12月号。『愛』『古』にあり。句集には「中国吟行」の前書あり。二七参照。

一一〇一 「川柳塔」 昭和45年4月号。『肉』『愛』『古』にあり。『肉』『句集』とも「妻再び入院す 四句」の前書があり、一一〇一、一四四八、一四六四、一一三〇の順に収録。『愛』『古』では、一一三〇を省き、3句収録。

一一〇二 「川柳雑誌」 昭和39年3月号。「日名子旅館にて」の前書あり。『樽』にあり。句集も同じ前書。六〇五参照。

一一〇三 「川柳雑誌」 昭和32年7月号。『有』にあり。

一一〇四 「川柳雑誌」 昭和35年7月号。『有』にあり。

一一〇五 初出未詳。『樽』『愛』『古』『師』『喜』にあり。

一一〇六 初出未詳。『有』にあり。

一一〇七 松露川柳句会。昭和35年10月16日(日)。「水道」河相すゝむ選。『有』『愛』『古』にあり。補注一〇一三参照。

一一〇八 「川柳塔」 昭和46年8月号。「どんと」の後、一字空白あり。『肉』『愛』『古』にあり。同号「柳界展望」に、「路郎忌の七月七日(水曜―編者注)は台風十三号が北上して大阪に雨をもたらした。夕刻梅雨明けの雷がとどろく。」とある。

一一〇九 初出未詳。『肉』にあり。

一一一〇 「川柳塔」 昭和52年1月号。『愛』『古』『喜』にあり。額田王は、飛鳥時代の歌人。天智天皇が粟草狩りをしたときに、天皇の弟で前夫であった大海人皇子(後の天武天皇)に詠みかけた歌が(あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る)。「袖振る」は、愛情を示す行為。(紫草(むらさき)のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも)は、それに応えた大海人皇子の歌。

一一一一 三井が丘川柳会。昭和55年7月20日(日)。「自由吟」軸吟では、「梅雨長し」。「川柳塔」 昭和55年9月号には、「梅雨ついで」で発表。『愛』『古』にあり。句集には「青森行四句」の前書あり。二五四参照。

一一一二 「川柳展望」2号(昭和58年8月1日発行)。「愛』『古』にあり。碧眼は、欧米人のあお目。

一一一三 西宮北口句会。昭和62年5月11日(月)。「強い」西口いわる選。「川柳塔」 昭和62年7月号にも発表。

一一一四 「川柳塔」 昭和63年4月号。「川口弘生さんを偲ぶ」の前書あり。『古』にあり。『古』の前書は初出時と同じ。『句集』では、「川口弘生先生を偲ぶ」。↓補注。

一一一五 「川柳塔」 平成10年5月号。『喜』にあり。↓補注。

一一一六 初出未詳。『樽』『愛』『古』にあり。

一一八	吊皮は手枷 生涯平社員	2	0	6	「肉眼」
一一九	釣り道具魚拓数枚形見分け	3	0	0	「乱れ髪」
一二〇	釣針を整う如し 旅前夜	1	9	0	「肉眼」
一二一	鶴の愚鈍亀の狂気をあこがれる	2	5	8	「愛染」
一二二	蔓ばらと善魔の護る城ならん	2	3	6	「愛染」
【て】					
一二三	定年を茶碗の龍と淋しがる	5	5		「乱れ髪」
一二四	剃髪をして 紫の底知れず	2	6	2	「愛染」
一二五	剃髪をして 煩惱のひとつかみ	2	6	9	「愛染」
一二六	手紙など書きたき 風邪の癒り際	6	4		「有情」
一二七	鉄砲玉もひょうろく玉も定年か	2	4	9	「愛染」
一二八	掌で囲むほどの火も恋の巴里祭	3	0	7	「花径」
一二九	手に足に関節のある寒さかな	2	0	5	「肉眼」
一三〇	手にのせた文鳥の暖 母が病む	1	9	1	「肉眼」
一三一	寺と萩マンネリズムも美しや	1	4	7	「檸檬」
一三二	テレビ見る 子を頤と膝に埋め	1	7	0	「肉眼」
一三三	テロリスト 神明に加護祈るなり	1	1	9	「有情」
一三四	手をつなぐことのかなわぬ雪だるま	3	1	4	「花径」
一三五	手を汚さない生活が ふとさびし	1	1	9	「有情」
一三六	天国に節穴一つ 豆秋忌	1	6	3	「肉眼」

- 一一七 「川柳塔」昭和53年8月号。各地柳壇「西宮北口句会」にあり。『愛』『古』『師』『喜』にあり。横溝正史は、明治35年5月14日(水)に生まれ、昭和56年12月28日(月)に79歳で死去。角川春樹が仕掛けたリバイバルブームにより、昭和51年には角川文庫の横溝正史作品が一〇〇〇万部を突破したという。
- 一一八 「川柳塔」昭和47年4月号。「手枷」の後、一字空白あり。『肉』『愛』『古』にあり。
- 一一九 もくせい川柳会。昭和61年11月17日(月)。「釣る」五選。
- 一二〇 「川柳塔」昭和45年3月号。「九輪抄」欄。『肉』にあり。
- 一二一 川柳ねやがわ。昭和56年4月19日(日)。「自由吟」軸吟。『愛』『古』にあり。
- 一二二 「川柳塔」昭和53年9月号。「寺尾俊平さん新居落成」の前書あり。『愛』『古』『師』にあり。句集も同じ前書。補注七六二参照。
- 一二三 初出未詳。『喜』にあり。
- 一二四 翠洋会。昭和58年2月16日(水)。「紫」軸吟。『愛』『古』にあり。
- 一二五 初出未詳。『愛』『古』にあり。
- 一二六 「川柳雑誌」昭和35年7月号。「書きたき」の後、一字空白あり。『有』『梅』にあり。
- 一二七 「川柳塔」昭和55年12月号。『愛』『古』にあり。
- 一二八 「川柳塔」平成7年8月号。『古』にあり。
- 一二九 「川柳塔」昭和47年3月号。『肉』『愛』『古』にあり。
- 一三〇 「川柳塔」昭和45年4月号。『肉』にあり。句集には「妻再び入院す 四句」の前書あり。一〇一参照。
- 一三一 「川柳雑誌」昭和37年12月号。『梅』『愛』『古』『喜』にあり。
- 一三二 「川柳塔」昭和42年7月号。「頤↑おとがい。『肉』『愛』『古』にあり。
- 一三三 初出未詳。『有』『愛』『古』にあり。
- 一三四 「川柳塔」平成9年1月号。「匠とみのり」の前書あり。『句集』には前書なし。
- 一三五 「川柳雑誌」昭和32年1月号。「近作柳樽」欄。『有』にあり。
- 一三六 「川柳塔」昭和41年7月号。『肉』にあり。須崎豆秋は、明治25年9月10日(土)に生まれ、昭和36年5月4日(木)、68歳で死去。「柳界の一茶」と呼ばれた。

- 一一三七 天才の根気の無さが哀れなり
- 一一三八 転生も美しからん 釈静水
- 一一三九 天井が未来へ移行 担送車
- 一一四〇 点滴の血のみ暖色 手術室
- 一一四一 てんとう虫 ここにも小さい輪島塗
- 一一四二 天と地を君と往く大観覧車
- 一一四三 天来の妙音蔵す白百合(白百合)は
- 一一四四 でかしゃんしたでかしゃんしたと初対面
- 一一四五 出来心 ダイヤの指輪していても
- 一一四六 出来なんだ頃エンピツが記憶する
- 一一四七 でぼちゃんを叩いて金を借りて去に

【と】

- 一一四八 灯竿と号し その灯が古稀になり
- 一一四九 東京で 遺産が二年とはもたず
- 一一五〇 東京の娘の着くを待つ祝膳
- 一一五一 東京へ 出たら出たらと 若社長
- 一一五二 東郷湖夕日とところを得て沈む
- 一一五三 蕩尽是金だけでないことを知る
- 一一五四 灯台の在り風浪の中なる繭
- 一一五五 灯台は灯の入る瞬時差らいぬ

7 0	「有情」
5 4	「乱れ髪」
1 9 5	「肉眼」
1 8 8	「肉眼」
1 8 0	「肉眼」
3 3 8	「花径」
2 2 4	「愛染」
3 1 1	「花径」
8 0	「有情」
2 6	「乱れ髪」
1 0 4	「有情」
2 0 8	「肉眼」
1 1 4	「有情」
2 7 2	「愛染」
1 1 4	「有情」
1 3 5	「檸檬」
3 3 0	「花径」
1 3 0	「檸檬」
1 6 2	「肉眼」

- 一一三七 「川柳雑誌」昭和33年10月号。「哀れなり」↑「あわれなり」。「有」にあり。
- 一一三八 竹原川柳会創立35周年・学生句集「竹の子」第二集 発行・山内静水追悼川柳大会。平成3年9月8日(日)。「美」軸吟。↓補注。
- 一一三九 「川柳塔」昭和46年1月号。「胃手術(五句)」の前書あり。「移行」の後、一字空白あり。「肉」「愛」「古」にあり。句集では「入院手術」の前書。二六参照。
- 一一四〇 「川柳塔」昭和45年3月号。「妻病めば」の前書あり。「肉」にあり。句集では「妻病む」の前書。九五参照。
- 一一四一 「川柳塔」昭和43年11月号。「てんとう虫」↑「てんと虫」。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。句集には「能登から佐渡へ」の前書あり。八参照。補注七六二参照。
- 一一四二 「川柳塔」平成13年5月号。「喜」にあり。
- 一一四三 「川柳塔」昭和50年10月号。「愛」「古」にあり。
- 一一四四 「川柳塔」平成8年8月号。「長男に長男誕生」二句「の前書あり。『句集』も同じ前書。この句の前に「一四七」。
- 一一四五 「川柳雑誌」昭和34年2月号。「有」にあり。
- 一一四六 もくせい川柳会。平成3年7月15日(月)。「エンピツ」互選。
- 一一四七 初出未詳。「有」にあり。
- 一一四八 「川柳塔」昭和47年9月号。「逸見灯竿氏を祝し」の前書あり。「肉」にあり。句集も同じ前書。
- 一一四九 初出未詳。「有」にあり。
- 一一五〇 「川柳塔」昭和60年1月号。「愛」「古」にあり。「東京の娘」は、次女の幸(こう)。
- 一一五一 初出未詳。「有」にあり。
- 一一五二 「川柳雑誌」昭和39年5月号。「檸檬」「愛」「古」「師」「喜」にあり。東郷湖は、島根県東伯耆郡湯梨浜町にある汽水湖。山陰八景の一。
- 一一五三 「川柳塔」平成12年5月号。
- 一一五四 「川柳雑誌」昭和40年8月号。この号と9月号の「川柳塔」欄の選者は、霞乃。「檸檬」にあり。句集には「潮岬二句」の前書あり。この句の後に一一五六。
- 一一五五 「川柳塔」昭和41年7月号。「犬吠埼(二句)」の前書あり。「肉」にあり。句集も同じ前書。この句の前に一一二九。犬吠埼は、千葉県銚子市にある関東平野最東端の岬。補注二七九参照。
- 一一五六 初出未詳。「檸檬」にあり。句集には「潮岬 二句」の前書あり。一一五四参照。

一五六 灯台は見返る時に惜別す  
 一五七 灯台よ 牛乳 壘に乳充てる  
 一五八 陶枕に睡蓮恋し 女人より  
 一五九 塔の朱の水に映れば浄土の朱  
 一六〇 稲門の出と アル中は別のこと  
 一六一 灯籠三千 祈願三千 尽くや神  
 一六二 遠い灯は 人を想えというごとし  
 一六三 遠き人を北斗の杓で掬わんか  
 一六四 遠吠えのごとく余震のつづく夜  
 一六五 遠めがね海の渦見てのどかなり  
 一六六 通り抜け昨日誘われ今日誘う  
 一六七 通り抜け 花の濃淡夜に入りぬ  
 一六八 都会の夜 セロリは母の香に似たり  
 一六九 年明けただけでほのぼの天地人  
 一七〇 年とってペタンシツプのモデルで居  
 一七一 図書館も市庁も古びた水都祭  
 一七二 年寄の居ぬお雑煮は淋しかる  
 一七三 屠蘇祝う酸素ポンペを傳かせ  
 一七四 屠蘇祝うわが家の龍虎おだやかに  
 一七五 特急は颯爽鳶の輪を残し

1 3 1 「檸檬」  
 2 0 9 「肉眼」  
 2 1 5 「肉眼」  
 2 0 8 「肉眼」  
 1 0 2 「有情」  
 1 7 6 「肉眼」  
 6 8 「有情」  
 1 3 9 「檸檬」  
 2 9 1 「愛染」  
 1 3 2 「檸檬」  
 5 2 「乱れ髪」  
 1 9 9 「肉眼」  
 6 6 「有情」  
 5 3 「乱れ髪」  
 5 2 「乱れ髪」  
 1 1 2 「有情」  
 2 5 5 「愛染」  
 3 3 6 「花径」  
 2 8 1 「愛染」  
 1 4 9 「檸檬」

一五七 「川柳塔」昭和47年7月号。『肉』にあり。  
 一五八 「川柳塔」昭和48年7月号。『肉』『愛』『古』にあり。  
 一五九 「川柳塔」昭和47年9月号。「浄瑠璃寺にて」の前書あり。『肉』にあり。句集の前書は「浄瑠璃寺 四句」。六九四参照。  
 一六〇 川柳雑誌社本社句会。昭和33年8月7日(木)。「學歷」麻生路郎選。『有』にあり。  
 一六一 初出未詳。『肉』にあり。句集には「春日大社万灯籠三句」の前書あり。昭和43年の作。一三二・七一参照。  
 一六二 初出未詳。『有』『檸檬』にあり。  
 一六三 「川柳雑誌」昭和38年11月号。『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 一六四 「川柳塔」平成7年3月号。「阪神大震災」の前書あり。『古』にあり。句集の前書には「八句」の但書。補注一九八参照。  
 一六五 「川柳雑誌」昭和39年10月号。「鳴門公園にて」の前書あり。『檸檬』『愛』『古』にあり。句集の前書は「鳴門公園」。  
 一六六 三井が丘川柳会。昭和53年4月16日(日)。「自由吟」軸吟。  
 一六七 「川柳塔」昭和46年6月号。『肉』『愛』『古』にあり。  
 一六八 「川柳雑誌」昭和32年11月号。『有』『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 一六九 三井が丘川柳会。昭和54年1月21日(日)。「ほのぼの」戸田古方選。『喜』にあり。  
 一七〇 三井が丘川柳会。昭和53年8月20日(日)。「モデル」大坂形水選。ペタンシツプは、第一製菓の湿布菓。  
 一七一 「川柳雑誌」昭和34年9月号。『有』にあり。  
 一七二 「川柳塔」昭和56年1月号。年賀状の句。『愛』『古』にあり。  
 一七三 「川柳塔」平成13年3月号。  
 一七四 「川柳塔」昭和63年1月号。年賀状では、「祝う」の後、一字空白あり。『古』にあり。昭和63年は辰年。龍は長男充、虎は薫風。充は24歳、薫風は62歳の春を迎えた。  
 一七五 「川柳雑誌」昭和37年9月号。「颯爽」↑「颯爽」。「颯」は誤植。『檸檬』『愛』『古』にあり。『檸檬』『句集』とも「東北行七句」の一句目。補注四四三参照。  
 一七六 川柳わかやま句会。昭和51年8月8日(日)。「散歩」川村好郎選天位。  
 一七七 せんば川柳社本社句会。昭和42年9月19日(火)。「おんな」樋口舟遊選。『肉』『愛』『古』にあり。

一七六	嫁ぐ朝父の散歩に添うて出る	4	4	「乱れ髪」	
一七七	十年経て女の言葉あわれなり	1	7	3	「肉眼」
一七八	鳶の輪の下は一面 水害地	1	1	1	「有情」
一七九	飛ぶことを覚えた雛の黙りがち	3	4	2	「花径」
一八〇	飛ぶ鳥へ飛ばざる鳥へ初光	2	7	1	「愛染」
一八一	泊る気になつて外したイヤリング	8	1		「有情」
一八二	友来たる 古きレコード 回すべし	1	7	5	「肉眼」
一八三	友だちがしみじみ光る年となり	2	7	5	「愛染」
一八四	友達の定期を借りて来たデート	4	2		「乱れ髪」
一八五	柳友の死に近寄りがたき長田町	2	9	2	「愛染」
一八六	友一人二人声出せ雲の果て	3	4	0	「花径」
一八七	寅年に候 寅の年の旦	3	2	1	「花径」
一八八	捕らないでくださいと言ひ 螢狩り	3	2	0	「花径」
一八九	鳥追笠を深くかぶれば恋めきぬ	1	3	2	「檸檬」
一九〇	鳥籠に雀飼うべき鳥ならず	1	5	1	「檸檬」
一九一	トンネルが遠くに見える秋の恋	2	2	4	「愛染」
一九二	童顔の一日だった叙黠の日	3	9		「乱れ髪」
一九三	童顔は首から上だけのことさ	1	7	0	「肉眼」
一九四	同期の桜 酒に爛れてしまいきり	1	7	0	「肉眼」
一九五	道化の死蝙蝠傘は舟になり	2	5	0	「愛染」

一七八 「川柳雑誌」昭和32年10月号。「有」にあり。  
一七九 サークル檸檬。平成6年1月9日(日)。「飛ぶ」奥田みつ子選。  
一八〇 「川柳塔」昭和60年1月号。一四三の句と共に、年賀状の句。「愛』『古』にあり。  
一八一 「川柳雑誌」昭和32年7月号。「有」にあり。  
一八二 初出未詳。「肉』『愛』『古』にあり。  
一八三 初出未詳。「古』『師』にあり。  
一八四 初出未詳。  
一八五 「川柳塔」平成7年4月号。「古」にあり。句集には「阪神大震災 八句」の前書あり。補注一九八参照。  
一八六 第21回みか月記念川柳大会。平成11年11月14日(日)。「声」軸吟。「喜」にあり。  
一八七 「川柳塔」平成10年1月号。72歳の春を迎えた。  
一八八 「川柳塔」平成9年11月号。  
一八九 「川柳雑誌」昭和39年10月号。「阿波踊」の前書あり。「檸檬』『愛』『古』にあり。句集の前書には「二句」の但書。この句の後に一八五七。「川柳雑誌」昭和39年9月号「柳界展望」に、「徳島にて」阿波踊りに来ました。想像した以上に熱狂した街に驚きました。(と)とまるを知らぬ踊りに身を流す)八月二十二日(土曜—編者注)。とある。  
一九〇 「川柳雑誌」昭和35年10月号。「檸檬」にあり。  
一九一 「川柳塔」昭和50年9月号。「愛』『古』にあり。  
一九二 「川柳塔」平成11年2月号。「祝 木村あきら氏」の前書あり。「句集」も同じ前書。木村あきは、川柳塔おっぱこ吟社(香川県白鳥町)の柳人。勲五等瑞宝章を授与される。当時84歳にして壮健。  
一九三 初出未詳。「肉」にあり。  
一九四 「川柳塔」昭和42年11月号。「桜」の後、一字空白あり。「肉』『愛』『古』にあり。  
一九五 「川柳展望」創刊号(昭和50年5月1日発行)。特別作品「鎮魂」25句の5句目。「蝙蝠傘は」↑「蝙蝠傘も」。「愛』『古』にあり。  
一九六 川柳塔本社句会。昭和48年5月7日(月)。「泥」香川酔々選天位。「肉」にあり。  
一九七 初出未詳。「檸檬』『愛』『古』にあり。  
一九八 初出未詳。「有」にあり。  
一九九 「川柳塔」平成10年1月号。「毒の世の」↑「わが生」に。平成11年1月号「私の一句」にも「わが生」で発表。  
「朝日新聞」平成11年2月26日(金)夕刊に、「毒の世の」で

- 一一九六 童貞さんふうわりと跳ぶ 春の泥  
 一一九七 獐猛な熊が歩けり内股で  
 一一九八 毒舌に負けてはおらぬ流行つ妓  
 一九九 毒の世の達陀の火と開伽の水  
 一二〇〇 どこまでが首かと蛇も思案する  
 一二〇一 どんと来い太鼓はいつもそう響く
- 【な】
- 一二〇二 地震熄んで一輪の薔薇毅然たり  
 一二〇三 中之島剣先は寂 十二月  
 一二〇四 就中ひよろひよろ椰子の親しさよ  
 一二〇五 なかんずく紫式部むらさきに  
 一二〇六 汝が祈りふかからしむと雪を給う  
 一二〇七 長靴の片方どうしてもこける  
 一二〇八 長崎の霞はまるし湾円く  
 一二〇九 流される雛よわたしもケア・ハウス
- X 長年の欲一本の皺となる
- 一二一〇 長年の欲一本の皺となる  
 一二一一 亡き母のあこがれだった空を航く  
 一二一二 なつかしや友七 十の丈くらべ  
 一二一三 夏雲の 死ねば越ゆべき峰ならん

2	1	3	「肉眼」
1	2	7	「檸檬」
8	5		「有情」
3	4	5	「花径」
3	0	7	「花径」
2	4		「乱れ髪」
2	9	1	「愛染」
1	6	7	「肉眼」
2	2	7	「愛染」
2	6	4	「愛染」
1	7	3	「肉眼」
1	6	0	「肉眼」
2	2	3	「愛染」
3	3	3	「花径」
3	6		「乱れ髪」
2	6	7	「愛染」
3	9		「乱れ髪」
3	2	4	「花径」
1	7	1	「肉眼」

発表。「師弟」7句の5句目。新聞には、達陀に「達陀は東大寺お水取りの時の松明乱舞の行。」の注あり。『師』『喜』にあり。補注二二三参照。

二二〇〇 「川柳塔」平成7年9月号。

二二〇一 川柳塔唐津支部結成12周年記念川柳大会。平成6年11月2日(水)。「太鼓」古川静江選佳作。

二二〇二 「川柳塔」平成7年3月号。「阪神大震災」の前書あり。「古』『喜』」にあり。「古』『句集』」には、「阪神大震災」八句の前書。「喜』」には、「阪神大震災」の前書で、この句のみ収録。補注一九八参照。

二二〇三 「川柳塔」昭和42年2月号。「寂」の後、一字空白あり。「肉』『愛』『古』『喜』」にあり。大阪市の淀屋橋より東側が中之島公園。剣先はその東の果てで、大川を土佐堀川と堂島川に分ける尖った島の部分。中之島公園も冬は寂しいが、剣先の比ではない。

二二〇四 「川柳塔」昭和51年3月号。「愛』『古』」にあり。句集には「ハワイ紀行 五句」の前書あり。補注二〇五参照。

二二〇五 「川柳塔」昭和58年8月号。「城北菖蒲園にて」の前書あり。「愛』『古』」にあり。句集の前書は「城北菖蒲園」。城北菖蒲園は、大阪市旭区にあり、毎年五月下旬に開園。紫式部は、夏、葉の付け根に淡紫色の小花を開く。

二二〇六 「川柳塔」昭和43年2月号。「肉』『愛』『古』『師』『喜』」にあり。「ふあうすと」昭和43年6月号。「第13回全国川柳作家合同句集」では、「ふかまるべし」の形で発表。↓補注。

二二〇七 昭和42年度第一回大萬川柳。「長靴」清水白柳選地位。「肉』『愛』『古』『師』『喜』」にあり。「川柳塔」昭和43年1月号「ゆーもあ特集」にこの句を挙げ、「私の生活にもユーモアがあるのだから、数は少ないながら、このところちよいちよい出てくる。まだまだ1+1=2のユーモアだが」とある。

二二〇八 「川柳塔」昭和50年7月号。「愛』『古』」にあり。句集には「長崎行」の前書あり。七七三参照。

二二〇九 「俳句現代」平成12年6月1日発行。「タツノオトシゴの家」10句の7句目。

二二一〇 初出未詳。「愛』『古』」にあり。

二二一一 西宮北口句会。昭和62年5月11日(月)。「航路」和田光代選。

二二一二 「川柳塔」平成10年6月号。「同窓会」の前書あり。「喜』」にあり。「句集』」には前書なし。「喜』」は初出時と同じ前書。

二二一三 「川柳塔」昭和42年10月号。「肉』『愛』『古』『師』『喜』」

一一一四	夏空に映りそうなるたらい舟	2	8	4	「愛染」
一一一五	夏の愛形を変えて鱗雲	2	3	7	「愛染」
一一一六	夏の風邪瀬古とマラソン走るなり	2	6	9	「愛染」
一一一七	夏は陽画冬は陰画の佐渡の旅	2	8	2	「愛染」
一一一八	菜つ葉服着て春泥をためらわず	1	4		「乱れ髪」
一一一九	夏祭り 男に似合う豆紋り	1	1	6	「有情」
一一二〇	夏祭り過ぎて悲しい原爆忌	4	9		「乱れ髪」
一一二一	夏料理 緋鯉の見える縁に座し	8	8		「有情」
一一二二	何もかもぬかるむ戦後 明治村	1	6	7	「肉眼」
一一二三	何もせぬのがヨット部に籍を置き	1	0	8	「有情」
一一二四	難波橋獅子像にはや春の雲	3	0	6	「花径」
一一二五	菜の花を視野に 交番 眠くなり	8	6		「有情」
一一二六	生身より句碑光るなり初日影	2	9	9	「花径」
一一二七	波の音雨粒一つ顔に落ち	1	5	2	「檸檬」
一一二八	波の音よき思い出を繰り返し	2	9	4	「愛染」
一一二九	波のしぶき逃れて小雨降っている	1	6	2	「肉眼」
一一三〇	南無菊花義礼信を棺に入れ	2	9	3	「愛染」
一一三一	名を挙げてからは ちよくちよく帰郷する	1	0	4	「有情」
一一三二	汝明日を憂うるなかれ終列車	5	2		「乱れ髪」
一一三三	南天と写されてよい歳になり	2	9	9	「花径」

にあり。路郎の辞世の句（雲の峰という手もありさらばさらばです）を踏まえた句。

一一一四 「川柳塔」平成元年9月号。「古」にあり。句集には「佐渡小木にて」の前書あり。「川柳塔」平成元年12月号、西尾菜の随想「佐渡の句碑」に、「柳都」四〇周年記念川柳大会（7月23日（日）、新潟厚生年金会館で開かれた一編者注。）の帰途、薫風さんと佐渡へ一緒することが出来た。（中略）小木の港では、タライ舟に乗っている観光客で遊園地のようである。乗る順番の列が出来ていた。私は家内と二人で乗ったが、薫風さんは一人で乗ってタライ舟を漕いでいる元気に驚いた。」とある。

一一一五 「川柳塔」昭和53年10月号。「愛」「古」にあり。

一一一六 「川柳塔」昭和59年9月号。「愛」「古」にあり。ロサンゼルスオリンピックを詠んだ句。

一一一七 初出未詳。「古」にあり。

一一一八 明和病院青蛙川柳会。補注三六四参照。

一一一九 初出未詳。「有」にあり。

一一二〇 三井が丘川柳会。昭和51年7月18日（日）。「夏」互選。

一一二一 初出未詳。「有」にあり。

一一二二 「川柳塔」昭和42年3月号。「肉」「愛」「古」にあり。

一一二三 初出未詳。「有」にあり。

一一二四 「川柳塔」昭和48年9月号。各地柳壇「八尾菜の花川柳会」にあり。「はや」↑「浮く」。「喜」にあり。↓補注。

一一二五 「川柳雑誌」昭和33年7月号。「有」にあり。

一一二六 「川柳塔」平成6年2月号。補注六参照。

一一二七 初出未詳。「檸檬」にあり。

一一二八 「川柳塔」平成7年7月号。「哀悼」の前書あり。5月15日（月）、西尾菜死去。「古」にあり。「古」には、「哀悼西尾菜先生」の前書。「句集」では、それに「五句」の但書。この句は、西尾菜の（人恋し人煩わし波の音）を念頭に置いたもの。四七参照。

一一二九 「川柳塔」昭和41年7月号。「犬吠埼（二句）」の前書あり。「肉」にあり。句集も同じ前書。一一五五参照。

一一三〇 「川柳塔」平成7年7月号。「哀悼」の前書あり。「菊花」「義」「礼」「信」の後、それぞれ一字空白あり。「古」にあり。四七参照。

一一三一 初出未詳。「有」にあり。

一一三二 三井が丘川柳会。昭和53年12月17日（日）。「列車」羽原静歩選。

【に】

一二三四	なんとなく河馬の母子もこどもの日	3	1	7	「花径」
一二三五	新妻を何と呼ぼうぞ秋の天	1	3	0	「檸檬」
一二三六	二月盡いのち盡へと続くなり	3	4	6	「花径」
一二三七	逃げおおせるものと 女は思うて居	8	0		「有情」
一二三八	逃げてゆく蚊の魂を感じ取り	4	1		「乱れ髪」
一二三九	逃げるための脚を麩鹿さずけられ	9	6		「有情」
一二四〇	煮凍りよ少年の日は貧しかりき	1	3	6	「檸檬」
一二四一	西成のシャツステテコは王衣に似	2	2	4	「愛染」
一二四二	二次会の ここも早稲田の歌になり	1	0	2	「有情」
一二四三	虹消えぬ嬰兒の笑みに似たりけり	1	2	9	「檸檬」
一二四四	虹の子を千晶とこそは名付けたれ	2	4	1	「愛染」
一二四五	二代目の差がいつまでも残りそう	3	0	5	「花径」
一二四六	日記帳 K子K子が続いでる	7	8		「有情」
一二四七	日本へ少し落目のジャズバンド	1	1	2	「有情」
一二四八	似てるなど河童は蟻螂に見入る	2	2	9	「愛染」
一二四九	似は似ても 狼の影 犬の影	9	6		「有情」
一二五〇	入院や わが来し方の土埃	1	9	5	「肉眼」
一二五一	入学と卒業姉妹ピアノ弾く	2	5	1	「愛染」
一二五二	入学のよい目よい耳よい眉根	2	3	9	「愛染」

一二三三 「川柳塔」平成6年1月号。補注六参照。  
 一二三四 「川柳塔」平成9年6月号。『師』にあり。  
 一二三五 初出未詳。『檸』にあり。  
 一二三六 「朝日新聞」夕刊。平成11年2月26日(金)。「師弟」7句の7句目。二月盡は、二月が終わること。早や一年の六分の一が過ぎたという感慨。いのち盡は、命が終わること。薫風の造語か。補注二二三参照。  
 一二三七 「川柳雑誌」昭和34年4月号。『有』にあり。  
 一二三八 「川柳雑誌」昭和38年4月号。各地柳壇「明和川柳研究会」にあり。  
 一二三九 初出未詳。『有』にあり。  
 一二四〇 「川柳雑誌」昭和39年2月号。『檸』『愛』『古』にあり。「川柳塔」昭和60年7月号の編集後記で、「私たちの世代は、テレビよりラジオの方に深い思い出を持っている。今の若者は、イヤホンで音楽を聞いて受験勉強をするながら族であるが、私は一間しかない家に祖母と暮らしていたので、いやおうなしにラジオの浪花節や講談などを聞いて勉強した。夜になると祖母の楽しみがそれ以外になかったからで、貧しさのながら族であった。」と、少年の日の貧しさについて記している。  
 一二四一 「川柳塔」昭和50年9月号。『愛』『古』にあり。  
 一二四二 「川柳雑誌」昭和33年3月号。『有』にあり。  
 一二四三 初出未詳。『檸』『愛』にあり。  
 一二四四 「川柳塔」昭和54年2月号。「田中博造・峰代夫妻に女子誕生」の前書あり。『愛』『古』にあり。句集も同じ前書。『セレクトション』柳人8 田中博造集(二〇〇五年十二月三十一日発行。邑書林)の略歴に、「一九七八年、一子、千晶誕生。翌年、洛西に新居を得る。二人の結婚を詠んだ句は三〇一。  
 一二四五 川柳塔本社句会。平成7年2月6日(日)。「差」軸吟。『師』にあり。  
 一二四六 初出未詳。『有』にあり。  
 一二四七 初出未詳。『有』にあり。  
 一二四八 菜の花句会。昭和51年9月10日(金)。「河童」軸吟。『愛』『古』にあり。  
 一二四九 初出未詳。『有』にあり。  
 一二五〇 「川柳塔」昭和45年12月号。「入院や」の後、一字空白あり。『肉』『愛』『古』にあり。句集には「入院手術」の前書あり。二六参照。  
 一二五一 「川柳展望」創刊号(昭和50年5月1日発行)。特別作品「鎮魂」25句の22句目。『愛』『古』『喜』にあり。

一二五三	入 <small>にゅうがく</small> 学 <small>へ</small> へ <small>たみ</small> 畳 <small>を</small> 歩 <small>ある</small> く新 <small>あら</small> ら <small>の</small> 靴 <small>くつ</small>	1	2	6	「檸檬」
一二五四	入 <small>にゅうし</small> 試 <small>の</small> 子 <small>こ</small> と母 <small>は</small> 起 <small>お</small> きてい <small>る</small> 看 <small>み</small> 病 <small>びょう</small> の <small>こ</small> と	1	3	5	「檸檬」
一二五五	女 <small>にょ</small> 人 <small>にん</small> 高 <small>こう</small> 野 <small>や</small> 石 <small>しやく</small> 楠 <small>く</small> 花 <small>なげ</small> 浄 <small>じよう</small> 土 <small>ど</small> 浄 <small>じよう</small> 土 <small>ど</small>	3	0	6	「花径」
一二五六	鶏 <small>にわとり</small> も飼 <small>こ</small> う <small>て</small> る島 <small>しま</small> の測 <small>そつ</small> 候 <small>こう</small> 所 <small>じよ</small>	1	0	6	「有情」
一二五七	仁 <small>にん</small> 侠 <small>ぎやう</small> は男 <small>おとこ</small> のロ <small>ロ</small> マ <small>マン</small> 喉 <small>のど</small> 仏 <small>ほとけ</small>	2	3	0	「愛染」
一二五八	忍 <small>にん</small> 従 <small>じゆう</small> の女 <small>おんな</small> 心 <small>こころ</small> に光 <small>ひか</small> る貝 <small>かい</small>	1	4	4	「檸檬」
一二五九	人 <small>にん</small> 情 <small>じゆう</small> の秋 <small>あき</small> 深 <small>ふか</small> まればよ <small>よ</small> み <small>が</small> え <small>り</small>	1	6	6	「肉眼」
一二六〇	忍 <small>にん</small> 耐 <small>たい</small> も少 <small>すこ</small> し異 <small>こと</small> なる美 <small>び</small> 女 <small>じよ</small> 醜 <small>しゆう</small> 女 <small>じよ</small>	2	4	3	「愛染」
一二六一	縫 <small>ぬい</small> 針 <small>はり</small> を折 <small>お</small> つ <small>て</small> しま <small>えり</small> 男 <small>おとこ</small> 親 <small>おや</small>	1	9	0	「肉眼」
【ぬ】					
一二六二	ネ <small>ネ</small> ク <small>ク</small> タイ <small>の</small> ま <small>ま</small> で <small>デ</small> カ <small>カ</small> ン <small>ン</small> シ <small>シ</small> ヨ <small>の</small> 輪 <small>わ</small> に <small>は</small> い <small>入</small> り	2	3	9	「愛染」
一二六三	猫 <small>ねこ</small> が <small>も</small> う <small>膝</small> に <small>の</small> つ <small>て</small> る女 <small>おんな</small> 客 <small>きやく</small>	8	4		「有情」
一二六四	猫 <small>ねこ</small> 抱 <small>だ</small> いて <small>あ</small> れば <small>乙</small> 女 <small>とめ</small> 耳 <small>みみ</small> 聡 <small>さと</small> く	1	8	2	「肉眼」
一二六五	猫 <small>ねこ</small> の首 <small>くび</small> つ <small>か</small> み <small>二</small> 階 <small>かい</small> を降 <small>お</small> り <small>て</small> くる	1	1	5	「有情」
一二六六	猫 <small>ねこ</small> の眼 <small>め</small> に <small>さ</small> え暇 <small>ひま</small> 人 <small>じん</small> と <small>う</small> つ <small>る</small> なら <small>ん</small>	1	1	3	「有情」
一二六七	猫 <small>ねこ</small> 柳 <small>やなぎ</small> 亡 <small>な</small> き人 <small>ひと</small> ば <small>か</small> り思 <small>おも</small> わ <small>る</small> る	1	8	6	「肉眼」
一二六八	寝 <small>ね</small> 転 <small>ころ</small> んで読 <small>よ</small> むを許 <small>ゆる</small> さ <small>る</small> 卒 <small>そつ</small> 業 <small>ぎやう</small> し	2	5	1	「愛染」
一二六九	寝 <small>ね</small> 正 <small>しょう</small> 月 <small>がつ</small> ガ <small>ス</small> 中 <small>ちゆう</small> 毒 <small>どく</small> を <small>し</small> て <small>へん</small> か	1	4	3	「檸檬」
一二七〇	熱 <small>ねつ</small> の <small>こ</small> へ眼 <small>め</small> 鏡 <small>がね</small> を <small>か</small> け <small>た</small> ま <small>ま</small> 眠 <small>ねむ</small> り	6	7		「有情」

一二五二 初出未詳。『愛』『古』にあり。  
一二五三 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。  
一二五四 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『師』にあり。  
一二五五 「川柳塔」平成7年6月号。「室生寺」の前書あり。  
『古』にあり。句集も同じ前書。室生寺は、奈良県宇陀郡室生村にある真言宗の寺。女人禁制の高野山に対し、女人高野と称した。  
一二五六 初出未詳。『有』にあり。  
一二五七 第24回大萬川柳大会。昭和52年2月27日(日)。「喉」軸吟。『愛』『古』『師』にあり。  
一二五八 「川柳雜誌」昭和38年5月号。「角屋青貝の間」の前書あり。『檸檬』『愛』『古』にあり。句集も同じ前書。「川柳雜誌」昭和38年3月号「柳界展望」に、「二月十六日(土曜)編者注」堂友クラブの会合で京都島原、二条陣屋等を見物、角屋での『貸の式』に一句。落胤が目元涼しき禿なり」とある。  
一二五九 「川柳塔」昭和41年12月号。「啞三味さんの三周忌」の前書あり。『肉』にあり。句集では「啞三味氏三周忌」の前書。啞三味については、補注八七八参照。  
一二六〇 「川柳塔」昭和54年6月号によると、むらくも創立30周年記念川柳大会での句。「川柳木馬」創刊号(昭和54年7月発行)招待作品「春眠」10句の10句目。補注七六三参照。『愛』『古』にあり。  
一二六一 初出未詳。『肉』にあり。句集には「妻病む」の前書あり。九五参照。  
一二六二 初出未詳。『愛』『古』にあり。  
一二六三 初出未詳。『有』にあり。  
一二六四 「川柳塔」昭和43年11月号。「乙女子」↑「乙女の。『肉』にあり。  
一二六五 初出未詳。『有』『愛』『古』『喜』にあり。  
一二六六 初出未詳。『有』にあり。  
一二六七 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。  
一二六八 「川柳展望」創刊号(昭和50年5月1日発行)。特別作品「鎮魂」25句の21句目。『愛』『古』『師』にあり。  
一二六九 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
一二七〇 「川柳雜誌」昭和35年9月号。『有』『檸檬』『愛』『古』にあり。  
一二七一 「川柳塔」昭和53年11月号。『愛』『古』にあり。  
一二七二 「川柳塔」昭和56年10月号。『愛』『古』『師』『喜』にあり。「川柳塔」昭和57年1月号「私の一句」にも発表。  
昭和56年8月6日、「番傘」水府忌句会「母」の軸吟に(合歡

一二七一 合歓の花雨に濡れてるのは乳房  
 一二七二 合歓の花母の乳房を焼いて来ぬ  
 「愛染」

【の】

一二七三 喃妻よ鮎まで値切ることはない  
 「愛染」

一二七四 のう三毛よ盲導犬を見て御覧  
 「花径」

一二七五 野菊咲く島で流人として終り  
 「有情」

一二七六 乃木さんに似た人と会うひとり旅  
 「乱れ髪」

一二七七 飲み仲間 誰が誘うたわけでなし  
 「有情」

一二七八 飲む会のハガキは箸で裏返す  
 「愛染」

一二七九 のらくろを読み返しおり建国忌  
 「花径」

一二八〇 野良でいておつとりとした見事な目  
 「花径」

一二八一 のれん分け電話一番違いなり  
 「愛染」

【は】

一二八二 肺炎へこの元旦の空のいろ  
 「花径」

一二八三 灰皿もその小心にあきれ果て  
 「乱れ髪」

一二八四 敗戦忌バスケットから犬の顔  
 「愛染」

一二八五 敗戦日分水嶺の如くあり  
 「愛染」

一二八六 敗戦日われ人生を二つ生き  
 「愛染」

一二八七 背徳や三面鏡の無数の顔  
 「愛染」

一二八八 這い這いふたり不思議不思議と懺悔懺悔  
 「愛染」

2 3 8  
 2 5 9  
 2 4 7  
 3 3 2  
 8 8  
 2 7  
 1 0 2  
 2 4 0  
 3 3 9  
 3 4 4  
 2 6 7  
 3 1 5  
 2 4  
 2 3 3  
 2 4 5  
 2 4 5  
 2 4 5  
 2 3 2  
 2 8 7

の花母の乳房は何処にある)を发表。  
 一二七三 三井が丘川柳会。昭和54年8月19日(日)。「自由吟」  
 軸吟。「喃」↑「なあ」。「川柳木馬」創刊号(昭和54年7月発  
 行)の招待作品「春眠」10句の2句目。補注七六三参照。『愛』  
 『古』『師』にあり。  
 一二七四 「俳句現代」平成12年6月1日発行。「タツノオトシ  
 ゴの家」10句の5句目。「喜」にあり。  
 一二七五 初出未詳。『有』にあり。  
 一二七六 「川柳塔」平成6年11月号。『古』にあり。  
 一二七七 川柳雑誌寿四百号記念川柳大会。昭和35年9月11日  
 (日)。「飲み仲間」堀口堯人選。『有』にあり。  
 一二七八 菜の花句会。昭和57年3月10日(水)。「はがき」墨  
 作二郎選。『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 一二七九 「川柳塔」平成13年6月号。のらくろは、田河水泡  
 の漫画。昭和6年から昭和16年まで、「少年倶楽部」に連載さ  
 れた。  
 一二八〇 サークル檸檬。平成7年1月8日(日)。「自由吟」互  
 選。  
 一二八一 初出未詳。『愛』『古』にあり。  
 一二八二 「川柳塔」平成9年2月号。  
 一二八三 もくせい川柳会。昭和59年8月20日(月)。「自由吟」  
 黒川紫香選秀句。  
 一二八四 「川柳塔」昭和53年1月号。「敗戦忌」↑「敗北の」。  
 『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 一二八五 「川柳塔」昭和54年10月号。「敗戦日」↑「終戦日」。  
 一二八六の句と共に、「終戦日」を「敗戦日」に変えている。  
 「八月十五日」に対する薫風のとらえ方の変化が窺えて興味深  
 い。『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 一二八六 「川柳塔」昭和54年10月号。「敗戦日」↑「終戦日」。  
 『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 一二八七 初出未詳。『愛』『古』にあり。  
 一二八八 「川柳塔」平成5年5月号。『古』にあり。六一六参  
 照。  
 一二八九 「川柳雑誌」昭和32年6月号。『有』にあり。  
 一二九〇 初出未詳。  
 一二九一 「川柳塔」昭和43年4月号。「肉』『愛』『古』にあり。  
 一二九二 初出未詳。『樽』『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 一二九三 「川柳塔」昭和57年4月号。「愛』『古』『師』『喜』  
 にあり。「川柳塔」昭和58年1月号。「私的一句」にも発表。  
 一二九四 初出未詳。『有』にあり。

一二八九	肺病が癒った時に寿命が来	100	「有情」
一二九〇	蠅叩き欲深い目になっている	46	「乱れ髪」
一二九一	墓があり 急に土あたたかくなる	176	「肉眼」
一二九二	墓の前刻去るままに去らしむる	127	「檸檬」
一二九三	墓の前もとの子一人母一人	260	「愛染」
一二九四	履きかえの足袋だけ持って 女旅	79	「有情」
一二九五	萩椿咲け何事も元通り	311	「花径」
一二九六	吐く息も吸う息もなし 夕桜	185	「肉眼」
一二九七	白菜の悲鳴が妻に聞えたか	258	「愛染」
一二九八	白秋は朱槿のごとし陽のごとし	257	「愛染」
一二九九	白牡丹リーダーよりも雨気を知り	264	「愛染」
一三〇〇	方舟の用意そろそろ社会党	304	「花径」
一三〇一	羽衣を盗られたような風邪を引き	285	「愛染」
一三〇二	葉桜の温泉は花の溶けた色	289	「愛染」
一三〇三	箸紙もいの一番は匠殿	322	「花径」
一三〇四	走る火の行きつくところ屋根の反り	177	「肉眼」
一三〇五	斜に見て天のひとでの大文字	194	「肉眼」
一三〇六	蓮の花は一茎一花 恩師の忌	164	「肉眼」
一三〇七	鯊を釣る鯊のごとくに群がりて	238	「愛染」
一三〇八	職差の一人ひとりが鹿の助	280	「愛染」

- 一二九五 「川柳塔」平成8年9月号。「罹災復興・恩人（九十三翁）の新居落成 二句」の前書あり。「咲け」の後、一字空白あり。「句集」では、「罹災復興・恩人の新居落成」の前書。「句集」に未収録の一句は（元通りならぬあり 老婦人の遺影）。前書の「恩人」は、武田義章博士。四五二参照。
- 一二九六 「川柳塔」昭和44年6月号。「なし」の後、一字空白あり。「肉」「愛」「古」にあり。補注一七三六参照。
- 一二九七 菜の花句会。昭和56年4月10日（金）。「野菜」土田欣之選。「愛」「古」にあり。
- 一二九八 「川柳塔」昭和56年6月号。「愛」「古」にあり。句集には「柳川にて」の前書あり。白秋は明治44年に、詩集「思ひ出」を刊行。その中に、作品「朱槿のかけ」がある。同年、文芸誌「朱槿」を発行。
- 一二九九 「川柳塔」昭和58年5月号。「リーダーよりも」↑「リーダーよりも」。「もりも」の「も」は誤植。「愛」「古」にあり。
- 一三〇〇 「川柳塔」平成6年12月号。平成6年、社会党の村山富市は、首相に就任するや安保条約肯定、原発肯定、非武装中立の放棄を宣言した。翌年の参議院選挙では、71の議席が37に減るといふ大敗を喫した。
- 一三〇一 「川柳塔」平成元年12月号。「古」にあり。
- 一三〇二 「川柳塔あおもり」4号（平成2年11月）。「古」にあり。
- 一三〇三 「川柳塔」平成10年1月号。
- 一三〇四 「川柳塔」昭和43年5月号。「お水取り 二句」の前書あり。「走る火の」↑「火の走る」。「肉」にあり。句集も同じ前書。この句の前が四一九。
- 一三〇五 「川柳塔」昭和45年10月号。「肉」にあり。
- 一三〇六 「川柳塔」昭和41年8月号。「肉」「愛」「古」にあり。
- 一三〇七 「川柳塔」昭和53年11月号。「愛」「古」にあり。
- 一三〇八 「川柳塔」昭和63年5月号。「鹿野城山神社祭礼」の前書あり。「古」にあり。句集も同じ前書。5月号に発表した〈天を仰ぐは星の幸を受けるべく（獅子舞）〉（地に臥すは眠るにあらず風を聞き）（鷹匠の稚児にして鷹も眼のやさし）の三句は、句集未収録。鹿野の幸盛寺は、「願はくは我に七難八苦を與へ給へ」で有名な山中鹿之助の菩提寺。紺屋町の職差（武者行列）は、鎧武者が右手に竹筒を持ち、地面をこすりながら肅々と進む、という。
- 一三〇九 三井が丘川柳会。昭和52年8月21日（日）。「はだか」軸吟。一〇五八参照。



一三二九	花言葉忘恩もある不死もある	2 2 3	「愛染」
一三三〇	花御所を柿と知りしは玲瓏下	3 0 4	「花径」
一三三一	鼻先をつんつん歩く好きな人	1 6 1	「肉眼」
一三三二	花つけて白鳥の首シクラメン	2 2 0	「愛染」
一三三三	花の絵の鍋で魚が焦げている	2 5 8	「愛染」
一三三四	花の宴家康ひとり目をつむり	2 3 9	「愛染」
一三三五	花の香を嗅ぐ顔をして接吻し	7 9	「有情」
一三三六	花の散る今日一日は物言うな	2 5 6	「愛染」
一三三七	花の墓 大佐渡小佐渡並走す	1 8 1	「肉眼」
一三三八	花火爆ぜ微塵地獄にいるふたり	2 2 5	「愛染」
一三三九	花嫁に牟婁の海山弥朗ら	2 3 8	「愛染」
一三四〇	花よりも紅葉に似合う紺のれん	2 6 7	「愛染」
一三四一	羽根ペンで書きし嘗ての文学よ	1 3 8	「檸檬」
一三四二	母親を呼んでいる子へ 祖母が来る	1 1 8	「有情」
一三四三	母がくる予感やつぱり母がくる	3 6	「乱れ髪」
一三四四	母と来てお伽話の花の色	1 7 1	「肉眼」
一三四五	母と児が母と娘になる写真帖	3 3 9	「花径」
一三四六	母刀自の在せし頃の御御御汁	3 4 5	「花径」
一三四七	母に似てこの娘も百貨店が好き	8 3	「有情」
一三四八	母の顔安楽椅子の観世音	2 5 7	「愛染」

畔」昭和49年2月24日(日)。「白鳥」大野風柳選。(白鳥の視野に一つの火気もなし)も入選している。「川柳塔」昭和49年4月号にも発表。「愛』『古』にあり。同号「柳界展望」に、「二月二日の柳都川柳社の白鳥を観る句会の選者として出席。昼の月瓢湖に映る力なし―薫風」とある。句集では、一四三八、一三三二、一六九九の順に収録。柳都同人山田加勢夫宛葉書(消印は、昭和49年3月16日)に、「白鳥の会に参加しまして、仲々たのしかつたです。風太郎さんのお宅での歓談も、あんな雰囲気であると時の経つのも忘れてしまいました。あなたが、万博の時とちつとも変わっていらつしやらないのは、川柳の功德かなと思つたりもしました。(後略)」とある。  
 一三三三 菜の花句会。昭和56年6月10日(水)。「鍋」江口度選。「愛』『古』にあり。  
 一三四 初出未詳。「愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 一三五 初出未詳。「有』『檸檬』『愛』にあり。  
 一三三六 「川柳塔」昭和56年5月号。「嗚呼麻生霞乃先生四句」の前書あり。「愛』『古』にあり。句集は、「慙愧かな天を仰ぐも地に伏すも」を収録せず、一四七九、一三八八、この句の順に収録。麻生霞乃は、明治26年2月24日(金)に生まれ、昭和56年3月24日(火)、89歳で死去。  
 一三三七 初出未詳。「肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。句集には「能登から佐渡へ」の前書あり。大佐渡は、佐渡の北部、小佐渡は、南部。八参照。  
 一三三八 「川柳塔」昭和51年1月号。「愛』『古』にあり。  
 一三三九 「川柳塔」昭和53年12月号。「大矢十郎氏息女栄子さんの結婚を祝し」の前書あり。「愛』『古』にあり。句集も同じ前書。  
 一三四〇 初出未詳。「愛』『古』にあり。  
 一三四一 「川柳雑誌」昭和39年1月号。「梅』『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
 一三四二 「川柳雑誌」昭和36年8月号。「有』にあり。  
 一三四三 初出未詳。  
 一三四四 「川柳塔」昭和42年10月号。「乗鞍岳で」二句「の前書あり。「肉』『愛』『古』にあり。「肉』句集は「乗鞍二句」で、この句の後に一九七七。「愛』『古』では「乗鞍」の前書で一九七七(雲海)は未収録。補注一六六七参照。  
 一三四五 「川柳塔」平成13年7月号。「喜』にあり。  
 一三四六 「朝日新聞」夕刊。平成11年2月26日(金)。「師弟」7句の2句目。「喜』にあり。補注二三参照。→補注。  
 一三四七 「川柳雑誌」昭和34年10月号。各地柳壇「西宮支部」

一三四九	母の手をひいて砂丘の狐雨	1	3	5	「檸檬」
一三五〇	亡母の闇黒い塚から酒を酌ぐ	2	6	5	「愛染」
一三五一	亡母の闇この世は雨が降っています	2	6	0	「愛染」
一三五二	亡母の闇は鬱金の闇か夢に見たし	2	5	9	「愛染」
一三五三	母一人子一人秋の灯を分かち	2	3	2	「愛染」
一三五四	母病むに紅白の別花に多し	2	5	9	「愛染」
一三五五	ハラキリ由紀夫へ 雪降らず 花散らず	1	9	7	「肉眼」
一三五六	春惜しみおりひと言で事が足り	1	2	5	「檸檬」
一三五七	春風の帷に吹くとき懸想かな	1	2	5	「檸檬」
一三五八	遙かなる島 従えて句碑の贅	3	3	3	「乱れ髪」
一三五九	春孤独眼鏡はずせばなお孤独	1	2	5	「檸檬」
一三六〇	新春の灯と悪の灯へ十二月来る	4	1	1	「乱れ髪」
一三六一	春らしいものに紋白蝶の紋	9	4	4	「有情」
一三六二	晴着着て出たがやつぱり立話	1	9	1	「乱れ髪」
一三六三	ハワイ行GOのランプか月が出る	2	2	6	「愛染」
一三六四	ハワイまで星を閲して来たりけり	2	2	6	「愛染」
一三六五	ハンカチを黙って渡す妻の汗	2	4	5	「愛染」
一三六六	半月のころんとありぬ 憂国忌	2	0	3	「肉眼」
一三六七	反葬は雪の巔から李花の里	2	0	7	「肉眼」
一三六八	半時を一声もなし桔梗寺	3	3	1	「花径」

にあり。「母に似て」↑「ママに似て」。「有」にあり。  
一三四八 初出未詳。『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
一三四九 「川柳雑誌」昭和39年5月号。『檸檬』『愛』『古』『喜』にあり。『檸檬』『愛』『古』『喜』の前身は、「鳥取砂丘一句」。「古」は「鳥取砂丘」。「喜」では、「一五二」(東郷湖夕日ところを得て沈む)を並べて、「鳥取旅情 二句」の前身。  
一三五〇 「川柳塔」昭和58年11月号。「亡母三周忌」の前身あり。『愛』『古』にあり。句集も同じ前身。  
一三五一 「川柳塔」昭和57年4月号。「降っています」↑「降つてます」。「愛』『古』『師』『喜』にあり。↓補注。  
一三五二 「川柳塔」昭和57年4月号。『愛』『古』にあり。  
一三五三 「川柳塔」昭和52年11月号。『愛』『古』にあり。  
一三五四 「川柳塔」昭和56年10月号。『愛』『古』にあり。  
一三五五 「川柳ジャーナル」昭和46年2月号。「水鏡集」時実新子選巻頭。「霜月悲鳴」の前身あり。『肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。句集では「霜月悲鳴」の前身。七二五参照。  
一三五六 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。  
一三五七 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。帷は、とぼりたれぎぬ。  
一三五八 「川柳塔みちのく」13号。投句葉書の消印は、平成5年9月3日。  
一三五九 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。  
一三六〇 初出未詳。  
一三六一 初出未詳。『有』にあり。  
一三六二 初出未詳。  
一三六三 「川柳塔」昭和51年3月号。「川柳塔同人ハワイ吟行記」中にあり。『愛』『古』にあり。句集には「ハワイ紀行五句」の前身あり。補注二〇五参照。  
一三六四 「川柳塔」昭和51年3月号。「川柳塔同人ハワイ吟行記」中にあり。1月21日(水)に、ハワイに到着。『愛』『古』にあり。句集には「ハワイ紀行 五句」の前身あり。補注二〇五参照。  
一三六五 阿波おどり川柳大会(関西汽船「すみれ丸」船中にて)。昭和54年8月15日(水)。「汗」軸吟。『愛』『古』『師』にあり。  
一三六六 「川柳塔」昭和47年1月号。『肉』にあり。憂国忌は、三島由紀夫忌。  
一三六七 「川柳塔」昭和47年6月号。『肉』『愛』『古』にあり。  
一三六八 「川柳塔」平成12年9月号。「廬山寺」の前身あり。『句集』の前身には「四句」の但書。四二六参照。

- 一三六九 般若湯師の槍さびが聞こえそう
- 一三七〇 半白のオールバックに知情意が
- 一三七一 バーで会うだけの友なりバーで会う
- 一三七二 バンガローから朝刊を読みにくる
- 一三七三 万愚節万民を愚に消費税
- 一三七四 番号に悲喜ある日なり風の中
- 一三七五 万歳万歳 淋しさの残りける
- 一三七六 晩秋に水は一番重くなる
- 一三七七 晩年という日のなかりける男
- 一三七八 パチンコの玉にも愚弄されて去に
- 一三七九 パチンコ屋大人は大志抱かざる
- 一三八〇 パトロンが替わり 香水が替わり
- 一三八一 パントマイムの妻に止めを刺されたり

【ひ】

- 一三八二 ひいばあさまからの指輪と譲られる
- 一三八三 光堂 大阪地獄から来しに
- 一三八四 灯がついてからは落ち着く女客
- 一三八五 引金をひく一瞬が恋にあり
- 一三八六 抽斗に転がるものが一つある
- 一三八七 抽斗の亡父の眼鏡は捨てられず

278	「愛染」
150	「檸檬」
42	「乱れ髪」
108	「有情」
315	「花径」
272	「愛染」
73	「有情」
225	「愛染」
198	「肉眼」
100	「有情」
139	「檸檬」
81	「有情」
234	「愛染」
19	「乱れ髪」
193	「肉眼」
84	「有情」
77	「有情」
50	「乱れ髪」
50	「乱れ髪」

一三六九 「川柳塔」昭和62年8月号。「高野山にて」の前書あり。『古』にあり。句集には「三句」の但書。七四四参照。

一三七〇 「川柳雑誌」昭和32年9月号。「工藤甲吉氏へ」の前書あり。『檸檬』『愛』『古』にあり。句集も同じ前書。「東北行七句」の最後の句。補注四四三参照。

一三七二 初出未詳。

一三七三 川柳雑誌社本社句会。昭和33年6月7日(土)。「朝刊」麻生路郎選。『有』にあり。

一三七四 「川柳塔」平成9年5月号。

一三七五 「川柳塔」昭和60年2月17日(日)。「自由吟」軸吟。「風の中」↑「風は春」。『愛』『古』にあり。

一三七六 「川柳雑誌」昭和37年5月号。『有』『檸檬』『愛』『古』にあり。

一三七七 「川柳塔」昭和50年12月号。同年10月11日(土)、ふあうすと本社句会で(晩秋は水が一番落ちていっている)が入選している。『愛』『古』にあり。

一三七八 「川柳雑誌」昭和46年3月号。「住田乱耽さんを悼む」の前書あり。『肉』にあり。句集では「悼 住田乱耽氏」の前書。↓補注。

一三七九 「川柳雑誌」昭和33年5月号。『有』『檸檬』にあり。

一三八〇 「川柳雑誌」昭和38年11月号。『檸檬』『愛』『古』にあり。

一三八一 「川柳雑誌」昭和36年10月号。『有』『檸檬』『愛』にあり。

一三八二 「川柳塔」昭和53年4月号。「パントマイムの妻に」↑「パントマイム妻に」。『愛』『古』にあり。

一三八三 初出未詳。

一三八四 「川柳塔」昭和45年9月号。「平泉金色堂」の前書あり。『肉』『愛』『古』にあり。句集には前書なし。光堂は、中尊寺金色堂。(五月雨の降りのことしてや光堂)は、芭蕉の有名な句。「川柳塔」昭和45年8月号「柳界展望」に、「青森県川柳大会の帰途、生々庵主幹と別れて盛岡で下車、平泉から松島の名所を探訪した。」とある。補注五一〇参照。

一三八五 初出未詳。『有』にあり。

一三八六 「川柳雑誌」昭和35年5月号。『有』『檸檬』にあり。

一三八七 三井が丘川柳会。昭和51年12月19日(日)。「抽斗」高杉鬼遊選。

一三八八 初出は「一三八六と同じ」。

一三八九 「川柳塔」昭和56年5月号。「嗚呼霞乃先生四句」の前書あり。『愛』『古』にあり。句集には「三句」の但書。

- 一三八八 髭を剃る千本の木を薙ぎ倒す
- 一三八九 膝に手を置いて井上八千代かな
- 一三九〇 ひた走るアベベ仏陀の相に似る
- 一三九一 日だまりに似て灯だまりが秋にあり
- 一三九二 七月の奢りを極む水の精
- 一三九三 七月の蜂起の空となりけり
- 一三九四 七月よ煙草の輪にも力あり
- 一三九五 七五三晴着きた手をつながせず
- 一三九六 七十と言う青春はネクタイに
- 一三九七 七十と三の恋指相撲
- 一三九八 七面鳥 その風格が聖者めき
- 一三九九 柩（柩） 出た跡形もなし 療養所
- 一四〇〇 筆勢が良うて無心の字に向かず
- 一四〇一 一口もきかずに化粧出来上り
- 一四〇二 ヒトゲノム金の盲者に酒の猛者
- 一四〇三 人妻と濁りにしまぬにこり酒
- 一四〇四 人妻よ 海 中の石見えながら
- 一四〇五 人の世というは石にも表裏
- 一四〇六 人の世や 嗚呼にはじまる広辞苑
- 一四〇七 人の世や 棺に打ち込む釘もあり

2	5	6	「愛染」
1	3	4	「檸檬」
1	3	0	「檸檬」
2	6	8	「愛染」
1	4	9	「檸檬」
2	0	7	「肉眼」
2	3	1	「愛染」
3	0	9	「花径」
4	8		「乱れ髪」
2	7	6	「愛染」
9	5		「有情」
1	8	3	「肉眼」
1	1	1	「有情」
8	0		「有情」
3	3	8	「花径」
2	6	1	「愛染」
2	0	9	「肉眼」
3	4	1	「花径」
1	8	7	「肉眼」
1	2	0	「有情」

- 一三三六参照。
- 一三八九 「川柳雑誌」昭和39年6月号。「檸檬」「愛」「古」「師」
- 「喜」にあり。井上八千代は、明治38年5月14日（日）に生まれ、平成16年3月19日（金）、98歳で死去。京舞の第一人者だった。昭和30年人間国宝。
- 一三九〇 「川柳雑誌」昭和39年12月号。「オリンピック」の前書あり。「檸檬」「愛」「古」「師」「喜」にあり。句集では「東京オリンピック」の前書。
- 一三九一 西宮北口句会。昭和56年9月4日（金）。「灯」室田千尋選秀句。「愛」「古」にあり。
- 一三九二 「川柳雑誌」昭和37年9月号。「十和田湖二句」の前書あり。「奢り」↑「奢」。「檸檬」にあり。句集では「三句」の但書。「東北行 七句」の三句目。補注四四三参照。
- 一三九三 「川柳塔」昭和47年8月号。「肉」「愛」「古」「喜」にあり。
- 一三九四 「川柳塔」昭和52年10月号。「愛」「古」にあり。
- 一三九五 「川柳塔」平成7年12月号。
- 一三九六 三井が丘川柳会。昭和50年5月17日（土）。「ネクタイ」互選。「青春は」↑「青春が」。
- 一三九七 「川柳塔」昭和62年2月号。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品25句「老司祭」の4句目。「古」にあり。
- 一三九八 「川柳雑誌」昭和34年2月号。各地柳壇「にしなり支部句会」にあり。「七面鳥」後藤梅志選。「有」にあり。
- 一三九九 「川柳塔」昭和44年1月号。「嗚呼清原祐志君」の前書あり。「柩」↑「棺」。「跡形もなし」↑「跡形もなき」。「肉」にあり。四四九参照。↓補注。
- 一四〇〇 「川柳雑誌」昭和32年3月号。「近作柳樽」欄。「有」にあり。
- 一四〇一 「川柳雑誌」昭和33年7月号。「有」にあり。
- 一四〇二 「川柳塔」平成13年5月号。
- 一四〇三 「川柳塔」昭和57年5月号。「愛」「古」にあり。
- 一四〇四 「川柳塔」昭和47年8月号。「人妻よ」↑「人妻の」。「肉」にあり。
- 一四〇五 サークル檸檬。平成5年10月10日（日）。「裏」吉田あずき選。
- 一四〇六 「川柳塔」昭和44年12月号。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。
- 一四〇七 初出未詳。「有」「檸檬」「愛」「古」にあり。
- 一四〇八 「川柳塔」昭和44年12月号。「聖堂にして」↑「聖堂

- 一四〇八 一人去り一人去る 聖堂にして
- 一四〇九 一人旅 町の祭に行き合わせ
- 一四一〇 一人旅 わかさぎ釣りの氷穴親し
- 一四一一 独り身に 魚の骨はさびしすぎ
- 一四一二 ひとよりよりふたりにこわき屏風波
- 一四一三 人を待つ かたわらの花嗅ぎもして
- 一四一四 日向ぼこ梅干の種口にあり
- 一四一五 日向ぼこ病衣は襦袢になり易し
- 一四一六 難の酒湯呑みに注ぐは無法者
- 一四一七 火に熔けぬものなし 五島慶太の計
- 一四一八 火の消えた炬燵の上の置手紙
- 一四一九 火の粉降る闇 豊類の奈良乙女
- 一四二〇 日の高さ悪事悪事とならぬなり
- 一四二一 陽は高し青鞥もよし花もよし
- 一四二二 火は揺れただけ一匹の虫が死に
- 一四二三 日日恐懼昭和とともに生きてきて
- 一四二四 悲報来 金魚 鮎 鯉 水の底
- 一四二五 緋牡丹に負けぬ天晴れ孫娘
- 一四二六 ひまわりのリズムコスモスのリズム
- 一四二七 向日葵も国衰えて花小さし

1 6 0 「肉眼」  
 1 1 6 「有情」  
 1 6 8 「肉眼」  
 1 1 7 「有情」  
 2 0 5 「肉眼」  
 1 6 9 「肉眼」  
 1 3 9 「檸檬」  
 1 5 2 「檸檬」  
 3 2 9 「花径」  
 1 1 4 「有情」  
 1 4 5 「檸檬」  
 1 7 7 「肉眼」  
 2 1 9 「愛染」  
 1 5 「乱れ髪」  
 4 3 「乱れ髪」  
 2 8 0 「愛染」  
 1 9 7 「肉眼」  
 3 0 6 「花径」  
 2 1 「乱れ髪」  
 3 5 「乱れ髪」

- 一四一九 「川柳塔」昭和43年5月号。「お水取り(二句)」の前書あり。「肉」にあり。句集も同じ前書。一三〇四参照。
  - 一四二〇 「川柳塔」昭和49年1月号。「愛」「古」にあり。
  - 一四二一 「川柳塔」初出未詳。
  - 一四二二 「川柳塔」昭和63年11月号。昭和64年(平成元年)の年賀状の句。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品25句「老司祭」の16句目。「古」にあり。
  - 一四二四 初出未詳。「肉」にあり。句集には「嗚呼 清水白柳氏」の前書あり。九八〇参照。
  - 一四二五 「川柳塔」平成7年6月号。「長谷寺」の前書あり。「句集」も同じ前書。長谷寺は、奈良県桜井市初瀬にある真言宗の寺。牡丹の名所としても知られる。
  - 一四二六 初出未詳。
  - 一四二七 「川柳塔みちのく」41号(二〇〇〇年一月)。「日向葵」となっているが、誤植。投句葉書の消印は、平成12年8月14日。
  - 一四二八 初出未詳。
  - 一四二九 「川柳塔」昭和54年10月号。各地柳壇「どんぐり川柳会」にあり。「百匹に」↑「十四に」。「愛」「古」にあり。
  - 一四三〇 「川柳塔」昭和52年10月号。「愛」「古」にあり。
- に來て夫婦。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。井上信子が夫剣花坊(1870~1934)の死に際して詠んだ句に、(一人去り二人去り佛と二人)がある。
- 一四〇九 初出未詳。「有」「檸檬」にあり。
- 一四一〇 初出未詳。「肉」にあり。「川柳塔」昭和42年5月号「柳界展望」によると、わかさぎ釣りをしたのは3月20日(月)。補注七一〇参照。
- 一四一一 「川柳雑誌」昭和35年6月号。「有」にあり。
- 一四一二 「川柳塔」昭和47年6月号。「肉」にあり。
- 一四一三 「川柳塔」昭和42年6月号。「肉」「愛」「古」にあり。
- 一四一四 「川柳雑誌」昭和39年1月号。「檸檬」「愛」「古」「喜」にあり。
- 一四一五 初出未詳。「檸檬」「愛」「古」にあり。
- 一四一六 「川柳塔」平成12年5月号。
- 一四一七 「川柳雑誌」昭和34年10月号。「有」にあり。「五島慶太」は、明治15年4月18日に生まれ、昭和34年8月14日に77歳で死去。東急グループの創設者。強引な企業買収を行なったので、「強盗慶太」とも呼ばれた。
- 一四一八 「川柳雑誌」昭和38年2月号。「檸檬」「愛」「古」にあり。

一四二八	百人一首七十歳もお年頃	3	3	4	「花径」
一四二九	百匹になると鰻も修羅になる	2	4	6	「愛染」
一四三〇	氷柱花電話ボックスには女	2	3	1	「愛染」
一四三一	氷柱に待す 正装のパーテンダー	1	5	8	「肉眼」
一四三二	氷囊の下から見て好きな人	2	2	5	「愛染」
一四三三	豹を着て豹の匂いのする女	2	6	3	「愛染」
一四三四	昼の酒恩師はいつまでも恩師	3	3	5	「花径」
一四三五	昼の酒遠く 雷鳴っている	2	4	0	「愛染」
一四三六	昼の月 お前も二日酔なのか	6	9		「有情」
一四三七	昼の月十三の砂山海晦し	2	7	9	「愛染」
一四三八	昼の月瓢湖に映る力なし	2	2	0	「愛染」
一四三九	昼の闇 青蓮院も知恩院も	3	2	0	「花径」
一四四〇	昼は花を夜は花火を見たふたり	2	4	4	「愛染」
一四四一	鱧だけを動かしている河豚の顔	2	6	0	「愛染」
一四四二	灯を消せば彌勒女菩薩糸編む	1	2	8	「檸檬」
一四四三	美人とはいいな 眼鏡に個性が出	8	2		「有情」
一四四四	病院の丑満刻を尿捨てに	1	8	9	「肉眼」
一四四五	病院の金魚寡多なく退院す	1	8	9	「肉眼」
一四四六	病院の風呂から藤の棚が見え	1	0	0	「有情」
一四四七	病妻に花買う晩年の明かり	2	9	5	「愛染」

- 一四三一 「川柳塔」昭和40年11月号。『肉』にあり。  
一四三二 「川柳塔」昭和50年12月号。『愛』『古』『師』『喜』にあり。  
一四三三 「川柳塔」昭和58年4月号。各地柳壇「菜の花句会」にあり。『愛』『古』にあり。  
一四三四 初出未詳。  
一四三五 初出未詳。『愛』『古』にあり。  
一四三六 「川柳塔」昭和36年1月号。『有』にあり。  
一四三七 「川柳塔」昭和62年10月号。「秋田・青森の旅」の前置あり。『古』にあり。句集には、前置に「四句」の但書。三九二参照。  
一四三八 「川柳塔」昭和49年4月号。『愛』『古』『師』『喜』にあり。瓢湖は、新潟県北蒲原郡水原町にある溜池。白鳥の渡来地として有名。一三三二参照。  
一四三九 「川柳塔」平成9年11月号。「山海友照さんの夫君を悼む」の前置あり。『句集』には前置なし。青蓮院は、京都市東山区粟田口にある天台宗の寺院。最澄開基。知恩院は、同区林下町にある浄土宗総本山の寺院。法然開基。  
一四四〇 「川柳塔」昭和54年7月号。「川柳木馬」創刊号（昭和54年7月発行）にもあり。招待作品「春眠」10句の5句目。補注七六三参照。『愛』『古』にあり。  
一四四一 「川柳塔」昭和57年2月号。各地柳壇「菜の花句会」にあり。『愛』にあり。  
一四四二 「川柳塔」昭和40年1月号。『檸檬』『愛』『古』『師』にあり。  
一四四三 「川柳塔」昭和33年12月号。各地柳壇「にしなり支部句会」にあり。後藤梅志選。『有』にあり。  
一四四四 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。句集には「妻病む」の前置あり。九五参照。  
一四四五 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。句集には「妻病む」の前置あり。九五参照。  
一四四六 初出未詳。『有』『愛』『古』にあり。  
一四四七 「川柳塔」平成10年3月号。『師』にあり。  
一四四八 「川柳塔」昭和45年4月号。『肉』『愛』『古』『師』にあり。句集には「妻再び入院す」の前置あり。一一〇一参照。  
一四四九 「川柳塔」昭和36年11月号。『有』にあり。  
一四五〇 初出未詳。『肉』にあり。句集には「嗚呼 清水白柳氏」の前置あり。九八〇参照。  
一四五一 初出未詳。『有』にあり。

一四四八	病 <small>びょう</small> 妻 <small>さい</small> は少 <small>しょう</small> 女 <small>じよ</small> のようなくくり髪 <small>がみ</small>	1 9 1	「肉眼」
一四四九	病 <small>びょう</small> 室 <small>しつ</small> に林檎 <small>りんご</small> 健 <small>けん</small> 康 <small>こう</small> 色 <small>しよく</small> 過 <small>す</small> ぎる	1 0 0	「有情」
一四五〇	病 <small>びょう</small> 床 <small>しょう</small> に聞 <small>き</small> く計 <small>か</small> へ水 <small>みず</small> を飲 <small>の</small> んですます	1 9 7	「肉眼」
一四五一	病 <small>びょう</small> 人 <small>にん</small> の恋 <small>こい</small> は手紙 <small>てがみ</small> の嵩 <small>かさ</small> を見 <small>み</small> せ	7 8	「有情」
一四五二	病 <small>びょう</small> 人 <small>にん</small> の長 <small>なが</small> い手紙 <small>てがみ</small> も哀 <small>あ</small> れなり	6 4	「有情」
一四五三	ビリの顔 <small>かお</small> もトップの顔 <small>かお</small> も苦 <small>く</small> しそう	1 4 3	「檸檬」
一四五四	風神 <small>ふうじん</small> のたむろしている風 <small>かざ</small> 袋 <small>ぶくろ</small>	1 3 6	「檸檬」
一四五五	風神 <small>ふうじん</small> の袋 <small>ふくろ</small> から出 <small>で</small> た春 <small>はる</small> の風 <small>かぜ</small>	2 9 9	「花径」
一四五六	風神 <small>ふうじん</small> の八坂 <small>やさか</small> の郷 <small>しむ</small> の朱 <small>しゆ</small> の破 <small>は</small> 魔 <small>ま</small> 矢 <small>や</small>	2 8 5	「愛染」
一四五七	風船 <small>ふうせん</small> と魂 <small>たましい</small> だけ <small>だけ</small> は赤 <small>あか</small> がよい	3 4 3	「花径」
一四五八	夫婦 <small>ふうふ</small> にはなれなかつたが冬 <small>ふゆ</small> の旅 <small>たび</small>	2 0 4	「肉眼」
一四五九	笛吹 <small>ふえふ</small> き童子 <small>どうじ</small> 恋 <small>こい</small> ならなくに ならなくに	1 7 8	「肉眼」
一四六〇	深眠 <small>ふかねむ</small> り 母娘 <small>おやこ</small> 相 <small>そう</small> 似 <small>じ</small> のカメオ置 <small>お</small> き	2 1 2	「肉眼」
一四六一	複 <small>ふく</small> 雑 <small>ざつ</small> な世相 <small>せそう</small> とオモチャ屋 <small>や</small> も思 <small>おも</small> い	1 0 0	「有情」
一四六二	福寿草 <small>ふくじゆそう</small> 父子兄弟 <small>ふしきょうだい</small> に似 <small>に</small> たりけり	1 6 0	「肉眼」
一四六三	福寿草 <small>ふくじゆそう</small> 五人家族 <small>ごにんかぞく</small> はこのような	2 8 6	「愛染」
一四六四	袋 <small>ふくろ</small> ごと蜜柑 <small>みかん</small> 食 <small>く</small> う子 <small>こ</small> よ 母 <small>は</small> が病 <small>や</small> み	1 9 1	「肉眼」
一四六五	河豚 <small>ふぐ</small> 食 <small>く</small> うて処女 <small>おとめ</small> 穢 <small>けが</small> れること勿 <small>な</small> れ	2 3 4	「愛染」
一四六六	富士山 <small>ふじさん</small> の藍 <small>あゐ</small> に一 <small>いち</small> 礼 <small>らい</small> してしまう	2 9 4	「愛染」

一四五二 「川柳雑誌」昭和35年12月号。「哀れなり」↑「あわれなり」。「有」『檸檬』にあり。

一四五三 「川柳雑誌」昭和38年5月号。「檸檬」『愛』『古』にあり。

一四五四 初出未詳。「檸檬」『愛』にあり。句集には「別府温泉郷遠望」の前書あり。

一四五五 初出未詳。

一四五六 「川柳塔」平成3年2月号。「風神の」↑「神風の」。

一四五七 サークル檸檬。平成6年6月5日(日)。「風船」田中正坊選。

一四五八 「川柳塔」昭和47年3月号。「肉」『愛』『古』にあり。

一四五九 「川柳塔」昭和43年6月号。「肉」『愛』『古』『喜』にあり。笛吹童子は、昭和28年NHKでラジオドラマ化された。テレビでは、昭和35年NETが放映。明国に留学中、野武士に乗っ取られた丹波国満月城を取り戻そうとする。「ヒヤラーリヒヤラー」で始まる主題歌も有名。

一四六〇 「川柳ジャーナル」昭和48年3月号。招待作品「一兵の生」8句の1句目。「肉」『愛』『古』にあり。

一四六一 大阪市民文化祭第十二回川柳大会(毎日新聞大阪本社講堂)。昭和35年10月2日(日)席題「世相」西尾葉選秀句。

『有』にあり。

一四六二 「川柳塔」昭和41年2月号。「肉」『愛』『古』『師』にあり。

一四六三 「川柳塔」昭和63年1月号。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品25句「老司祭」の12句目。「古」にあり。

一四六四 初出未詳。「肉」『愛』『古』にあり。句集には「妻再び入院す」の前書あり。一一〇一参照。

一四六五 「川柳塔」昭和53年5月号。「愛」にあり。

一四六六 「川柳塔」平成7年9月号。各地柳壇「川柳若葉の会」にあり。「富士山の藍に一礼してしまふ」↑「富士の藍に一礼をしたくなる」。「古」『師』『喜』にあり。「川柳塔」平成8年1月号「私の一句」にも発表。「川柳塔」平成11年4月号の巻頭言「田辺聖子先生」中に、「私がこの句を創ったのは電車の中からではない。同時に嘗て見た横山大観の富士山の小品を思い起こした。晩年の大家の到達した藍の色の澄んだ気韻に圧倒され、芸の力の無限を感じた。」とある。

一四六七 「川柳塔」平成8年12月号。

一四六八 初出未詳。「檸檬」『愛』『古』にあり。

一四六九 初出未詳。「肉」『喜』にあり。

- 一四六七 富士山の往きと復りに違いあり
- 一四六八 富士小さし生みの親をば思い出す
- 一四六九 富士見えていよいよ華麗 食堂車
- 一四七〇 襖絵に龍虎相撃ち春の雨
- 一四七一 不回転スーチーさんの髪の花
- 一四七二 ふたつめの衛星がこれ男の児
- 一四七三 普茶料理 子供はじつとしていない
- 一四七四 復 旧は急 土埃 土埃
- 一四七五 降って来たから止めようという齢になり
- 一四七六 文机に菜根譚を伏せて 留守
- 一四七七 文机に花御所振れば鳴りそうに
- 一四七八 舟歌は最も人を恋う歌か
- 一四七九 計は常にかかるかたちで来る白刃
- 一四八〇 冬の酒 唐竹割りに胃へ落ちる
- 一四八一 冬の酒 蛸の足こそ親しけれ
- 一四八二 冬の雷 石仏七千俯瞰の中
- 一四八三 冬晴れて 見馴れし山も高く見え
- 一四八四 冬牡丹 九死一生かも知れず
- 一四八五 冬夜の凍て 愛恋の書も真理の書も
- 一四八六 フランス語講座 女優の書架にあり

- 3 1 3 「花径」
- 1 4 8 「檸檬」
- 1 6 1 「肉眼」
- 3 1 2 「花径」
- 3 1 3 「花径」
- 3 1 1 「花径」
- 2 1 「乱れ髪」
- 3 0 5 「花径」
- 7 0 「有情」
- 7 1 「有情」
- 3 0 4 「花径」
- 1 7 0 「肉眼」
- 2 5 6 「愛染」
- 3 2 2 「花径」
- 2 0 4 「肉眼」
- 1 7 5 「肉眼」
- 6 5 「有情」
- 2 0 6 「肉眼」
- 1 8 4 「肉眼」
- 1 1 3 「有情」

一四七〇 「川柳塔」平成8年10月号。  
 一四七一 「川柳塔」平成8年11月号。スーチーは、一九四五年、ビルマのラングーン生まれ。「ビルマ独立の父」アウンサン將軍の娘。一九九一年に、ノーベル平和賞受賞。一九八九年から一九九五年まで自宅軟禁状態。一九九六年5月、国民民主連盟が党大会を計画するが、軍政は弾圧策をとる。  
 一四七二 「川柳塔」平成8年8月号。「長男に長男誕生 二句」の前書あり。「これ」の後、一字空白あり。『句集』も同じ前書。一一四四参照。  
 一四七三 初出未詳。  
 一四七四 「川柳塔」平成7年4月号。「急」の後、一字空白あり。『句集』には、「阪神淡路大震災 四句」の前書あり。八〇四参照。  
 一四七五 「川柳雑誌」昭和32年8月号。「有」にあり。  
 一四七六 「川柳雑誌」昭和32年12月号。「有」「檸檬」「愛」「古」「喜」にあり。『菜根譚』は、明の供自誠の著。書名は貧困に安んじて人生を送れば困ることはない、という意味の「菜根を咬み得れば百事なすべし」からとった。人生の指南書として各界の人に読まれる。  
 一四七七 「川柳塔」平成7年1月号。花御所は、補注一三三〇参照。  
 一四七八 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。  
 一四七九 「川柳塔」昭和56年5月号。「嗚呼 麻生霞乃先生 四句」の前書あり。『愛』『古』にあり。句集では「三句」の但書。一三三六参照。  
 一四八〇 「川柳塔」平成10年1月号。「喜」にあり。  
 一四八一 「川柳塔」昭和47年1月号。『肉』『愛』『古』にあり。  
 一四八二 「川柳塔」昭和43年3月号。『肉』にあり。  
 一四八三 「川柳雑誌」昭和35年3月号。「1月13日二女幸誕生」の前書あり。『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。『愛』『古』『師』は「二女」を「次女」と表記。『喜』のみ日付がなく、「二女幸誕生二句」の前書で、初出未詳の（あかつきの光を得たり子と蕃薇と）も収録。「川柳雑誌」昭和35年2月号「柳界展望」に、「二月十三日（水曜―編者注）次女出生 幸（こう）と命名した。」とある。同39年1月号「柳界展望」に、「次女幸さんの作品が豊中市の第七回小中児童児童画展幼稚園児の部に展覧され、三才児の出品は唯一人のこととして大いに親馬鹿ぶりを発揮された。」とある。補注四五参照。  
 一四八四 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。  
 一四八五 「川柳塔」昭和44年3月号。『肉』『愛』『古』にあり。

一四八七	ふり返る道来た道のようでないし	4	0	「乱れ髪」
一四八八	振り出しに戻る小さな愛を得て	5	4	「乱れ髪」
一四八九	古切手失恋の日も遠くなり	4	8	「乱れ髪」
一四九〇	ふる里に四季霧まとう大樹あり	2	3	「乱れ髪」
一四九一	ふる里の水平線は志	3	3	「花径」
一四九二	ふる里へいのちが還る句碑一つ	3	4	「花径」
一四九三	故郷よ松よりありがたき雑木	3	8	「乱れ髪」
一四九四	故郷を出た日もこんな雲が浮き	1	0	「有情」
一四九五	古手紙この世のことはこのような	2	5	「愛染」
一四九六	降る雪に貧しきものが先ず隠れ	1	4	「檸檬」
一四九七	ふんぎりの一番おそいお金持ち	2	1	「乱れ髪」
一四九八	噴水と相似の緑柳なり	1	9	「肉眼」
一四九九	噴水の形変らず恋終る	1	7	「肉眼」
一五〇〇	不器用な猫だ また骨立でている	9	4	「有情」
一五〇一	ぶち当たれぶち当たれ音小気味よき	2	8	「愛染」
一五〇二	仏手柑ひとつ新年の文机に	2	2	「愛染」
一五〇三	仏像を恋うるがごとき恋となり	1	7	「肉眼」
一五〇四	仏壇に桃がはにかむ宣介忌	3	6	「乱れ髪」
一五〇五	葡萄酒べ終ると焼跡のような	2	4	「愛染」
一五〇六	文相の薔薇の微笑もしかと受け	3	4	「花径」

一四八六 初出未詳。「有」「愛」「古」にあり。  
一四八七 初出未詳。  
一四八八 三井が丘川柳会。昭和55年1月20日(日)。「振り出し」軸吟。  
一四八九 三井が丘川柳会。昭和50年4月29日(火)。「切手」羽原静歩選。  
一四九〇 第28回川柳塔きやらぼく忘年句会。平成4年12月6日(日)。「霧」軸吟。「大樹あり」↑「やさしい樹」。「古」にあり。  
一四九一 初出未詳。「喜」にあり。  
一四九二 初出未詳。  
一四九三 西宮北口句会。昭和60年1月14日(月)。「自由吟」高杉鬼遊選。  
一四九四 「川柳雑誌」昭和33年3月号。「有」にあり。  
一四九五 「川柳展望」創刊号(昭和50年5月1日発行)。特別作品「鎮魂」25句の4句目。「愛」「古」にあり。  
一四九六 「川柳雑誌」昭和38年3月号。「檸檬」「愛」「古」「師」「喜」にあり。補注一六七参照。  
一四九七 「川柳塔」平成9年8月号。各地柳壇「ほたる川柳同好会」にあり。  
一四九八 「川柳塔」昭和45年6月号。「肉」「愛」「古」にあり。「緑」の後、一字空白あり。  
一四九九 「川柳塔」昭和42年12月号。「肉」「愛」「古」にあり。初出未詳。「有」にあり。  
一五〇〇 初出未詳。「有」にあり。九参照。  
一五〇一 「川柳塔」平成2年6月号。「古」にあり。九参照。  
一五〇二 「川柳塔」昭和52年1月号。「愛」「古」にあり。  
一五〇三 「川柳塔」昭和43年6月号。「肉」「愛」「古」にあり。  
一五〇四 「川柳塔」昭和55年10月号。「八月十九日」の前書あり。「仏壇に桃がはにかむ」↑「仏壇の桃のはにかみ」。「句集」は前書なし。↓補注。  
一五〇五 「川柳塔」昭和53年12月号。「愛」「古」にあり。  
一五〇六 「川柳塔」平成13年7月号。「喜」にあり。「句集」では、「春の寂熱で木杯一組台付賜与さる 五句」の前書のある5句目で、「遠山敦子文部科学大臣」の前書あり。7月号の「風薫る日」の文中に、「国立劇場では木杯を受ける代表として舞台上に上り、親しく遠山敦子文部科学相から賞状を頂くことが出来たのは感激だった。(略)大臣は一番末席の私に一番やさしいおらかな笑顔を下さった。私はそのほほえみに一瞬包み込まれたように打たれた。こんな笑顔がこの世にある。

一五〇七 プラトニッククラブいとおしや桔梗寺  
 一五〇八 プリンスの恋 美しく父子二代

【へ】

一五〇九 平成の荒ぶる年の長刀鉾  
 一五一〇 平成の埴輪マモルの宇宙服  
 一五一一 平成の補陀落渡海ムルロアへ  
 一五一二 臍の緒がまた生えてくる子の受験  
 一五一三 臍放り出して社 長隙がなし  
 一五一四 絲瓜のあおほどの青なし 祖父の愛  
 一五一五 ヘッセ詩集の活字整然鱗雲  
 一五一六 蛇が皮を脱ぐようにまた離婚した  
 一五一七 へらへらと泳ぐ魚に似た汚職  
 一五一八 ヘルメット挙げ雄叫びや勝鬨や  
 一五一九 ヘルメット着けて一弾頭となる  
 一五二〇 遍路杖納めセールスマンの足  
 一五二一 別居して以来 物質主義となり  
 一五二二 別荘は犬小屋だけが焼け残り  
 一五二三 ベッドから落ちたを父はひたかくし  
 一五二四 ベトナム遠し 子のピストルに斃れる真似  
 一五二五 紅冴えて花嫁化粧にはあらず

3 3 0	「花径」
1 9	「乱れ髪」
3 0 7	「花径」
3 3 3	「花径」
3 0 7	「花径」
2 2 0	「愛染」
2 3 1	「愛染」
1 6 5	「肉眼」
1 3 0	「檸檬」
8 1	「有情」
2 1 9	「愛染」
2 8 3	「愛染」
2 8 3	「愛染」
2 1 9	「愛染」
2 8 3	「愛染」
2 1 9	「愛染」
1 1 1	「有情」
1 0 7	「有情」
9 3	「有情」
1 6 8	「肉眼」
2 7 8	「愛染」

私のこれからの生き方に大きい示唆を受けたように感じた。」とある。三〇八参照。

一五〇七 「川柳塔」平成12年9月号。「蘆山寺」の前書あり。  
 『句集』では「四句」の但書。四二六参照。  
 一五〇八 「川柳塔」平成5年3月号。各地柳壇「ほたる川柳同好会」にあり。  
 一五〇九 もくせい川柳会。平成7年7月17日(月)。「自由吟」軸吟。「川柳塔」平成7年9月号にも発表。「古」にあり。  
 一五一〇 「俳句現代」平成12年6月1日発行。「タツノオトシゴの家」10句の9句目。「喜」にあり。↓補注。  
 一五一一 「川柳塔」平成7年9月号。「仏・核実験」の前書あり。『句集』では「仏核実験」の前書。↓補注。  
 一五一二 「川柳塔」昭和49年3月号。「愛」「古」にあり。  
 一五一三 川柳塔本社句会。昭和52年9月7日(水)。「隙」大坂形水選。「愛」「古」にあり。  
 一五一四 ふあうすと本社主催・時の川柳社共賛「初代川柳忌物故川柳家慰霊句会。昭和41年9月23日(金)。「偲ぶ」湯川銀界選。「あおほどの青なし」↑「青ほど青なし」。「肉」「愛」「古」にあり。  
 一五一五 初出未詳。「檸檬」にあり。  
 一五一六 「川柳雑誌」昭和36年10月号。「有」「愛」にあり。  
 一五一七 「川柳塔」昭和49年2月号。各地柳壇「八尾菜の花句会」にあり。『愛』にあり。  
 一五一八 初出未詳。「古」にあり。九参照。  
 一五一九 「川柳塔」平成2年6月号『古』『師』にあり。『師』には「アメリカンフットボール」の前書があり、この句のみ収録。九参照。  
 一五二〇 「川柳塔」昭和48年11月号。「愛」「古」にあり。↓補注。  
 一五二一 初出未詳。「川柳雑誌」昭和37年7月号。各地柳壇「阿倍野支部」豆秋忌句会に、(別居以後目にもみせてやる気なり)の句あり。『有』にあり。  
 一五二二 「川柳雑誌」昭和31年6月号。「近作柳樽」欄。『有』にあり。  
 一五二三 初出未詳。「有」にあり。  
 一五二四 「川柳塔」昭和42年2月号。「肉」「愛」「古」にあり。ベトナム戦争は、昭和35年初頭から始まり、同50年4月30日(水)まで続いた。昭和40年4月から、アメリカ軍B52による北爆開始。同41年12月、初のクリスマス休戦。  
 一五二五 「川柳塔」昭和62年7月号。「義妹の死」の前書あり。

- 一五二六 紅椿墜とすや怒濤はばたけり
- 一五二七 紅椿 雪を解かしていたりけり
- 一五二八 紅の爪枯山水の枯れること
- 一五二九 紅薔薇は壺に剩れど血の足らぬ
- 一五三〇 紅唇もまた光りに光る綿帽子
- 一五三一 ベルリンを伯林と書き父恋し
- 一五三二 ペレー帽着て看板屋夢を持ち
- 一五三三 弁当の大きい順に朝を出る
- 一五三四 ペディキュアの足を仏足頂礼す
- 一五三五 ペンほどに重からずまた軽からず
- 一五三六 ペン持った父へ無言でお茶を置く

【ほ】

- 一五三七 法悦にあらざるはなし仕舞風呂
- 一五三八 豊頬のひきめかぎばな孫娘
- 一五三九 咆哮もあくびも見事虎のひげ
- 一五四〇 飽食の国へ来て風腐るなり
- 一五四一 ほおずきの飛び出したようブチトマト
- 一五四二 鬼灯よわが七才に恋ありき
- 一五四三 頬杖もつつかい棒よ秋の雨
- 一五四四 ホームバー 子なき夫婦が赤を着て

1 8 4	「肉眼」
2 0 5	「肉眼」
2 9 0	「愛染」
1 8 9	「肉眼」
2 6 1	「愛染」
3 3 5	「花径」
1 1 1	「有情」
1 1 0	「有情」
2 1 9	「愛染」
3 0	「乱れ髪」
2 5	「乱れ髪」
2 7 8	「愛染」
2 8 9	「愛染」
3 1 2	「花径」
3 0 0	「花径」
2 7	「乱れ髪」
1 3 1	「檸檬」
3 1 2	「花径」
1 7 8	「肉眼」

- 『古』にあり。句集には「三句」の但書があり、一七三二、一五二五、一八四四の順に収録。
- 一五二六 「川柳塔」昭和44年5月号。「雨の足摺岬」の前書あり。『肉』にあり。句集には「足摺岬」の前書。同年4月号「柳界展望」に、「三月二日（日曜）編者注」土佐市民会館落成川柳大会に出席。次いで母と長男同道で足摺岬、松山、琴平、屋島を見物、六日帰阪したが、「すすむさんが生きていたらと思う旅」とある。六一一参照。
- 一五二七 初出未詳。『肉』『愛』『古』にあり。
- 一五二八 「川柳塔」平成7年2月号。『古』にあり。
- 一五二九 「川柳塔」昭和45年3月号。「妻病めば」の前書あり。『肉』にあり。句集には「妻病む」の前書。九五参照。
- 一五三〇 「川柳塔」昭和58年1月号。「長女章子結婚」の前書あり。「紅唇もまた光りに光る」→「紅唇光りに光る」。『愛』『古』にあり。句集の前書には「二句」の但書。七九五参照。
- 一五三一 「川柳塔」平成13年1月号。『喜』にあり。↓補注。
- 一五三二 「川柳塔」昭和32年3月号。「近作柳樽」欄。『有』にあり。
- 一五三三 初出未詳。『有』にあり。
- 一五三四 「川柳塔」昭和48年11月号。『愛』『古』『師』『喜』にあり。仏足頂礼は、仏の法を全部頂くという気持ちで、仏の足下にひれ伏して、仏の足を自分の手の上に頂くこと。まるで谷崎の世界のような句。
- 一五三五 もくせい川柳会。昭和61年6月16日（月）。「重い」大路美幸選。
- 一五三六 もくせい川柳会。昭和60年2月18日（月）。「ん」黒川紫香選。
- 一五三七 「川柳塔」昭和62年8月号。「高野山にて」の前書あり。『古』『師』にあり。句集の前書には「三句」の但書。『師』は「高野山」の前書で、この句のみ収録。七四四参照。
- 一五三八 「川柳塔」平成5年3月号。『古』『師』『喜』にあり。六一六参照。
- 一五三九 「川柳塔」平成8年9月号。
- 一五四〇 初出未詳。
- 一五四一 もくせい川柳会。平成10年7月20日（月）。「トマト」小池しげお選。
- 一五四二 「川柳雑誌」昭和39年10月号。『愛』『古』『喜』にあり。
- 一五四三 「川柳塔」平成8年10月号。
- 一五四四 初出未詳。『肉』にあり。

一五四五	北限の鈴虫を聞くひとり旅	2	7	9	「愛染」
一五四六	埃っぽい男 あれあれ 立候補	1	0	4	「有情」
一五四七	星が出て露天風呂にも沖がある	3	3	1	「花径」
一五四八	穂芒の如き魂 ありにけり	2	5	4	「愛染」
一五四九	北方四島夕餉の鉢をこう並べ	3	4	1	「花径」
一五五〇	仏 一体数知れぬ露の奥	2	7	4	「愛染」
一五五一	仏 恋数珠持つことの多い年	3	1	9	「花径」
一五五二	仏 様へ 青いバナナを供えとき	1	0	7	「有情」
一五五三	仏の座ここに好啓ここに薬介	3	2	3	「花径」
一五五四	ほほ笑んでいる紀子さんの鼻の汗	1	8		「乱れ髪」
一五五五	褒められた思い出がなし師を葬送る	1	5	7	「肉眼」
一五五六	本心が二伸に 女 心かも	6	8		「有情」
一五五七	本心を明かした酒がまだ醒めず	1	0	1	「有情」
一五五八	本棚に隙間のあるは油断かな	2	6	9	「愛染」
一五五九	本棚を砦のように老作家	2	5	8	「愛染」
一五六〇	ほんとうに死んでしまった死んだふり	2	7	6	「愛染」
一五六一	忘恩や 磯の香のせぬ日本海	1	8	1	「肉眼」
一五六二	暴君のところが好きと 妓 惚れ	8	5		「有情」
一五六三	某月某日 税吏のメモの怖しさ	1	0	3	「有情」
一五六四	茫々五十年醜の御楯は呆け立つ	2	8	1	「愛染」

- 一五四五 「川柳塔」昭和62年10月号。「秋田・青森の旅」の前書あり。『古』にあり。句集の前書には「四句」の但書あり。三九二参照。
- 一五四六 初出未詳。『有』にあり。
- 一五四七 「川柳塔」平成12年10月号。『喜』にあり。
- 一五四八 「川柳展望」3号(昭和50年11月1日発行)。「愛』『古』にあり。
- 一五四九 サークル檸檬。平成5年11月7日(日)「自由吟」互選。↓補注。
- 一五五〇 「川柳塔」平成6年12月号。各地柳壇「サークル檸檬」にあり。「仏一体」の後、一字空白あり。『古』にあり。
- 一五五一 「川柳塔」平成9年10月号。「母十七回忌」の前書あり。「川柳塔みちのく」29号(一九九七年十一月)にも発表。投句葉書の消印は、平成9年8月26日。『句集』も同じ前書。
- 一五五二 「川柳雑誌」昭和31年9月号。「近作柳樽」欄、初巻頭。「有』にあり。補注二〇八参照。
- 一五五三 「川柳塔」平成10年4月号。「ここに藻介」↑「いずれに藻介」。田中好啓は、大正2年12月5日(金)に生まれ、平成10年3月1日(日)、84歳で死去。「ふあうすと」副主幹。中尾藻介は、大正6年12月12日(水)に生まれ、平成10年2月15日(日)、80歳で死去。フアンの多い柳人だった。
- 一五五四 初出未詳。川嶋紀子が礼宮文仁親王と婚約をしたのが、平成元年9月12日(火)。そのときの記者会見を詠んだ句か。
- 一五五五 「川柳雑誌」昭和40年9月号(最終号)。「川柳塔」欄の選者は霞乃。『肉』にあり。
- 一五五六 「川柳雑誌」昭和33年12月号。『有』『樽』『愛』『古』にあり。
- 一五五七 初出未詳。『有』にあり。
- 一五五八 初出未詳。『愛』『古』にあり。
- 一五五九 川柳ねやがわ。昭和56年3月15日(日)。「自由吟」軸吟。『愛』『古』にあり。
- 一五六〇 「川柳塔」昭和62年2月号。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品25句「老司祭」の5句目。『古』にあり。
- 一五六一 初出未詳。『肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。句集には「能登から佐渡へ」の前書あり。八参照。
- 一五六二 「川柳雑誌」昭和32年11月号。『有』にあり。
- 一五六三 「川柳雑誌」昭和33年2月号。『有』にあり。
- 一五六四 「川柳塔」平成2年3月号。「武蔵野陵」の前書あり。

一五六五	ボーリング	恋のライバル	塵	1 5 9	「肉眼」
一五六六	牧場の柵	もたれている旅情		1 1 6	「有情」
一五六七	僕だけの凱旋門	はいつも持ち		2 3	「乱れ髪」
一五六八	僕の齢	啄木はもう死んでいた		1 0 1	「有情」
一五六九	僕の富レモン	一個を棺に入れよ		2 6 6	「愛染」
一五七〇	ボス	今日は子の親として並ばされ		1 1 8	「有情」
一五七一	牡丹へは	蜂も静かな訪問者		8 6	「有情」
一五七二	牡丹雪	ゆつくり俺が昇天す		1 8 4	「肉眼」
一五七三	ボディービル	橋杭岩の力みよう		1 3 1	「檸檬」
一五七四	墓碑銘	を守るかたち	に木を植える	3 0 0	「花径」
一五七五	盆踊り	河内音頭でしめくくり		2 9	「乱れ髪」
一五七六	ぼんぼんの嫁	は標準語を使い		8 3	「有情」
一五七七	ポケット	に隠し切れない	手錠にて	1 1 0	「有情」
一五七八	ポスター	を女優の卵	貼りにいく	4 7	「乱れ髪」
一五七九	ポツペンは	ブーツの女にも似合う		2 3 0	「愛染」
【ま】					
一五八〇	まあおもらし	してと三歳姉の顔		3 1 3	「花径」
一五八一	毎日の中	の一日誕生日		2 7 3	「愛染」
一五八二	勾玉を	じいは磨いているのだよ		2 8 6	「愛染」
一五八三	幕切れの破顔	一笑は鬼だ		2 7 5	「愛染」

- 『古』にあり。句集の前書には「二句」の但書あり。この句の後が七二四。↓補注。
- 一五六五 初出未詳。『肉』『愛』『古』『喜』にあり。
- 一五六六 せんば川柳社本社句会。昭和34年4月4日(土)。「牧場」伊藤静夢選。『有』にあり。
- 一五六七 昭和63年度「川柳塔唐津支部」秋季大会。10月9日(日)。「門」西山幸選。
- 一五六八 「川柳雑誌」昭和35年9月号。『有』にあり。石川啄木は、明治19年2月20日(土)に生まれて、明治45年4月13日(土)に、26歳で死去。薫風は、このとき33か34歳。
- 一五六九 川柳塔本社句会。昭和58年10月2日(日)。「富」軸吟。『愛』『古』にあり。
- 一五七〇 初出未詳。『有』にあり。
- 一五七一 「川柳雑誌」昭和31年9月号。「近作柳博」欄初巻頭。『有』『檸檬』『愛』『古』にあり。補注二〇八参照。
- 一五七二 「川柳塔」昭和44年4月号。『肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。同年3月号「柳界展望」に、「二月十一日(火曜)編者注」から北陸山代温泉へ」とある。
- 一五七三 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。『檸檬』『愛』は「ボディービル」と表記。句集には「串本海岸」の前書あり。橋杭岩は、和歌山県串本町にある、橋杭を支える杭のように並んだ岩。
- 一五七四 川柳塔本社句会。平成6年4月7日(木)。「植える」軸吟。
- 一五七五 もくせい川柳会。昭和59年8月20日(月)。「自由吟」黒川紫香選。
- 一五七六 川柳雑誌社第八回川柳まつり。昭和36年7月16日。(日)「大阪」土井文蝶選。『有』『愛』にあり。
- 一五七七 初出未詳。『有』にあり。
- 一五七八 初出未詳。
- 一五七九 「川柳塔」昭和52年4月号。各地柳壇「どんぐり川柳会」にあり。『愛』『古』にあり。喜多川歌麿の浮世絵を念頭に置いて作った句だろう。↓補注。
- 一五八〇 「川柳塔」平成8年11月号。「匠とみのり」の前書あり。『句集』も同じ前書。一〇一四参照。
- 一五八一 川柳塔本社句会。昭和60年7月8日(月)。「毎日」軸吟。『愛』『古』にあり。
- 一五八二 「川柳塔」平成5年3月号。「川柳塔みちのく」11号(平成5年3月)にも発表。『古』『喜』にあり。六一六参照。
- 一五八三 初出未詳。『古』『喜』にあり。

一五八四	枕抱いて 胃をかばえるか虫を聞くか	194	「肉眼」
一五八五	敗け戦一度とてなし馬上盃	56	「乱れ髪」
一五八六	敗けて勝つことも大切共白髪	18	「乱れ髪」
一五八七	真心をあげて淋しくなりました	177	「肉眼」
一五八八	孫の二人（孫二人）たこ焼きの前気を合わせ	326	「花径」
一五八九	孫膝にしておさまるは句碑の膝	287	「愛染」
一五九〇	孫ふたり初湯の桶のよい響	276	「愛染」
一五九一	将門の気骨やいずこ天高し	34	「乱れ髪」
一五九二	麻酔より醒めて必ず夜なりけり	195	「肉眼」
一五九三	マズルカへ拙者お相手仕る	240	「愛染」
一五九四	またの世に散るのは紫のさくら	23	「乱れ髪」
一五九五	待ちやすし かたすみという名の茶房	331	「花径」
一五九六	松毬を拾うて楽し 山の畑	107	「有情」
一五九七	真つ青な日の出地下鉄サリン以後	56	「乱れ髪」
一五九八	松島のふた月たちてなつかしや	195	「肉眼」
一五九九	松茸をこけしのように掌にのせる	148	「檸檬」
一六〇〇	待つ人が来て愛犬を放ちやる	177	「肉眼」
一六〇一	末法の世に降る羅生門の雨	326	「花径」
一六〇二	まどうなく胃を切除りわれのながらうに	198	「肉眼」
一六〇三	真人間だったばかりに 死を選び	105	「有情」

- 一五八四 「川柳塔」昭和45年11月号。「肉』『愛』『古』」にあり。
- 一五八五 初出未詳。馬上盃は、馬上のまま酒を飲むのに都合のよいように、高台部分が長くなっている盃。
- 一五八六 初出未詳。
- 一五八七 「川柳塔」昭和43年5月号。「肉』『愛』『古』『師』」にあり。
- 一五八八 「川柳塔」平成11年6月号。
- 一五八九 「川柳塔」平成6年2月号。「古』」にあり。補注六参照。
- 一五九〇 「川柳塔」昭和62年1月号。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品25句「老司祭」の2句目。「古』『喜』」にあり。
- 一五九一 「川柳塔みちのく」33号（一九九八年十一月）。投句葉書の消印は、平成10年8月28日。平将門（903?~940）は、平安中期の武将。朝廷に対抗して独自に天皇に即位し、「新皇」を名乗るが、承平天慶の乱で討伐された。
- 一五九二 「川柳塔」昭和46年1月号。「胃手術（五句）」の前書あり。「肉』『愛』『古』」にあり。句集では「入院手術」の前書。二六参照。
- 一五九三 初出未詳。「愛』『古』」にあり。マズルカは、社交ダンスの一つ。もとは、ポーランドの民族舞踊。
- 一五九四 初出未詳。
- 一五九五 「川柳塔」平成12年9月号。「待ちやすし」の後、一字空白あり。
- 一五九六 「川柳雑誌」昭和31年12月号。「近作柳博」欄。「有』」にあり。
- 一五九七 初出未詳。地下鉄サリン事件は、平成7年3月20日（月）、オウム真理教が起こした無差別テロ事件。死亡者12人。負傷者5510人。警察庁による正式名称は、地下鉄駅構内毒物使用多数殺人事件。
- 一五九九 初出未詳。「川柳塔」昭和45年11月号。「肉』」にあり。
- 一六〇〇 柳都20周年記念大会。昭和43年6月9日（日）。「雑詠」川上三太郎選。「肉』『愛』『古』『師』」にあり。
- 一六〇一 「川柳塔」平成11年8月号。
- 一六〇二 「川柳ジャーナル」昭和46年2月号。「水甕集」時実新子選巻頭。「霜月悲鳴」の前書あり。「肉』」にあり。句集には「霜月悲唱 五句」の前書。七二五参照。
- 一六〇三 「川柳雑誌」昭和32年12月号。「有』」にあり。
- 一六〇四 「川柳雑誌」昭和36年5月号。各地柳壇（明和川柳

一六〇四	魔の山と見えず初日の下にあり	1	5	2	「檸檬」
一六〇五	幻の女の息の霧の音	1	7	2	「肉眼」
一六〇六	ままごとでいわしさんまはわびしいぞ	1	4	0	「檸檬」
一六〇七	継母の思い出に 針 つきまとい	8	2		「有情」
一六〇八	豆撒いて自分で拾う旅の果て	3	2	9	「花径」
一六〇九	繭玉の赤と白とのごとくとなり	3	5		「乱れ髪」
一六一〇	丸鬢の母の写真が一つある	3	1	4	「花径」
一六一一	満月の万世橋に父の影	3	1	0	「花径」
一六一二	曼珠沙華君といるごとくひとりおり	1	3	3	「檸檬」
一六一三	曼珠沙華 恋わるるよりも恋うべしと	1	8	7	「肉眼」
一六一四	曼茶羅に原子のごとく仏たち	2	3	1	「愛染」
【み】					
一六一五	滯はるか 近づきしだけ遠のく師	1	5	8	「肉眼」
一六一六	見返りにたましいの秋しのび寄る	3	1	9	「花径」
一六一七	見返るに長すぎはせぬ鶴の首	2	6	3	「愛染」
一六一八	味方とも敵ともつかぬ 墓	2	2		「乱れ髪」
一六一九	三日月があんなに光るのも勇氣	2	2	4	「愛染」
一六二〇	水浴びの鳥を見ている人妻か	2	0	7	「肉眼」
一六二一	湖に映すはオフェーリアか鶴か	3	2	8	「花径」
一六二二	湖の雨を水底から見つめ	2	8	4	「愛染」

- 研究会」にあり。『檸檬』『愛』『古』にあり。
- 一六〇五 「川柳塔」昭和42年12月号。「信濃の旅(二句)」の前書あり。『肉』『愛』『古』にあり。句集も同じ前書。三三九参照。
- 一六〇六 「川柳雑誌」昭和38年10月号。『檸檬』にあり。
- 一六〇七 初出未詳。『有』にあり。
- 一六〇八 「川柳塔」平成12年3月号。『喜』にあり。
- 一六〇九 「川柳塔みちのく」43号(二〇〇一年五月)。投句葉書の消印は、平成13年2月16日。
- 一六一〇 「川柳塔」平成8年12月号。各地柳壇「ローズ川柳会」にあり。
- 一六一一 「川柳塔」平成8年3月号。『師』『喜』にあり。↓補注。
- 一六一二 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『師』にあり。句集には「別離」の前書あり。
- 一六一三 「川柳塔」昭和44年12月号。『肉』『愛』『古』にあり。
- 一六一四 「川柳塔」昭和52年9月号。『愛』『古』『師』にあり。曼茶羅は、仏の悟りの境地や世界観等を描いたもの。「原子のごとく」仏が立ち並ぶのは、金剛界ではなくて胎藏界。
- 一六一五 「川柳雑誌」昭和40年9月号(最終号)。「川柳塔」欄の選者は蔑乃。『肉』にあり。
- 一六一六 「川柳塔」平成9年9月号。同号には、この句の前には、「出陣(男は鯨波の笛太鼓)(弘前ねぶた)」がある。『句集』には前書なし。見返りは、ねぶたの裏の絵(見送り、見返り絵)のこと。↓補注。
- 一六一七 「川柳塔」昭和58年4月号。『愛』にあり。
- 一六一八 第49回岸和田市民川柳大会。平成11年10月16日(土)。「味方」軸吟。
- 一六一九 川柳展望発刊記念句会。昭和50年6月22日(日)。「勇氣」軸吟。「川柳塔」昭和50年9月号にも発表。『愛』『古』『師』『喜』にあり。鳥取県鹿野町鹿野小学校新校舎(平成13年4月完成)前周辺道の歩道に句碑が建立された。これは、平成14年の秋に第17回国民文化祭川柳大会を開催するに当たり、町づくりの一環としてなされたものである。
- 一六二〇 「川柳塔」昭和47年6月号。『肉』『愛』『古』にあり。
- 一六二一 「川柳塔」平成12年3月号。「悼 川上富湖さん」の前書あり。『句集』も同じ前書。↓補注。
- 一六二二 「川柳塔」平成元年6月号。「見つめ」↑「見たら」。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品25句「老司祭」の21句目。『古』にあり。

- 一六二三 湖の孤独は 雲を映すのみ
- 一六二四 自らに同情をして釣りに出た
- 一六二五 水際にシエパードがいて黄昏る
- 一六二六 水子塚時に桜も着ざめる
- 一六二七 水鳥へ鶴のつがいは身じろがず
- 一六二八 水濁り火も汚れ行く世紀末
- 一六二九 水の上蛇の長さが長くなる
- 一六三〇 水の渦想いの渦も春になり
- 一六三一 水の音私が石に捨てられた
- 一六三二 水の精覚め森の精まだ眠し
- 一六三三 水飲めば涙に変わる 恍惚の人
- 一六三四 水は低きに友も低きに流れるか
- 一六三五 水枕干す秋の気が一入に
- 一六三六 水割りと読書三味僕の避暑
- 一六三七 視する蓮花の菓子を口に
- 一六三八 襖ぎせよ初春大雪の永田町
- 一六三九 みぞおち匂う人妻の恋
- 一六四〇 乱れ髪恋の甘さは遠い過去
- 一六四一 乱れ髪式部の世より恋は憂き
- 一六四二 美智子妃も旅立つ顔になり給い

- 9 9 「有情」
- 5 3 「乱れ髪」
- 9 5 「有情」
- 2 4 3 「愛染」
- 1 9 「乱れ髪」
- 3 1 7 「花径」
- 2 2 5 「愛染」
- 2 3 5 「愛染」
- 3 4 2 「花径」
- 1 4 9 「檸檬」
- 2 1 0 「肉眼」
- 2 5 1 「愛染」
- 1 4 8 「檸檬」
- 3 7 「乱れ髪」
- 2 2 2 「愛染」
- 5 6 「乱れ髪」
- 1 2 9 「檸檬」
- 1 3 「乱れ髪」
- 1 3 「乱れ髪」
- 4 3 「乱れ髪」

- 一六二三 初出未詳。『有』にあり。
- 一六二四 三井が丘川柳会。昭和54年4月22日(日)。「自由吟」軸吟。『愛』『古』にあり。
- 一六二五 初出未詳。『有』にあり。
- 一六二六 「川柳塔」昭和54年6月号。『愛』『古』にあり。
- 一六二七 「川柳塔」平成5年4月号。「ほたる川柳同好会」にあり。
- 一六二八 「川柳塔」平成9年7月号。
- 一六二九 「川柳塔」昭和50年12月号。各地柳壇「どんぐり川柳会」にあり。「水の上」の後、一字空白あり。『愛』『古』にあり。
- 一六三〇 「川柳塔」昭和53年5月号。『愛』『古』にあり。
- 一六三一 サークル檸檬。平成6年3月6日(日)「自由吟」互選。『喜』にあり。
- 一六三二 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。「東北行 七句」の4句目で、「十和田湖 三句」の2句目。「十和田湖 三句」の中で、この句のみ『愛』『古』に収録。補注四四三参照。
- 一六三三 「川柳塔」昭和47年11月号。「肉』『愛』『古』にあり。
- 一六三四 「川柳展望」創刊号(昭和50年5月1日発行)。特別作品「鎮魂」25句の15句目。『愛』『古』にあり。
- 一六三五 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。
- 一六三六 西宮北口句会。昭和56年8月10日(月)。「避暑」黒川紫香選。
- 一六三七 一九七五年版「川柳年鑑」。昭和50年1月25日発行。
- 一六三八 初出未詳。
- 一六三九 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』『喜』にあり。
- 一六四〇 明和病院青蛙川柳会。昭和30年1月作か。一六四一参照。補注三六四参照。
- 一六四一 明和病院青蛙川柳会。昭和30年1月作か。『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。和泉式部は、平安中期の歌人。冷泉帝の第三皇子為尊親王と熱愛し、為尊親王死後、敦道親王の寵愛を受ける。(黒髪のみだれもしらずうちふせばまづかきやりし人ぞ恋しき)を踏まえて詠んだ句。三六四参照。↓補注。一六四二 「川柳雑誌」昭和38年12月号。各地柳壇「明和病院支部句会」にあり。
- 一六四三 初出未詳。『有』にあり。
- 一六四四 「川柳塔」平成13年2月号。『喜』にあり。補注一六九参照。

- 一六四三 道遠し 師弟二人つきりとなり  
 一六四四 みちのくの雪とりんごと黄なコート  
 一六四五 御堂筋金の公孫樹へ黄なコート  
 一六四六 皆 君のもの 新妻の寝顔まで  
 一六四七 見残した夢を見ている塔の朱よ  
 一六四八 未亡人 どの親切も淋しうて  
 一六四九 見舞客土筆を摘んで来てくれる  
 一六五〇 耳垢と耳学問をわびしがる  
 一六五一 耳濡らす涙 生涯仰臥の身  
 一六五二 宮様も昔崩さぬ鬚を持ち  
 一六五三 みんな髭剃つてる 港近くなり
- 【む】
- 一六五四 昔から女が走る愛の時  
 一六五五 麦の穂が目を刺しそうな都落ち  
 一六五六 無口なる人でありしが今日の旅  
 一六五七 虫が来て晩学の灯を和ませる  
 一六五八 息子から歳を聞かれた日を覚え  
 一六五九 無と書いて和尚祇園へ出かけられ  
 一六六〇 紫に男女の別のあるごとし  
 一六六一 紫の椅子の愁いはわが愁い

106	「有情」
335	「花径」
336	「花径」
72	「有情」
208	「肉眼」
81	「有情」
20	「乱れ髪」
219	「愛染」
183	「肉眼」
14	「乱れ髪」
117	「有情」
234	「愛染」
67	「有情」
318	「花径」
275	「愛染」
340	「花径」
45	「乱れ髪」
234	「愛染」
96	「有情」

- 一六四五 「川柳塔」平成13年2月号。『喜』にあり。補注一六九参照。  
 一六四六 「川柳雑誌」昭和37年4月号。「新婚生活の岩井三窓君へ」の前書あり。『有』『樽』『愛』『古』にあり。句集では、六八七（『川柳雑誌』昭和37年1月号）の句と併せて、『句集』『文オベラ』の岩井三窓君結婚「二句」の前書。六八七参照。  
 一六四七 「川柳塔」昭和47年9月号。「浄瑠璃寺にて」の前書あり。『肉』『愛』『古』にあり。六九四参照。  
 一六四八 初出未詳。『有』『樽』にあり。  
 一六四九 「川柳塔」平成5年8月号。各地柳壇「ほたる川柳同好会」にあり。  
 一六五〇 「川柳塔」昭和48年11月号。『愛』『古』にあり。  
 一六五一 「川柳塔」昭和44年1月号。「嗚呼清原祐志君」の前書あり。「涙」の後、一字空白あり。『肉』『愛』『古』にあり。四四九参照。  
 一六五二 初出未詳。  
 一六五三 初出未詳。『有』にあり。  
 一六五四 「川柳塔」昭和53年5月号。『愛』『古』にあり。  
 一六五五 せんば川柳社本社句会。昭和34年4月4日（土）。「自由吟」岡橋宣介選。『有』『樽』『愛』『古』『師』にあり。  
 一六五六 「川柳塔」平成9年7月号。「悼 稲葉真郎氏」の前書あり。『句集』には前書なし。  
 一六五七 初出未詳。『古』にあり。  
 一六五八 みか月結成満11周年記念大会。平成3年11月10日（日）。「息子」軸吟。  
 一六五九 初出未詳。  
 一六六〇 「川柳塔」昭和53年5月号。『愛』『古』にあり。  
 一六六一 「川柳雑誌」昭和37年8月号。「不朽洞の人々」の自己紹介文中にあり。『樽』『愛』『古』『師』『喜』にあり。「不朽洞の人々」に、「紫の椅子の愁いはわが愁い」（薫風子）／紫は沈んだ華やかさを持つ品格のある色だ。／私は二十年前までこの色が最も好きであった。／今はどんな色にも興味を覚えず魅力を感じとるようになったが、これは私の魂に純粹さが薄れてしまった故か、或は人間として幾分成長して来た故か、おそらくそのどちらでもあるのだろう。私は紫の椅子にじっくり腰を下ろして、沈んだ華やかさを持つ品格のある詩囊を肥やして行きたい。」とある。  
 一六六二 川柳塔本社句会。昭和54年1月8日（日）。「気合い」軸吟。『愛』『古』にあり。  
 一六六三 「川柳塔」昭和58年5月号。『愛』『古』にあり。

- 一六六二 紫の色の気合が分りかけ  
 一六六三 紫は仁義礼智信を統べ  
 一六六四 ムンクの絵外真つ青な雪景色  
 【め】  
 一六六五 明月や静かの海の足跡は  
 一六六六 明治百年 蹄の音は消え去りぬ  
 一六六七 明治村 醉生夢死の昼の月  
 一六六八 明治村 烈婦というはずになし  
 一六六九 名刀無銘 昔の人は名を惜しみ  
 一六七〇 眼鏡にも青葉映して恋たのし  
 一六七一 眼鏡拭きほとぼりはもうさめたるか  
 一六七二 眼鏡屋は鱈雲ほど並べたり  
 一六七三 巡る忌や師は不死鳥と号されし  
 一六七四 飯食うて来たというのへ飯を出し  
 一六七五 めし時の時計の針の親しさよ  
 一六七六 飯を食うさえも勇気の要る日なり  
 一六七七 目に余るものにロビーの登山靴  
 一六七八 目に見えぬものを支える釈迦の指  
 一六七九 目の限り菜の花の黄が師の浄土  
 一六八〇 眼を閉じて見え眼を開けて見えぬ母

2	4	1	「愛染」
2	6	4	「愛染」
3	4	5	「花径」
4	0		「乱れ髪」
1	6	6	「肉眼」
1	7	2	「肉眼」
1	7	2	「肉眼」
3	1		「乱れ髪」
3	4		「乱れ髪」
2	6	4	「愛染」
1	8	2	「肉眼」
3	1	4	「花径」
4	4		「乱れ髪」
1	4	0	「檸檬」
7	3		「有情」
2	2	3	「愛染」
2	2	6	「愛染」
2	9	4	「愛染」
3	1	6	「花径」

- 一六六四 「朝日新聞」夕刊。平成11年2月26日(金)。「師弟」7句の6句目。「喜」にあり。ムンク(1863-1944)は、ノルウェー出身の画家。「叫び」で有名。補注二三参照。  
 一六六五 初出未詳。アポロ11号のアームストロング船長が、静かの海に降りたつて、「これは一人の人間には小さな一歩だが、人類にとって大きな飛躍だ」と言ったのは、一九六九年7月20日(日)。  
 一六六六 「川柳塔」昭和42年1月号。同号「ゆーもあ特集」にも発表し、「宮さん宮さんお馬の前での唄に切つて落された明治維新。以来九十九年、丙午の迷信を最後に馬は蹄の音を消した。」とある。「肉」「愛」「古」にあり。  
 一六六七 「川柳塔」昭和42年10月号。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。→補注。  
 一六六八 「川柳塔」昭和42年10月号。「いうは」↑「云うは」。「肉」「愛」「古」「師」「喜」にあり。補注一六六七参照。  
 一六六九 もくせい川柳会。平成元年1月16日(月)。「名」安藤寿美子選。  
 一六七〇 初出未詳。「有」「檸檬」にあり。  
 一六七一 川柳ねやがわ。昭和58年4月17日(日)。「自由吟」軸吟。「愛」「古」「喜」にあり。  
 一六七二 「川柳塔」昭和43年10月号。「肉」「愛」「古」「師」にあり。  
 一六七三 「川柳塔」平成9年1月号。「師」にあり。年賀状の句。  
 一六七四 初出未詳。  
 一六七五 「川柳雑誌」昭和38年12月号。「檸檬」にあり。  
 一六七六 「川柳雑誌」昭和36年8月号。「有」「檸檬」「愛」「古」にあり。  
 一六七七 「川柳塔」昭和50年8月号。各地柳壇「どんぐり川柳会」にあり。「愛」「古」にあり。  
 一六七八 富柳会・菜の花合同句会。昭和51年3月14日(月)。「飯を食う」香川酔々選。「愛」にあり。  
 一六七九 「川柳塔」平成7年7月号。「哀悼」の前書あり。「古」にあり。句集では「哀悼 西尾菜先生 五句」の前書。四七参照。  
 一六八〇 「川柳塔」平成9年6月号。「八月母の十七回忌」の前書あり。「句集」も同じ前書。  
 一六八一 初出未詳。「愛」「古」「喜」にあり。  
 一六八二 「川柳雑誌」昭和35年6月号。「有」にあり。  
 一六八三 「川柳塔」平成7年11月号。

一六八一 一面の裏菩薩も夜叉もなかりけり 2 6 6 「愛染」

【も】

一六八二 もう俺をのけものにして逢うている 7 8 「有情」

一六八三 もう覚悟出来たらしくて風呂へ行く 3 0 8 「花径」

一六八四 盲目の巫鈍氏が笑む 師を話し 1 7 9 「肉眼」

一六八五 モーニング着た日も顔を見せにくる 7 8 「有情」

一六八六 木犀と星が漉すなるこの夜気か 2 0 3 「肉眼」

一六八七 木杯へ男の月の花菖蒲 3 4 6 「花径」

一六八八 餅の罫わが鞆の手に受けて食ぶ 2 9 6 「愛染」

一六八九 餅花を二歳の孫と咲かせおり 2 9 6 「愛染」

一六九〇 黙契や いまも仏法僧が啼く 2 0 5 「肉眼」

一六九一 黙契や 野に紫の花が増え 2 0 2 「肉眼」

一六九二 もつと光をもつと 空気を元日 3 2 8 「花径」

一六九三 モナリザも拈華微笑に違いなし 2 8 4 「愛染」

一六九四 物言わぬ金魚がうれし 誕生日 1 8 6 「肉眼」

一六九五 ものさしへ祖母の背筋はしやんとする 4 7 「乱れ髪」

一六九六 喪服着た妻に女が残こつてた(残つてた) 6 6 「有情」

一六九七 桃菖蒲めでたく育つ姉 弟 3 1 6 「花径」

一六九八 霧山へ三角波のほしいまま 3 0 2 「花径」

一六九九 聞香の首かしげいる白鳥か 2 2 0 「愛染」

一六八四 「川柳塔」昭和43年7月号。「尾道にて(四句)」の前書あり。『肉』にあり。句集には「尾道にて 五句」の前書あり。二八八参照。

一六八五 「川柳雑誌」昭和36年12月号。『有』にあり。

一六八六 「川柳塔」昭和46年12月号。「漉すなる」の後、一字空白あり。『肉』にあり。

一六八七 「川柳塔」平成13年7月号。『喜』にあり。『句集』には、「春の叙勲で木杯一組台付賜与さる 五句」の前書あり。

「川柳塔」平成14年1月号「私の一句」にも発表。三〇八参照。

一六八八 初出未詳。

一六八九 初出未詳。↓補注。

一六九〇 「川柳塔」昭和47年5月号。「黙契や」の後、一字空白あり。『肉』『愛』『古』にあり。

一六九一 「川柳塔」昭和46年12月号。「黙契や」の後、一字空白あり。『肉』『愛』『古』にあり。

一六九二 「川柳塔」平成12年2月号。「俳句現代」平成12年6月1日発行「タツノオトシゴの家」10句の8句目に「もつと光をもつと空気を灌仏会」の形で発表。

一六九三 「川柳塔」平成元年9月号。↓補注。

一六九四 「川柳塔」昭和43年12月号。「言わぬ」↑「云わぬ」。

『肉』にあり。

一六九五 初出未詳。

一六九六 「川柳雑誌」昭和35年5月号。『有』『樺』にあり。

一六九七 「川柳塔」平成9年5月号。

一六九八 「川柳塔」平成6年6月号。「市浦練御殿 二句」の前書あり。『句集』も同じ前書。この句の後に「一八〇二。霧山は、北津軽郡市浦村にある152米の三角形の山。」

一六九九 「川柳塔」昭和49年4月号。『愛』『古』にあり。一三三二参照。

一七〇〇 「川柳塔」平成7年4月号。「紋太」「養生」「竹二」の後、一字空白あり。『句集』には、「阪神淡路大震災 四句」の前書。八〇四参照。相元紋太は明治23年12月6日(土)生まれで昭和45年4月11日(土)80歳で死去。房川素生は明治33年8月1日(水)生まれで昭和44年7月29日(火)68歳で死去。大山竹二は明治41年2月14日(金)生まれで昭和37年11月5日(月)54歳で死去。延原句沙彌は明治30年10月29日(金)生まれで昭和34年7月27日(月)61歳で死去。

一七〇一 昭和63年度「川柳塔唐津支部」秋季大会。10月9日(日)。「門」西山幸選。

一七〇二 初出未詳。『愛』『古』『師』『喜』にあり。昭和53年

一七〇〇	紋太素生竹二句沙弥の御霊しずか	3	0	5	「花径」
一七〇一	門一つ昨日の夢と明日の夢	2	4		「乱れ髪」
一七〇二	モンロー忌黒子の位置の恐るべし	2	3	7	「愛染」
	【や】				
一七〇三	八百長相撲も礼にはじまり礼に終る	2	4	7	「愛染」
一七〇四	やがて女は友 情を持てあますだろ	2	3	5	「愛染」
一七〇五	やがて君と伯夷叔 斉たるもよし	2	6	2	「愛染」
一七〇六	焼跡に似た傷抱いて冬近し	1	9	6	「肉眼」
一七〇七	焼ける胃と如何なし難し 想夫恋	1	9	3	「肉眼」
一七〇八	優しい人をなおもやさしく有馬筆	2	5	5	「愛染」
一七〇九	安からめ 御身の胎児たり得れば	2	1	4	「肉眼」
一七一〇	やせつぼち あんな度胸も持ちあわせ	1	0	8	「有情」
一七一	宿の庭の雪溶けかかる椀の粥	3	1	0	「花径」
一七一二	柳の芽姉三六角蛸 錦	2	9	0	「愛染」
一七一三	柳 ポブラ 柳 ポブラ 水郷よ	1	6	3	「肉眼」
一七一四	やはり雑犬 道草ばかり食い	9	5		「有情」
一七一五	流鏑馬の矢ほど見事なものはない	3	3	8	「花径」
一七一六	山蒼し 幻の中金鶏飛ぶ	1	3	1	「檸檬」
一七一七	山男 山の画集に汗おとす	2	0	8	「肉眼」
一七一八	山男 山を下りてはみすばらし	1	7	5	「肉眼」

- 7月23日(日)、「モンロー忌句会」中尾藻介居。(モンローの黒子わたしのモンローに)も発表している。
- 一七〇三 第33回堺市民川柳大会。昭和54年10月21日(日)。「礼軸吟」『愛』『古』『師』『喜』にあり。
- 一七〇四 川柳塔本社句会。昭和53年3月7日(火)。「友情」高杉鬼遊選。『愛』『古』にあり。
- 一七〇五 「川柳塔」昭和58年1月号。「畏友Sへ」の前書あり。
- 『愛』『古』にあり。句集は「畏友俊平兄へ」の前書。↓補注。
- 一七〇六 「川柳塔」昭和46年2月号。「胃手術(五句)」の前書あり。『肉』にあり。句集では「入院手術」の前書。二六参照。
- 一七〇七 「川柳塔」昭和45年11月号。『肉』にあり。
- 一七〇八 「川柳塔」昭和56年2月号。「悼 大山あや子さん(三句)」の前書あり。『愛』『古』にあり。句集も同じ前書で、この句のみ収録。句集未収録の2句は、(玲瓏の笑みかの世にて所得ん)(有馬今日悲し酔いざめ湯ざめして)。大山あや子は、大山竹二の妻。有馬筆は、有馬名産の軸を絹糸で飾った筆。
- 一七〇九 「川柳塔」昭和48年6月号。『肉』『愛』『古』『師』にあり。
- 一七一〇 初出未詳。『有』にあり。
- 一七一 一 「川柳塔」平成8年1月号。「海潮(うしお) 荘」の前書。『句集』には「海潮温泉 四句」の前書。四五参照。補注一四五参照。
- 一七一二 「川柳塔」平成7年5月号。『古』『師』『喜』にあり。↓補注。
- 一七一三 「川柳塔」昭和41年7月号。「水郷(五句)」の前書あり。『柳 ポブラ 柳 ポブラ 水郷よ』↑「柳木ポブラ 柳ポブラ水郷よ」。『句集』も同じ前書。『肉』『愛』『古』にあり。八七九参照。補注二七九参照。
- 一七一四 初出未詳。『有』にあり。
- 一七一五 川柳塔本社句会。平成13年4月7日(土)。「見事」河内天笑選。
- 一七一六 初出未詳。『檸檬』にあり。句集には、「熊野権現 二句」の前書あり。この句の前に三七五の句。三七五によると昭和39年の作だと考えられる。金鶏は、神武天皇東征の時に、弓の先にとまったという金色のトビ。
- 一七一七 「川柳塔」昭和47年9月号。「板尾岳人兄へ」の前書あり。「山男」の後、一字空白あり。『肉』『愛』『古』『師』にあり。『古』『師』のみ「板尾岳人」の前書。他は初出時と同じ前書。
- 一七一八 初出未詳。『肉』にあり。



一七三八	夕桜 盲人鳩の餌をこぼす	1	8	5	「肉眼」
一七三九	友情に深入山の名もうれし	2	3	9	「愛染」
一七四〇	夕立のように泣き止む男の子	9	0		「有情」
一七四一	夕日も月も飽玉だった里の森	3	0	8	「花径」
一七四二	浴衣着た人に紫陽花似て涼し	8	7		「有情」
一七四三	浴衣着て又一段と名妓たり	2	4	6	「愛染」
一七四四	浴衣にも祇園祭りと大文字	2	6		「乱れ髪」
一七四五	由紀夫の首といくばく距つ焼林檎	1	9	7	「肉眼」
一七四六	雪皚々 湖一つ埋め残し	7	4		「有情」
一七四七	雪国の桜でありし桜漬け	1	9	2	「肉眼」
一七四八	雪化粧した森しかと神おわす	5	4		「乱れ髪」
一七四九	雪巻風三十階の英国屋	3	1	5	「花径」
一七五〇	雪女郎山一つ程裾をひき	4	1		「乱れ髪」
一七五一	雪涅槃 武原はん女舞いおさめ	3	2	3	「花径」
一七五二	雪の夜暮を打つ音の間遠なり	4	1		「乱れ髪」
一七五三	雪霏々と降る血を吐きし朝に似て	4	1		「乱れ髪」
一七五四	雪見酒かの家持も招んでやれ	3	3	0	「花径」
一七五五	雪を掻くもはや旅人にはあらず	1	4	4	「檸檬」
一七五六	逝く春へ白だけ残る五色豆	2	3	0	「愛染」
一七五七	湯槽出る男 海より出るごとし	6	9		「有情」

- 一七三七 「川柳塔」昭和54年6月号。『愛』『古』にあり。
- 一七三八 「川柳塔」昭和44年6月号。『夕桜』『餌を』の後、それぞれ一字空白あり。『肉』にあり。補注一七三六参照。
- 一七三九 「川柳塔」昭和53年12月号。三段映にて(二句)の前置あり。『愛』『古』にあり。句集も同じ前置。この句の前に四五五。深入山は、広島県安芸太田町にある標高1153米の山。
- 一七四〇 初出未詳。『有』にあり。
- 一七四一 「川柳塔」平成7年12月号。
- 一七四二 初出未詳。『有』にあり。
- 一七四三 初出未詳。『有』『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。
- 一七四四 「川柳塔」平成10年9月号。『喜』にあり。
- 一七四五 「川柳ジャーナル」昭和46年2月号。「水鏡集」時実新子選巻頭。「霜月悲鳴」の前置あり。『肉』にあり。句集では、「霜月悲鳴 五句」の前置。七二五参照。
- 一七四六 「川柳雑誌」昭和35年3月号。『有』『檸檬』にあり。皚々は、明るく白いさま。『檸檬』の「雪白々」は誤植だろう。
- 一七四七 「川柳塔」昭和45年6月号。『肉』『愛』『古』にあり。
- 一七四八 竹原川柳会創立40周年記念川柳大会。平成8年9月8日(日)。「森」軸吟。
- 一七四九 「川柳塔」平成8年3月号。『師』にあり。英国屋は大阪市北区の阪急ランドビル三十階にある喫茶店。昭和59年10月号に「名月へ六十階のコーヒー店」がある。
- 一七五〇 初出未詳。
- 一七五一 川柳塔本社句会。平成10年2月6日(金)。「しんみり」軸吟。「雪涅槃」のあと一字空白あり。『師』にあり。『師』には「悼」の前置。『句集』には「悼 武原はん女」の前置あり。武原はんは、明治36年2月4日(水)に生まれ、平成10年2月5日(木)、95歳で死去。上方舞の第一人者。地唄舞「雪」が代表作。
- 一七五二・一七五三 初出未詳。
- 一七五四 「川柳塔」平成12年5月号。↓補注。
- 一七五五 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。句集には、「北陸豪雪」の前置あり。補注一六七参照。
- 一七五六 「川柳塔」昭和52年5月号。各地柳壇「どんぐり川柳会」にあり。『愛』『古』にあり。
- 一七五七 「川柳雑誌」昭和37年7月号。『有』『檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。
- 一七五八 「川柳塔」昭和52年9月号。『愛』『古』にあり。
- 一七五九 「川柳塔」昭和48年11月号。『愛』『古』にあり。

一七五八	夢醒めて紙の音する千羽鶴	2 3 0	「愛染」
一七五九	夢に見る父は父よりやさしかり	2 1 9	「愛染」
一七六〇	夢も理想も音も失いつつ老ゆる	4 8	「乱れ髪」
一七六一	百合も薔薇も花輪になれば俗っぽし	1 5 1	「檸檬」
一七六二	許す方許される方水を呑み	2 4	「乱れ髪」
【よ】			
一七六三	酔い醒めのこれも汚職のダムの水	3 0 1	「花径」
一七六四	羊糞を切るにもふたりぼっちなり	3 1 7	「花径」
一七六五	よう喋り女満腹して帰る	5 1	「乱れ髪」
一七六六	用心棒 国の訛がまだとれず	1 0 9	「有情」
一七六七	幼稚園 もうグループというがあり	9 0	「有情」
一七六八	養命酒汚辱のいのち養えり	2 4 7	「愛染」
一七六九	養老の酒 年金で飲むべかり	3 2 4	「花径」
一七七〇	欲のない父を家 中して案じ	9 3	「有情」
一七七一	横顔の子規も八雲も荒 仏	2 5 4	「愛染」
一七七二	横顔のほうがいとも言いかねる	3 0	「乱れ髪」
一七七三	横縞の雪となりたり 霊柩（柩）車	1 9 2	「肉眼」
一七七四	横 丁の夕日の中の紙芝居	1 1 0	「有情」
一七七五	横向きの女ばかりへ秋の風	1 6 5	「肉眼」
一七七六	横揺りにあしかが歩く金脈へ	2 5 1	「愛染」

- 一七六〇 初出未詳。
- 一七六一 「川柳雑誌」昭和36年3月号。『梅』『愛』『古』にあり。
- 一七六二 もくせい川柳会2号。昭和59年7月23日（月）。「水」安藤寿美子選。
- 一七六三 「朝日新聞」夕刊。平成5年11月13日（土）。「酔いざめの」5句の1句目。『古』にあり。補注二九参照。
- 一七六四 「川柳塔」平成9年7月号。↓補注。
- 一七六五 三井が丘川柳会。昭和52年11月20日（日）。「満腹」軸吟。
- 一七六六 初出未詳。『有』にあり。
- 一七六七 川柳雑誌社本社句会。昭和36年10月7日（土）。席題「グループ」軸吟。「幼稚園 もう↑「幼稚園にも」。「有」にあり。川柳雑誌社本社句会の新選者として、初めて席題の選をする。「川柳塔」昭和46年9月号の目次下エッセイ「川柳忌に思う」に、「私が選者に推された時、今は故人の後藤梅志氏から路郎先生に『待った』がかかったそうである。『川柳を始めて数年のものに選をさせられては、何十年この道で苦勞をしている者の立つ瀬がなからう』というのである。若造に洗練された句の味が判るものかといった老作家の気概であつたらう。このように、その当時の川柳雑誌には、いかにいいえない厭しいものがあつた。」とある。
- 一七六八 「川柳塔」昭和54年1月号。『愛』『古』『師』『喜』にあり。
- 一七六九 川柳塔本社句会。平成10年8月7日（金）。「養う」軸吟。
- 一七七〇 ふあうすと本社句会。昭和33年12月13日（土）。「無欲」根元紋太選。『有』にあり。
- 一七七一 寺尾俊平東洋樹賞受賞記念大会。昭和57年7月25日（日）。「横」藤川良子選で、佳句6句の止め。天地人等ないので最高位の句。『愛』『古』『師』『喜』にあり。↓補注。
- 一七七二 もくせい川柳会。昭和61年6月16日（月）。「横」西森花村選天位。
- 一七七三 「川柳塔」昭和45年3月号。「梅志さんの死」と題する弔文の末尾にあり。「肉」にあり。句集には、「悼 後藤梅志氏 二句」の前書。九九二参照。
- 一七七四 「川柳雑誌」昭和33年2月号。『有』にあり。
- 一七七五 初出未詳。「肉」にあり。
- 一七七六 「川柳展望」創刊号（昭和50年5月1日発行）。特別作品「鎮魂」25句の20句目。『愛』『古』にあり。

一七七七 余呉の湖灯ともし頃は灯がともし  
 一七七八 夜桜へ 街の時計は刻打たず  
 一七七九 吉野大夫高尾大夫の菊の首  
 一七八〇 余生送るように 水族館の鯛  
 一七八一 四つ足で歩けば楽になる傷か  
 一七八二 四つ足を連れた足跡 大砂丘  
 一七八三 四つの手が 卍となりぬ 歓喜天  
 一七八四 淀川と四万十川の生きる音  
 一七八五 淀川の土筆送らんすべもなし  
 一七八六 淀川の水滔々とお元日  
 一七八七 四人目の出来るを 晩 酌聞かされる  
 一七八八 世の移り変わりさびしい雀ずし  
 一七八九 夜の茶漬 パパは象牙の箸鳴らし  
 一七九〇 夜の長さ 襖をあける猫がいて  
 一七九一 世は暗し 腸 饅えた鯉のぼり  
 一七九二 呼び戻す 背なの赤子の名を呼んで  
 一七九三 呼鈴を 大言海の上に載せ  
 一七九四 呼ぶときと呼ばれるときの父の顔  
 一七九五 読み初めの今年は石田波郷集  
 一七九六 読みつけば 冬の未明の白湯の味

2 6 3 「愛染」  
 2 0 6 「肉眼」  
 2 6 7 「愛染」  
 9 5 「有情」  
 2 0 3 「肉眼」  
 1 8 6 「肉眼」  
 3 2 2 「花径」  
 2 9 3 「愛染」  
 7 2 「有情」  
 1 8 3 「肉眼」  
 1 1 8 「有情」  
 2 6 6 「愛染」  
 9 2 「有情」  
 1 9 1 「肉眼」  
 2 7 7 「愛染」  
 2 1 4 「肉眼」  
 1 1 9 「有情」  
 3 4 1 「花径」  
 1 9 0 「肉眼」  
 1 8 4 「肉眼」

一七七七 「川柳塔」昭和58年4月号。『愛』『古』『師』『喜』にあり。余呉の湖は、滋賀県北部にある湖。  
 一七七八 初出未詳。『肉』にあり。  
 一七七九 初出未詳。『愛』にあり。  
 一七八〇 川柳雑誌社本社新春川柳大会。昭和31年1月8日(日)。席題「鯛」土井文蝶選。『有』『樽』にあり。  
 一七八一 ふあうすといづみの会(くらしきのつどい)。昭和46年11月21日(日)。『肉』『愛』『古』にあり。  
 一七八二 初出未詳。『肉』にあり。句集には、「鳥取砂丘」の前書あり。五九二参照。  
 一七八三 「川柳塔」平成10年1月号。  
 一七八四 「川柳塔」平成4年3月号。『古』『喜』にあり。句集には「土佐にて」の前書あり。「川柳塔」平成5年1月号「私の一句」にも発表。  
 一七八五 「川柳雑誌」昭和37年6月号。「香林氏夫妻を思う」の前書あり。『有』にあり。句集では、「武部香林氏夫妻を思う」の前書。武部香林は、「川柳雑誌」淀川支部のリーダーで、副理事長を務めた。明治39年5月29日(火)生まれ。若菜夫人は二歳下。昭和34年、緑内障で失明し、夫人も眼病を病む。同36年、夫婦で西国への旅に出る。同37年9月下旬、徳島県池田町西山で白骨死体となって発見された。警察では、37年の早春死亡と推定。  
 一七八六 「川柳塔」昭和44年3月号。『肉』『愛』『古』にあり。  
 一七八七 「川柳雑誌」昭和32年3月号。「近作柳樽」欄。『有』にあり。  
 一七八八 初出未詳。『愛』『古』にあり。雀ずしは、小鯛を二つに切った形が雀に似ているところから付いた名。  
 一七八九 川柳雑誌社本社忘年川柳大会。昭和30年12月17日(土)。「パパ」麻生路郎選。本社句会に初出席。『有』にあり。  
 一七九〇 「川柳塔」昭和46年3月号。『肉』『愛』『古』にあり。  
 一七九一 「川柳塔」昭和62年6月号。「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品25句「老司祭」の7句目。『古』にあり。  
 一七九二 「川柳塔」昭和48年8月号。『肉』『愛』『古』にあり。  
 一七九三 初出未詳。『有』『愛』『古』にあり。↓補注。  
 一七九四 サークル檸檬。平成5年10月10日(日)「自由吟」互選。  
 一七九五 「川柳塔」昭和45年1月号。『肉』『愛』『古』にあり。  
 一七九六 ↓補注。初出未詳。『肉』にあり。句集には、「白黒記」の前

一七九七 読(よ)み人(ひと)知らず私(わたくし)の好(す)きな相聞歌(さうもんか)

× 読(よ)む限(かぎ)り末法(まつぽう)の世(よ)も面白(おもしろ)し  
「乱れ髪」 3 1

一七九八 読(よ)む限(かぎ)り末法(まつぽう)の世(よ)も面白(おもしろ)し  
「愛染」 2 2 1

一七九九 嫁(よめ)しゅうと 姑(こ)カーネーションは火(ひ)の簇(やじり)  
「花径」 3 1 7

一八〇〇 夜(よる)の汽(き)車(しゃ) 空(くう)気(き)枕(まくら)を譲(ゆず)り合(あ)う  
「有情」 1 1 0

一八〇一 夜(よる)の波(なみ)にふたりの心(こころ)縫(ぬ)わせお  
「肉眼」 1 8 1

【り】

一八〇二 ラーメンに行(ぎょうじや)者(もの)にんにくの名(な)もよろし  
「花径」 3 0 2

一八〇三 来(らい)世(せい)紀(き)もうにんげんの世(よ)ではなし  
「花径」 3 3 3

一八〇四 ライバルが面(めん)を外(はず)して飲(の)んでい  
「乱れ髪」 1 5

一八〇五 磊(らい)落(らく)に笑(わら)うて 不(ふ)安(あん)かくしとく  
「有情」 1 1 3

一八〇六 老(ら)酒(しゅう)へ水(みず)上(かみ)つと勉(と)物(もの)しずか  
「花径」 3 1 0

一八〇七 羅(ら)漢(かん)さんには撫(なで)子(こ)を摘(つ)んできた  
「花径」 3 3 3

一八〇八 落(らく)胤(いん)の身(み)の放(ほう)埒(らち)が募(つ)るなり  
「愛染」 2 5 3

一八〇九 落(らく)選(せん)す百(ひやく)万(まん)言(げん)を費(つい)して  
「愛染」 2 2 1

一八一〇 落(らく)選(せん)の酒(さけ)は問(もん)答(とう)無(む)用(よう)なり  
「有情」 6 9

書あり。「白黒記」は、昭和43年に刊行された高鷲亜鈍の句集。  
↓補注。

一七九七 もくせい川柳会。平成元年1月16日(月)。「名」安藤寿美子選。

一七九八 「川柳塔」昭和49年5月号。『愛』『古』にあり。

一七九九 「川柳塔」平成9年7月号。『師』にあり。

一八〇〇 初出未詳。『有』にあり。

一八〇一 「川柳塔」昭和43年9月号。『肉』『愛』『古』にあり。

一八〇二 「川柳塔」平成6年6月号。「市浦鯨御殿 二句」の前書あり。『句集』も同じ前書。この句の前に一六九八。行者にんにくは、ユリ科ネギ属の多年草。修験道の行者が精力をつけるために食べたという。

一八〇三 「俳句現代」平成12年6月1日発行。「タツノオトシゴの家」10句の10句目。

一八〇四 「川柳塔」平成5年12月号。各地柳壇「川柳若葉の会」にあり。

一八〇五 初出未詳。『有』にあり。

一八〇六 「川柳塔」平成8年3月号。「山の上ホテル新北京」の前書あり。「水上勉」の後、一字空白あり。『句集』も同じ前書。山の上ホテルは、東京都千代田区神田駿河台にある、文人御用達のホテル。新北京は、同ホテル地階にある中華料理店。水上勉は、大正8年3月18日(火)に生まれ、平成16年9月18日(土)、85歳で死去。

一八〇七 「川柳塔」平成12年8月号。『喜』にあり。

一八〇八 「川柳展望」2号(昭和50年8月1日発行)。『愛』『古』にあり。

一八〇九 「川柳塔」昭和49年6月号。「落選す」の後、一字空白あり。『愛』『古』にあり。

一八一〇 「川柳雑誌」昭和33年8月号。『有』『樺』『愛』『古』にあり。

一八一〇 初出未詳。『樺』『愛』『古』にあり。

一八一〇 初出未詳。『樺』『愛』『古』にあり。

一八一〇 初出未詳。『樺』『愛』『古』にあり。

一八四 リストラの見事な素首落としかも

一八五 陸橋は天下の嶮よ 梯子酒

一八六 柳暗やお染久松蔵の窓

一八七 竜宮もへドロ藻泥となりぬべし

一八八 両親の期待通りは背丈だけ

【る】

一八九 ルパンダ（ルパンダ）の一兵の生官 中歌会

一八二〇 ルンペンに王侯の鬚 詩人の眼

【れ】

一八二一 靈枢（枢）車 辻を曲つてから 速し

一八二二 礼状は簡略ながら葉書なり

一八二三 礼を尽くし礼を失し師と旅にあり

一八二四 列車通過駅長の背と列車の背

一八二五 レントゲン寒冷前線通過中

【ろ】

一八二六 老猿の半脚思惟像すぐ崩れ

一八二七 老桜のほつほつと咲く童心か

一八二八 老師九十二 夫人庄死せり

一八二九 老司祭黒にも無垢の衣あり

一八三〇 老詩人ひとり渉らす天の川

3 3 6 「花径」

1 8 8 「肉眼」

2 3 6 「愛染」

2 2 2 「愛染」

1 7 「乱れ髪」

2 1 2 「肉眼」

1 5 9 「肉眼」

1 2 0 「有情」

3 2 「乱れ髪」

1 4 9 「檸檬」

5 3 「乱れ髪」

3 1 5 「花径」

1 8 8 「肉眼」

2 4 7 「愛染」

3 0 5 「花径」

2 8 3 「愛染」

1 5 7 「肉眼」

補注。一八一七 一九七五年版「川柳年鑑」（昭和50年1月25日発行）。

『愛』にあり。一八一八 「川柳塔」平成7年6月号。各地柳壇「川柳若葉の会」にあり。

一八九九 「川柳ジャーナル」昭和48年3月号。招待作品「一兵の生」8句の6句目。『肉』『古』にあり。

一八二〇 「川柳雑誌」昭和40年8月号。「川柳塔」欄の選者は葎乃。『肉』『愛』にあり。

一八二一 「川柳雑誌」昭和36年1月号。『有』『梅』『愛』『古』『師』『喜』にあり。

一八二二 川柳塔あおもり五周年記念句会。平成4年10月18日（日）。『葉書』小出智子選佳句。

一八二三 初出未詳。『梅』『愛』『古』『師』『喜』にあり。昭和37年の作。補注四四三参照。

一八二四 三井が丘川柳会。昭和53年12月17日（日）。『列車』羽原静歩選。

一八二五 「川柳塔」平成9年2月号。『師』にあり。同号巻頭言「初夢」に、十二月三十日（月曜―編者注）、一ヶ月ほども引きずった風邪にどんづまりが来て、近くの病院に入院した。

妻の同乗したタクシーで病院に向かう身は検束されるに似て引かれ者の思いがする。救急治療室からの入院なので主治医も決まらぬ病室で二十四時間点滴がはじまり、その間、反省の連続だった。反省はまた新しいものを知ることから始まる。と知る。とある。この句の他に、（肺炎への元旦の空のいろ）（咳の数生き身も枯葉払うなり）（友を思いわが身を思う窓の星）（西の風邪東の風邪に爺と孫）も発表。

一八二六 「川柳塔」昭和45年4月号。『肉』にあり。↓補注。

一八二七 「川柳塔」昭和55年1月号。『愛』『古』にあり。

一八二八 「川柳塔」平成7年4月号。『悼 武田義章先生夫人』の前書あり。『句集』には「阪神淡路大震災四句」の前書。武田義章は、蕪風の命の思人。八〇四参照。

一八二九 「川柳塔」平成元年2月号。同2年1月号「私の一句」にも発表。「川柳展望」同2年2月号にも発表。特別作品25句「老司祭」の1句目。『古』『師』『喜』にあり。↓補注。

一八三〇 「川柳雑誌」昭和40年9月号（最終号）。「川柳塔」欄の選者は葎乃。『肉』にあり。老詩人は、麻生路郎のこと。

一八三一 「川柳雑誌」昭和37年6月号。『有』『梅』『愛』『古』『喜』にあり。

一八三二 「川柳雑誌」昭和37年5月号。『有』『梅』『愛』『古』

- 一八三一 老醜らうしゆうの 土筆つくしほどにはなけれども
- 一八三二 労働歌らうどうか 蟻ありが歌えば凄せこかろう
- 一八三三 老夫婦らうふうふ布団ふとんの新さらをわびしがる
- 一八三四 老夫婦らうふうふ喜びよろこびごとに疎うとくなり
- 一八三五 ローソンヘグランパをゲットして
- 一八三六 六十ろくじゅうを越こした家出いっせは哀あわれなり
- 一八三七 紹刺せうさしする余生よせいを埋うずめゆくような
- 一八三八 肋骨ろつこつのふくらむ程ほどの若い夢ゆめ
- 一八三九 六法全書ろくぽうぜんしょの重おもさと聖書せいしょの重おもさ
- 一八四〇 爐ろの音おとは遥はるかはるかを目指めざす音おと

【わ】

- 一八四一 若社わかしゃ長頭ちやうあたまが切きれて肚はらがない
- 一八四二 若者わかものの海うみを歩あるけるような靴くつ
- 一八四三 若者わかものの髭ひげにうたれたためしなし
- 一八四四 別わかれして猫ねこの頭あたまを撫なでるのみ
- 一八四五 わが影かげのくの字じに折おれて長い堀へい
- 一八四六 わが過去かこに三日みかづき月型きがたの亀裂きれつあり
- 一八四七 わが子こ男子だんし旭あさひのこときまる裸はだか
- 一八四八 わが妻つまになすべかりしを賀が状書じようかく
- 一八四九 わが庭にわにわれと名付なづけし夢見台ゆめみだい

7 1	「有情」
6 3	「有情」
2 4	「乱れ髪」
1 5 0	「檸檬」
3 3 2	「花径」
7 1	「有情」
1 3 8	「檸檬」
1 3	「乱れ髪」
1 4 6	「檸檬」
3 4 1	「花径」
2 0	「乱れ髪」
3 2 6	「花径」
2 6 6	「愛染」
2 7 8	「愛染」
2 3	「乱れ髪」
3 0 6	「花径」
1 2 9	「檸檬」
6 8	「有情」
3 3 0	「花径」

『師』『喜』にあり。

一八三三 川柳塔唐津支部結成12周年記念川柳大会。平成6年11月2日(水)。「布団」軸吟。

一八三四 川柳雑誌社第9回川柳まつり。昭和37年7月8日(日)。「喜び」中島生々庵選。「檸檬」にあり。

一八三五 「俳句現代」平成12年6月1日発行。「タツノオトシゴの家」の2句目。「グランパ」↑「グランドパ」。

一八三六 川柳雑誌社本社句会。昭和37年4月7日(土)。「家出」麻生路郎選。「有」にあり。

一八三七 せんば川柳社創立15周年記念川柳大会。昭和38年11月10日(日)。「雑詠」岡橋宣介選。「檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。↓補注。

一八三八 明和病院青蛙川柳会。補注三六四参照。

一八三九 「川柳雑誌」昭和38年1月号。「聖書」には、「バイブル」とルビあり。「檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。

一八四〇 サークル檸檬。平成5年8月8日(日)。「遥か」古川喜久子選。

一八四一 初出未詳。

一八四二 「川柳塔」平成11年7月号。↓補注。

一八四三 「川柳塔」昭和59年3月号。「愛』『古』にあり。

一八四四 「川柳塔」昭和62年7月号。「義妹の死」の前書あり。「古」にあり。句集には「三句」の但書。一五二五参照。

一八四五 第33回川柳塔きやらぼく忘年句会。平成9年12月7日(日)。「堀」軸吟。

一八四六 川柳塔本社句会。平成7年4月7日(金)。「亀裂」軸吟。

一八四七 「川柳雑誌」昭和40年1月号。「十月二十六日長男充誕生」の前書あり。「いとこ」↑「如き」。「檸檬』『愛』『古』『師』『喜』にあり。「檸檬』『愛』『古』には「長男充誕生」二句」の前書があり、この句の後に一七四。「師』『喜』には、この句のみ収録。

一八四八 「川柳雑誌」昭和37年3月号。各地柳壇「にしなり支部句会」にあり。昭和37年2月4日(日)、せんば川柳社本社句会「自由吟」岡橋宣介選にも出句。「有』『檸檬』『愛』『古』にあり。

一八四九 「川柳塔」平成12年5月号。

一八五〇 初出未詳。

一八五一 サークル檸檬。平成6年1月9日(日)。「飛ぶ」奥田みつ子選秀句。

一八五二 「川柳雑誌」昭和38年9月号。「檸檬』『愛』『古』にあり。

一八五〇	わが家にもロンドンからの客がくる	1 5	「乱れ髪」
一八五一	驚の飛ぶ爪の先まで隙が無し	3 4 2	「花径」
一八五二	驚の眼も駒鳥の瞳も鳥の目や	1 4 1	「檸檬」
一八五三	童歌生別死別異ならず	2 2 8	「愛染」
一八五四	割箸にこうも格式貧富の差	3 1 0	「花径」
一八五五	われここに残り魍魎となれば	2 7 4	「愛染」
一八五六	われに過ぎたり 絢爛と死ねる歳	1 6 1	「肉眼」
一八五七	われもひとも千手観音阿波踊	1 3 2	「檸檬」
一八五八	われもまた己を知らずお元旦	2 5 5	「愛染」
一八五九	われら迎うオアフは波のレイかけて	2 2 6	「愛染」
一八六〇	われをしも馭馬貴人と名付けんか	2 5 5	「愛染」
一八六一	ワンズアポンナタイムと孫について行く	3 4	「乱れ髪」
一八六二	ワンマンも胃のたかぶりを持て余す	1 9 4	「肉眼」

り。

一八五三 「川柳塔」昭和51年9月号。『愛』『古』にあり。

一八五四 「川柳塔」平成8年3月号。「格式」の後、一字空白あり。

一八五五 「川柳塔」昭和61年12月号。「懸空寺」の前書あり。『古』にあり。『句集』には「二句」の但書。この句の後に三八四。12月号「中国への旅の印象」中に、懸空寺についてこう記している。「オプシヨナルツアー」というより、全員参加の『天から牡丹餅ツアー』、懸空寺への一日は、文字通り肝に銘じた旅だった。シルクロードへ向う旅人が、こもこも心身の労を傾けるような寺だ。多くの仏像は、一口に言えば、泥絵の塑像で、かんばせも整ってはいない。第一、仏教、儒教、道教、ラマ教、回教、キリスト教などの寄り合い世帯で、説明を聞いていても、いかにもややこしい。堂宇といえば、百米を超すほどの絶壁の高所にへばりついている。まるで夜の蜘蛛が数ひき黒い壁に足を踏んばっている態だ。見るからに魍魎魍魎になってしまいうような構えに、一同ぞっとする。拝観をすませて下りて来て、再び見上げると、更に怖ろしい思いのする数奇な寺であった。」補注一三四参照。

一八五六 「川柳平安」の「星座」句会。昭和41年1月15日(土)。「若い」軸吟。「川柳塔」昭和41年3月号にも発表。『肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。「川柳展望」8号(昭和52年2月1日発行)の《人間をもとめて》で、天根夢草(聞き手)の「中で私が一番好きな句、われに過ぎたり絢爛と死ねる歳。これは全く素晴らしい。男の中の男という感じですよ。」に対して、「この句は『平安』の席題の軸吟やね。俊平、久美子と一緒に京都で遊んだ日で、ムードが良かったんかな。博造が、その時の句箋を今も持ってくれているそうで……」と答えている。

一八五七 初出未詳。『檸檬』『愛』『古』にあり。句集には「阿波踊 二句」の前書あり。この句の前が一一八九。

一八五八 「川柳塔」昭和56年1月号。『愛』『古』にあり。

一八五九 「川柳塔」昭和51年3月号。「川柳塔同人ハワイ吟行記」中にあり。『愛』『古』にあり。句集には「ハワイ紀行五句」の前書あり。補注二〇五参照。

一八六〇 「川柳塔」昭和56年1月号。『愛』『古』にあり。↓補注。

一八六一 「川柳塔みちのく」31号(一九九八年五月)。投句葉書の消印は、平成10年3月11日。「ワンズアポンナタイムと」↑「ワンサボンナタイムト」。「タイムト」の「ト」は誤植。

一八六二 「川柳塔」昭和45年11月号。『肉』にあり。

## 補注

三 「二兵の生」は、他に（深眠り 母娘相似のカメオ置き）（弥次郎兵衛一人一点殉死かな）（裏切られあたたかきもの放尿す）（姦計を鯛の目玉にさげすまる）（ルバングの一兵の生 宮中歌会）（男ばかり澄む 橋立は松の木ばかり）（暮れるばかり暮れるばかりの木屋町や）の7句。（弥次郎兵衛（男ばかり）の2句は、『句集』未収録。）

六 平成5年8月21日（日）、香川県大川郡白鳥町中央公園に、（島一つ買うて暮らせば涼しかろ）、福祉センター白鳥温泉の螢橋のたもとに、西尾栞の（温泉や坐りらかむに寝る羅漢）の句碑が建立された。「川柳塔」平成6年1月・2月号に発表した句のうち、（あかねさす）（初日かげ）（孫膝に）を『句集』「愛染」287頁に、（生身より）（会い別れ）（南天と）（あと一歩）を『句集』「花径」の冒頭299頁に収録している。

八 「川柳塔」昭和43年8月号の「柳界展望」に、寺尾俊平氏と、「六月九日（日曜）編者注）柳都川柳社二十周年大会」に出席。七、八日は能登半島を一周、十、十一日は佐渡を観光。」とあり、「のろま木偶まばたきをして人嗤う 俊平」の句が紹介されている。「川柳塔」昭和60年6月号「編集後記」に、郡上八幡の翠柳吟社の大会に参加して、平瀬温泉に泊まったときのことを記している。「☆川柳仲間には軒をかく人が多い。平瀬温泉の宿では栞主幹、俊平、岳人、正坊さんら五人で寝た。☆俊平さんと初めて弥次喜多道中をしたのは、能登半島一周から新潟へ出て佐渡へ渡る旅だったが、四泊するうちに睡眠不足で体重が一貫目近く減ってしまった。佐渡では遂に我慢ならず布団の上に正座して『えいっ』『やっ』と掛け声を掛け、止まっている間に寝入ろうとするが神経冴えるばかり、『バカ、マヌケ』を繰り返した。今は、軒のリズムに呼吸を合わせていると、知らぬ間に寝入ってしまった。三人三様の軒を楽しむ境地の達人になった。☆俊平さんちの猫のお染は知らぬが母の残したわが家の猫もいい軒をかく。」

十八 「川柳塔」平成11年3月号巻頭言「パーティー」中に、1月24日、『時実新子全句集』出版のお祝い会に出席したことを記している。

新子さんは参会者二百四十名への記念の色紙にすべて異なる句を書いたという。

まるで大字典のような厚さの句集は鮮やかな朱色の装いで袋に入っていた。

昭和三十八年に発刊の句集「新子」はブルーであった。新子さんの色は赤やで、臙脂がええ、と私は進言していたが

冬生まれこれがいのちの青である

と当時の句にある通り、私には意想外の色で登場した。それが今回、卑弥呼の出現のように燦然と現れたのだ。まさに

あかあかや あかあかあかや あかあかや

である。新子さんは三十五年後の今日の日を見越して、この色を取っておいたかと思ったりもしたのである。

司会の道上洋三氏の質問に答えて、

「新子さんの川柳出発の頃の句を拝見して、幻の名馬ときのみのると勝手に呼んでいたが、今では幻ではなく、日本の川柳界に存在感のある、ときのみるになられた。体をいとお互い長生きしましよ、と帰るまでに言いたかったです。」と私は発言した。

「川柳大学」百号記念特大号（平成16年4月号）に、「新子とは」と題するエッセイを寄せている。

あかあかやあかあかあかあかやあかあかや

あかあかあかあかやあかあかや

これは樹上禪定の上人明恵の和歌で、哲学宗教的思索を経た透徹したあかである。

新子のあかはちよつと違う。花に譬えればバラより曼珠沙華に近い赤で、原野を焼き尽くす業火のあかだ。

もつと突詰めると卑弥呼の赤である。オーラを纏い、それ自体が火の化身なのである。

処女句集『新子』が出て四十年ほどになるが、あの時寺尾俊平は、「これこれ、この深いブルーが新子の色なんだよなあ」と言った。「あほ言え、新

子は真つ赤な、少なくとも臙脂でなけりや」と私。

時を経て、一九九九年の誕生日に『時実新子全句集』が誕生した。

その時、新子は真紅の衣装ですつくと立った。

二二 寺尾俊平第二句集『風の中』解説（『橘高薫風川柳文集』所収）に、俊平の（笛も太鼓もその後そのまま風景で）を挙げて、次のように述べている。

句集『葦川』発刊のとき、俊平さんは葉を作成しました。その葉に私は次のように書いたのです。

「俊平さんと私は、まるで弥次さんと喜多さんである。秋祭の太鼓と笛のようだとも言える。二人が会えば、前句と付け句さながら自然の調和が出来上がる。私は俊平さんから川柳はやさしさであることを教えられたる。

秋が来て笛は太鼓を恋しがる 薫風

笛は（ね）、太鼓は音（おと）。笛は細く鋭く遠方へ透らんことを願い、太鼓は豪快に響いて辺りを広く抱擁しようとしています。

二六 「入院手術 十句」は、一二五〇、一一三九、一五九二、六五二、三七七、二六、七四五、一四七、一七〇六、一三七の順に収録。「川柳塔」

昭和45年11月号「柳界短信」に、「橘高薫風は十月六日（火曜―編者注）

急拠大阪厚生年金病院へ入院、目下胃の手術をするため種々の検査をはじめている。八日に東京のホテルオークラで挙げられる柳人藤巻昌子さんの結婚披露宴へも止むなく欠席、楽しみにしていた山陰川柳大会へも不参加になってしまった。六日八日、中島生々庵主幹のお見舞いを受ける。院長に面接病状を聴取して下さる。深謝。すつきりしてまたお会いしましょう。（三三二一号室ベッドで）とある。「川柳塔」昭和45年12月号「柳界展望」に、

「十一月十六日（月曜―編者注）大阪年金病院を退院。」とある。

二七 「中国吟行 十句」は、六九九、七八一、六七一、七四〇、九五九、六八九、四二五、八七七、二七、一一〇〇の順に収録。昭和59年9月24日（月）〜29日（土）、川柳塔社中国吟行の旅（上海・蘇州・桂林）が催された。川柳塔社の同人・誌友は19名参加。

四九 不垢不浄は、般若心経の言葉。「空」の認識に立つと、清らかなものも汚いものも存在しないことになる。小出智子を詠んだ句。小出智子は、大正

15年10月28日（木）に生まれ、平成9年6月22日（日）、70歳で死去。「川柳塔」平成9年8月号の巻頭言「六月有事」に、「今ここに時実新子さんの書

信がある。『拜復 小出智子さん』逝去のおしらせにおどろきました。一時は、私が茨木時代に通っていた医院へ智子さんも通院されていました。あなたやうちの父と打たれた麻雀の音、智子さんのピシッピシッという高温が今も耳に残っていて、あの音に私は智子さんの芯のお強さを見た思いました。『

（略）／句集『蔦の墓』の出版を曾我さんにお頼みに行ったときのことであった。／祝典（磯野いさむ金婚お祝いの会―編者注）から通夜へ、私は板尾岳人君と暗い夜道を黙々と歩いた。／翌日の葬儀におだやかなお顔を見た。

いい処へ行かれる。それだけでよかった。」とある。同号には、この句と五〇の他に、（あじさいは姐御肌ともいう噂）（藍に終わり鐘の音に果てあじさい忌）（あじさいのはや明るる間に空の青）も発表。「川柳塔」平成10年6月号に、（あじさい忌湖一つ持つ人と）を発表。

五一 大阪市天王寺区夕陽丘町の勝鬘院で、6月30日〜7月2日まで本尊愛染明王が開帳される。愛染明王は全身赤色で、愛欲煩惱がそのまま悟りであることを表す。「川柳塔」昭和54年1月号「私の一句」にも発表。

八九 「川柳塔」同年7月号の「編集後記」に、「六月十五日から青森への旅に出た。寺尾俊平、海地大破ら畏友に曳かれての旅で、岳人さんを誘ったら、『僕も行くと関西に善人が居なくなるので今回は止めにおきます』とのこと、久しぶりに気づい気ままの解放感を味わった。」とある。8月号には（友三人鼎のごとし風の中（竜飛岬））の句がある。

一〇〇 勇は、吉井勇（1886〜1960）。（かにかくに祇園は恋し寝るときも枕の下を水の流るる）が有名。白秋は、北原白秋（1885〜1945）。福岡県柳川市高畑公園に、白秋最後の著書、水郷柳河写真集『水の構図』の序文の一節が碑に刻まれている。「水郷柳河こそは、我が生れの里である。この水の柳河こそは、我が詩歌の母體である。この水の構図この地相にしてはじめて我が體は生じ、我が風は成った。」

一三四 昭和61年9月18日(木) 24日(水)、第2回川柳塔社中国吟行の旅(北京・万里の長城・大同)が催された。川柳塔社の同人・誌友は20名参加。「川柳塔」昭和61年11月号「麻生路郎先生曾遊の記」中で、薫風は路郎の記録を引用しながら、天壇について、こう記している。「明の永楽十八年に建てられた天壇は、大円楼の祈年殿で折穀壇といふ三層に築かれ、毎年正月上辛の日に五穀豊穰を祈願される」ところ。「川柳塔」同年12月号に、中国の句を5句発表している。この句と、(権勢といえ石舫を水に浮く(頤和園)、(白塔に風荷葉の風ばかり)(北海公園)、(われここに残り魍魎となれば)(懸空寺)、(菩提樹の数珠ありがたや香染まず)(華嚴寺)。そのうち、句集に収録されたのは、この句と(われここに)の句。

一三七 昭和46年の年賀状に、「昨年は八ヶ月に亘る妻の入院と 私の胃潰瘍の手術が続いて大変な年でしたがもう二人ながら全快致しました 今年は長女が中学へ進み 長男が小学校へ上がります ころろ敦い柳友との出会いもたのしまれ 明るい年でありますように願っています」とあり、(すばらしい予約へ続くお元日)(胃半分肺半分の湯呑かな)の二句を添えている。

一四五 「川柳塔」平成8年1月号の巻頭言「新年新生」中に、旧臘、きゃらぼく忘年句会の後、先生(西尾菜―編者注)ご推奨の海潮温泉へ足を伸ばし、牛尾荘の岩風呂に浸りひとりごちながら、そして翌朝には、夜中降り積った庭の雪を見ながら、囲炉裏を囲んで頂いた朝粥の味に、先生との四十年のご厚誼に心からのお礼を申して参りました。/また古稀に際して『古稀薫風』なる第五句集を、予定より大幅に遅れながらも上梓することが出来ました。おかしなことに、川柳塔社主幹となりました今、句集を手にしてとても恥ずかしいことに思えるのです。路郎・栗岡先生のご生前には何らの抵抗もなしに句集を出し、奔放に振舞ってきたことなのに、これではよいのか、という思いが強くなります。」とある。四五参照。

一五〇 摩天涯は、隠岐国賀海岸にある。海面から二五七米の高さで垂直にそそり立っている。「川柳塔」昭和50年7月号、吉岡通児の「大阪 山陰交流隠岐吟行」から、一部抜粋する。五月二日(金)に一日目の観光を終

えた、次の日の記事である。

昨夜半からの降雨に二日目の別府への航路は気が重かった。別府上陸を機に雨はますます激しさを増した、折角の黒木御所の参拝もそこそこ二泊目の宿シーサイドホテル鶴丸のロビーに腰を下す。昼食後、天の配剤も好ましく雨が上り予定のコース国賀遊覧の船客となる。海から見る島々の景観に並せ老船長の錆の効いた声音によるガイド、はては海の男の間かす隠岐民謡は船縁を叩く波濤の調和を得て旅情は最高、中でも三百米になんなんとする摩天崖を仰ぎみるに至っては言う言葉を知らず、の感をそれぞれに灼きつける。

橋高薫風子

大阪市北区堂島上二丁目五二

大正15年7月11日。

。出生地 尼崎市上阪部三九六

。職業 旅館

。電話 34・四六一三

。自信の句 牛の背で笛吹く恋がしてみたし

。趣味 釣り

。川柳に手を染めた年月 昭和三十一年二月

一六六 内藤鳴雪は、1847年4月15日に生まれ、1926年2月20日、死去。享年79。本名は素行。鳴雪は俳号。

一六七 『棒』『愛』『古』では、「北陸豪雪 三句」として(豪雪の今年つくらぬ雪だるま)(雪を掻くもはや旅人にはあらず)(積雪一丈その下の金魚の死)。その後、(降る雪に貧しきものが先ず隠れ)。最後に、「兼六公園」の前書で、(美しいものに雪置く美しさ)。「句集」では、「北陸豪雪 五句」としてまとめて同じ順に収録。ただし、(美しい)の句には同じく「兼六公園」の前書あり。「川柳雑誌」昭和38年2月号「柳界展望」に、「一月十三日から三日間家族で金沢湯涌温泉に遊ぶ。大人は大人の、子供は子供の心で深い雪を嬉しがったと寄信された。兼六公園で『氷柱さえ夕顔亭の氷柱なり』と

ある。3月号発表の〈温泉のゆつたりとした手拭よ〉(降る雪に貧しきものが先ず隠れ)、4月号発表の、「北陸豪雪」と前書きのある〈積雪一丈その下の金魚の朱〉も、このときのことを詠んだ句だろう。

一六九 「黄なコート」の連作10句は、「川柳塔」の自選集に、平成13年の2月号と4月号に発表された。2月号に発表した次の1句は、『句集』には未収録。

空港はベンツを降りる黄なコート

生前、その理由をお聞きしたところ、「ベンツは、ええかつこしいというか、エリート意識の表れというか、ハイソサイアティを感じさせるもので、自分の句として残すことのためにためらいを感じたのやろと思う」、だいたいそのような趣旨のことをおっしゃった。『句集』には、一六四四、四五二、一六四五、九一九の順に4句。その後他句3句を挟んで、一六九、七五三、四九一、三二六、三三八の順に5句収録。合計9句収録している。

一八二 藤田東湖は、1806年5月4日に生まれ、1855年11月11日死去。享年49。幕末の儒学者。水戸藩士として徳川斉昭を補佐する。尊皇攘夷論者として知られる。その著「回天詩史」の後半部に、「敬神・尚武を以て政教の根本と爲し、以て尊皇攘夷の大義を明らかにするに至つては、之を鬼神に質して謬らず。百世その人を俟つて惑はず。資性驚なりといへども、冀はくは畢生の心を竭くし、終身の力を極めて事に斯に従ひ、上は国家の鴻恩に報い、下は以て先臣の遺志を述べんとす。所謂此の心を神明に誓ひ、斃れて而して後已む、これ吾が一分の衷念なり。」とある。「斃れて而して後已む」は、死ぬまでやりとおす、という意味。自分は鈍才ではあるが、神に誓つて生涯、尊皇攘夷運動をやりとおすという決意を述べている。

一九二 「山下清」は、大正11年3月10日(金)に生まれ、昭和46年7月12日(月)死去。享年49。放浪画家。貼り絵で有名。

一九四 平成5年の年賀状に、こうある。

昨秋十一月七日内孫に女兒誕生 私は早速  
うれしきは みのりの秋がわが家にも  
と一句書きつけました 長男夫婦が命名した孫の

名は みのり でした 私の句とは偶然の一致でしたが それ故一層うれしくてなりません 十年日記を買うほどの弾みようです

めでたさや みのりの玉とこつんこ 薫風

一九六 平成13年9月1日(土)、岡山県久米南町川柳公園に句碑建立。句碑では「鱗」は平仮名。『古』『師』『喜』にあり。補注二一九参照。

一九八 「阪神大震災 8句」は、一〇六五、一九八、九三九、一二〇二、一六四、一〇八四、一一八五、六二〇の順に収録。

二〇七 戎橋は、今宮戎に通じてるので付いた名。ナンバのメツカなので、通称「ひっかけ橋」とも呼ばれている。

二〇八 「川柳雑誌」昭和31年9月号「近作柳樽」初巻頭は、次の7句。

〈牡丹へは蜂も静かな訪問者〉(獲物の大きさに蟻うろたえる) 〈淋しさに宿立ち出れば霊柩車〉(ハイヒールの高さ虚栄に正比例) 〈仏様へ青いバナナを供えとき〉(犬連れて俵せそうな散歩をし) 〈世話好きが上手に鮎の骨を抜き〉。翌々月の11月号でも、次の7句で巻頭を取っている。〈温泉の雨染焼の筆を執り〉(女郎花のような女はもう居らず) 〈ペコ／＼の鋸を素人もて余し〉

〈風呂の熱さこらえる様な生活むき〉(立話長うて犬も坐り換え) 〈左遷から住めば都と便りが来〉(物干のマダムへ秋の空の藍)。

二〇九 ロッキード事件を詠んだ句。昭和51年7月27日(火)、田中角栄逮捕。8月16日(月)、受託収賄と外為法違反容疑で起訴。10月12日(火)、東京地裁が、田中に懲役4年、追徴金5億円の実刑判決を下す。

二一一 大野源一九段は、明治44年9月1日(金)に生まれ、昭和54年1月14日(日)死去。享年67。「振り飛車の名人」と呼ばれていた。

二一九 「酔いざめの」の題で、「酔い醒めのこれも汚職のダムの水」(鉛筆の匂いは五十年同じ)〈踏鞴踏む阿形峠 形人間座〉(鱗雲一枚破れ亡母の窓)〈九月十月行き着く酒の十二月〉の五句。

二二三 「師弟」の題で、「温泉で生まれたときの顔になる」(母刀自の在せし頃の御御御汁)〈老いらくに吉祥天のぬいぐるみ〉(師弟あり一人は天に一人地に)〈毒の世の達陀の火と閻伽の水〉(ムンクの絵外真っ青な雪景色)二二

月盡いのち盡へとつづくなり」の7句。

二三一 「川柳塔」昭和43年3月号「柳界展望」に、「二月四日（日曜―编者注）奈良春日大社の万灯籠・興福寺の鬼追式を見物。今回も村上春巳氏の好意で案内をしていただいた。」とある。

二三四 「川柳塔」昭和41年5月号「柳界展望」に、「三月十九（土曜―编者注）、二十の両日、大山、皆生温泉、松江、大社と巡遊、大陸の黄塵のまじった大山の茶色い雪と、殊に千鳥城には大いに感動した。グループので柳人との交歓時間が持てず残念だった。」とある。

二三六 大津絵の鬼といえは、「鬼の念仏」。殊勝げな偽善者の邪心を老いに見立ててからかった図。家族の留守を預かりながら酒を呑む自分を「鬼の念仏」に見立てた。

二四九 ロッキード事件を詠んだ句。昭和51年2月4日、米国外交委員会多国籍企業委員会が、ロッキード社が対日工作費として約30億円を使つたことを暴露。2月6日、ロッキード社副社長のコーチャンが、児玉誉士夫に21億円を支払つたと証言。2月16日（月）、国際興業の小佐野賢治、丸紅の伊藤宏専務、全日空の若狭得治副社長の証人喚問が執り行われた。三人は、「記憶にございません」を連発した。四七八、五三〇、五九〇の句も同じ号で発表。

二五一 一九九九年版「川柳年鑑」（一九九六年七月一〇日発行・緑書房）に、時実新子・尾藤三柳との座談会「受賞句・問題句を斬る」が掲載されている。その中で薫風は、「初心時代に、また自分の句になってしましますけれど、療養生活時代でしたけれど、いろんな本を読んでいまして、有島武郎の『カインの末裔』とか、『或る女』にしろ、『惜みなく愛は奪ふ』というような小説、全集を見たりしていますと、『惜みなく愛は奪ふ』なかなかいい言葉やな、そこへ曼珠沙華がひらめき、ベッドの上でつくった、そういう連想からひらめいたりしたのを、ああ、一丁できた、と言いながらやっていた時期があります。」と云っている。

二五三 「海の日」は平成8年から施行された祝日。平成8年は、7月20日。明治天皇の東北巡幸の帰着日で、海洋国日本の繁栄を願う日。乙旗は、信

号旗だが、日本ではかつて、後がないという決戦の意志も込められた。

二五四 「川柳塔」昭和55年7月号の目次下エッセイ「青森行」全文を掲げる。路郎先生に随行して青森県川柳大会に出席したのは昭和三十七年七月で丸十八年が経つ。

これには藤村メ女さんも同行された。

十和田湖よみな酒になれ旅人へ 路郎

この句が先生の筆蹟の凸版で新聞に出た印象も今に鮮やかに目に残っている。私は席題「B・G」の選を担当した。天位の句は「税務署へ元B・Gの妻をやり」というのであった。帰途、仙台では後藤閑人、菅原一宇、赤井滯子の諸氏に、東京では、川上三太郎、村田周魚、塚越迷亭、高須啞三味、富士野鞍馬、阿部佐保蘭といった大家の方に引合わされ、その後の出会いも、特に親しく声を掛けて下さる因となった。川柳塔の同人の山根白星氏ともその時が初対面で、西銀座の瀟洒な料理屋で一献頂戴したのだった。

二度目の青森行は昭和四十五年の七月、生々庵主幹のお供をした時で、第二十四回の大会だった。この大会の前夜、浅虫温泉のホテルで、主幹から私の誕生日（七月十一日）を祝って乾杯をして戴いた。

日本語が時々まじるかの如し 生々庵

前回同様にお世話になった同人の工藤甲吉氏や今は亡き木村涼人氏をはじめ、青森の川柳人との交歓、そして、さい果ての竜飛岬への旅は共に忘れ難い。私は席題「悪友」の選をしたが、「酔うて来て悪友妻と握手する」が天の位だった。「馬奮さま」と呼ばれていた松尾馬奮翁も亡くなられていたし、和室が洋室の椅子席になったこともあって、会の雰囲気は一変していた。

さて、この七月十三日（日曜―编者注）に開催の第三十四回青森県川柳大会には私が招かれて講演と選評をすることになった。なつかしさ、うれしさが交錯して旅情はすでに滾りかえっている。大会の雰囲気は前回と余り変化はないことだろう。しかし、青森県作品は、十年以前より誠に目ざましい脱皮を漸次推し進めていて刮目するものがある。合同句集、個人句集の刊行をはじめ活発な川柳活動は、ペテランと新進との和があつてこそはじめて可能なことであると思われる。幸いに、中林瞭象氏からは黒石へ、小泉紫峰氏

からは八戸へ立寄って歓談の機会を持つようお奨めがあったので、可能な限り友誼に甘えたいと思っている。

私が今回招かれたことも、前二回の交流があつたのである。つまり、路郎先生や生々庵主幹が、その種を播いて下さつた訳である。今回も何とか後続の若い人たちに同行を願つて、青森県の川柳界と川柳塔とのつながりを太く致したいのだが、前後少くとも二泊の行程、青森の遠さと思うとともに、私の恵まれた環境に仕合せを感じたのである。

二六二 「川柳塔」同年12月号の「編集後記」に、「二三夫さんとの思い出は限りがない。私の日記帳に九月二十六日の深夜にかけつけたとき、印象された危篤の容貌がスケッチされている。髻の切れたサムライのそれである。鼻から胃へ通したドレーンを押さえた絆創膏が痛々しい。」とある。

11月号には、〈曼珠沙華危篤の人（急ぐ旅）〉も発表。不二田一三夫は、明治44年4月30日（日）に生まれ、昭和55年10月11日（土）死去。享年73。

標語「鬼畜米英」の作者として知られ、秋田実に師事した漫才作家でもあつた。12月号には、「二三夫さんを悼む」の前書きで、〈さむらいのいまわの洒落も聞かざりき〉を発表。

二六五 「鎮魂」の題となつた〈鎮魂の松杉桜桜よし〉は、句集には未収録。

〈わたしの目に祇園精舎の赤い花〉（受験子の飲む水直ち知恵の水）〈千代紙に劣る昭和の女ども〉（雪霏々と滝の吐き出すものでなし）〈默契へマツチの暖を持ち続け〉（血はうすくなるばかりなり相逢わず）〈学者政治屋政治屋教師四月馬鹿〉（杯なめて木曜とらえどころなし）〈赤い雪蒼い雪ふる夢地獄〉（人形に魂入れよ春の雷）〈帰りになんいざと東京腹話術〉（雪やんでわたしと死んでくれませんか）も『句集』に収録されず。ただし、「雪霏々と」〔杯なめて〕の句は、『愛染』『古稀薫風』に収録。

二七六 弟橘媛は、日本武尊が東征中暴風で困つていたところ、我が身を海に投じて海神の怒りを鎮めたことで有名。

二七九 「川柳塔」昭和41年6月号「柳界展望」に、「五月一日から水郷（潮来）犬吠埼へ遊び、生前水郷を案内すると、しきりにお誘いを受けていた啞三味氏の冥福を祈りながら一人旅を味わつて来た。」とある。

二八〇 宣介の秀句短評に、「鏡の中へ歩み去る」の表現はよかつた。おとめの死の永遠のいのちを食い入るように見つめている作者の、そして読者の視線の中のイマージュに、縛りと遠さがある。若しもこの句が『鏡の中へ歩み出る』の凡想であつたらば、もちろん没である。」とある。『肉』『愛』『古』『師』『喜』にあり。

二八八 「川柳塔」昭和43年7月号「柳界展望」に、「五月十一日（土曜―编者注）から十三日まで、尾道、耕三寺、阿伏兔観音、輛を観光、高鷲亜鈍氏と再会対談した。」とある。

二九一 「川柳塔」平成10年7月号の巻頭言「こんにちは 川柳塔です」に、「路郎忌の七月に当り、このようなことを殊更に強調したのは、私の思い上がった油断から、突如呼吸困難の発作を起したからである。五月三十一日（日曜―编者注）の夜中のことで、救急車で病院に運ばれる。幸いに心臓が頑健そのものだったことで回復に向かつたが、取り敢えず二十四時間の酸素吸入と静養を申し渡された。」とあり、同号には〈媾曳も酸素ポンペを背たろうて〉を発表している。

三〇一 『セレクション』柳人8 田中博造集（二〇〇五年十一月三十一日発行。邑書林）の略歴に、「一九六五年、橘高薫風・窪田久美の紹介で『ふあうすと』同人であつた安西峰代と知り合う。一九六六年一月一日（土曜―编者注）、堀豊次夫妻の媒酌で結婚。」とある。

三〇七 端唄「槍さび」の歌詞は、「槍は錆びても名は錆びぬ 昔忘れぬ 落とし差し エーサアサーヨイ、ヨイ、ヨイ、ヨイ、ヨイ、ヨイ エーヨイサー 槍の穂先を奉書で受けて おせき召さるな我が友よ エーサアサー 柳生流儀の荒木又右衛門」

三一四 川維西成支部での作か。「川柳塔」昭和45年3月号の、「梅志さんの死」中に、「にしなり句会を<sup>注</sup>主宰しておられた当時、『恩借』という題が出た。今にして思えば梅志さんでなくてはの感の深い出題であつた。」とある。

注 「川柳塔」同号に、清水白柳が書いた「ああ、梅志さん」中に、「昭和三十三年十月二十四日に梅志居で『川維西成支部』句会を開いてからの発展は目をみはらせるものがあつた。（川維西成支部は支部長、土井文

蝶で以前からあったが句会活動はして居なかつた)句会は三十七年二月頃まで続いていて、その間に一年間の句会吟を集めた特集号を、三十三年、三十四年、三十五年と三回発行されているのも梅志さんの熱心さを物語っていると言えよう。」とある。

三四四 「川柳塔」平成12年5月号の巻頭言「川柳の質」の後半にこうある。『俳句現代』六月号(注1四月二十五日発行)に「俳句と川柳」の企画があつて、川柳十句提出の依頼を受けた。

現在マスコミに取り上げられる量産的浅薄な俳句と川柳への問いかけになるありがたいものと喜んで参加した。そして私なりに自分自身で問題提起をしながら作句をした。第一には注2俳句と川柳をずばり一句に仕立てる。誰もそう感じてはくれないだろうが、その川柳になぞらえたフレーズを作品のタイトルにした。第二には川柳にもいる頑迷な定型固執者に、リズムの融通無碍なるを訴える。外来語の増加に目立つ昨今、一句に外来語三つを使用してみる試行錯誤。ユーモアの一句と恋の一句。あとは川柳らしい現代社会と人間への批判をうがちを利かして述べればよい。かつて注3朝日新聞夕刊の文化欄に二度、五句と七句の掲載があつたときも、滅多にない機会を生かすのにまことに涙ぐましい齟齬を繰り返した。一句なりとこの句で勝負というのを生まんがためである。今回はそういう句は皆無であつた。ユーモアも恋の句も力足らずで出せなかつた。髀肉の嘆と言ふべきか。

四月二十五日角川春樹事務所発行の一冊、『俳句現代』六月号を、一見下さい。

本誌に掲載の次の五句と注4自選集の五句は、その落穂拾いである。

作品

弥生待七つの孫の机かな

雛の酒呑みに注ぐは卑怯者

残念の幼な駈けずり回るかな

老いらくのこぼれこぼれて続く恋

蕩尽は金だけでないことを知る

注1 「俳句現代」六月号の奥付によると、発行日は六月一日。

注2 「川柳塔」平成12年6月号の巻頭言「丸丸連休」に、「(略)五十年前から現実に返り『俳句現代』を開く。つたない十句が巻頭にあつた。『川柳大学』の露払いを勤める形だが、伝統派の作品を代表してよしとする。ノダイタンな独自の編集だが、きつと次々と各柳社の作家の登場が続き、俳句との違いを展開して頂けるものと思う。私の句の『風見鶏の館』は俳句を、『タツノオトシゴの家』は川柳を象徴させたつもり。」とある。

注3 平成5年11月13日(土)と、平成11年2月26日(金)の二度。それぞれ、補注二一九と補注二二三参照。

注4 自選集の五句は、(雪見酒かの家持も招んでやれ) (わが庭にわれと名付けし夢見石) (嘴の形に鳥の生きるべし) (ウインクの雁字搦めに会いにけり) (春にして死ぬときの灯は月がよい)

尚、「タツノオトシゴの家」は、「革命さをはじめてコアラ飲んだ日は」(ロ一ソンヘグランパバをゲットして) (合格は大祖父さんの出た学者) (風見鶏の館タツノオトシゴの家) (のう三毛よ盲導犬を見て御覧) (蟻たちよ三三五五と帰りなさい) (流される雛よわたしもケアハウス) (もっと光りをもっと空気を灌仏会) (平成の埴輪マモルの宇宙服) の10句。すべて『句集』に収録。(もっと光りを) は形を変えて収録。

三六四 昭和33年9月1日に、川柳雑誌社明和病院支部から、句集『明和』が発行された。序は、明和病院長 友国説郎(柳号 撰郎)、川柳不朽洞会理事 長西尾菜。薫風子の作品は、(祇園まだ寝ている京の雨の朝) (舞稽古師匠のくせのまま覚え) (春の雲旅に出でよと云う) (とく) (惜しみなく愛は奪えと万珠沙華) 四月四日 長女章子誕生(木も草も花をつけてる誕生日) (鶯の啼く庭に来た執達吏) (菜の花を視野に交番眠くなり) (牡丹へは蜂も静かな訪問者) (竹植えて雨うつ音を楽しめり) (青雲のこころに蜜柑まだ青く) (親だけが大器晩成まだ信じ) (息抜いたところが師匠には判り) (椅子蹴って立つたに続くものがなし) (淋しさは義肢に靴下履かせて出) (煙突の高さも高し此花区) (恋たのし切符も二枚買うて待ち) (振り返りせせめかと女まだ立つ

て）（人形も器量の順に売れてゆき）（囲われたままで小鳥のように死に）  
（端切れにも思い出多き未亡人）（文机に菜根譚を伏せて留守）（鶴龜に何  
処か似ている夫婦なり）（立話長うて犬も坐り換え）（檻の鶴又目を閉ずる  
ほかはなし）の24句収録。

「あとがき」は、支部長の西尾青一路。次に、全文挙げておく。

川柳雑誌社、明和病院支部が誕生してからまだ一年半しか経たないのに、  
句集が出来たと聞けばおそらく驚かれることであろう。これには訳がある。  
この病院での川柳史は、その濫觴古く、記録によれば、昭和二十四年二月  
『しろい山茶花』と云う名のもとに始められて、当時小浜牧人氏の肝煎り  
で水谷鮎美氏が選をして下さつていた。消長はあったがずっと続いて、二  
十八年七月に青蛙川柳会と名を改められた。そしてその頃には、満秋、善坊、  
鬼美、弦月氏等の名が出ています。私自身、作句は至つて下手ですが自慢じ  
やないが、北川春巢、尾崎方正両医博、並びに西尾菜師とは阪大川柳会時  
代からの、麻生路郎先生門下の同期生である。そんなわけで、私もこの病  
院に來た二十八年十二月以来、青蛙会の選者を押つけられて、一躍先生  
になつたが、選を受ける方に図抜けて上手なのがあるので、どうも、われ  
ながら冷汗ものであつた。そこで西尾菜師に頼んで指導していただくこと  
にした。喜んだのは私だけでなく同好の誰もがであつた。ぐん／＼伸びる  
のは当然である。薫風子、すゝむ、鶴江、舟遊、青風、氏等の新進が、雨  
後の筈の如く頭角をあらわして來たので、病院での川柳熱は弥が上にも盛  
り上り遂に、川柳支部結成にまで進展したのである。こうした生い立ちか  
ら見れば、当支部の歴史も最早十年近くにもなるので、纏つた句集ぐらひは、  
あつて然るべき筈のものです。もつとも、これまで同好の間に、三度句集  
が出てゐるが、いずれも小範圍のものばかりで、今回のはいわば綜合句集  
とも謂うべきものである。

この記念すべき句集を出版するについて、川柳雑誌社主宰麻生路郎先生  
から格別な御配慮を仰ぐ事の出來たこと、理事長西尾菜師の序文並びに明  
和病院院長友国説郎医博から御懇篤なる激励を給つたことを、衷心より  
感謝申し上げます。

また集句、編集一切をお世話下さつた河相すゝむ、橘高薫風子の両兄はじ  
め、明和川柳研究会の諸氏、並びに本句集の印刷に特別の奉仕をして下さつ  
た明和印刷所の方々及び中村修二郎所長等の御協力に對して深甚の謝意を表  
します。

昭和三十三年八月

川柳雑誌明和病院支部にて

支部長 西尾青一路 識

三九二 「川柳塔」昭和62年10月号の編集後記に、「☆九月六日の秋田の大会  
で私はユーモアについて話した。女性の進出から薄れがちのユーモアを極力  
盛り込みたい。若い世代が食指を動かすのは、川柳では、このユーモアのよ  
うな気がしてならない。新しいユーモアを模索したい。☆秋田五城目町から  
出ている川柳誌『すずむし』は当地が鈴虫の北限地であることに由来するの  
を知つた。☆男鹿半島一周の観光で、寒風山の彼方は薫風山だと激しい風  
に向つて飛翔した。大会終了後、菜主幹と合流するため青森へ直行、民謡酒場  
の津軽ジョンガラの三味に早速と溶け込んだ。☆翌日は菜主幹ご夫妻と、甲  
吉・五楽庵・叶氏らの案内で太宰治の生家、斜陽館、十三湖、十三の砂山へ。  
大きな生がきに舌鼓をうち、渚で錦石を拾つた。」とある。

四二五 「川柳塔」昭和59年12月号には、「岸は五百羅漢のメリーゴーラウン  
ド」も発表。共に、瀉江下りを詠んだ句。同号の旅記「蘇州・桂林」に、  
「翌日の瀉江下りは、やはり今度の旅の圧巻だった。山容夢幻、河川の曲折  
また無限の如くして飽きさせない。羅漢の像と見れば見え太古の巨大な墳墓  
と思えば思える。私は、一峰に一字ずつを置いて見た。所謂、千字文の一字  
一字をだ。天地玄黄から焉哉乎也に終る四言古詩の二百五十句、正に美しい  
ハーモニーではないか。影を蔵した鋭鋒、影を抱くを厭う奇岩、日が射せば  
移ろい、雲影を得て変じ、実にすばらしい。ひと時はまた靄がかかり、小雨  
模様を呈して、芒芒の昔に還る感をすら抱かせた。」とある。

四四三 「東北行 七句」は次のとおりである。

一一七五 特急は颯爽鳶の輪を残し

一八二三 礼を尽くし礼を失し師と旅にあり

十和田湖 三句

一三九二 七月の奢りを極む水の精

一六三二 水の精覚め森の精まだ眠し

四四三 踵かえさん魂青に溶けぬうち

酸ヶ湯温泉

六二八 混浴のさながら古き風俗画

工藤甲吉氏へ

一三七〇 半白のオールバックに知情意が

四四五 高杉鬼遊は、大正9年4月12日(月)に生まれ、平成12年12月7日(木)、

80歳で死去。法名は浄寛院亮善鬼遊居士。雅号鬼遊(きゆう)は、本名久(ひさし)を音読みしたもの。

四四八 「川柳塔」昭和50年3月号に、「柳界二匹の鬼」と題する座談会記

事に、「薫風 藻介さんにはユーモアが多分にあります。昔の、恋人の

気弱へピアノノぐわんと打ち 藻介 は、私の初心時代頭をそれこそ、ぐわ

んと打った句で、わらうべし父の胸なるモンロー忌 藻介 は、そこはか

となきユーモアの奥に深い男のペーソスが感じられます。モンロー忌聖な

るものは遠くなる 藻介 も心をそそりますね。／冬二 モンロー忌をや

りたいな。／新子 ええなあ。／藻介 以前にもよろか云うてたことある

んですがね。八月五日です。一九六二年八月五日午前二時、秘書がその死

を発見したんで、ひよつとしたら四日に死んでしまったかも知れんとこです。

生れは一九二六年。／薫風 よう覚えてはる。モンローの大きい写真掲げ

てあんなええ句作りはった藻介さんとこでロマンチストが集って……。／

藻介 モンロー忌うちでやったら奥さんに叱られますがな。(笑)とある。

四五 「川柳雑誌」昭和33年5月号「柳界展望」に、「四月四日 待望の女

児出生 章子さんと命名された。」とある。「川柳塔」昭和58年5月号の

「編集後記」に、「私は胃半分肺半分の身障者と言える体だが成形手術後、

肺結核は全快、三人の子供をもうけた。長女の名は章子、命の恩人の肺臓

外科の権威、武田義章博士の一字を頂戴して命名した。次女は幸で、生ま

れた時、路郎先生が『わしの名をあげよう。路(みち)と名付けたら』と仰  
言つて下さったが『路は厳し過ぎるので娘には不向きと思われます。本名の  
幸二郎の一字を下さい』と申し上げた。妻は、『梅幸さんの幸ですか』と大  
賛成、尾上梅幸の大的ファンだったことが大いに幸いして即座に決まったの  
である。長男は充。次男には実と付ける予定であった。妻が子宮外妊娠で流  
産、開腹手術を受けたが、果たして男の子だった。以来子供は出来ず、充実  
は夢で終つてしまった。とある。

五〇八 「川柳塔」平成10年10月号の巻頭言「恩」に、「川柳での恩人は多い  
が麻生路郎先生は別格であった。先生の川柳界への貢献は広範に亘るが、戦  
後の昭和二十四年十二月、山陽新聞に夕刊が復刊してすぐ山陽柳壇が創設さ  
れ選者を担当された。翌二十五年の九月、先生の第三句碑が久米南町のJ R  
弓削駅前に建立された。／俺に似よ俺に似るなと子を思ひ／の句で、『句碑  
ありぬ亡き先生の背丈ほどの』と私が後年その前に立ったときに詠んだもの  
だ。」とある。

「川柳塔」昭和42年11月号の「柳界展望」に、「清水白柳氏、若本多久志  
氏と橋高薫風は九月十日弓削の西日本川柳大会の帰途恩師路郎先生の句碑に  
対面した。」とある。このときの作か。

五〇九 平成13年7月7日、尾道文学公園(志賀直哉旧居下広場)に、路郎の  
(俺に似よ俺に似るなと子を思ひ)、葭乃の(飲んで欲し やめてもほしい  
酒をつぎ)の句碑除幕式が行われた。句碑の設置は5月7日に済んでおり、  
路郎の息女西村梨里と薫風は、5月14日に句碑を訪れた。そのことを記した、  
「山陽日日新聞HP」(5月16日) から一部抜粋する。

橋高さんは「俺に似よ俺に似るなと子をおもひの句は、大正15年7月11日  
に鳴尾の遅日荘で開かれた柳壇会で路郎先生が発表された川柳。その前日が  
先生の誕生日で、おそらく誕生祝いで一杯やりながら、奥さんの葭乃さん相  
手に上機嫌の先生がつくられたものに違いない。私は先生と一日違いの7月  
11日生まれ。弟子の私の誕生日にこの句が世に出たということにも何か運命  
的なものを感じないわけにもいかず、こうして皆さん方との縁が出来、句  
碑が立派に完成したことも先生のお引き合わせ以外には考えられない」と句

碑を両手で撫でながら感慨一入といった表情。

葎乃さんの「飲んで欲し やめてほしい酒をつぎ」の句についても、もう一度よく調べてみたいと話していた。

五一〇 「川柳塔」昭和45年8月号「柳界展望」に、「中島生々庵主幹は七月十二日(日)、青森市の東奥日報社で開催された同社主催の第十二回青森県川柳大会に特別選者として出席、(略)翌十三日は工藤甲吉氏らの案内で津軽半島竜飛岬を観光。句会では同人の木村涼人氏をはじめ多数の青森県川柳人と交歓、意義深い青森での三泊の後十四日朝『はつかり』二号で青森をあとに東京経由帰阪された。薫風随行。」とある。

五二四 「川柳塔」昭和58年11月号の編集後記に、「酔々が死んだ。何かにやさしい心遣いをする男だったが、物事に筋を通し、ちゃらんぽらんを嫌った所は大正人間の典型だった。／九月二十二日容態急変の連絡があったが、私は長女の産前近とあつて産院で腰をさすっていた。夜遅く帰宅して知り、鬼遊さんに電話で詳しいことを聞く。翌二十三日は出雲への川柳の旅へ出発の日、早目に家を出て酔々を見舞う。七時前までいたが、すでに吐く息ばかりの気配がした。彼は四時間ほどの後に息を引きとる。酔々の額に当てた手が脂で津和野に至るまでネチネチしていた。／初孫が前夜の十時に生れ親友が翌日夜十一時過ぎに死ぬ。私の初心時代の句の『病院に降る雪生まると 死ぬと』を思い出していた。」とある。

五七八 次は、エッセイ「錨の如し」の全文。

結婚当時僕は五尺六寸、十六貫五百、妻は十三貫五百、合せて三十貫であった。現在では僕は十二貫五百で瘦身鶴の如くだが、妻は十七貫五百、やはり合せて三十貫になる。(十月末に出産の予定なので本当は七十疋、十八貫七百なのだが平常の時コンスタントに十七貫五百である。)体重の推移とともに権力もおのずから移行して、今では屢々索漠とした思いにさせられることが多い。僕は僕と結婚する女性の資格の一条に足の美しいことを入れていた。僕は女性の、丁度下駄の上に載るだけの足の部分の形に、顔の美醜よりもっと神経を配る、そういう性格的なものがあった。瘦せた神経質な足指、太く短いまるで生薑のようななどを見るといら

らしたり悲しくなったりするのである。妻は先ずこの条件に適っている、肥り過ぎた今でもかっこいい足指をしている。

大阪の下町育ちなので経済に関しては締りのある方だ。下着などはオール問屋でかためて買う。値切るのは心得たものだ。併し、鷹揚なところもあって、数年も前のことだが歯医者に通っていたと思つたら四万円を越す請求書を持って帰って驚かせたりする。また、下町的だ。たこ焼お好み焼が好きである。

芝居、こんにやく、いも、たこ、くり、○○、なんきん、と俗裡で言う女の好物は、なんきんを除いた外は大いに目がない。趣味は、いろいろと変つていって、今は大いに刺繍ずき、子供の持物をはじめ狭い部屋は満艦色である。この十月末に三人目を生むが、上二人が女なので是非とも男児を出産して欲しく、僕は五月頃、横山大観の名画の「村童」をなぞらえて制作された、腕白な、それでいて気品のある面構えの童像を買つて来て、胎教に資したつもりでいたりしている。男児を生めば、オリンピックの金メダルものだ。妻よ。フレ、フレ、フレ、フレ。

子が病んで錨の如し わが妻は  
妻がもう口あけて寝るようになり  
妻の影 わが影 この世おもしろし

五八〇 次に掲げるのは、平成十年一月三日の日付で牛尾緑良氏に送った薫風の手紙の抜粋。(略)同封の写真は正月新調した洋服を着て床の間の前にかしこまっている姿ですが、掛軸は 古稀の屠蘇壺万里酒羅生門の拙句です。二年前に頂戴した羅生門で自祝した日を思い出します。上部の古稀が切れていて、下部のテールに何も載つてないのが、妻の撮影の優秀なところで、それこそ、ちゃんと酒器を用意するとか、羅生門の一升壇ぐらいを抱えておればと思うことです。一枚同封して、お礼の敬意と致します。(略)平成十年一月三日 橘高薫風 牛尾緑良様。掛軸には、平成八年六月吉日の日付がある。満年齢では、平成八年に七十歳。

六四七 「川柳塔」平成八年六月号の巻頭言「出会い」に、「今年の春は高知県佐川町と津軽弘前城の観桜句会に招かれた。深尾氏一万石、津軽氏十万石

の城の桜で日本の桜百選に選ばれている。／佐川城は明治の始め廢城となつたが、小規模ながら石垣や奥土居が残つていて田中光顯の青山文庫や牧野富太郎ゆかりの牧野公園など、文化的遺産に富んだところ。満開の桜とみやまつじ、連翹の色彩豊かな競演が見事であつた。」とある。

六七二 藤沢恒夫は、明治37年7月12日(火)に生まれ、平成元年6月12日(月)、84歳で死去。「川柳塔」平成元年7月号「編集後記」に、「本号最初の校正刷りの出た十二日、阪急百貨店で、小島直記著『志に生きた先師たち』を買つて帰宅したら、テレビで藤沢恒夫先生の死去が報じられた。早速お別れに駆けつけ、言葉では言い尽くせぬ、ご恩に深謝申し上げたが、人生にはつらく悲しい事が出来る。」とある。

六七三 三朝は、鳥取県東伯郡にある温泉地。四方を山に囲まれた三徳川のほとりに佇むようにある。

六七八 「川柳塔」昭和58年5月号の目次下エッセイ「もぐら馬鹿」の冒頭に、「鎮魂の松杉桜桜よし／古墳には一番ふさわしい夕日／私の家の前に豊中市文化財の三十六塚と言われた通り幾多の古墳があつたが、重なる開発により今は残存する数個の墳丘が桜の群落のある閑静な住宅地に点在する。大塚古墳は、直径約50米高さ10米ほどの円墳で、幅13米深さ1.5米の周濠を備える。百本ばかりの松があつて朝朝山鳩が来て鳴いてくれることは随想『中桜塚』(山井三窓著『川柳読本』所収)に書いた。私は朝夕、時には深夜にも墳丘に上つて夕日や月にしばしば心を休めた。」とある。

六八八 「川柳塔」平成6年7月号の目次下エッセイ「人間陶治―厳しさのあつてこそ―」に、「(略)私は、去る五月五日、青森県蟹田町の『風の町川柳広場94』の町を挙げてのイベントに参加し、『川柳・風・巡礼』と題する講演と選を受け持った。翌日、竜飛崎の川上三太郎の句碑とすさまじい風雨の中で三度目の対面をしたのである。／私は竜飛への道筋、御廐の源義経伝説のあたりから道を少し逸れて『みちのく松陰道』算用師峠への案内を乞うた。そこは、幕末に吉田松陰が海防論の根拠ともなる実地検証に、小泊から御廐へ山また山の峠越えをした史跡なのだ。松陰の見た空をこの目で見、松陰の踏みしめた道にわが足で立つた感慨は、たちまち三太

三太郎や路郎への思いに繋がるのだった。／高杉晋作、伊藤博文、大山巖ら有数の志士を育てながら、この北の涯の地まで踏破する信念と行動力の凄さを思いつつ、実に美しい杉とヒバの林のしずもりを眺め、算用師川の清冽な流れに耳を澄ました。／松陰は後、国外渡航の企て成らず一八五九年三十にして江戸で斬、刑場の露と消える。／身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留置まし大和魂／がその辞世。／竜飛崎の風雨にも身じろぎしなかつたであろう吉田松陰。私は瘦身、風に翻弄されて海へ落ちぬようにがやつとで、早々に自動車へ逃げ込むのであつた。／如何せん人間陶治とはいかず」とある。

七〇五 上村松篁は、明治35年11月4日(火)に生まれ、平成13年3月11日(日)死去。享年98。四季の花鳥画を得意とした日本画家。母は、上村松園。平成3年、朝日新聞社主催により米寿記念展が開催された。

七一〇 「川柳塔」昭和42年4月号「柳界展望」に、「生々庵と3月19日(日)曜―编者注)三太郎紫綬褒章受章並喜寿祝賀会に出席。」とある。また、同5月号の「柳界展望」に、「三太郎先生の祝賀の会の翌日、会津若松、磐梯高原へ一人旅した。住吉貞康氏の遺族を訪い、桧原湖水に穴を開けて『わかさぎ』釣りに興じ冬の旅の醍醐味を味わった。」とある。なお、「川柳塔」昭和42年5月号に、薫風が、三太郎の祝賀川柳大会の報告文を書いている。

七二二 「川柳塔」平成7年1月号の目次下エッセイ「挨拶」に、「麻生路郎先生に初めてお会いしたのは昭和三十二年四月のこと、その年の七月には先生の古希祝賀川柳大会が開催されました。／古希はよし弟子に孫弟子ひまご弟子／クイックスロークイックスロー古稀を華やかに／私がお会いしたときの先生と同じ年になったのです。川柳塔十一月号に発表した句／酌み交わし而立と古希は一瞬ぞ／は、路郎先生と私、私と長男の年齢の二重写しに感慨を盛って成ったものです。」とある。

七二五 この号より「水甕集」新設。投句は葉書で5句以内。以後、薫風の「水甕集」への投句はなし。「肉」「愛」「古」にあり。句集では、「霜月悲唱 五句」の前置があり、一三五・七二五・一七四五・一六〇二・七四一の順に収録。「水甕集」では、一六〇二の句がなく、4句入選。一六〇二は没になった句だろう。『肉』『句集』には、「霜月悲唱 五句」の前置では、一七四

五（由紀夫の首といくばく距つ焼林檎）一六〇二（まどうなく胃を切除りわれのながらうに）の2句未収録。『喜』ではさらに、七四一（終焉や裂けてくれない増す柘榴）を省いて、この句と一三五五（ハラキリ由紀夫へ雪降らず 花散らず）の2句のみ収録。昭和45年11月25日、三島由紀夫は新宿区市ヶ谷陸上自衛隊東部方面総監部総監室で割腹自刃した。享年45。薫風は44歳。

七四〇 「川柳塔」昭和59年11月号の目次下エッセイ「上海」中に、「上海の夜は、ホテル近辺の街路が暗く、繁華街まで足を向けることも覚束ないので、三十分程の散策の後、葡萄酒と林檎（八個）をとともに二・三元（日本円で二百三十円）で買い、ホテルの部屋で陶然と夜を更かした。／上海を走馬看花のバスの窓／上海の夜と思う夜の赤い酒」とある。

七四四 句集には「高野山にて 三句」の前書があり、一三六九、一五三七、七四四の順に収録。「川柳塔」には、（仕合わせな弟子師の伝記書く仏間）の句も発表。

七五六 「手榴弾」の読みは、『愛染』の索引では「てりゆうだん」だが、『古稀薫風』の索引の「しゅりゆうだん」の読みに従った。

七五七 NHK学園の大木俊秀氏との対談で次のように言っている。「最初のころ新しがりやで新しい句をつくらんらん思うて、これも路郎先生とのかかわりになるんですけれども、（青雲の心に蜜柑まだ青く）（九一〇番の句）とか（春愁の階段ゆるく蝶をなせり）といった新しがりやの句をつかって先生に出したけど、全然通らんですわね。」（NHK学園「川柳春秋」22号・平成3年7月1日発行）。

七六二 寺尾俊平は、大正14年5月20日に生まれ、平成11年10月19日死去。享年74。「川柳塔」平成11年12月号に掲載された、「秋が今年は音を立て」と題する追悼文を全文掲げておく。

秋が今年は音を立て

寺尾俊平さんが死ぬ。

突然のようでもあり、当然のようにも感じた。常に生死を見つめてあがき続けた川柳作家であった。

寺尾俊平さんは善魔です。それ故、俊平邸が新築落成したとき、私は勝手なことながら善魔堂と名付けました。

文芸をたしなむ者は、魔物でなければなりません。茫洋たる霸気や多分の狂気のあつた方がよいとの意味合いです。魔物といつても陰々滅々の悪魔では、庶民の闊達な生活や心情を表現する川柳には向きません。暢達にして鷹揚な善魔がふさわしいのです。

右は俊平さんの第二句集『風の中』の解説の書き出しの部分である。

寺尾俊平、時実新子、そして私は、川柳に手を染めた年代が同じであることから、同期の桜と称していた。神戸で仲間に「同期の桜の会」を催してもらったこともあった。

あいつには負けないぞというライバル意識とか、何らの気負いとてなく溶け合った気分、頼めば頼み甲斐のある存在感を持ち続けてきた。

秋が来て笛は太鼓を恋しがる

これは私の句。笛は瘦せた私、太鼓は太つちよの俊平さんであることはすぐにも分かる。

そして二人は弥次さんと喜多さん、あちらこちらと川柳の旅をたのしんだ。昭和四十三年、初めて柳都川柳社の大会に出た。その往路と復路、能登半島一周と佐渡島観光をして、それぞれの句を成した。

てんと虫ここにも小さい輪島塗 薫風  
注尺取虫が樹の上から見た海だ 俊平

二人の句のスタイル、特徴がよく出ていると思う。このように二人になるとその個性が触発して、より明確に対応することを、一般にはライバルと言うのである。ライバル意識のない自然なる相棒を持つお互いは、その点でも幸いが多かった。

俊平さんは今年の二月葉文館から『海が砂漠か、砂漠が海か』と題した句文集を出した。柳誌『ますかっ』の第三雑詠の選後感の収録であるがとてもやさしい。この欄で育った新鋭作家は全国的な存在だった。

山陽柳壇の選評も、投句者と同じ目線で物を言う語り口であった。最近、そうした若い世代の作家が、目先の利害だけで行動する軽はずみを嘆いていたが、俊平さんの川柳会への貢献は、この後進指導の成果のあったことだと思う。

陶淵明が好き、タリム盆地の砂漠の中をさまよう湖、ロブ・ノール湖にあこがれた俊平さんは、荒ぶる年の秋の最中にこの世を去る。

俺たちは、そろそろ伯夷・叔斉になろうよと述懐していたのに、定金冬二氏の葬儀に大阪へ来て、風邪を引いたらしい。

連れ添って歩いてきた一人が、落し穴に落ち込んで消えたような果敢なさであるが、本誌十一月号の巻頭言のあとの私の二句は、その死を予測しているようで、胸がつぶれる。

しのび寄る秋が今年は音を立て  
芋の葉の露は仏舎利然とまるい

注 〈尺取虫〉は、この時の作ではない。『吉備団子 十集』（昭和33年9月5日発行・川柳岡山社）に、寺尾一臈の号で〈尺取蟲が樹の上から見た海だ〉を発表している。（『人生の端役』10句の9句目）。薫風が、ここで〈尺取虫〉の句を取り上げたのは、二人の作風を説明するためか。

七六三 「川柳木馬」創刊号（昭和54年7月発行）の招待作品に「春眠」と題して、次の10句を発表している。

車椅子へ牡丹の花は目の高さ  
なあ妻よ鮎まで値切ることはない

鮎鱗の恋憫笑に値する  
蜘蛛さえも四月五月は美しし

昼は花を夜は花火を見たふたり  
蜂蜜に花の香りの遠い人

春眠のそのまま覚めぬ死もあらん  
少年のように近頃夜が怖し

未明とはよきかな殊に青年に

忍耐も少し異なる美女醜女

『橘高薫風川柳句集』に未収録の句は、〈車椅子へ〉〈鮎鱗の〉〈蜘蛛さえも〉〈蜂蜜に〉〈未明とは〉の5句。〈蜂蜜に〉は、「川柳塔」昭和54年7月号にあり。他の4句は、初出未詳。

七九〇 高鷲亜鈍は、本名藤村青一。明治41年2月27日（木）に生まれ、平成元年4月15日（火）、81歳で死去。

八二〇 この句とは関係がないかもしれないが、「川柳塔」平成5年8月号に、西尾菜の巻頭言「路郎門十哲」が掲載されている。「昭和三十年頃の八月の或る日だった。商工会議所から講演を頼まれ、麻生先生を紹介して案内した。その帰り、道頓堀のある料亭で一杯やった。先生の御機嫌を損じたら破門になるという話がまことしやかに喧伝されていた頃だったから、つかず離れずの距離を保っていた私だったが、講演もうまくいったので、先生の御機嫌を見ずまして、『蕉門の十哲というのがありますが、路郎門十哲というのは先生考えておられますか』と訊ねると盃を口へもっていつてはおき、もっていつてはおかれて、『葉君、君は考えたことがあるか』と問われたので、頭の中にあった、『出雲の尼緑之助』『フン』『みちのくの工藤甲吉』『フン』『北陸は小松の伊藤茶伝』『フン』、浪速へ戻って『今よう一茶の須崎豆秋』『フン』『水谷鮎美』『あとは後世の人がきめる。豆秋までで今日はおいておく』と言われたのであった。その頃先生と鮎美さんは鮎美さんの句集刊行のことで一寸したトラブルがあったので、先生はご機嫌斜めだったのだ。」とある。

八六四 酒債は、酒屋に対する酒代の借金。詩債は、人におくるべき詩をまだつくっていないこと。

八六九 天牛新一郎は、明治25年生まれ。明治40年、南区二ツ井戸で露店営業。大正5年、日本橋南詰東半丁の場所へ独立。昭和22年、難波新地5番丁で再興。昭和23年、道頓堀中座前に移店。昭和45年角座前にも開店。

八七〇 「川柳塔」昭和48年1月号「柳界展望」に、「昨年十一月末から〒560 豊中市岡町北一丁目八の二（電068・55・8774）へ移転。北区の店を廃業して再出発される。」とある。「北区の店」とは、「大阪市北区

堂島上2の52 電話 341・4613（「川柳塔」昭和40年10月創刊号の広告による）にあつた旅館「立花屋」のこと。旅館は、もとは薫風の母が経営していたもので、この旅館に薫風がこの時まで住んでいたわけではない。「川柳雑誌」昭和32年9月号の「柳界展望」に、「七月三十一日（水曜―编者注）に明和病院を退院、曾根の公団住宅の新居に落ちつかれ大阪の宅と半々で消光されるとのこと。退院へひそかな恋も置いてくる の名吟を寄せられた。実感句かどうか保証の限りではない。」とある。昭和42年8月号の「柳界展望」に、豊中市岡町北一丁目五六番地の五、への転居通知が出ている。44年8月号の「柳界展望」では、「五六番地の五」から「八番二号」への番地改称を通知している。店を廃業する通知葉書に、「錦秋の候益々川柳にご精進のことお慶び申し上げます 小生この度諸般の事情により皆様に親しんで戴きました堂島の店を廃業致すことになりました 交通至便環境繁華の巷を出て生活設計をやり直すことを決心致しましたのは 母と私と妻の健康 それに思春期を迎えようとする娘達のことを思い 家族一同が一つ屋根に棲んで 祖母らしく 父らしく 母らしく 夫らしくの生活を致すべく分別致しました 今後の通信その他左記へお願い致しますようご挨拶をかねてお願い申し上げます 敬具 十一月二十二日 〒560 豊中市岡町北一丁目八の二 橋高薫風 電話〇六八―五五―七七四番」とある。

そして、「川柳塔」昭和49年11月号の「柳界展望」にマンションが完成したことが報告されている。〒560 豊中市中桜塚三丁目13・15。※1106・849・6911。その通知葉書に、「爽涼の候、皆様方には、ご清栄のこととお慶び申し上げます 私ども一家も元気でおります 建築中の小さなマンションもやっと完成致しました 豊中市役所の南三百米 国道沿いの簡易裁判所を東へ百五十米入ったところで 文化財遺跡大塚古墳公園に隣接し 服部緑地公園にも近い閑静な土地柄ですから 近くへお出ましの時は是非お立ち寄り下さい 十月一日」とある。※現在、この電話番号は使われていない。

八七七 「川柳塔」昭和59年12月号の旅行記「蘇州・桂林」の補注四二五に

続く文章に、「船室でビールを傾けてはデッキに出て、格調のある竹林の続く風情を前に漁る漁夫、水牛の親子、家鴨たち、楽土の景観に見入りつつ舟行教時間を堪能した。」とある。【编者】

「雨笠煙蓑」は「煙蓑雨笠」ともいう。煙雨の中で蓑笠をつけている様をいうことは、「雨笠」「煙蓑」とも唐詩に例があるが、「雨笠煙蓑」「煙蓑雨笠」と重ねた形で用いられたのは宋代の詩および詞（流行歌謡の曲に合わせて作られた歌詞）においてである。特に宋代の陸游の詩に多く例が見られる。日本の古典文学作品ではあまり使用例がない。岩波日本古典文学大系の範圍では、太平記に例がある。

太平記の例は、「渡口に船を喚んで立ち、山頭に路を失ひて帰る。煙蓑雨笠、破草鞋底、すべて故郷を思ふ愁へならずと云ふことなし。」と、旅愁と結びつく形で用いられている。

中国の詩や詞においては、漁夫や小舟を操る者の形容として用いられる例が目立つ。が、それに限られるというわけでもなく、雨の中を徒歩なり舟なりで行く人の様子を表す際に用いられている。さらに言うならば、宋代の陸游が好んで用いており、広く田舎暮らしをイメージさせる語としてとらえられていたことがうかがえる。蘇東坡の「書晁 之考牧図後」という詩には、「煙蓑雨笠」（蓑は蓑と同じ意味）という語を用いている。この句も中国の風景に触発されつつ、そのような漢詩のイメージによって作りあげられた句であると考えられる。

あるいは、人が悟りにいたる過程を十枚の絵と詩で比喩的に表した「十牛図」が句の背景にあるのかもしれない。「十牛図」は北宋末ごろに廓庵師遠禅師が作ったもので、「第七到家忘牛」に石鼓夷和尚が和した賛に、牛を追う、家についた牧童が脱いだ「煙蓑雨笠」が所在なげに置かれていた様が詠まれている。路傍にたたずむ牛を「十牛図」からの連想で「雨笠煙蓑」と詠んだと考えることもできる。

実際はそれらのさまざまな連想をなしつつ、一句としたのではないかと思われる。【石橋】

八八九 「川柳塔」昭和58年8月号に、「佐野にて」の前書で「睡蓮はわれの化身よ誕生日」（妙宣寺）を発表している。「川柳展望」8号（昭和52年2月1日発行）の《人間をもとめて》で、聞き手の天根夢草の「男性には珍しく花の句も多いですね。たとえば 陶枕に睡蓮恋し女人より（肉眼）蓮の花は一茎一花恩師の忌肉眼」特に蓮にいい句があるようですね……」に対して、「ああそれね、これも遺言に入れたいが、ぼくは昔花の暦というか表のようなものを持っていてね、元旦からずっと三百六十五日、その日その日の花が書いてあるのやね。ぼくの誕生日の花は睡蓮で、そうするともうぼくは睡蓮の生まれかわりやないかと（笑）……好きになるわけやねえ。（庄周胡蝶を夢み、胡蝶庄周と為れり）李白の詩を思い出させる事柄やが。」と答えている。

八九三 句集『肉眼』の掉尾を飾る句。昭和49年の年賀状に、「昨秋 句集『肉眼』を刊行致しました節は ひとかたならぬご厚情を賜り ありがとう存じました あの句集の最後の句で川柳をおしまいに出来たら どんなにすがすがしかろうと思う程 今はほっとしています 今年は新しい生活の設計に邁進したい所存です ラグビーの虎の縞着て気負えるよ 薫風」とある。生前の薫風から「万丈光、ということば、自分の造語やと思うてたんやけど、藤澤桓夫先生が漢詩にあると教えてくれはってなあ」とお聞きしたことがある。【编者】

「万丈光」は、万丈までも及ぶ光。佩文韻府に「萬丈光」としてとられるが、全唐詩には用例がなく、宋詩および宋詞にわずかに例が見られるのみである。宋詩の例は、星の光、あるいはそこから比喩的に転じて人の放つ光を「萬丈光相映ゆ」と述べている。宋詞の例は、一例が「文章萬丈光焰」とあり、優れた文章の形容に用いている。いま一例は、天公や七夕などが詠まれており、「自九霄飛至、萬丈光芒」とあることから、星の光の形容と見ることが出来る。いずれにしても、他よりもひときわ目立ち、遠くからも認めることのできる光を放つものの形容と考えることができよう。

#### 【石橋】

八九九 田中好啓児が発行していた「川柳いづみ」16号（昭和44年1月25日

発行）では、「獣」の題で（スケートを履いて獣の姿勢とる）の形で発表。

九一〇 「川柳塔」平成7年6月号の「川柳塔」欄選後感を記した「柳緑花紅」に、「麻生路郎先生も作品には厳しい先生だった。私には特にそう思えた。しかし、須崎立秋が先生の選に満腔の信頼を寄せ、選のあとの反省を自分に課したように、私もとことん喰らいついていった。当初、清新な若い感覚の句を指向した自信の句はすべて没で、没個性の句ばかり抜けたが、川柳をはじめて七年、やっと『労働歌蟻が歌えば凄かろう』『恋人の膝は檸檬のまるさかな』『石くれも三つ積んだら思惟の塔』などの句を取って下さるようになった。あとは一気呵成だった。」とある。

九一一 「ダイアナ妃」は、一九六一年7月1日に生まれ、チャールズ皇太子妃となるが、一九九六年離婚し、一九九七年8月31日、パリでの交通事故により36歳の生涯を閉じた。

九二八 直原玉青は、明治37年8月1日（月）に生まれ、平成17年9月30日（金）、101歳で死去。南画の第一人者で、青玲社を主催。南あわじ市に滝川記念美術館玉青館を開く。昭和40年10月「川柳塔」に改題以来、平成17年7月号まで表紙を飾った。

九五三 「川柳塔」昭和58年10月号「柳界展望」に、「（略）八月二十七日から蒲郡の形原温泉での大陸川柳同窓会に出席、岡崎周辺を観光、東野大八氏と久闊を叙した。なお、菜、鬼遊夫妻、岳人、薫風らは大八氏の案内で郡上八幡へ足を延ばし、翠柳吟社の借春氏ほか柳人と交流した。」とある。

九八四 「川柳塔」昭和43年4月号「柳界展望」に、「二月十八日（日曜―编者注）勝浦温泉・那智滝へ遊び、温泉の雨に心身をほぐした。」とある。

九九二 後藤梅志は、明治27年10月13日（土）生まれ。「川柳雑誌」から「川柳塔」に改題後も名句鑑賞を連載。昭和45年1月15日（木）、75歳で死去。「川柳塔」昭和45年3月号「梅志さんの死」の後半部を抜粋する。

四日に私がお見舞いをした時は、元気に喋っておられたのに、十一日には容態急変して意識が混濁し、十五日の成人の日にこの世を去られた。句集完成を目前にしながら。『秀句鑑賞と梅志句集』は、二月二十日に発行された。【编者注】。一月十五日は、例年寒気厳しい日で、奈良の若草山焼きも、強

風の日には日延べをすることもある。夜空をこがして燃えさかる火を、私は、この年から梅志さんを葬う祭典の火と見るに違いない。金閣寺を焼いて、その中に身を置いてこの世から消えた人間の死も豪勢の上はなかったが、梅志さんは、それに劣らぬ強く美しい火に送られながら昇天されたのである。

### 弔句

正しき死 その夜壮厳 山焼かる

横縞の雪となりたり壺柩車

九九七 塚越迷亭は、明治27年1月8日(月)に生まれ、昭和40年3月12日(金)、71歳で死去。きやり顧問・川柳クラブ委員長を務めた。

一〇一三 「川柳鳥取」昭和35年11月号に、鳥取句会の句報が載っている。

10月15日夜6時、市内ちづばし畔りいち画房で句会が行われた。席題

「砂丘」但住星影選で、(風の中雪の砂丘を思っている)子供もう一つ向う

の砂丘に居(風が出て砂丘精気を取り戻す)の三句が入選している。森

田若人の編集手帖に、「〇この日、大阪から川柳雑誌社明和病院支部の橋

高薫風子、樋口舟遊、河相すゝむ、本城弦月、菱田満秋の諸氏が来鳥され、

午後、日満、湖山の両氏が砂丘に案内して、同夜、句会場に迎えた。八歩

日満、湖山、耕民、多可志、秀和、八文銭、由多香、辰春、亨、南山、若

人の諸氏が参集して柳談を交わし、特に席題『砂丘、珍客』を出題して、

庭からの虫の音を聞きながら作句したが、翌十六日開催の米子松露川柳句

会へ出席のため同夜米子市 へ向かわれた。」とある。

翌16日には、川柳雑誌社米子支社「松露川柳句会」(午後1時より・米

子市公会堂 日本間)に出席した。「川柳松露70号記念」昭和35年11月号

の句会報によると、次の10句が入選している。「家」城内吾柳選で、(家の

ことなら隅まで母は知っている)〈家見えてからの田舎の道遠し〉(一生に

自分の家も持たず死に『有情』収録)。「水道」河相すゝむ選で、(水道

の水もプールで青く澄み)〈八八六 水道の洩れたままなりお正月〉(一一

〇七 妻若し水道一ぱいにひねり)。「人」軸吟(六一二)この人も金を持

たせば愚かなり)。「時事吟」谷閑閑選で、(フルシチョフアイク二人の世

にあらず)〈その眼鏡その声はまだ生き続け)。「連想吟」清水一保選で、

(ピート族ライトも点けず突っ走る)〈茶碗伏せて一歩も後へひかぬなり)。

一〇一四 ビリケンは、頭がとがり、眉が釣り上がって、仏像の後光のような

ものをそなえた裸体の像。一九〇八年、アメリカの美術家を作った。通天閣

の展望台にもあり、足の裏を撫でると幸運を招くとされている。

一〇七七 同号、私の誕生日アンケート文に、「大正15年七月11日。日曜日

であったらしい(確かに日曜日―編者注)。(略)一年三百六十五日、その一日

一日を季節の花で表わした珍らしい表を見たことがある。(略)七月11日は

睡蓮で、花言葉は清潔。それ以来睡蓮を「わが花」と感ずるようになった。

(略)蝶の妍極まればわが誕生日」とある。

一一一四 川口弘生は、北川春巢に師事し、城北川柳会の会長であった。先祖

は、大和郡山の藩主だった柳沢吉保の家老で、川口十太夫といった。大正14

年4月9日(木)に生まれ、昭和62年2月14日(土)に、61歳で死去。

一一一五 「川柳塔」平成10年9月号の巻頭言「Tip Top Tap」に、

「今年になって梅田の阪神百貨店の一階のコルナーにチップ・トップタップ

という潇洒なテイー・ルームが開店した。(略)／店の名が変わっているので、

その意味をウエートレスに聞いたら『ホップ・ステップ・ジャンプと同じよ

うなのでは』との答え、『まるで雨垂れやね』と私。そこで煙草に火を点け

て、雨垂れのチップ・トップ・タップ珈琲館と一句がメモされる。無論、

阪神百貨店には雨垂れなど無縁だが、ここで私の想像が広がって行く。／青

森の小さい町の粋な喫茶店だ。雨垂れの上句が「氷柱解け」と変化する。川

柳塔の自選欄に発表した句の謂れはこのようなことであった。」とある。「T

ip Top Tap」は、手や足で拍子をとること。また、「Tip T

op」が最高、「Tap」がラウンジで、最高のラウンジという意味にも取

れる。

一一三八 「静水(せいすい)」の法名は、「静水(じょうすい)」。山内静水は、

大正5年3月10日(金)に生まれ、平成3年3月5日(火)、74歳で死去。

昭和31年9月、竹原川柳会を創立した。

一一〇六 「全国川柳作家自句自解集」(昭和48年10月12日発行・川柳路吟社)

に、この句について薫風がこのように記している。

私の柳友の一人に聖心書房へ勤めるクリスチャンがいる。その店へクリスマスカードを買に行つて、一枚のカードに雪の降るのを見ていたら、その時の私の心象と絵が静かなスパークをして即座に想がまとまった。

先ず、「わが祈りふかめよ雪降つて」であつたが、「わが祈りふかまるべしと雪を給う」を経て、この句になつたことが、片時も離さずにいる文芸手帖の、その日の走り書きに残されている。私の記憶では、「わが祈りふかまるべしと雪を給う」とクリスマスカードにしたためて贈つたものの、この形にもう一步のところで満足が行かず、あれこれ推敲して、二日程経過してから、「汝が祈り」と定着したように思う。川柳塔に発表になつた時、北条令子・森中恵美子・時実新子・窪田久美子の女性作家達からお賞めの便りを戴いたので殊に印象深く思い出されるのである。

一二二四 難波橋は、大阪市の中之島公園を挟み、堺筋にかかる橋。阿吽の獅子の像が、二体ずつ親柱の上にある。別名ライオン橋。

一三三〇 花御所は、鳥取県因幡地方にのみ栽培されている甘柿。

一三四六 「川柳塔」平成11年10月号「佳句感想」に、「今年二月に作句した次の句は『御御御汁』の句語に惹かれて生まれた。明治生まれの母刀自を介し、即席味噌汁の手抜きを批判した。」とある。

一三五二 「川柳塔」平成10年2月号の巻頭言「辞書の効用」に、「昭和五十七年四月号の自選集で／亡母の間この世は雨が降ってます／と発表した句を見た時実新子さんは間髪を入れず、お母さんを思う至情によく理解出来ませんが、ここは『雨が降っています』と下六になつても丁寧に表示現さない効果は半減どころか思いが半端になつてしまいます。とハガキを下さる。この時は隙を衝かれた口惜しさ、いい友達を持つたありがさに胸を熱くした。」とある。

一三七七 住田乱耽は、明治42年12月8日（水）生まれ。18歳から「川柳雑誌」に投句。同じく編集部員だった伊藤愚陀が24歳の若さで昭和7年12月27日（火）に亡くなる。一周忌を待たずして、乱耽は、愚陀との合同句集『潮騒』を上梓した。昭和13年10月川柳雑誌社を離れ、樽吟社を興し、同

年川柳雑文集『蚤の足音』を出版。昭和46年1月5日（火）、61歳で死去。

一三九九 「川柳ジャーナル」昭和43年2月号に、時実新子が清原祐志の追文「ユウジ シジ シス」を発表している。一部抜粋する。

昭和四十三年十一月十三日（水曜―編者注）午前三時。

清原祐志君は死んだ。三十一才。

三田市大原国立療養所兵庫中央病院十棟個室八号が彼の終の家になった。

祐志君はその人柄ゆえに多くの人に愛され、その計を知つた人々は一様に彼を惜しんだが、その中の一人大阪の橋高薫風氏の十三日付の手紙から氏の許可を得て一部抜粋し、祐志君を知るよすがにしたいと思う。

「……とにかく入場券を買つてプラットへ駆け上つたら列車はプラットの前寄りに止つてゐる。オーイと外聞もなく叫びながら走つたのに、目の前でドアが閉まる。ドアを叩いて車掌に開けるツと言つたがそのまますつと出てしまつた。列車を見送つていた助役をつかまえて『友人が死んでかけつけようとしたのに、目の前で適わぬとは人生哀愁深いすなあ』と皮肉を息ひいひいはずませながら言つておいた……」

結局薫風氏は午後三時の火葬の間には合はずとも、できるだけ彼の遺体の近くへ行つて冥福を祈りたいとて、三田へ急がれたが。

（中略）

再び薫風氏の手紙。

「若い人が死ぬことはいけないことです。ジャーナルを見ても一番まつとうな句を作つていて、最近とみに句境を深めていたのに残念でならない。この前危篤と聞いて見舞つた時にも『お互い血を吐く思いというのは、血を吐かん奴には判らんからなあ』と言つて、苦はあるが死は思わぬだろうと言つたら『そうだ』と相槌を打つていたが、とうとう死んでしまつた。死ぬぐらいだからやはり死を思い見つめていたのだろう。強靱だった祐志君のネバリも遂に。ほんとうに惜しい。惜しい奴は早く死ぬ。」

（中略）

とまれ句集「笹舟」（昭和四十年刊）以来のファイトと伸びのみごととき。前記私信の中で薫風氏も「彼は笹舟というよりも笹舟に降る雪のようなイメー

ジを私に残して去った」と述懐しておられるが、実に清冽で深いその作品は惜しまれて余りある作家であった。

一五〇四 岡橋宣介は、明治30年4月20日(火)生まれ。昭和24年「せんば」を創刊。昭和54年8月19日(日)、81歳で死去。

一五一〇 毛利衛(昭和23年)は、秋山豊寛に次ぐ日本人で二人目の宇宙飛行士。平成12年2月12日(土)〜2月23日(水)まで、二度目の宇宙飛行に成功した。

一五一一 ムルロアは、南太平洋にあるフランス領ポリネシアの島。昭和41年からフランスは核実験場として使用。環礁に被害があったため、同50年から平成3年まで地下での実験に変え、百八個の実験を敢行した。平成7年は、実験再開の年。環境保護団体が大いに反発した。「補陀落渡海」との取り合わせは、痛烈な諷刺。

一五二〇 10月号「柳界展望」に、「八月に北海道へ旧婚されたが、九月三日(月曜―编者注)から母堂と三回目の四国巡拝へ、伊予の香園寺で第一夜を過ごされたが、揉手で寄付を募る和尚にいささか懐疑的。」とある。

一五三一「川柳塔」平成元年7月号「編集後記」に、「昭和三年、父は獨逸へ二度目の留学をしたが、その時ユングフラウ・ヨッホで『ピラタス』は男さびすも湖と雲を距てて若き妻見る」と詠んだ。私がユングフラウに向かえばどのように詩うだろうか。」とある。「川柳塔」平成元年9月号「編集後記」に、「父の戒名は、高岳院潤誉徳風居士である。それなら私は、愛染院柳誉薫風居士だねと妻に話したものだ。柳誉薫風禅定門という方がふさわしいように思えてきた。柳の木のある門を懐手をして通り抜けて行くようなさわやかさで、川柳生活を続けたいと思うのが今の心境である。」とある。

一五四九 内閣府・北方対策本部のHPに、こうあった。

平成5年10月、エリツイン大統領が来日し、細川総理と会談。「東京宣言」が署名された。この宣言は、日露間の最初の包括的な文書であり、平和条約締結に関する日露交渉の基礎となった。

(1) 北方四島の島名を列挙し、その帰属に関する問題を、(1)歴史的・法

的事実に立脚し、(2)両国の間で合意の上作成した諸文書及び(3)法と正義の原則を基礎として解決することの明確な交渉指針が示された。

(2) ロシアが、ソ連と国家としての継続性を有する同一の国家であり、日ソ間のすべての条約その他の国際的約束は、日本とロシアとの間で引き続き適用されることを確認。

一五五三 好啓・藻介とも「たいしよの会」のメンバーだった。

「たいしよの会」は、昭和53年10月に発足した。柳社の枠を越えて「川柳を愛し、川柳を憂い、川柳に遊ぶ」をモットーに掲げ、月に一回寄り集い、川柳を肴に大いに飲み、かつ、論じあった。

「川柳」13号(昭和54年11月1日発行・構造社)が、創刊二周年記念として「たいしよの会」の座談会を企画して掲載している。座談会出席者が、順不同として次のように記されている。島本泰・榎谷寿馬・高杉鬼遊・室田千尋・越智禎・寺尾俊平・光森良・森本夷一郎・岩井三窓・中尾藻介・橋高薫風。座談会は、柳界の現状・選者の資格・大会あれこれ・期待する作家・禅問答の見出しが付いているが、柳界の現状、の部分に次に載せておく。

#### ☆柳界の現状

藻介 皆さん、こんばんわ。去年の十月に発会した「たいしよの会」も早や八回目の会合になります。毎回飲みながら放談をたのしんで来ましたが「川柳を愛し、川柳を憂い、川柳に遊ぶ」との会のキャッチフレーズの手前何か外に対して意志表示をしたと思っていました矢先、雑誌川柳から座談会の申入れがあり、私に司会をとということで進捗係、つまり交通整理の役をさせて戴きます。

先ず、現代川柳の傾向や水準についてなのですが、先頃、高知で創刊された「木馬」で俊平さんが書いています。が。

#### 薫風 俊平的現代川柳への認識。

藻介 そう、それを私流に考えて、多分にからかいな言い方ですが、今は暗喩全勢時代、裝飾語氾濫時代、句会中心時代、評論不毛時代、ゼンイン模倣時代。

鬼遊 模倣は地方の人に多いのじゃないか。そこから二次的、三次的に伸

びて行くようですね。リーダーではないけれど新しい語彙を発表する意欲的作家をすぐ真似る。賞品、トロフィーがまつわるとな一層のことです。

**漢介** 番傘、ふあうすと、川柳塔など大きな柳社によって句に違った味があります。幾人かの個性が目立つだけで、柳社としての個性は薄れて来たんじゃないかと……そういう気がしてならんです。

**千尋** どの柳社も何か怖る怖る新しい方向に向っているという感じに見えます。これは好むと好まざるに拘らず、句会などで新しい句を他の柳誌で見るからだと思いますね。

**漢介** 私は、今では番傘の作家たちが一番新鮮で、先鋭な優れた句を作っていると思うのです。もちろん、ふあうすと、川柳塔にも……。

**薫風** そら、水府は市井の庶民として客観的な目で物を適確に捉えてるし、路郎は路郎で主観的な詩人の魂で対処してるな。

**三窓** 昔と違う。今のわれわれがどうだと云うので……。もう、水府や路郎という亡霊は切らんといかんね。あんたも。

**鬼遊** 微妙なことですな、それは。色合いは、はっきりしないです。ということとは、やはり、際立った作家が何人かいて、その人たちが注目されているわけでしょうが、一般的にはさして違いはなさそうです。だから各社にしても、いや川柳社（川柳塔社の誤植か―編者注）に限って云っても、その代表句を挙げよと云われると難しいのと違いますか。

**良** ふあうすと調と云われても、ふあうすととの人間でも疑問を持つ。何かありながら、時代時代で変わっていつてますからね。自分では何かあるような気がするのですけれど。

**漢介** 紋太精神は継承されているということでしょう。

**薫風** 紋太精神は継がれていても、今では大山竹二の句風が色濃いのは……。

**三窓** 今はないけど、ふあうすと調いうものが確かに……。

**漢介** 昭和十六年頃、ふあうすと推薦句集が出てまして、やわらかいと云うか、ムード横溢してとにかくひきつけられました。

**薫風** 秀句集ですけど、ここでいきなり大きな問題になってしまいます

が、それは、この会に番傘、ふあうすと、川柳塔の編集長が揃っているのですから、又、岡山城（ますかつと）の家老もおられるのだから、それぞれの柳社の過去の秀句を抄出すれば、関西柳界のアンソロジーが出来るし、行く行く北海道や東北・関東・その他全国の柳社に協力して貰って、俳句界がやっただ歳時記のような整った資料を作りたいたいですね。

**漢介** 日川協にも協力して貰って。

**薫風** 先ず、たいしようの会だけでやったらよろしい。初心の人が川柳を知って第一に読む本というものを作りたいのです。

**鬼遊** 昭和柳博ですね。昭和万葉集は一般からも募集し、小句会からも句を採っている。これならすぐに出来ることです。柳社にとられず網を広げて佳句を洩さぬことです。

**漢介** 話がえらいところへ来てしまいました。場合によってはカットします。（笑）田中南都さんの句集が出ましたが、句数は何千句でしたかなあ。

**三窓** 六千四百ばかり。

**漢介** あれも、ずい分読みごたえがあります。類題別というのがよい。

**薫風** 平凡な句の中にキラッキラツと佳句のあるのは感銘も得られるが、六千、七千と秀句ばかりでは、これはかえって相殺だね。

**俊平** 現代川柳の総集編、集大成になる。

**鬼遊** 後世に残る仕事だね。自分の手許にある句集、雑誌からはじめましょうか。

**夷一郎** 持つてる本だけでは、柳社、地域など偏りますよ。

**漢介** それでも、三窓さんがこんな抜いた、俊平さんの三百句はこれかという興味はある。

**薫風** 「門標に竹二とするすいのちかな」なんてゆう句は皆が採ってダブりますね。

同号に「柳界トピック」として、次の記事が掲載されている。

川柳全集第二巻「麻生路郎」出版記念句会

『薫風さん・ようやったの会』たいしようの会が主催

小社から刊行された、川柳全集第二巻「麻生路郎」橋高薫風編の出版記念句会が、たいしようの会主催により、9月15日午後1時大阪労働センター内で盛大に開催された。

会場は5階にある視聴覚室だが、句会の模様をTV用ビデオに撮るため機材を持ち込み寺尾俊平氏が撮影をしている。

披講に先立ち、森中恵美子さんから橋高薫風氏へ花束贈呈が行なわれた。例会と違い、アトラクションとして、カラオケによる歌なども用意され、大変華やかな会場である。

出席者は81名という多勢の出席だが、高知から宇佐美和子さんや土佐の海地力氏などと遠方からの出席者も多く、薫風氏の交際の広さ、人柄を偲ばせる出席者の顔振れである。

当日の選者と秀句は次掲。(省略)

句会終了後、場所を大阪駅前「入り船」に移し懇親会が持たれた。先程の作句している顔とは大分違いリラックスした雰囲気、余興が飛び出すなどしている。薫風氏もお祝いのお札にと、歌を一曲披露するなど楽しい会である。

### 「麻生路郎」橋高薫風編

「選定図書」に指定される！

川柳全集第二巻「麻生路郎」が社団法人・日本図書協会の第一四二五回図書選定委員会において、日本図書協会選定図書に指定され、九月十四日付の文書で日本図書協会から構造社へ通知された。

この選定図書とは、数多く出版された書籍の中から選定委員に審議され「選定図書速報」や「週刊読書人」によって全国各地の図書館その他へ周知される。(略)

鬼遊宛の薫風の葉書を紹介しておく。昭和53年11月28日に書かれたもの。たいしようの会は、二回目も愉快に過ぎませんでした。藻介さんが、ぼたん鍋に参加下さるのはありがたいことです。席題があるなら、その一題を選んで貰っては如何でしょう。(以下略)

一五六四 醜の御楯は、天皇の楯となる自身を卑下するという語。万葉集に、(けふよりはかへりみなくて大君の醜の御楯と出で立つわれは)。平成2年(1990年)は、太平洋戦争開戦(1941年12月8日)から49年目。

一五七九 「対決 巨匠たちの日本美術」(東京国立博物館・平成20年7月8日(8月17日)の目録によると、喜多川歌麿の浮世絵は、「婦女人相十品・ポツピンを吹く娘」とある。

一六一一 万世橋は、東京都秋葉原電気街の南端に位置し、神田駅へ向かう時に渡る橋。昭和5年に、現在のアーチ橋になった。

一六一六 「川柳塔」平成9年9月号の巻頭言「弘前ねぶたまつり」に、「小出智子理事長の死去(同年6月22日。编者注。)」により、車の両輪の片方が損なわれた現状では、川柳塔の活性化は地方との一層密接な交流を促進するほかはない。／その手始めの弘前行であり川柳塔みちのく十周年記念川柳大会への参加である。(略) 出陣を意味するねぶたは扇の表の絵に三国志や水滸伝、日本の酒呑童子など昔話の英雄豪傑が描かれ、これを鏡絵と言う。肥後和香子さんお住居の宮園の鏡絵は『閻魔王怒る』で、見送りと呼ぶ裏絵は『官女』であった。見送りのさまざま、『悲母観音』『楊貴妃』『静御前』『八百屋お七』と艶を競うてたのしい。／情緒的な雰囲気にも酔えるのが『動』に対する『静』と言われる所以かと思えるうち、ふと小出智子さんの面影が浮かんで来た。智子さんが何人もの女人に姿を換え、つぎつぎに遠ざかって行く。／先刻、ギネスブックにも記載されているという直径三米三十厘の『津軽情張太鼓』の音に感動して涙ぐんだのと異質の涙が込み上げてくるのだ。／『祈五穀豊穰巖鬼大権現』の大幟が迫ってくる。豊作を祈り、祖先の霊を迎え送り、魔の退散を念ずる北国のまつりは老若男女の別なく溶け込んで短い夏を駆け抜けるのだ。ヤーヤードの掛け声が今度は耳に残った。」とある。

一六二一 川上富湖は、昭和24年9月26日(月)に生まれ、平成12年1月27日(木)、50歳で死去。平成10年、第三回オール川柳大賞受賞。平成11年路郎賞受賞。川柳塔社同人。

一六四一 薫風が川柳を始めた時期について、いくつかの資料を挙げておく。

(1)「川柳雑誌」昭和36年7月号「現代柳人録」では、川柳に手を染めた年月を、昭和三十一年二月、としている。

(2)『檸檬』のあとがきでは、「乱れ髪式部の世より恋は憂き／兼題『乱れ髪』でつくったこの句が私の川柳への第一歩で、昭和三十年一月であった。」とある。

(3)『古稀薫風』の—経歴—には、「昭和30年1月川柳作句をはじめるとある。

(4)『橋高薫風川柳文集』の、橋高薫風略歴の〈川柳歴〉には、「昭和三十一年一月 川柳作家として活動開始」とある。

(5)『喜寿薫風』の、橋高薫風略歴の〈川柳歴〉には、『橋高薫風川柳文集』と同じく「昭和三十年一月 川柳作家として活動開始」とある。

(6)「川柳展望」8号（昭和52年2月1日発行）の《人間をもとめて》（聞き手は天根夢草）では、次のように話している。

薫風 うん、川柳界のことになると、ぼくは病気をさておいて語れないわけ。終戦で桐生へ帰って、学校へ行って、三年生の夏に発病した。

—病気は何ですか。

薫風 肺結核。戦後すぐやから大変やった。それでも何とか元気になって働けるようになつとつたんやけどね、昭和29年に再々発して明和病院へ入った。そこに青蛙川柳会があつたんやね。水谷鮎美さんが指導しておられた。事務長が路郎門の西尾青一路いう人で、小浜牧人さんやらも居られたわけです。それで、自然に川柳に興味持つようになった。昭和30年2月からやね。

—まわりの人にすすめられたわけですね。

薫風 同室に片山鏡水いう俳句の人が居てね、その人が病院内の新春句会に行つて賞品に菓子器を貰うて来はつた。『ええですなあ』というような話から、あんたも川柳やいなさい、となつたわけや。その人は〈善悪のまん中をゆく苦勞人〉なんて句を作る人でね。仲々面白いと思つて。

—それからはじめられたんですね。

薫風 うん2月からね。乱れ髪という題でね、〈乱れ髪式部の世より恋は

憂き〉が平に抜けてね。

—ほう、それが処女作とは恐れ入りますねえ！

(7)「川柳雑誌」昭和38年6月号は、「雨の思い出を語る諸家」という特集を組んでいる。薫風も「雨の思出」と題して、エッセイを寄せている。全文載せておく。

雨の思出

橋高薫風子

乱れ髪式部の世より恋は憂き

薫

私が初めて川柳を創つたのは、「乱れ髪」という題で、昭和三十年の一月か二月か、冷たい雨の降る日であつたと記憶する。二十九年の十二月初旬に明和病院へ入院した私は、その翌朝「ごぼごぼと真紅な生ま臭い血を吐いた。胸の中に混沌として固まらぬ沼のようなものがあつて、それをいたわりいたわり療養生活をしていた、いわば人生の最も暗い雨の日だった。私は、川柳を始め時を、公には、薫風子と改号して川柳雑誌の近作柳樽欄に投句を始めた昭和三十一年三月からだとしているが、約一年足らずの期間、中断はしながらも、にやにやとした傍観者的な態度で作句した時代があつた。私の入院と相前後して、片山鏡水という俳句をも川柳をも手掛けるやや苦吟型の作家が入院して来られた。ベツトが隣だったので俳句の入門書などを見せて貰つたりしていたが、正月の或る日、鏡水さんは病院内の青蛙川柳会（川柳明和病院支部の前身）の新春句会で天位を獲得され、賞として菓子器を貰つて来られた。私は、その日、その安物くさい菓子器がとても豪華に見えて仕様がなかつた。鏡水さんが練りに練つて創られた句が選者に認められ、最高位になつたそのことは作家としてのよるこびや満足が大仰に私にまで伝わつて来て羨ましく感じただけでなく、療養生活をひつくるめた人生の中でも、何か高い価値を持つ誇りあるもののように思えた。それで翌二月中旬の題から作句し出したのだったが句会には顔を出さず投句だけを続けていた。私は苦吟型の鏡水さんから創作の苦しみや喜びを、いち早く深く教えられたが、その熱気の籠つた真摯な作句態度は後々私の作句への心構えに好影響を与えてくれた。川柳生活ようやく八年、句会での兼席題にも慣れてなおざりな作

句に情した自分を顧みて恥かしい思いをしている。私が初めて句会に出席したのは、青蛙川柳会、阪神電鉄の川柳教室、角一ゴムの白鷺川柳会の合同句会が病院の講堂で開催され、水谷鮎美、須崎豆秋、長谷川三司、榎南夏六の諸氏が見え、選者として選をされた時で、今にして思えば、錚々たる大先輩が揃われた句会だった訳だが、当時の私は、豆秋さんがすばらしい作家の一人であることさえ知らぬ無関心ぶりであった。その句会の鮎美先生選で、

祇園まだ寝ている京の雨の朝

という句が天位に入賞した。題が「京の雨」というのだったので、これも雨に因縁があるわけだ。注三〇年の十月か十一月かであった。

なお、雨の思い出を拾えば、青蛙川柳会に徳永貴美さんという作家がおられた。後、明和川柳研究会で発会当時の寄せ書に、「川柳の鬼とならん。」と書き、号を鬼美と改めて不朽洞会員にもなられたが、氏から届く手紙や葉書の類はいつも奇妙に雨の日だった。

見ておれば蛙小さく坐り換え

慾がある楽に死にたい慾がある

など、療養生活の自己を注視した名吟を屢々吐かれ、私の好きな作家の一人だったのが、社会復帰後非常に多忙なため川柳を止められた。それは、川柳の鬼を指摘した作家にふさわしい止め方で、年賀状以外はふつつり音沙汰がなく誠に潔ぎよい。年賀状だけになってからも、昭和三十七年、三十八年の元日には多少の雨が降っていて、氏から便りの届く日は雨だというジンクスが続いている。

雨は懐旧の情をそそるだけかと云えば、そうでもなく、将来を約束する雨もあるらしく、「初めて逢った日が雨の日だったら、その恋人達の将来は倅せに満ちている。」という言葉を、私は或るフランスの映画で知ったがこの古いフランスの言い伝えを私はひそかに心の糧にしている。私の何番目かの恋人、川柳との出会いは暗い雨の日であったのだから。

注 「川柳雑誌」昭和31年1月号「各地柳壇」明和病院に、この句が

掲載されている。

一六六七 「川柳塔」昭和42年9月号「柳界展望」に、「河相すゝむ氏（西宮同人）と薰風は七月二十六日（水曜―編者注）から岡橋宣介、海士天樹氏らと、乗鞍岳、平湯温泉、日本ライン、明治村を周遊、日本ライン温泉ホテルでの第三回大陸柳人同窓会に合流。同人の河村日満、大山雅城の両氏や東野大八氏らと交歓、三十日帰阪した。明治村での六十五名出席の句会の模様は三十一日付中日新聞に掲載された。」とある。

一六八九 内孫みのりを詠んだ句（補注一九四参照）。「檸檬句会報No.122」（平成7年1月15日発行）の随想欄「レモネード」に、「☆元日の夜、七時三十分から二時間、NHKラジオの放送『川柳正月風景』の番組を担当するので、渋谷の放送センターへ行くことになる。孫娘のみのりと逢える絶好のチャンス、三十日から夫婦で押しかけるぞと長男に電話、嫁に厄介掛けてすまぬ気がしないではない。☆そこで歳末の忙しい一日、松屋町をうろつくことになった。餅花を買うためである。既成の玩具ばかりを当てがわれる今の幼児に自分で作る体験をさせたいとの思いである。餅花と羽子板二枚羽三つ（川柳ではない）。本社句会皆出席者にさし上げる色紙と畳紙五十枚ずつ、これらについての買物だが腰が痛くならぬかと心配。」とある。一六八八も、このときの句かもしれない。

一六九三 「川柳展望」平成2年2月号にも発表。特別作品25句「老司祭」の22句目。『古』『師』『喜』にあり。NHK学園「川柳春秋」22号（平成3年7月1日発行）の「シリーズ この人に聞く」に、「拈華微笑というのは、広辞苑にも出ているんですけども、一口で言えば以心伝心というような気持ちで。お釈迦さんが靈鷲山というところで説法なさって、ちよいと横の華をつまんで取られて、それをねじられたいんです。華をねじってそして大衆を見渡したら、摩訶迦葉というお弟子さんだけはその意を悟ったのかにっこり笑ったというんですよね。そういうことから拈華微笑という言葉が出たというふうにか謎の微笑というのか、その笑いもお釈迦さんとお弟子さんの一人とが交わしたような微笑じゃないかという、精神的なつながりとか、そんな句を志向した時代があったですけれどもね。」とある。

一七〇五 伯夷(兄)・叔齊(弟)は、周の武王が殷の紂王を討つのを諫めたがきいてもらえなかつたので、周が天下を統一するや、その粟(むぎ)を食うことを恥じて首陽山に隠れ、蕨(わづ)を食って共に餓死した。

一七一一 姉三六角蛸錦は、京都の東西の通りである、姉小路、三条、六角蛸薬師、錦、を縮めたもの。京都の人は唄にしている。

一七三六 「川柳塔」平成元年6月号の「編集後記」に、亜鈍氏が亡くなった(平成元年4月15日(土)死去)ことを悲しみ、その思い出をこう記している。「亜鈍氏は、昭和39年の東京オリンピックの競技を見ていて、突然目の前が真っ暗になり失明されたらしいが、私には、注1その後、尾道で麻生家の墓を一緒に探して歩いた思い出がある。注2福善寺だったと記憶するが、立派な臥龍の松のある境内の墓域の隅に、それを見つけたときの感慨は今も鮮やかだ。『盲人の手をひく先を道おしえ』の句は、そのときの所産で、夕暮の注3極楽寺で詠んだ『夕桜盲人鳩の餌をこぼす』『夕桜琴朱の布に包まれる』の句とともに注4拙著『肉眼』に掲載した。」とある。

注1「その後、」…「檸檬句会報」(平成5年4月号)の随想「桜」に、

「前半略」昭和四十四年、高鷲亜鈍さんがまだ尾道にお住居の頃、二人で路郎先生のお墓を探した日も桜が美しかった。亜鈍さんは緑内障でもう目が見えなくなっておられたので手を引いて坂道を歩いた。道おしえという虫が三步ほど先へ先へと、まさしく道案内をしてくれた。／＼分無駄足を食ったあと、福善寺という臥龍の松の立派なのがあるお寺で、『麻生家の墓』と刻まれた墓標を見つけた時は感激だった。亜鈍さんは石を撫でながら頬ずりをせんばかりに見えぬ眼を見開くのであった。有名な極楽寺の桜も見た。亜鈍さんは鳩にポップコーンを撒く。琴の演奏会があったのか、若い娘さんが琴を抱いて境内を横切って行った。私の、夕桜盲人鳩の餌をこぼす夕桜琴朱の布に包まれる／＼はその時の所産である。」とある。

注2「福善寺」：尾道市長江一丁目9-1。「ええ門は福善寺」と言われるように、堂々たる山門を持つ浄土真宗の寺。境内には鷲が翼を広

げた姿を思わせる「鷲の松(市天然記念物)」が枝を広げている。

注3「極楽寺」：因島八十八ヶ所の2番目の寺。尾道市北部にある。

注4「肉眼」には、「川柳塔」昭和44年6月号に発表した、「盲人の手をひく先を道おしえ」(夕桜 盲人鳩の餌をこぼす)夕桜 琴朱の布に包まれる)「吐く息も吸う息もなし 夕桜」(夕桜 人の情は大切な)の5句を収録。『句集』には、一七三八(夕桜 盲人)、一七三六(夕桜 琴)、一七九六(吐く息も)の順に3句収録。

一七五四 大伴家持(718頃～782)は、万葉集第4期の代表歌人。万葉集4516番の歌(万葉集最後の歌)は、家持の(新しき年の初めの初春の今日降る雪のいや重(し)け吉事(よごと))。左遷された因幡国庁で、七五九年元旦に詠まれたもの。以後の家持の歌は残っていない。

一七六四 路郎の(羊羹のこともめてる老夫婦)に較べると、さびしい句。

一七七二 昭和37年1月13日(土)、川柳雑誌社本社句会「横顔」路郎選で(横顔に小泉八雲生きている)が入選している。

一七九三 大言海は、大槻文彦編纂の四分冊の国語辞典。没後、昭和10年に富山房から刊行された。

一七九五 「川柳塔」昭和46年2月号「柳界展望」に、「サンケイ新聞一月七日の夕刊に、藤沢桓夫氏が『松の内閑談』を執筆。『私の年少の友人に橘高薫風という優れた川柳作家がいる』と。——読(み)初めの今年は石田波郷集——のほか薫風作品が数篇紹介されている。」とあるが、「数篇紹介されている」は誤りで、「読初めの」の句のみ紹介。波郷の四句(初蝶や吾三十の袖袂)〈朝顔の紺の彼方の月日かな〉(秋風や夢の如くに棗の実)〈琅玕や一月沼のよこたはり)を紹介している。「松の内閑談」は、読み初め・書き初めの話から、薫風作品を紹介し、石田波郷の思い出話を綴ったエッセイである。薫風に触れた部分を抜粋する。

私の年少の友人に橘高薫風という優れた川柳作家がいるが、この人が去年の正月に作った句を雑誌で見て、それはもう一年前のことになるが、やってるなど私は微笑させられた。

その句というのが読み初めの句だった。

読初めの今年は石田波郷集

この句に私が共感を覚えたのは、一つには、薫風君も私と同じ「読み初め」党の一人だなど思ったのと、もう一つには、石田波郷氏はたしか一昨年の暮れ近くに亡くなられた、その波郷氏の俳人としての優れた業績を惜しんで、そのかなしみを薫風君がこの句に託した切なさが、何か私の心に触れたからだだった。

一七九六 「川柳塔」昭和44年3月号に、句集「白黒記」の紹介文を書いてゐる。一部抜粋する。

著書には藤村青一句集「白黒記」とある。詩人藤村青一を前に押し出したのだから、われわれ川柳人には高鷲亜鈍の方が親しみ深い。亜鈍という底の抜けたような名は、生前の路郎先生をもたじろがせた傲慢さと一本気な性質にふさわしい。

(略)

白黒記の白は白杖の白、あらぬ方へ据える盲人特有の姿など、云わば外形を示し、黒はその内貌を示す暗を象徴している。深い苦悩の積み重ねの後に、

ひとみんな小さい蠟燭もっている

の句の如き安心の境に辿りつかんことを。

一八一六 柳暗は、柳が茂ってほの暗いさま。お染久松で蔵が出てくる芝居は、菅野介作の「染模様妹背門松」(1767年12月、大坂北堀江座初演)。

「野崎村」で有名なのは、近松半二作の「新版歌祭文」(1780年9月、大坂竹本座初演)。山家屋への嫁入りが近づいているお染は、恋人の久松の子を宿している。久松の親久作が野崎村から来て、道ならぬ恋を意見して、久松は実家に帰り、お染は嫁入りすることを承知する。久作はそれでも心配なので久松を蔵に閉じ込める。が、夜半にやって来たお染めは久松と蔵の内と外で語らい、それぞれ心中する。

一八二六 半跏思惟像は、左脚を垂れ、右脚をまげ左の膝頭に乘せて腰掛け、右手を頬の辺りに挙げ思考に耽る姿。

一八二九 「川柳塔」平成元年2月号「編集後記」に、「30日に刷り上がった

た年賀状と同人名簿を持ち、大晦日新幹線に乗った。長崎・阿蘇・由布院から国東半島への旅は、国東の石仏礼拝が主目的だった。妻は実妹を亡くしてから仏像に強い関心を示したのである。その旅で、長崎の崇福寺と大浦天堂、大分の富貴寺と宇佐神宮の四つの国宝建造物を拝することが出来た。」とある。また、NHK学園「川柳春秋」22号(平成3年7月1日発行)の「シリーズこの人に聞く」に、「二、三年前に『老司祭黒にも無垢の衣あり』という句をつくりました。これは長崎の浦上天主堂に妻と一緒に旅したときの句なんですけれども、無垢といったら白無垢で花嫁衣装という白が常識的やけれども、神につかえる神父さんは黒を着ていらつしやる、黒無垢という言葉はないけれども、神につかえる神父さんの召していらつしやる衣服ですから、無垢に違いない。そこで黒にも無垢の衣ありと、ふと出るんです。これも一つの精神的な所産かもしれんけど、初心時代にはちよつとこういうものはできなかったですね。あまり努力もしていないのに長年やっているとそういうものを見たときにフツと出るような、テクニクじゃなくて閃きとも言えんしというふうな、そういうものが培われているように思います。だからやはり川柳、川柳いうてる歳月もむだやないんやないかというふうな気も時折するんです。」とある。

一八三七 紹刺は、紹織を枠張りにして織り地の透き目へ糸を刺していく刺繍。  
一八四二 一九九〇年代後半、靴底が5cm、かかとが15cm以上あるような厚底靴が流行した。自動車事故なども多く起こり、平成11年7月9日、国民生活センターは、厚底靴による事故の注意を呼びかけた。

一八六〇 駅馬も貴人も、四柱推命で吉星をあらわす言葉。駅馬貴人という星はない。駅馬は移動の星。転居を繰り返したり、旅に出ることが多い。好奇心が非常に強い。貴人は色々あるが、薫風は太極貴人を思い浮かべていたのではないか。太極貴人は、困難に出会っても目上の人の引き立てや助ける人が現れて望みを達成する星。

一八六一 「川柳塔」平成10年9月号の巻頭言「TIP TOP TAP」中にもあり。ワンスアポンナタイムは、昔昔ある所に、と語り始める昔話の出だし。

# 句集『有情』『檸檬』『肉眼』『愛染』『古稀薫風』『師弟』『喜寿薫風』について

## 1 『有情』

### ① 句集『有情』について

『有情』について、「川柳雑誌」昭和37年10月号に、次の広告が掲載されている。

橋高薫風子著、川柳句集「有情」が昭和三十七年九月二十三日、川柳雑誌社から発刊された。著者六年半の作品四百八十七句が収録してある。川柳叢書B列6型百六十六頁、価二百五十円。

また、「柳界展望」には、次の記事がある。

橋高薫風子氏は句集「有情」発刊の過労のため八月下旬発熱、しばらく阪大病院へ通院治療される。

題字は、麻生路郎。表紙は、野尻弘。写真は、山本邦。印刷は、昭和三十七年九月十一日。発行者は、麻生幸二郎。発行所は、大阪市住吉区万代西五丁目二五番地川柳雑誌社。電話 大阪 六七一局 六〇八一番。振替 大阪 七五〇五〇番。著者印は、橋高、の丸印。「有情」「紫の椅子」「往還」の三章からなり、「有情」には八一句、「紫の椅子」には一六五句、「往還」には二四一句を収録。一頁三句立て。巻末に十頁の索引を付す。なお『有情』の句には、一字空白のあるものが多い。路郎の指導によるものだろう。

路郎の序と薫風子のあとがきを載せておく。

### 序

句の発表の手段として。新聞、雑誌、放送、柳誌が主たるものであるが、それ等はいずれも歳月とともに散逸してしまう可能性が大きい。殊に放送はすぐと忘れられるおそれがある。その点から簡人句集として句を遺すことは、今のところ最良の方法だと云えよう。

従来簡人句集は作家の還暦とか、古稀とかの簡人的慶事や、故人を追憶する意味で刊行されたもの、又は何等かの記念に上梓されたものが多かった。しかし、簡人句集は自己の作品の足あとを回顧反省するためのもの、つまり自己の句の成長振りを知り未来への飛躍を約束するものであってこそ、最大の意義があるのではないかと思う。従来もその意味で上梓されたものが皆無だとは云えないが、たいていの簡人句集は右に述べたように、自己の作品の終止符的刊行に終わったものが多い。

今回、橋高薫風子君が、句集を出したからと云う話を持ち込んで来た。この句集は右に述べた記念的出版ではなく、自己の作品の一段階としての発表だと云うのであるから、大いに賛意を表し、出来るだけ出版に関する援助を惜しまなかった訳である。

薫風子君は川柳不朽洞会の会員であると同時に、川柳雑誌社の編集部員でもある。句作上の年輪は必ずしも多いとは云えないが、句は主として「川柳雑誌」の川柳塔欄に発表したものであり、更にそれ等の句を精選したものであるから、新人作家として推奨に値するレベルの高い句集であることは自負していいだろう。

薫風子君は若いけれども、社会の一員として、一ト通りのエチケットを心得た好青年紳士である。老いたる母には孝養の人で、妻子には愛情の深い、よき夫であり、よきパパであることは句によってもうかがい知ることが出来る。しかも句の持つ領域はなかなか巾広いものがあるので、前途に多くの期待を懸けることの出来る作家である。

一九六二年の初秋

川柳雑誌社編集局にて

麻生路郎 識

僕の句集が出来る。実にうれしい。

僕の句が、『川柳雑誌』の昭和三十一年三月号、近作柳樽欄に、初めて二句掲載されてから、約六年半の歳月が流れた。

もう十数年にもなるが、亡父が、若い日に留学をしたドイツやスイスへの追想、戦時中のマニラでの生活、それに、交友関係の思い出などを纏めた随筆を、創元社から出版したことがある。無鉄砲な僕は、父が出版したのならとばかり、暇に書き寄せた原稿を一括して、樋之上町の創元社へ持参に及んだのだが、

「十万円持って来れば出版する。」

と、剣もほろろに追い返された。当時、僕達の住む堂島の土地が、坪三千円もしなかったのだから、その時の僕の魂消ようたらなかった。そして、著書の出版など、わが一生には思いもよらぬことと、深く肝に銘じたのであった。それ故に、今回の出版は例えようもなくうれしい。川柳を知り、川柳に精を出したお蔭であり、麻生路郎先生のご援助の賜である。

路郎先生は、僕が、西尾葉先生の推薦を得て、昭和三十二年二月、不朽洞会に入会し、先生の門下の一員となつてからこの方、句に関する限り、旨くなつたとも拙いとも、一言も仰言ることがなかった。唯、毎月提出する川柳塔への投句十句の、入選句没句を通じて暗黙の啓示があるばかりであった。僕は、この暗黙のご指導を一層効果あらしめるよう、僕自身の方法で心を尽した。又、句会へ頻繁に出席した年、殆んど雑誌だけに限つて作句した年などが、僕の生活の変化にもなつて現れた。収録した句を分類して見ると、雑詠吟としての句が約半数、課題吟で得たのが残り半数という比率になつてゐる。

とまれ、これは僕の第一句集であり、一里塚に過ぎない。先生と、数多の諸先輩のご指導で、再び、一步一步蝸牛の歩みが続けてゆくことであろう。

本書出版に当り、選句をはじめ、題字、装幀からカットに至るまでの配慮、その他万端に亘つて、先生のお手を煩わし、川柳雑誌社のご支援を戴いたが、これらに対する感謝の気持は言葉では云い尽し得ない。師恩の大きさ、大樹

の庇護を思ふばかりである。

最後に、写真の撮影をこころよく引き受けてくださったジャパン・タイムス大阪支社の山本邦氏に深甚の謝意を表する。

昭和三十七年七月十一日 三十六回目の誕生日に

橋高薫風子

「川柳雑誌」昭和38年6月号に、河野春三が『有情』評を執筆している。全文を載せる。

「有情」の三つの潮流

河野春三

1

昨秋、京都の僚友上田枯粒氏から、近頃「川柳雑誌」の橋高薫風子という前向きの作家と文通しているという便りをもたらした事があったが、それはそのまま聞き流していたが、このお正月に三十年ぶりで川柳雑誌社に麻生路郎氏を訪ねて歓談した折、林さんから「有情」や「福寿草」注1「人間横町」などを頒けてもらったので早速薫風子さんの句集を拝見したところ、中々よい作品が沢山あって、かなり惹かれるところがあった。それで直接著者へ、厳正な立場で、批判と鑑賞とを兼ねた私見を申送つたところ、大変喜んでもらい、謙虚な御返事を頂いた。

私はまだ薫風子さんにお眼にかかったことはない。「川柳雑誌」四二三号の「不朽洞の人々」に同氏の写真と、一家言が載っているがそれにはこんな事が書かれてある。

紫の椅子の愁いはわが愁い 薫風子

紫は沈んだ華やかさを持つ品格のある色だ。私は二十年前までこの色が最も好きであった。今はどんな色にも興味を覚え魅力を感じるようになったが、

これは私の魂に純粹さが薄れた故か、或は人間として幾分成長して来た故か、おそらくそのどちらでもあるのだろう。私は紫の椅子にじっくり腰を下ろして、沈んだ華やかさを持つ品格ある注<sup>2</sup>詩情を肥やして行きたい。

私は「有情」を一気に読んで、(句集というものは一気に読むというべきものではないと思うけれども)、同時に薫風子という作家の「紫の椅子の愁い」をはつきり感じとったのである。

私も若かった頃、「紫」という色に惹かれた時代があつたことをまざまざと思い出した。そのあとで、川柳雑誌十二月号で北川春巢さんの、「有情」を読んで「を一読したが、私とは相当感じ方が違う事を知つたのである。

春巢さんは文中随所に、薫風氏は円満な常識人である。世の中の酸いも甘いも知りつくしている……というような所見と、その裏付けとも見られる作品を列挙していられる。

勿論それらの句からそういう結論が感じられぬではないが、私が「有情」を通読したところでは「円満な常識人」というような印象はあまり受けなかつた。

私のうけとめた薫風子はやはり青年作家らしい(本当は三十六才とあるが)感傷と、人間への肯定と否定が彼の体内を吹き抜けていて、懐疑の多い——それ故に又静かに「考える人」のポーズをとっている面が多く、いかにも青白いインテリのもつ作家精神が感じられる。作者は実際には常識人といううな面よりは、寡黙で静思の詩人といったタイプの人ではあるまいか、ただの川柳づくりではなくて、一つの人生途上の苦悩を秘めている作家なのではあるまいか。「紫の椅子の愁い」は即ち彼の作家としての一つの性格であつて、彼がそれを越えてゆくところに「或は人間として幾分成長して来た故か」と述懐しても、所詮は詩人としての性格として今後も「紫」を一生背負うてゆくのではないかと私は思うのである。

## 2

「ふあうすと」誌上で、莫徳三氏が「有情」の批評をしているのを見たが、ここでも、あまりこの句集を感心しないようであり、彼がチェックした句は

わずかに五句であつた。

然し私にはそうは思えない。

ここで私は「有情」の作品を鑑賞して見て、凡そこの句集には三つの傾向、三つの潮流があることを率直に指摘し、この三つの潮流が、今後どのようなその比重をかえてゆくであろうかという点に私の興味がかかっているかということを述べて見たい。

第一の系統は伝統派的な作品で、生活日記のトリヴィアルズムと、いわゆる三要素的な既成川柳といつてよいもの。勿論この傾向の中にもいくつかの段階があつて、適確な穿ちやユーモアや軽みが、そのよさを示しているものもあるけれども大半は日記川柳的な、平凡な安易な境地の述懐にすぎぬものである。

例へば

妻がもう口あけて寝るようになり

落選の酒は問答無用なり

二枚ずつ二枚ずつ切る熱海駅

看護婦の恋門限を口に出し

鏡台の前の思案はたかが知れ

出来心ダイヤの注<sup>3</sup>指環していても

泊る気になつて外したイヤリング

独身の机の上の磯じまん

こうした作品は相当数採録されているが、こういう句からうける作者は私に、やや失望しか与えない。作者の眼が対象に向つて働きかける態度に、感激も衝動もなく、いわゆる「川柳というものを作り上げる」というアミューズメントしか感じられない。大体伝統派の作品は、相当古くから関東調、関西調というものがあつて、関東調は井上剣花坊をその祖として「穿ち」や「諷刺」に重点をおき、関西調は、西田当百、浅井五葉、岸本水府らの系列をひいて、「軽味」「写生」ということに重点をおいて、いかにも関西らしい軽いユーモアや生活の記録的なものが多かったのは今日にも尾をひいているが、これはその特長を甘く生かすと、関東派のようなドギツイ穿ちや諷刺ではな

くて、微妙な人間の生態を軽妙に描くということが出来るのであるが、大抵の場合は平板な日常茶飯事の報告にすぎなくなり、川柳が文学としての基盤を失うことになり勝ちなのを警戒しなければならぬ。

第二の系列の作品は三要素に縛られた既成川柳から脱して、生活川柳として、作句の前過程に於いて作者の感情が、詩的醸成を孕んでいるもの。

例えば

病み上り街は光に満ちあふれ

春斗の真ッ只中に子が生まれ

喪服着た妻に女が残つてた

つとさした夫の傘の大きさを

妻の留守食パン真ッ直ぐに切れず

四面楚歌故郷は豆の花の頃

竹植えて雨うつ音を楽しみ

もう嘘を見抜いて母の眼が優し

妻若し水道一ッぱいにひねり

等々であつて、この傾向の句にはもはや三要素的な「川柳味」から脱却して、彼のいう「紫の椅子の愁い」的な詩性が感じられ、生活川柳として素直な良さがあるが、よく見直してみると、内蔵するものに厳しさが欠け、いわば「植物的生」が見え、安堵しすぎた安易さがあつて、私達の胸に迫るものに乏しい。東洋的なあきらめの精神に近く、誰かがいった「老成」という評言に価すると思う。

第三の系列は私達が考える現代川柳として堪えるもので、ここで初めて作家橋高薫風子とその精彩を放っていると私は考えるのである。

A

労働歌蟻が歌えば凄かろう

学生を矢面に立て国貧し

都会の夜セロリは母の香に似たり

檻の鶴又眼を閉ずるほかはなし

十二月宝石の美の極まれり  
独楽二つ回りいることは息苦し  
牛小屋に月光美しき浪費

蜘蛛の巣の憎し糸も乱れぬは  
莊嚴ミサ嬰兒祈らず神に近し  
浚漉船も恋も一日位置を換えず

わが妻になすべかりしを賀状書く  
青天の霹靂乳房黒くなり

原始から女の姿水を汲み

B

椅子蹴つて立ったに続くものがなし

若い目が見ているんだぞ政治家よ

蕎麦の花地球滅びるなど思えず

失いしものと得しものこの友に

雑念をはずめる丸さ壺は持ち

蛇行して蛇行して川淋しけれ

惜しみなく愛は奪えと曼珠沙華

草いきれ万葉の世の相聞歌

青春は旗翻るごとくなり

人の世や棺に打ちこむ釘もあり

手注3よごさない生活がふとさびし

Aは私が推薦する佳作。BはAよりやや落ちるが、表現に難点のある句。勿論私自身の勝手な選抜であつて人によつてうけとり方が違ふと思うが、少くともこの項にあげた作品からは、作者が円満な常識人というには当てはま

らない詩人らしい孤独と、個性ゆたかな感性と知性、常識川柳にあきたらぬ内省的な短詩精神、高度な社会批判などが見られ、ここに路郎氏の影響も大いにあつたことと推察される。

3

ここで短評を許してもらおう。

○労働歌蟻が歌えば凄かろう

一つの道を果てしなく「無言の行」をつづける蟻の行列を凝視していて作者が高らかな労働歌のデモに連想を持って行ったのか。或はその逆の場合も考えられる。「凄かろう」に直截な作者の主観がある。開巻第一にこの句を置いたところが肯ける。私の戦前の作に

踏みかけた蟻の列のあまりにも長き  
というのがある。

○学生を矢面に立て国貧し

「国貧し」が説明的で安易でもあるが、「学生を矢面に立て」に社会風刺が痛烈である。

○椅子蹴って立ったに続くものがなし

啄木のはてしなき議論の後という詩にある有名なウイナロッドと呼び出すものなしを想起する。インテリの無行動精神への作者(の)いかりか。

○失いしものと得しものこの友に

「この友に」の「この」が独断であろう。具象性が要求される。

○都会の夜セロリは母の香に似たり

句品、格調、感覚ともに可。「都会の夜」の措辞又凡でない。

○かかる時海の晦さを持つ蚊帳よ

よい句と思うが、前書付の作品故特別扱いとしよう。

○わが妻になすべかりしを賀状書く  
この感慨に作者の手柄を発見する。案外甘さのないところがよい。佳吟として頂く。

○十二月寶石の美の極まれり

よい句と思うが「十二月」が「美の極まれり」のきびしさに対して軽いではないか。

◇極月の寶石の美のきわまれり

として極月というような堅い言葉を据えた方がよく、の字三字連ねて強調した方がよいと思うが、「極月」の「極」と「きわまれり」の「極」が重なるところが気になるので、やはり原句のままにしておくより仕様がなれないと思

う。

○独楽二つ廻りいることは息苦し

作者の内面生活が伺える。静思、反省の作者の息吹が独楽を通して感じられる。私の作品に

◇おのが影追いつつ独楽は乱れ伏す

◇子等といて独楽のとまりしこと見届く

というのがある。参考までに。

○浚渫船も恋も一日位置を換ええず

一見何の因果関係もない浚渫と恋とを拉してきて「一日位置をかえず」と定着したところ非凡であるが、その対比にやや「穿ち」が感じられる。

○雑念をはずめる丸さ壺は持ち

反省と沈思の作者が、「壺」を通して、安住感を詠んだものであるが、先人の作品にはすでにこうした境地は読み古されているようである。「壺は持ち」は少し推敲不足と思われる。「壺昏れる」「壺の位置」「壺光る」「壺に坐す」といろいろ考えているうちに今度は「丸さ」が気になって来た。呵々。

○檻の鶴又眼を閉ずるほかはなし

佳句であるが「ほかはなし」は常套語で一考を要する。「檻」は猛獣を想起するので「禽檻」「禽網」とでもしたらと思うがこんな成語は未熟かも知れない。

○惜しみなく愛は奪えと曼珠沙華

「惜しみなく愛は奪う」と有島武郎の著作の題名である。勿論この句はそのパロディではあるまいが……。「曼珠沙華」と据えたところに作者の着想は認める。

○青天の霹靂乳房黒くなり

遅しい句、含蓄もある。坐五は「乳房黒く見る」「黒ずめり」等々重々しくした方が、上の句の重圧に堪え得るのではあるまいか。

○牛小屋に月光美しき浪費

「浪費」が作者の手腕であり更に「美しき浪費」は作者の力量であろう。然し句に深味はない。

○似は似ても狼の影犬の影

佳句である。傾向が変わっているが、作者の眼に狂いはなさそうである。

○青春は旗翻るごとくなり

「青春の」としてはどうだろうか、句意は明瞭で、付け加えるところはない。

○若い目が見ているんだぞ政治家よ

平明、ズバリでよく分る。一步あやまるとスローガンになる危険性は孕み

つつも。

○日当りの悪い窓なり株式課

私が頂かなかった句、これがいわゆる「川柳」で、

◇注4 銀行員朝より蛍光す烏賊の如く

これは金子兜太の有名な注5 造形俳句である。

○荘厳ミサ嬰兒祈らず神に近し

敬虔な内省的な作者を見る。重厚さを愛しよう。

4

この句集を見てから「川柳雑誌」の川柳塔を見ていたら

十二月某日ブランコ揺りいたり 薫風子

六法全書の重さと聖書の重さ 同

というような句にぶつかり、益々今後の作者の精進に期待するところが大になった。

「有情」の三つの潮流は、前向き姿勢をとろうとする目覚めた作家が誰しも経験する一つの過渡現象として、貴重な足跡であろう。思うにその作句経歴はまだ七年ということであり、この句集は初期の作品から現在まで集めているための三つの傾向の混戦が見られるが必ずや作家薫風子は今後幾多の壁にぶつかって、脱皮に脱皮を重ねていつの日か第三の系列の作品ばかりの優れた作家として私達を畏敬せしめる日が来るのではあるまいか、彼の第二句集がそんな姿で現れる日を私は切に待望している。

彼が「魂に純粹さを失う」たり「人間として幾分成長した故か」というような感慨を捨てて、あくまでも闘志と、「紫の椅子」の抒情とを忘れずに、短詩作家として燃焼して行くことも願うのは私一人ではあるまい。

現在の「川柳雑誌」の作家の中では有数の貴重な作家として私は注目して行きたいと思う。

尚この「有情」の一つの特色として前書付けの句が、頗るうまいことである。

前書付の句というものは大抵月並みな、上滑りなものが多いが、彼はそんな場合でも、真実をこめて、或は悲しみ、或いは喜んで、一句たりともかりそめにしないその真摯さを買いたい。

豆秋さんを悼む

七七忌金魚の糞もただならず

母再び入院

かかる時海の晦さを待つ蚊帳よ

鳥取砂丘

砂丘有情お前と月の出を待とう

こうした句を見るととき彼の真情がよく伺える。最後の句は本句集の「有情」の典故となったものと思われる。私はこのお正月は山陰地方を旅行したが、鳥取の砂丘では横なぐりの吹雪に馬はうなだれ、路は雪の中に車の轍が深くめり込んで幾条かの筋を曳くという荒涼の砂丘で、到底薫風子の作のような有情はなく、怒り狂う日本海を見下ろしながら、ジープで震え乍ら砂丘を上ったり下ったりした事で、風紋どころの騒ぎではなかったが、薫風子作品のような和やかな日にもう一度訪れて見たいと思っている。私が現在住んでいる此花区というところは薫風子の作品に

瓦斯タンクの傍で結構人が住み

煙突の高さも高し此花区

寒空への煙突も煙吐き

とある通りの此花区の西北端で私は東洋一とかいう無水タンクの怪物と、灰色の運河と防潮堤、いつも私が吊り上げられそうな錯覚をおこすクレーンの群におびえる日常生活を過しているが、彼の奥さんの実家が私の家の近くにあるというような私信を頂いたのも何かの奇縁か。薫風子さんの御精進を祈って擲筆しよう。

(二九六三、三、一九)

注1 「人間横町」……「風流人間横丁」、が正しい。東野大八著。

注2 「詩情」……詩囊、が正しい。

注3 「よごさない」……汚さない、が正しい。

注4 「銀行員」の句……銀行員等朝より蛍光す鳥賊のごとく、が正しい。

注5 「造形俳句」……造型俳句、が正しい。

② 『有情』所収の句で『橘高薫風川柳句集』未収録のもの

【例】 妻の癖 すぐに値段のことを云う 9 33年11月

句の下の数字「9」は頁数。頁数の下に初出のわかっているものを示した。「川柳雑誌」に掲載されたものは柳誌名は省略。「33年11月」とあれば、「川柳雑誌」昭和33年11月号の川柳塔欄（路郎選）に掲載されたものであることを示す。薫風子が不朽洞会員になったのは、昭和32年2月だが、3月号までは作品は誌友投句欄の近作柳樽欄に掲載されている。「近作柳樽」欄に掲載された句は、「樽」で示す。「にしなり支部」「明和川柳研究会」とあるのは、その号の「各地柳壇」に掲載されたものである。句の異同も下に記した。

『橘高薫風川柳句集』未収録の句は、「有情」の章は八一句のうち一三句。「紫の椅子」の章は、一六五句のうち四四句。「往還」の章は二四一句のうち一〇八句。計四八七句のうち、一六五句が未収録である。

『有情』

「有情」

妻の癖 すぐに値段のことを云う 9 33年11月

子が生れ 妻 宝石をもう云わず 9 33年8月

逆境の父は邪教に凝りはじめ 1 1 35年4月9日、ふあうすと本社

「馬耳東風」 楯本紋太選

風鈴を残して家は売られたり 1 3 「逆境の」↑「馬耳東風」

浚渫船も 恋も 一日位置を換えず 1 4 32年12月

見合にも口数多き男なり 1 6 34年12月

この頃の酒量ただ事とも見えず 1 7 35年9月「にしなり支部」

雑念をしずめる丸さ 壺は持ち 2 1 「にしなり支部」

白浜千豊敷にて 2 3

海の没り日に 岩礁のみ染まろうとせず 2 3

須崎豆秋さんを悼む 一句 2 5 36年7月、前書「須崎」なし

七七忌 金魚の糞もただならず 2 5

焦燥へ 夕日と月が入れかわり 2 5

プラスチックアルファ 心さもしく解決し 2 5

汽車ですら うしろ姿はうらわびし 2 7

「紫の椅子」 3 1 32年8月

恋たのし 切符を二枚買うて待ち 3 2 33年11月

二枚ずつ 二枚ずつ 切る 熱海駅 3 2 31年12月「樽」

鶏頭の紅さが憎し 逢えぬ日は 3 2 32年9月

看護婦の恋 門限を口に出し 3 3 33年7月「ように」↑「様に」

困われたままで小鳥のように死に 3 3 31年10月「樽」

惚れている方がハンカチ敷いてやり 3 5 37年5月

所在なさに 女と五目並べてる 3 6 34年12月

恋に倦み 女 魚より生臭し 3 7 37年6月

緞帳の豪華さに酔う女にて 3 8 31年11月「樽」

花の散るすがたところ 女にも 3 8 31年6月「樽」

疑えば 女の帯も蛇に見え 3 9 34年10月「にしなり支部」

女郎花のような女はもう居らず 4 2

白百合のようというたが気に入らず 4 2

見えすいたからくり それも女なり 4 2

前身は仲居 上手に蟹を食べ	4 3	34年5月9日、ふあうすと本社
落ちぶれて逢いたがらぬも女なり	4 3	「蟹」 梶本紋太選
番台にも謎の女としてうつり	4 3	33年2月「女なり」↑「女にて」
恋人の頸が月見草に似て	4 4	33年11月「にしなり支部」
指にさえ表情持っている女	4 4	32年1月「樽」
さようなら 女の好きな台詞なり	4 4	
女十六 泣いてももころ満たずなり	4 5	
小説の恋より知らぬ娘に育て	4 5	32年6月
爪赤く染めても何処かじむさし	4 6	
男へはつらい逢瀬と云うておき	4 6	34年11月
倍氣していても湯だけはたぎらせて	4 3	33年12月13日、ふあうすと本社
執念のように娼婦は貯め続け	4 9	「倍氣」 津山信夫選
女なり 手紙でありつたけを云う	5 0	33年3月7日、本社「貯金」博也選
振り返りはせぬかと 女 まだ立って	5 0	
肉体というモードではないおばあちゃん	5 1	32年12月
もう嘘を見抜いて母の眼が優し	5 3	
小説に 乙女心を奪われし	5 5	
トンネルを出た思いなるお元日	5 8	35年2月
元旦だ 吸いさし喫うのなど止そう	5 8	36年1月
島の春 段々島は南向き	6 0	32年5月
サーカスの五色の玉は 春のもの	6 0	
童心にかえれとすみれ れんげ草	6 0	36年9月「明和川柳研究会」
秋の夜の夜店の裏の闇が濃し	6 1	
真心を押しつけられている暑さ	6 5	
雪の朝 椿はやはり朱けに咲き	6 8	
洗われて 葱の香少し甦る	6 8	
嘘をつく大人だと子はも知っている	7 0	
ポケットの小銭鳴らしてホッピング	7 4	32年7月

鼻を振る象の媚態もあわれなり	8 3	
蜘蛛の巣の憎し 一糸も乱れぬは	8 4	
「往還」		
思い出は散らず 野の薔薇散ろうとも	8 6	31年7月「樽」
真ッ直ぐな道は さびしいものを持つ	8 7	
天を指す蔓へ さびしくなるばかり	8 7	
デマ売って食う人生もあるのなり	8 9	
コップ酒 水飲むように飲み干せり	9 2	
満員車 一升壇をかばうてる	9 5	
しゃべり酒 子供面白がつて聞き	9 5	
手際よい処置の憎さも執達吏	9 6	35年3月「にしなり支部」
封印をされた筆筒が嵩だかし	9 7	
毛脛撫でながら債鬼はとりあわず	9 7	
そう云えば そんな気がする借りが出る	9 9	33年1月
金借せといわれ 他人の顔となり	1 0 0	32年2月「樽」
人相が金貯めだしてから変り	1 0 0	31年12月「樽」
借りるだけにある銀行と云うて居	1 0 1	
金に物云わせ善意がこじれて来	1 0 1	
人間のくらし 埃りにすぐ慣れる	1 0 2	
若い目が見ているんだぞ 政治家よ	1 0 3	
代議士に死んだ後まで利用され	1 0 3	32年5月
一生に自分の家も持たず死に	1 0 4	松露句会。昭和35年10月
頼杖の師にこんこんとさとされる	1 0 6	16日、「家」城内吾柳選
乞食の子 おじぎしたまま寝てしま	1 0 7	35年8月
行李から女中アルバム出して見せ	1 0 9	32年10月
蜘蛛が巣を繕ろうに似た屋根普請	1 1 0	31年7月「樽」
糸切れた凧にさも似た離婚沙汰	1 1 1	32年2月「樽」
ペコペコの鋸を素人もてあまし	1 1 1	31年11月「樽」

水鼻をかむ間 電話を待たしとき	1	1	3	32年2月「樽」
道ちよつと聞くに相手が綺麗すぎ	1	1	3	
衝立の陰の手真似は幹事さん	1	1	3	33年4月
叱られる使いと知らぬお人好し	1	1	4	
甘栗の皮を散らかすいやしんぼ	1	1	4	
横やりが奴の趣味とは知らなんだ	1	1	5	
受け売りと思わせぬもお人柄	1	1	5	
大げさに 雪崩に遭うたことを云い	1	1	6	
吊橋を揺るがせてゆく若さあり	1	1	7	
パトロール若し 顎紐かけてくる	1	1	7	34年8月
三角になった墨をばまだ使い	1	1	8	
焼跡の凹んだ鍋で湯を沸し	1	1	8	
朝晩を市電で通う老主任	1	1	8	
テレビ買わぬを主義のように云う	1	1	9	
卑怯者にされておこう と 盃受けず	1	1	9	34年11月14日、ふあうすと本社 「卑怯」 榎本紋太選
大学を出た跡継ぎが寄りつかず	1	2	0	
信心をしろと主治医にも云われ	1	2	0	
恥を知る顔とは見えぬサングラス	1	2	1	
愛の巢を私立探偵見上げてる	1	2	2	
高飛びの道連れなどつゆ知らず	1	2	3	
同居して魚を片身ずつ分ける	1	2	4	
心まで濡れそう 告別式の雨	1	2	6	34年5月
ブローカーのコツで縁談まとめて来	1	2	8	
都会淋しや 女の紐というがあり	1	2	9	
都会の哀愁 ナイターの灯が消える	1	2	9	
鼻かめば 鼻の黒さも大阪や	1	3	0	
寒空へ どの煙突も煙吐き	1	3	1	35年4月7日、本社「黒」路郎選
絵本一冊売れても夜店並べ替え	1	3	2	33年12月7日、本社「寒空」路郎選
今撒いた水が凍っている 屋台	1	3	2	

皆帰る足どりに見え 十二月	1	3	3	
雲をつかむ話に乗った十二月	1	3	3	
大晦日 諸行無常とすまされず	1	3	3	
土少しつけて苗木が届けられ	1	3	4	
朝の日へ 花と並んで立っている	1	3	4	36年11月「明和川柳研究会」
花束の花 皆上を向く 佳き日	1	3	4	
深く吸う煙草 勝算胸にあり	1	3	6	
ライバルの前 さりげなくさりげなく	1	3	6	
左遷から任めば都と便りが来	1	3	7	31年11月「樽」
新入社 眼鏡も一つはりこんで	1	3	8	
新入社 廊下の床がよく滑り	1	3	8	37年4月
郊外の夕日へ戻る勤め人	1	3	9	
洒落たつもりが 上役を怒らせる	1	3	9	
シヨックです などと 抜擢うれしそう	1	3	9	36年12月10日、 本社「シヨック」路郎選
腹案を抱いて 大江橋渡る	1	4	0	
日銀は 誰が這入つてゆくでなく	1	4	0	33年9月
日当りの悪い窓なり 株式課	1	4	0	34年3月
沢庵を噛むにも 社長豪快な	1	4	1	32年11月
社長のスランブ 人間ドックへ這入つてる	1	4	1	
レジャーブームを 先代は笑うらん	1	4	2	36年3月7日、本社 「先代」路郎選
横顔に 小泉八雲生きている	1	4	3	37年1月13日、本社 「横顔」路郎選
宰相の顔に迷いはなきごとし	1	4	3	
虎の皮敷いて国粋主義でいる	1	4	3	35年11月15日、 ふあうすと姫路の会
冷水摩擦の頑固一徹	1	4	5	
銭湯の籠へ癩性見せてやり	1	4	5	
作業服着ればいよいよ無口なり	1	4	6	

## 2 『檸檬』

### ① 句集『檸檬』について

句集『檸檬』の奥付を記す。

川柳叢書・川柳句集「檸檬」奥付・価五百円・昭和四十年七月六日印刷  
 ・昭和四十年七月十一日発行・著者・橋高薫風・発行者・麻生幸二郎・  
 発行所・大阪市住吉区万代西五丁目二十五番地川柳雑誌社

写真は、山本邦。著者印は、薫風、の角印。A5判・一六八頁。一頁一句  
 三句立て。三〇〇句収録。その内、八九句は『有情』の句を再録。なお『檸  
 檬』の句は、天地を揃えてあり一字空白のある句はない。

路郎の序・薫風のあとがき・著者柳歴を参考に入れておく。

### 序

視野無限

この言葉に尽く

昭和四十年初夏のころ

不朽洞の病室にて

麻生路郎 識

あとがき

乱れ髪式部の世より恋は憂き

兼題「乱れ髪」でつくったこの句が私の川柳への第一歩で、昭和三十年一  
 月であった。以来十年、麻生路郎先生のご指導を力にこの道を歩き続けてき  
 だ。

川柳雑誌の四百二十三号に私はこう書いている。

無精髭 第一ボタン外れてる	1 4 6	
校長の子がいて教師気が疲れ	1 4 7	
自衛隊の制服を着て養子来る	1 4 8	
養母にある色気に養子気がつまり	1 4 8	36年4月号。35年度第百九回
時代なり 天衣無縫の養子が来	1 4 8	大万川柳「養子」路郎選天位
滝の音 男心が通じ合う	1 4 9	
四十過ぎ ようやく向い風となり	1 4 9	36年2月「明和研究会」
鳥籠を預けて夫婦旅に出る	1 5 0	31年12月「樽」
湯の宿の意外な窓に富士が見え	1 5 0	
鳩に餌をやるのも旅のころなる	1 5 0	34年2月
髪ふり乱す女に似たり 海の荒れ	1 5 2	35年5月
悲しみが夜汽車のように遠去かる	1 5 3	31年5月「樽」
過去へ向って流れるごとし 笛の音は	1 5 3	
独身の机の上の磯じまん	1 5 4	34年7月
独り身に 造花の埃りよく目立ち	1 5 4	35年5月「玉造支部」
保線夫の息 鉄くさく 酒くさく	1 5 8	33年1月
見栄もなく冬の木立のごとくいる	1 5 8	33年5月。「如く居る」
さびしさは 一本杉に似て老いる	1 5 9	
空にまで夢のなくなる世がさびし	1 5 9	
風鈴が錆びついたまま 旧家なり	1 6 0	33年7月6日、川柳まつり
棕櫚の木も由緒正しい寺に見え	1 6 1	「風鈴」内藤きさ子選
色即是空などは仏のたまわず	1 6 1	
旅僧のうしろ姿が 舞台めく	1 6 1	34年9月「京都支部」
武運長久以来 祈ったことがなし	1 6 2	32年12月
祈りから目を挙げ 花の鮮やかさ	1 6 2	
墓建てる孝行が まだ 残こつてる	1 6 4	
通夜の隅 裏切り者として坐り	1 6 4	

「紫は沈んだ華やかさを持つ品格のある色だ。私は二十年前までこの色が最も好きであった。今はどんな色にも興味を覚え魅力を感じとるようになったが、これは私の魂に純粹さが薄れてしまった故か、或は人間として幾分成長して来た故か、おそらくそのどちらでもあるのだろう。私は紫の椅子にじっくり腰を下ろして、沈んだ華やかさを持つ品格ある詩囊を肥やして行きたい。」

右の私の抱負は今もお変りがない。

十年生み続けて来た句の中から三百句を自選し、川柳句集「檸檬」と題した。檸檬はその形、知的、又、抒情的で、しかも清潔感にあふれている。天地の純真が身体一杯に漲っている感じである。私は、私の一句一句を檸檬のように清新ならしめたいと絶えず願っている。

句集刊行に当って、路郎先生は病床にありながら即座に貴い序を下さり、叱咤激励、私の前途を指し示して下さいました。師恩の鴻大に唯々感泣するばかりである。

表紙を飾って下さった南画院評議員の伊藤紫紅先生、写真をこころよく引き受けて下さったジャパンタイムス大阪支社の山本邦氏に、併せて感謝の意を表す。

昭和四十年六月十八日

橘 高 薫 風

著者柳歴

昭和三十年一月、川柳を知り作句を始める。

昭和三十一年二月、「川柳雑誌」近作柳構欄に二句掲載される。

昭和三十二年二月、西尾菜氏の推薦を得て不朽洞会に入会。

昭和三十三年二月、川柳雑誌社編集部に入り今日に及ぶ。

「川柳雑誌」昭和40年9月号には、多くの人が「噫 路郎先生」の題のもとに、エッセイを寄せている。薫風のは、日記風に綴られていて『檸檬』出版の様子もうかがえる。全文を載せる。

五月二十日、不朽洞へ原稿整理に。葭乃先生に句集刊行の意志を述べ、機を見て路郎先生にご相談戴くようお願いする。夜、辞去する直前、路郎先生からお呼びがあり、二階の病室へ伺うと、「序文を書こう、印刷所との交渉もしてあげよう、他はすべて君がやるんだ。」と仰言って、「先日の寿司はおいしかった。退院して始めて飯を食った気分になったよ。」と鮎万の雀ずしを喜んで戴けた。塚越迷亭氏の急逝を例に、人の生命のはかなさに触れられ、句集刊行は迅速にと励まされる。即日のお許しありがたし。

五月二十五日（火）路郎先生より序文を戴く。銀行の小さなメモに万年筆で書かれてあった。

視野無限

この言葉に尽く

昭和四十年初夏のころ

病床に臥す 麻生路郎識

先生に甘える日頃の悪い癖が出て、つい「不朽洞の病室にて」の方がよろしいと思う旨申し上げたら、「そうだなあ。」とあっさり書き直された。こんなことは珍しい。常識的でなまぬるい表現にしまったかと、後後気に病むことしきりである。

五月二十九日、不朽洞へ。句稿完成し、序文、あとがきを清記して表紙の画と共に持参。「檸檬」と題す。路郎先生は、注第一頁の恋の句を他の適当な句と入れ替えよと注意をされた以外は総て可とされる。嬉しかった。三十一日に印刷所と交渉して下さいさる予定と。

六月二日（水）不朽洞へ。著者近影の写真版作成を製版所に依頼す。先生から印刷所との話し合いの経過などを伺う。

六月七日、九日、十五日、十九日、二十三日、二十五日、不朽洞へ、不朽洞へ、が日記に続く。この間、梅雨が執拗に続いていて健康な者でさえ身体

がだるい。先生はいつも蔑乃先生に灸をすえてもらっておられた。

七月二日（金）不朽洞へ。病室で路郎先生、林宏子さんと句集の最終打ち合わせ。梅雨のせいかな先生のご気分すぐれず校正刷がお手許で暫時停滞していたのだが……。先生はわざわざ辞書の「れもん」の活字を切りとって、それを見本に「川柳雑誌」に掲載する句集の広告用凸版を作成して置いて下さる。この日、林さんと小生、先生に大喝してお叱りを受ける。先生元氣。急転印刷開始。

七月四日（日）不朽洞へ。路郎先生眠り続けておられ、昨日より飲みものも嘔吐される。食欲皆無。足に浮腫ありと。蔑乃先生、「自然にまかせろほかしようがありません。」と、自若たる態度で八月号郵送用封筒の宛名書きを続けておられる。

七月六日、不朽洞へ。表紙の画の凸版出来上る。蔑乃先生、奈那さん、林さん交代で先生の背中をさすっておられる模様。昨日はトマトジュースをコップに半分程飲まれ、今日は口を少しきかれるとのこと、先生の咳一つ。

七月八日朝、不朽洞から電話。噫、「れもん」の序文が先生の絶筆となつてしまった。無念。

七月九日（金）晴。密葬。情熱の炎のような生前の先生のひとかけらすらうかがえぬ死顔だ。骸（なきがら）とはこのことだと感じた。棺に「川柳雑誌」七月号一冊。瓜破の斎場へお供をする。

七月に寒疣たてて師を送る

注 卷頭一頁の句は、（人生譜柳は日々の風を見す）。薫風が最初、巻頭に置いていた句は、句集の最後に据えられた（乱れ髮式部の世より恋は憂き）ではないだろうか。

「川柳塔」昭和41年12月号に、東野大八が『檸檬』評を執筆している。全文を載せる。

紫の椅子を羨む

橘高薫風著「檸檬」評

東野大八

六年ほど前だったか、お元氣なころの路郎先生へ

「橘高薫風という作家は、すばらしい。いまに川雑を背負って立つ人になりますよ」

といったことがある。

「君もそう思うか、あんなのが五人、いや三人居てくれたらなあ」  
と先生が真顔で答えられたことがある。

その彼の句集「檸檬」（れもん）を、通読して、かねての予想にたがわぬ好作家であることを確かめ、私はひとりあたり見回して、上機嫌になり、傍らの妻にさえ

「いい句集だよ、君も眼を通して御覧」  
と言い出す始末だった。

私はこれまで、数多くの句集に眼を通してきたことだが、ただの一度も、本気になってその句評を書いたことはない。だが、こんどだけは、いまこれから書くようなことを、書かされる、という破目に、独り陥る始末となった。

薫風という作家を、いつとはなしに注目しはじめた。私の意識外の意識と  
いうか、そういった心の動きを、いまじっくりとせんとせんとつめていくと、それは、かつての日の私自身の若さへと結びついていく。

若いころ、私は重症の文学青年だった。新感覚派時代のころの横光利一が  
「あつ、紫だツ」

と一人の女性に対し魂の叫びをあげた一郎にぶつかった個所があった。この横光さんが大陸へきたとき、若い私はインタヴューをとる膝頭のふるえをどうすることもできなかった。「旅愁」に出てくる「東野」というのはそのとき私のさしだした名刺からとられたものである。その旨のハガキを貰ったときには天にも昇る心地で、その紙片を長いこと机の前に、ピンで貼りつけて

おいたのだ。

余談になったが、紫のイメージは、そのように強烈な光芒を放って、今も私の心の奥底にけんらんと輝いている。

だが、ある權威のある教育者の話に、親のないような、愛に飢えた子は、つねに紫色の絵を描く、というのが出てきた。飢えたる愛のシンボライズされたものが、この色か？愛は知的なものへの飢えでもあるのかそれとも肌合濃い人の世への渴仰なのか、ロシエルは「飢えたる青春の飢餓」という言葉を用いているが、私のかつての日のこのころの奥底には、湿润したその心の飢えがつねに潜在していたことはたしかなようだ。とめどなき寂寞のなかの放浪。

薫風は、そういった私のかつての日の、心の風雪と、ほぼ似た地点に立って、黒髪なびかせて、ある寂寥に胸痛めつけられた若者ではないのか。それは文学か、恋か、人の世か。

—惚れている女 “箒はどこですの”

—デスマスクやっぱり俺は俺という

—豆しぼりお俵な恋がしてみたし

これが、三十台にかかったころの私の句であった。はなやぐような中にくぐもる、哀切—思えば私という男は、今日に立つともはや昨日への郷愁に立ちどころにかりたてられる。薫風の句は、それと同じ風が吹きわたっている。その奥底には、誰とも知れぬ、エリート<sup>エリート</sup>の香水をふりまいた。ペーソスの流れ。

—恋人の膝は檸檬のまるさかな

—恋なれやわれに鬣あるごとし

—花の香を嗅ぐ顔をして接吻す

—乱れ髮式部の世より恋は憂き

多情多感な、一人の若者のうた、そのみずみずしさ。もはや、言うすべもなし。

—春風の帷に吹くごとき懸想かな

—墓の前刻去るままに去らしむる

—生まれし時灯ありき死に行く時灯あらん

この三句の感覚はS・モームの作品のようにすばらしい。

この作者は、日記体の但し書の句に出色のものが多い、この種のもの総じて深みと味に欠けがちなものだが、彼はその対象のもつムードの把握がまことに巧い。

小出楯重展

裸婦の像わが頬にかたき無精髭

友人結婚

千万の睫の中の睫かな

阿波踊

鳥追笠を深くかぶれば恋めきぬ

東京オリンピック

ひた走るアベベ仏陀の相に似る

薫風の世相批判は常識人の折目正しさで、サラリとしていてアクがない。それだけに、ドミエの漫画の如き味合いがある。

—政治家の顔は自然と相容れず

—労働歌蟻が歌えば凄かろう

—弱肉強食鱗皮の鞆持ち

—学生を矢面に立て国貧し

—落選の酒は問答無用なり

—鶯の啼く庭に來た執達吏

—六法全書の重さと聖書の重さ

まだいくらかもある。書けば、句集すべてを書き連ねていかねばならないので、割愛せざるを得ないが、海女や、鳥取砂丘、そして十二月の句に秀句、名作が多い。私は、これからも、折ある毎にこの句集をひらき、慰めの日々の糧としていくつもりだが、巻頭にある一句にこうある。

—人生譜柳は日々の風を見ず、「見ず」が正しい—(編者注)。

彼は自然の中の生身、人間のただ中の孤独世俗の底の哀感を、どうこれからの句日記に書きつらねていくか。私は薫風を終生注目していきたいと思う。この人が四十五となり五十となるとき—そうだ私ほ五十の時の薫風の句を見

て死にたいとすら考える。

正直にいつて “この人は短命なのではないか、句が鋭くそして冷たすぎる” とそのかみ思ったことだった。しかし、自分、その心配はなさそうだ。

過日路郎忌に彼と茶をのんだとき、彼はためらいもなくレモンスカッシュをのんだが、いかにもこの人らしい、私ほ感銘したことだが。私はそうした彼に、果実の貴族レモンの、誇り高き気負いの情熱のまどかさを感じた。――紫の椅子の愁いはわが愁い――最後に、五十歳の薫風に私が期待するのは、レモンの心で句心に腐ったバナナや、トマトや、いもまでが入りこむ人の世の“錆”を身につけた彼にたいなる希望を抱くからである。ともあれ、川柳塔の今日から明日は彼の双肩にあるはずだ。いや、独り川柳塔ではない、私の欲する最大の柳人として、いまに日本柳壇の輝く太陽となる人だと信じる。まさに視野無限（路郎序）である。（ちとほめすぎたかな……） 呵々

② 『檸檬』所収の句で『橘高薫風川柳句集』未収録のもの

【例】 明石

蛸壺へ人の子寝かす子守唄 67 38年10月「明石にて」

句の下の数字は頁数。頁数の下に初出のわかっているものを示した。「38年10月」とあれば、「川柳雑誌」昭和38年10月号の川柳塔欄（路郎選）に掲載されたものであることを示す。「明石」は、句集での前書。「明石にて」は、雑誌掲載時の前書。また、句の異同も下に記した。

『有情』から再録した句・頁数も下に記した。次の例で言えば、132は、『檸檬』の頁数。25は『有情』の頁数。

七七忌金魚の糞もただならず 132 『有情』25

『橘高薫風川柳句集』未収録の句は、収録句数三〇〇句のうち、四八句。そのうち、『有情』収録句が六句ある。

『檸檬』

春愁の最たるは鳥齒を持たぬ	3		
愛恋の錆は何色桜桃忌	4		
卒業へまだ貞繰る雲雀の声	6		
わが影の障子の影も香林忌	12		40年2月
故郷に残る切株悔のごとし	13		
木犀の香に天照大神	19		39年11月
失恋にポストの色が変えられぬ	19		
小出楯重展			
裸婦の像わが頬にかたき無精髯	25		40年7月
菅楯彦展			
佛弟子の一人怒れる涅槃図絵	25		
月見草恋も滴るもののおち	30		39年10月
桐の花豆秋居士は寡黙居士	36		39年7月「豆秋さんの霊前を訪う」
政治家の顔を自然は相容れず	42		39年4月
人ひとりわが春愁の洞に入る	43		
由布院			
杉の秀の整然自衛隊緩慢	49		
元日のインターチェンジ飾り熨斗	52		
磯笛の細きは海女の年寄れる	57		39年2月
明石			
蛸壺へ人の子寝かす子守唄	67		38年10月「明石にて」
ラーメンの胃の腑に思索なかるべし	68		38年9月
親子の流浪夫婦の流浪より切なし	70		38年7月
螢飛ぶ一匹なれば人を恋わしむ	73		38年8月
春愁か樟脳の玉なくなっている	74		38年8月
月の出のエスカレーターよりゆるやか	78		38年4月
黒髪を梳くパイオリン弾くごとく	80		38年5月
鼻の孔耳の孔まで元旦也	85		38年2月
妻の死以後糞の中を傘ささず	87		38年5月

岩崎愛二氏夫人を悼む

山々も悲しむ雪の薄化粧  
川の面の煙突の影音楽的  
道で逢い道で別れぬ十二月  
椿落つ思いを断てと云うごとく  
国禁の書なき青春雷族

38年3月「悼 岩崎愛二氏夫人」  
38年1月  
38年1月  
38年1月「いうごとく」

悼大山竹二氏

黄の花火黄の菊となり悲をかこむ  
愛別離苦テープの色も濃紫  
コップ酒水飲むように飲み干せり  
二女幸誕生 二句（二句目）  
あかつきの光を得たり子と薔薇と  
風鈴を残して家は売られたり

38年2月  
37年10月7日、本社「紫」軸吟。  
『有情』92

1 9 7  
1 9 8  
1 1 3  
1 1 7  
1 2 4

『有情』13  
『有情』25  
『雑』34年1月  
『有情』32

七七忌金魚の糞もただならず  
除夜を聞く一つの旅を終えしごと  
二枚ずつ二枚ずつ切る熱海駅  
憂鬱を伝染して帰る女かな

35年8月「心配を伝染して帰る女  
が居」

1 3 2  
1 3 4  
1 3 8  
1 4 1

汚職無罪知恵の輪を抜くごとし  
あわれ子もやがて知るべし父の恋  
蜂の歩くは落武者に似る

40年7月9日、本社「蜂」軸吟。  
「歩くは」↑「憩むは」。

1 4 2  
1 4 4  
1 4 9

雷蝶ステンドグラスからこぼれ  
髪ふり乱す女に似たり海の荒れ  
祈りから目を挙げ花の鮮やかさ  
数珠を持つ右手左手慰め合う  
遠足の列を見送る葱坊主  
鈴虫を草へかえして都落ち

1 4 9  
1 5 1  
1 5 3  
1 5 3  
1 6 2  
1 6 3

3 『肉眼』

① 句集『肉眼』について

句集『肉眼』の奥付を記す。

川柳句集「肉眼」奥付・定価一千円・発行日・昭和四十八年十一月三日

・著者・橘高薫風・発行所・大阪市南区鰻谷仲之町二十番地・川柳塔社

写真、山本邦。著者印は、薫風の角印。

B6判・一五〇頁。一頁三句立、四五〇句収録。巻末に九頁の索引を付す。

『肉眼』は、「あとがき」にあるように、路郎死後の作品を収録しており、『有情』『檸檬』との重複はない。他の句集との重複句がないのは、『肉眼』のみである。一字空白のある句が多いのも、路郎精神を守ろうとする気持ちの表れだろう。

生々庵の序・薫風のとがきを参考に載せておく。

序 文

こんど本社編集長、橘高薫風君が、句集「肉眼」出すことになった。同君にとつて第三番目の句集である。第一句集に「有情」第二句集に「檸檬」がある。

その「檸檬」は、刊行が僅かに旬日遅れたばかりで、路郎先生のご臨終に間に合わず、親しく先生のお手にして頂けなかったと言う、悲しい思い出の句集である。この「檸檬」につづく第三句集が、こんどの「肉眼」であるわけであるが今となっては、この「檸檬」の誕生こそは、路郎先生にとつて、最後の愛弟子の句集となったのである。苦しい病牀にあつて筆を執り、愛する末子への贈りものとして尊い序を賜った。「視野無限、この言葉に尽く」というのである。薫風君にとつてかしこしとも、有難いとも、涙は枯れはて、胸は焦がされてしまった思いであつたらう。感激とも、鳴謝とも、そんな文字が、なんと白々しく、なんと生ぬるく、どうにかして、生地のままの自分

の思いを表現し得る文字や言葉はないものだろうか、こうした彼の苦悩は、到底、他人の伺い知ることを許さぬものがあつたらう。辛うじて、「檸檬」新刊第一号を、ご霊前に捧げつつ、「賜った序の教えを、護り本尊に、精進を続けます」と誓いの教語を綴り得たのであつた。それから八年の歳月が過ぎた。この固い誓いに裏付けされたように、薫風君の成長ぶりは、全国の柳界をして目をみはらせる今日になつた。同時にこの八年間は彼にとつて極めて苦しい八年間でもあつた。そうした歳月に耐えてゆく強靱な性根が、彼の肉体のどこにひそんで居るだろうか。恐らくは、「視野無限」のお言葉によつて、すべてが支えられて居るとしか思えない。その凝集の一片が「肉眼」となつて生れたのである。

第一句集「有情」が生れたのは、「檸檬」より丁度三年前のことで、その時彼は「これは僕の一里塚に過ぎない。一步一步蝸牛の歩みを続けてゆくであらう」と勇しく出発した。その当時の路郎先生は大変お元気で選句や装幀等すべて先生の手を煩わし、題字の「有情」は私達にも懐しい先生のご親筆として朱色に燃えて居る。その「有情」の序文に、「新進作家として推奨に値するレベルの高い句集であることは自負していいし、前途に多くの期待を懸けることの出来る作家である」と評された路郎先生のご達見に今更驚くのである。

こんどの「肉眼」は、四百五十句を収める予定のようで、先日、句稿にざつと目を通す機会を得て感じた事は、この「肉眼」をとおして、彼が愛好してやまぬ紫の椅子にゆつたり腰を落して、煙草をくゆらしながら、悠々迫らない自信にみちた姿は、「有情」から「檸檬」、「檸檬」から「肉眼」と大写真になつて私にせまつて来る。さぞかし、全国柳壇は新しい驚きと快哉とをもつて「肉眼」を迎えてくれる事であらう。

昭和四十八年六月十一日

於 川柳塔社  
中 島 生 々 庵

あとがき

藤沢桓夫先生に題字のご揮毫を頂戴することが出来て、私の終生の光栄と存じます。中島生々庵主幹のご懇篤なる序文ともども、心からあつくお礼申し上げます。

この句集は、麻生路郎先生の死去以後の八年間の句から四百五十句を集録したものです。先生の生前には絶えず選を仰いでいて、例えば、大きな壁にテニスのボールを打ちつけては反応を得るようになり、川柳という底知れぬものを納得し、理解しようとして修練を積んで来たのであります。その壁がなくなつて、いよいよ一人立ちの時代に入つたのです。壁がなくなつたのですから、ボールを自由奔放に何処へなりと飛ばすことが出来た筈ですが、私には目に見えぬ壁が感じられて、従前と同じ気持で、ある時は、先生の生前よりも一層着実温微なる作句態度を持ち続けて来ました。短詩文学の世界にも、厳しい「忍の精神」が存在することを、懷疑しながら領きながら進んで来たと言えます。それ故、第三句集と云えば、起承転結の転、ホップ、ステップ、ジャンプの大活躍の収穫が望まれるものなのです。この「肉眼」は、私の目にも「檸檬」の延長にすぎぬものに思われ、その意味では不本意な句集となりました。

昨年初冬、生活の転機を持ったこととて、この際一冊にまとめてみたわけです。

前二回に引き続いて今回も写真を担当して下さつた山本邦氏、並びに、句の集録、校正などのお世話を願つた窪田久美子、板尾岳人両氏に深甚の謝意を表します。

昭和四十八年六月十八日

橘 高 薫 風

「川柳塔」昭和48年12月号に、東野大八が『肉眼』評を執筆している。書き出しは省いて、三段落目から所々省略しながら載せておく。

肉眼の確かさ

——川柳句集「肉眼」を読んで——

東野大八

のつけに一口に申せば、川柳社会はどうも古くさくていけないね。川柳に人間性が大事なら、大事の前に古きを捨てよと申したい。もつともこれは何も柳界だけのことに限らない。俳句、短歌の大きくいえば短詩型すべての場合にいえることかもしれないね。

たとえば短詩型の主軸と目される俳句から入ろう。もともと俳句なるこの詩型は、自己完結なタイプの短歌の下の句を欠いたところで成立している。三十一文字詩型の、下半分近い充足部分を省略してそれを鑑賞者の想像力を借りて成立させている。いわば下の句の鑑賞は貴方ませである。この貴方ませの想像力に期待してほうり出された作品を、鑑賞させられる側だが、感受性が豊かで想像力も優れていけば問題ではないが、反対に頭脳がお粗末で質がおちる場合だとあたらず作者の意図は地をはらう始末となる。名句も迷句の鑑賞たらざるを得ない。

早い話が前衛を自負する詩川柳派の難解一途のしるものを例にあげてみると、その大方の作品は文芸上不可欠の「真」ではなく、文芸上の技芸に過ぎないものがほとんどといえる。自己陶酔的な甘美なまでのこの抒情と称する情緒主義は、草木的開花ならまだよい方で、まるでプラスチック製の香港フラワーに似ている。無味乾燥なこの詩型は、必然、的外れな恣意的鑑賞を誘いあげてしまう。作者にとつては、内心噴飯ものの望外な「名句鑑賞」がそこにまかり出る結果となる。

「日本古典鑑賞講座」の中で山本健吉氏は俳句を不完全詩型・不安定詩型としてそこに「完結体としての安定を獲る」方向を見出そうと説いている。(同著「芭蕉」の項参照)この論旨の前に、私はそこに新しい文芸川柳の存

在を必然的に想起せざるを得なかったのである。完結体としての短詩型、それは近代的川柳の一型式がここにあるのだと……

こんなことを書きはじめると、本誌すべてを埋めても埋め切れない大河の論旨の展開となるので、また他日に譲ることになるが、もつとも伝統なり本格なる名の川柳はあまりにも完結体すぎておそろしく食い足りないのだが……。そこで以上の短詩型詩論の一細胞的私の川柳鑑賞のペン先に浮かび上つてきたのが、本誌の橘高薫風著になる最近刊「肉眼」(川柳塔刊価千円)である。

——恋人がいま肉眼に入り来る

書名との関連ある「肉眼」の句はこれ一句のみ。今日一日(生涯かも知れぬ)をその恋人に賭けた人物が、しかと相手を捉えた喜びがよくこの二文字に示されている。句会だと果してこの「肉眼」を捉えうる選者は……?といいたいところだ。「檸檬」もそうだったがこの作者は、れもんや紫の椅子の綺羅三昧の高貴なムードがつねに官能の底にある。

——金環蝕そらエンゲージリングだよ

——金ペンにふさわしき秋灯となる

——睡蓮に汗くさき身を遠ざける

——讃岐富士一番星を簪に

この著者にとつての川柳句集は、今回が三冊目にあたるが、全著書を通じてこの人の作品系列には、人間の俗事の垢は感じられない清冽な一人間の風土で貫かれている。その垣間みる「死」の姿までも持前の官能的だ。

——牡丹雪ゆつくり俺が昇天す

——終焉や裂けてくれない増す柘榴

亡き路郎師への追慕敬悼の句がきわめて多いのも、今回の句集の特徴だが、その作品にも、作者の感能がよく示されている。

——路郎忌に炸裂したるカンナの朱

——老詩人ひとり渉らず天の川

——蓮の花は一茎一花 恩師の忌

——路郎の忌 睡蓮水の旅つづけ

それだけに、ひとしお人肌濃いつぎの作品が私の感受性につよくこたえて

くるのである。

— 恩師の死その夜眠むしとも眠むし

— 恩師の師手にとまる蚊をただみつめ

— 路郎忌に松の洩れ日のなつかしさ

この人は旅の孤独の好きな人だ。それだけに叙景句のものは小太刀の冴えがある。

— 尾道や今見下せし船に乗る

— 大文字恋のはじめのごとく点く

— 遠き火の小さく濃ゆし大文字

— 足摺の雨は遍路へ地から降る

(金剛山)

— 霧這えば杉の樹間の正しさよ

(浄瑠璃寺)

— 塔の朱の水に映れば浄土の朱

路郎先生は「視野無限、この言葉に尽く」と第一句集「檸檬」で記されたが、川柳文芸の情緒主義を、高度な詩章で捉え切ったその手腕は、わが柳界でもユニークなものである。この知的な十七字への昇華は、文学的特質の表現技巧でもある起承転結が一句に凝縮されていることによる。この完結体の短詩型が単調一途の伝統川柳の近代感覚を呼び起こしているともいえる。

— 捨猫とうなだれがちの向日葵と

— 裏切られあたたかきもの放尿す

— 昼顔へとどきたけれど波の舌

— 猫柳亡き人ばかり思われる

— ジンフィズ美人は美德だと思ふ

— お元日日本人の眼の黒さ

感動をとまなぬ既成川柳への、一種の活眼は前例句五句目の「眼の黒さ」にある。

— 長靴の片方どうしてもこける

— 学問の跡形もなし小商人

— 逢いに行く心の中の首飾り

— 黝々と水かけ不動恋の垢

— 火口湖からわが眼鏡から霧生まる

— 冬の酒蛸の足こそ親しけれ

— 切株の俺の五年と子の五年

— 牡蛎殻におのずからなる波の縞

橘高薫風はまぎれもなく川柳作家である。

— 石くれも三つ積んだら思惟の塔

と彼も作句にこと寄せているが、その柳眼のモチーフは、彼が最も愛惜思慕してやまぬ路郎師のそれに近い。だが、その叙法はどこかつねに絵画的な清新な色彩感覚に溢れたものといえる。俳諧の古典にさかのばれば、蕪村を想わせるものがあるが、「行きて帰る心の味」を説いた詩的経験の世界に生きた芭蕉の味わいは、まさに彼の場合はこれからさきのことになりそうである。五分月代の渡世人的私にとっては、その「俗の垢」の厚味を今後どうつけて貰えるかに、この人の明日の成長があるように思える。ともあれ集句四百五十句、いい川柳を鑑賞する喜びの一ときを味えたことに、薄汚いこの渡世人は酒の味を格別にしたことだけを特につけ加えておきたい。

## ② 『肉眼』所収の句で『橘高薫風川柳句集』未収録のもの

【例】 柳も雲も後姿に 恩師の死 2 40年10月

句の下の数字は頁数。頁数の下に初出のわかっているものを示した。「40年10月」とあれば、「川柳塔」昭和40年10月号の川柳塔欄に掲載されたものであることを示す。「川柳塔」の創刊号が昭和40年10月号なので、それ以前の号は、「川柳雑誌」のものである。「どんぐり川柳会」とあるのは、その号の「各地柳壇」に掲載されたものである。句の異同も下に記した。

『橘高薫風川柳句集』未収録の句は、計四五〇句のうち九八句である。



嗚呼 清原祐志君 五句、のうち未収録の二句。

菊の精を見き 童貞を見き 君に 7 1 44年1月

骸と同じ形でこの夜寝る 7 1 44年1月

雪見えて特急列車熱帯びる 7 2 44年4月

盲人の手をひく先を道おしえ 7 5 44年6月

夕桜 人の情は大切な 7 6 44年6月

鳥取砂丘 四句、のうち未収録の一句。 7 6 44年6月

風紋に 電気に似たるもの走る 7 9 44年7月

夕桜 恋の正体判らねど 7 9 44年7月

夕桜 光も影も吸い尽くし 7 9 44年5月本社「影」軸。

六帖の浄土となつて眠りこけ 8 0 44年5月本社「影」軸。

逢いに行く心の中の首飾り 8 0 44年9月

額の裸婦と同じポーズで夢を見ている 8 0 44年9月

金魚すくいの網のごとしか 敗北は 8 1 44年9月

残暑お見舞 鞭打ち症も三月目で 8 2 44年10月

逢いに来た 魚族のように身をしまらせ 8 3 44年10月

恋人の芥子の涙でもいいさ 8 3 44年10月

ひと一人心に見えて秋の風 8 3 44年11月

河相すゝむ氏一年祭 8 3 44年11月

虫が鳴く 一直線に亡き人へ 8 4 44年11月

一方になびけば恋慕薄とぞ 8 5 44年12月

榛名富士 四季の手鏡秋は藍 8 5 44年12月

望郷よ 地図の上では三榎 8 5 45年1月

菊の呼吸 処女懐胎もありぬべし 8 6 45年1月

牡丹雪 聴覚視覚より敏に 9 4 46年4月

光堂 胸三寸に収まれり 9 8 45年9月

遠き火の小さく濃ゆし大文字 1 0 0 45年10月

額縁を出て薔薇捨てし夫人像 1 0 5 45年10月

朝顔にロマン生まれるべくもなし 1 0 5

嗚呼 清水白柳氏 4句、のうち未収録の一句。 1 0 7 46年1月 前書「一さん」

菊の香よ 親切心は引き継がん 1 0 7 46年4月

なお会わず 冬木は黒い血管図 1 0 7 46年4月

毛皮来て女にめぐる獣の血 1 0 9 第17回(一九七二年)

人を待つ茶房の壁の古城の絵 1 1 0 全国川柳作家年鑑にあり

便り来て咳こぼれたり うれしい咳 1 1 1 46年6月

活け花の師匠にもある邪推かな 1 1 1 46年4月

ベトナムの難民に似た瘦昼寝 1 1 7 46年9月「どんぐり川柳会」

一日は鎖一環 倦怠期 1 1 9 46年10月

中年や 初冬に多き赤い花 1 2 0 46年11月

革命へ 音沙汰もなき志 1 2 0 46年12月

滝又水 海を渡つて来たわれに 1 2 1 46年12月

枯枝に鳥 幾世の友情か 1 2 2 47年1月

黒い炎は人妻の掌の黒茶碗 1 2 5 47年3月

琴古く曲新しく いのちの譜 1 2 7 47年4月

山路星文洞氏へ 1 3 1 47年6月

めでたさは作句還暦 喜寿の翁 1 3 7 47年6月

雨の作州大原で 1 3 7 47年6月

武蔵少年が見ていた雨垂れか 1 3 7 47年6月

中年や 癩癩病みを絶えて見ず 1 3 8 47年6月

当選をしたら蝶を裏返し 1 3 8 47年6月

愛人を帰して闘志一転す 1 4 0 48年1月

弥次郎兵衛 一人一点 殉死かな 1 4 1 48年1月

男ばかり澄む 橋立は松の木ばかり 1 4 4 「川柳ジャーナル」48年3月

昼顔へとどきたけれど波の舌 1 4 5 招待作品「二兵の生」

白昼夢 灰皿はわがコロシウム 1 4 6 右に同じ。 48年6月

1 4 8 48年6月

## 4 『愛染』

### ① 句集『愛染』について

句集『愛染』の奥付を記す。

川柳句集「愛染」奥付・定価・三千円・発行日・昭和六十一年八月

二十六日・著者・橋高薫風・発行所・大阪市阿倍野区三明町二丁目  
十番十六号・川柳塔社

写真（中之島公園にて）は、山本邦。「不思議な顔」と題して、こう述べている。「薫風さんのポートレートは四度目である。いつも句集を出すときだった。処女出版から二十五年ほどになるが、少しも年をとらない不思議な顔だ。／川柳の三要素は、うがち、こつけい、かるみといわれているが、人生の老練さが加わると、もうこの上はない。薫風さんもそんな時期がきたのであるうが、顔には少しも表れない。／山本 邦」

著者印は、薫風の角印。題簽は、橋高薫風。

B 6判・一七九頁（序・あとがき・索引はページ数に含まず）。一頁五句立。巻末に索引一六頁を付す。

「有情」の章が、P 11～15 『有情』四八七句から七五句再録

「檸檬」の章が、P 17～47 『檸檬』三〇〇句から一五五句再録

「肉眼」の章が、P 49～97 『肉眼』四五〇句から二四五句再録

「愛染」の章が、P 99～179 『肉眼』以後の作品四〇五句

八八〇句収録。その内、四七五句は過去の句集から再録したものである。

某の序・薫風のあとがきを参考に載せておく。

### 序

薫風君が第四句集「愛染」を出されることになった。洵に慶賀の至りであ

る。

第一輯の「有情」は昭和三十七年七月十一日、三十六才の誕生日に出版された。第二輯の「檸檬」は昭和四十年六月、三十八才の時で、第三輯の「肉眼」は昭和四十八年六月の四十六才の時であった。生涯のうちで、一冊の句集も出すことの出来ない人がゴマンとあるのに、四冊目の句集を出す薫風君は、最高の力量をもつと共に幸福な方である。一言で句集と言っても、江湖に問う句が、又自己を知ってもらおう充実した句がどれだけあるかと言うことと、経済的な面で、そう簡単に踏み切れるものではない。過去三冊の句集の発刊される時は、まだお母さんは、ご健在で、薫（本名）が句集出すのなら、私は一肌も二肌も脱ぎましようというお話を伺ったことがある。

あの親孝行の薫風君とお母さんのコンビの美談は、私達を感激させたものだった。この度の発刊日はきつとお母さんの祥月命日の八月二十六日にされることだと思ふ。そして、お母さんにデジケートされるに違いない。美しいことである。

「有情」「檸檬」の序文は路郎先生が立派に書いておられ、「肉眼」は前主幹の生々庵先生が名文をものさされている。今度私が序文を書く番になったが、薫風君の句は、先に出された三冊の句集によって既に定評があるので、今度出版される句集「愛染」はどんなに皆さんが期待されているかと思ふと、私も胸の踊るのを禁じ得ない。

この度の句集「愛染」発刊は、時恰かも君の還暦に当るので誠に意義深い出版となった。肉眼発刊以来十三年の年月が経った。その間の彼独特のユニークな格調高い句は、前三冊の句集を凌駕していることは勿論で、薫風ファンの随喜の的となり、經典となり、聖書となって読者を魅了することと思ふ。そして第五句集の発刊される日を切望してやまない次第である。

薫風君は、目下川柳塔社の副主幹であり、雑誌川柳塔の編集長と八面六臂の活動をしておられる。

胃半分肺半分の湯呑かなと薫風君自身詠んでいられる健康で、こんなに活躍出来るのも、常に彼の健康に留意して、陰になり日向になって面倒を見ておられる献身的な奥様のおられることを忘れてはならない。句集「愛染」

の後ろには、奥様のお力が燦然とかがやいているのである。二人のお嬢さんは既に結婚されて、可愛いお孫さんもおられる。坊ちゃんも目下大学ご在学中である。才子有情、幸に加餐されんことを祈って、ペンを擱く。

天神祭の日

水鶏庵にて

栗

あとがき

やはり今年のように句集を出そうと思いなおしたのは、六月の中旬、信濃への旅に出て梅雨晴れの白い雲を眺めたときで、即座に同行の西尾栗主幹に序文をお願いしたので、その気持は一層確乎たるものになった。

それからの慌しい作品集めは、身近かにある雑誌からの抄出となり、各地の川柳会で発表した作品は収録する時間の余裕がなかった。既刊の三冊の句集から若干再録したのは還暦の年に当り、三十余年の川柳生活の足跡としてまとめたかったからである。

詩歌の本質は、相聞と挽歌がその両輪をなすものと考えている私は、はじめて川柳に接した当初から恋に関する句が多かった。第三句集「肉眼」の下半期、母と四国遍路に出た頃から、精神的なものを尚更に指向しはじめたように思う。そして、母の死の前後に頂点に達し、それ以後は腑抜けたように力が入らなくなってしまう。

愛染とは煩惱の意。私という人間の醜態の姿にほかならない。

麻生路郎先生に師事する以前からご指導を得ていた、栗主幹の序文を戴けたことに心からお礼申し上げ、写真と、作品の整理の労を戴いた山本邦義氏と西出楓楽さんに、それぞれ深甚の謝意を表します。

七月十一日

橋高薫風

「川柳しなの」昭和62年2月号に、東野大八が『愛染』観賞を執筆している。全文を載せる。

恋人の膝は檸檬のまるさかな

橋高薫風還暦記念句集「愛染」観賞

東野大八

はじめにこの稿を書くに当たって、私と川柳とのかわりについて簡単に説明しておきたい。私はいまは一種の川柳雑文屋である。ブンヤ（新聞用語）の成れの果てからの哀しき習性である。川柳については、作句に無関心だし、選者はお断り、したがって大の句会嫌いである。なぜにこういう代物に出来上がったかといえ、本音は強烈な文学青年であることだ。老醜の極みの今もこの夢は全く捨てきつてはいない。この件についてはまた稿を改めて書くことにしよう。

こういう川柳を疎んじながら、悪女の深情け的に川柳への未練を断ち切れぬところからの私の心の期待は、川柳の未来を支える好作家の出現にあった。待つこと久し、忽然と一人の新人が颯爽と私の前に姿を現わした。橋高薫風である。彼との句の上の出会い、昭和37年に出版された、彼の第一句集「有情」を手にしたときにはじまった。私は通読するなり、直ちに麻生路郎先生宛に一書を認めた。

「先生の衣鉢を継ぐまたとない好作家だと思えます。しつかと捉えて離さぬように……」

と内容のものだ。先生から折返し返書がきた。

「仰せの通り、このような作家が私の門下に四、五人居たら不朽洞も泰山の安きにおかれるのだが……」

との嬉しげな長い文面であった。

麻生路郎先生は「川柳雑誌」（昭和38年11月号）の窓口談義に「句集は作家の魂の顕現」と題しつぎの様に書いていられる。その長い一文から抄録する。

「……私の門下の若い川柳人が、別に何々記念というのではなく、自己の

作品を世に問うために、勇敢にも句集に踏み切った。そしてハツラツたる作品が好評を博し、我社の刊行した柳書中でトップを切ったのであった。この青年は、第二句集刊行に向かって前進を開始しているのであるが彼いわく、「私の母は、私の第二句集の一助にと毎月五千円ずつ貯金をはじめました。素晴らしい句がたまるまでに、刊行費の方が先に行くのではないかと心配しています」

というのである。私は思わず熱い涙がまぶたを濡らした。この母の愛情、この子の幸福、川柳人は数多いが、こうした親子なんてそうザラにあるものはなからう。この青年のような話は永い川柳生活をしている私にとつてもはじめてのことである。」

この文中にある青年こそ橘高薫風で、その問題の第二句集は「檸檬（れもん）」と題して注1昭和40年6月に出た。第一句集「有情」の序文は路郎先生だったが、その懇切な文章に比べ、第二句集の折は路郎先生病篤き折柄で「視野無限 この言葉に尽く

昭和四十年初夏のころ 病床に臥す

麻生 路郎 識

という至極簡略なものであったが、これが薫風の師路郎先生の絶筆となった。一人の作家の運命は、師との出会いにあると思われるが、橘高薫風が麻生路郎という一徹無比、炎の如き情熱の川柳詩人を師と仰いだことは一つの僥倖といえるであろう。「一句を残せ」「いのちある句を創れ」と叫び敢然と職業川柳人を宣言した麻生路郎をここから師父として仰向したところに今日の彼の作句姿勢が培われたのである。

○注2 七月に寒疔たてて師を送る

○路郎忌に炸裂したるカンナの朱

○師はあらず文学小径埒もなや（尾道にて）

○元旦や偈頌のごとくに師の一句

○路郎の忌立膝癖も師父ゆずり

橘高薫風は昭和29年暮、注3明和病院（大阪）に入院。川柳を本格的に作りはじめたのは二年後の三月である。この間彼は病床に呻吟し、骨肉を切り

とり、内蔵まで一部切除する難病で死線をさまよった。その子をそれこそ必死で看取ったのは母で、母と子が相抱きあうような凄絶なその闘病記は、この母子の絆をより固く深いものにした。路郎先生を句集貯金で泣かせたその母と子だ。

○入院やわが来し方の土埃（入院手術六句）

○天井が未来へ移行担送車

○麻酔より醒めて必ず夜なりけり

○鷺一羽身じろぎもせぬ手術熱

○秋の雨しずかに粥がこなれゆく

○胃半分肺半分湯呑かな

これ故にか、彼の母親孝行は川柳界のみに止まらずこの母子を知る人々が感銘と羨望の念すら呼び起こしたほどだ。この仲睦い母子と子の絆の深さによく耐え、陰で支えた漢子夫人の心労は、並大抵のもでなかつたろう。しかしそのかけがえのない母の死が突然彼の頭上から襲いかかった。

○砂時計突如童巻母が死ぬ

痛ましいこの母思いの慟哭の一句は、惻隠の涙をそそってやまず飄々居士の異名の筆者ですら涙を溢れさせた。「愛染」のあとがきにも「母の死の前後から腑抜け」になったとその心境の一端をのぞかせている。その母思いの句は、誰しも心うたれぬものはないであろう。

○亡母の闇は鬱金の闇か夢に見たし

○亡母の闇この夜は雨が降っています

○香の銘天菊とあり亡母の闇

○白菊千日注4 仏と飽きはしませぬか

○墓の前もとの子一人母一人

○母の顔安楽椅子の観世音

紹介が遅れたが橘高薫風還暦記念の第四句集「愛染」が出た。注5この句集は既刊の「有情」「れもん」「肉眼」（昭48）の三冊から抜すいた秀作約八百句から成っている川柳生活27年の川柳生活を貫き通した人間薫風の記録である。

この句集のあとがきのなかで「詩歌の本質は、相聞と挽歌がその両輪をなすものと考えている」と述べている。相聞とは男女間の恋歌、挽歌とは葬送の悼歌である。万葉集ではこの二つに雑歌を加えて部立の基本としていることは周知の通り。彼はこの句集で師と母の挽歌をつづるかたわら、相聞・雑歌に余すところなく豊かな語彙を駆使して、典雅と気品ある恋うたを詠じ尽している。文語や語彙の多用は、硬質な都会的叙情とも受けとれる。すべて鑑賞者に対し、行き届いた心証の伝達に成功している。その技巧を支えているものは川柳的な「穿ち」である。晩年の路郎先生が唱えたこの「穿ち」の味に筆者は路郎先生の衣鉢を継ぐ彼の姿を垣間みるのである。以下紙数がないので心に残る作品を記しておく。

○労働歌蟻が注6 うたえば凄かるう || 「有情」 ||

○都会の夜セロリは母の香に似たり

○一匹の蚊に病室の広いこと (母入院)

○檻の鶴又眼を閉ずるほかはなし

○草いきれ万葉の世の相聞歌

○鼻の香を嗅ぐ顔をして接吻し

○砂丘有情お前と月の出を待とう

○傘さしてやつてる方が刑事なり

○乱れ髪式部の世より恋は憂き

○紫の椅子の愁いはわが愁い

○蜂の歩くは落武者に似る

○六法全書の重さと聖書の重さ

○つりあわぬ恋にかじかむ女の手

○惜春の音の一つに昼の三味

○城のある注7 町へと旅は恋に似る

○淡雪のいつから君を知りそめし (窪田久美子さんへ)

○糸切れた琴はある夜の女に似

○母の手をひいて砂丘の狐雨 (鳥取砂丘にて)

○初恋の注8 うすずみいろとなりけり

○恋なれや汝れに羽交のある如し

○鬼灯よわが七才に恋ありき

○わが子男子旭のごときまる裸 (長男充誕生) || 「肉眼」 ||

○建国祭寒の卵に血がまじり

○勤々と水かけ不動恋の垢

○舟歌は最も人を恋う歌か

○仏像を恋うるがごとき恋となり

○海渡るたかが佐渡とは言う忽れ

○眼鏡屋は鱗雲ほど並べたり

○讃岐富士一番星を簪に

○人の世や嗚呼にはじまる広辞苑

○ジンフーズ美人は注9 美徳だなど思う

○恋人がいま肉眼に入り来る

○足摺の雨は遍路へ地から降る || 「愛染」 ||

○夢に見る父は父よりやさしかり

○失恋の四十九日となりけるよ

○花言葉忘恩もある不死もある

○晩秋に水は一番重くなる

○チューリップ胡蝶の奈落かもしれず

○死後の肋は赤い鳥棲む鳥籠に

○紫に男女の別があるごとし

○昔から女が走る愛の時

○モンロー忌黒子の位置の恐るべし

○飲む会のハガキは箸で裏返す

○百匹になると鱈も修羅になる

○手榴弾注10 かって握りし手にレモン

○やわらかい枕に義理が注11 すたれいく

○僕の富レモン一個を棺に入れよ

○八十になったら恋をしてみよう

「八十になったら」の句は、本句集末尾の作品である。この句に四国多津の才女三井醉夢さんから「八十になったら恋のお相手を」の祝吟を頂戴したと、薫風先生大喜び、(塔十二月編集後記) これこそまさに相聞である。

注1 「昭和40年6月に出了。」：昭和40年7月11日発行。路郎の臨終(7月7日)には間に合わなかった。

注2 「七月に寒疣たてて師を送る」：炎天に寒疣たてて師を葬送る、が句集の句。二一六参照。

注3 「明和病院(大阪)」：明和病院の当時の住所は、兵庫県西宮市上鳴尾町。注4 「仏と」：仏も、が正しい。

注5 「この句集く三冊から抜すいた」：三冊の句集からの抜粋と、『肉眼』以後の作品をまとめたもの。

注6 「うたえば」：歌えば、が正しい。

注7 「町へと」：町への、が正しい。

注8 「うすずみいろ」：うすみずいろ、が正しい。

注9 「美德だなどと思う」：美德だと思ふ、が正しい。

注10 「かつて握りし手に」：かつて握りし手に、が正しい。

注11 「すたれいく」：すたれ行く、が正しい。

② 『愛染』所収の句で『橋高薫風川柳句集』未収録のもの

【例】 長崎行 四句のうち未収録の句。

かまぼこと平戸未練を持ち帰る 106 50年7月

句の下の数字は頁数。頁数の下に初出のわかつているものを示した。「50年7月」とあれば、「川柳塔」昭和50年7月号自選欄に掲載されたものであることを示す。(昭和50年6月号発表の句から、薫風作品は選を受けずに自選欄に掲載されるようになった)。句の異同も下に記した。各句会で、日の記述のないもの(例えば「玄人が」の句等)は、「川柳塔」の各地柳壇に掲載されたもの。

『有情』『檸檬』『肉眼』から再録した句・頁数も下に記した。次の例で言えば、70は『愛染』の頁数。66は『肉眼』の頁数。

彼岸会の無音無明は亀にあり 70 『肉眼』66

『橋高薫風川柳句集』未収録の句数は、次のとおりである。

『有情』の章 七五句収録のうち 一句

『檸檬』の章 一五五句収録のうち 一七句

『肉眼』の章 二四五句収録のうち 二二句

『愛染』の章 四〇五句収録のうち 七五句

すなわち、『橋高薫風川柳句集』未収録の句は、計八八〇句のうち一一四句である。

『愛染』

『有情』

二枚ずつ二枚ずつ切る熱海駅

『檸檬』

除夜を聞く一つの旅を終えしごと

あわれ子もやがて知るべし父の恋

雷蝶 ステンドグラスからこぼれ

蜂の歩くは落武者に似る

憂鬱を伝染して帰る女かな

愛別離苦テープの色も濃紫

川の面の煙突の音楽的

黒髪を梳くバイオリン弾くごとく

鼻の孔耳の孔まで元旦也

螢飛ぶ一匹なれば人を恋わしむ

ラーメンの胃の腑に思案なかるべし

明石

蛸壺へ人の子寝かす子守唄

蛸壺へ人の子寝かす子守唄

39 『檸檬』67

6 『有情』32

17 『檸檬』134

19 『檸檬』144

22 『檸檬』149

22 『檸檬』149

22 『檸檬』141

22 『檸檬』98

24 『檸檬』87

25 『檸檬』80

27 『檸檬』85

29 『檸檬』73

30 『檸檬』68



愚の酒で愚の骨頂となり給え

1 2 4  
53年6月

先生と同じベレーを被っていても

1 2 5  
53年6月7日、本社「帽子」軸

はた目には余程の度胸僧になる

1 2 5  
53年6月7日、本社

落日と夕日は違う別れ来て

1 2 6  
53年8月

最晩年充実紫陽花濃紫

1 2 6  
三井が丘川柳会。昭和53年  
6月18日「自由吟」軸吟

氷挽く鋸友情も篤からん

1 2 6  
53年8月

モンロー忌飯田蝶子も死んだれど

1 2 7  
53年7月23日(日)  
モンロー忌句会(中尾藻介居)

月光は黄金から白金へ告白す

1 2 9  
53年11月

赤い弓持ったばかりに天使随つ

1 3 1  
53年11月

紫の花何本も摘み難し

1 3 2  
54年1月

削られて以来丘には虹立たず

1 3 3  
54年1月

海の風宮島蟬の越天楽

1 3 4  
54年4月

丸い石四角い石をさげすむか

1 3 4  
54年2月「どんぐり川柳会」  
54年4月6日日本社

一年生だけは帽子を着てくれる

1 3 6  
54年4月29日 室生村 上田

牛が眼をつむると大平正芳か

1 3 7  
54年4月29日 室生村 上田  
翠光居句会「牛」

蜂蜜に花の香りの遠い人

1 3 8  
54年7月

路郎選集校正しおり路郎忌に

1 3 9  
54年9月

火の恋と氷の恋に天の川

1 4 1  
54年11月

朱の菊あつてもよしと思ふなり

1 4 1  
54年12月

銃殺と同じにモデル囲まれる

1 4 2  
54年12月「駒つなぎ川柳会」

河内天笑・野坂つき子さんへ

1 4 3  
55年2月

月が出て蒼天笑う如くなり

1 4 3  
55年2月24日、第27回大萬

激励を着い背広で聞いている

1 4 3  
55年2月24日、第27回大萬  
川柳大会「激励」軸

銀杏の黄労働よりも透き通り

1 4 3  
55年1月

かたくなに句をつくらねば喪のごとし

1 4 4  
55年8月

選挙をば戦と呼ぶは平和かな

1 4 4  
55年8月

赤い駅青い駅あり人生に

1 4 5  
55年7月7日、路郎忌・  
薫風東洋樹賞受賞記念本社「駅」軸吟

通り抜け附和雷同の顔連ね

1 4 6  
55年4月20日「三井が丘」  
「自由吟」軸吟

いつまでも背もたれない僕の椅子

1 4 6  
55年11月

やわらかい枕に義理がすたれ行く

1 4 7  
55年10月7日  
本社「枕」軸吟

雪霏々と滝の吐き出すものでなし

1 4 8  
56年12月7日

杯なめて木曜とらえどころなし

1 4 8  
56年12月7日

決断の兜をかむる顔になる

1 5 8  
56年12月7日  
本社「決断」軸吟。

流木は岸見え出してから焦る

1 6 1  
57年7月21日「翠洋会」  
「岸」互選

真実のほど雑草の花白し

1 6 2  
57年7月18日「ねやがわ」  
「真実」高杉鬼遊選

大正はガムを吐かねば字は書かぬ

1 6 3  
58年2月

来し方を溶かせば淡いむらさきか

1 6 3  
58年3月

りんどうの花の情熱こそ確か

1 6 4  
58年4月

梅が言う少し上手に齡とれと

1 6 4  
58年4月

往診で猫の仲人して帰る

1 6 8  
58年7月17日「ねやがわ」  
「自由吟」軸吟

正月元旦から物足らぬ物足らぬ

1 6 9  
59年2月「翠洋会」

河豚提灯ふぐは涙をこぼさぬか

1 6 9  
59年1月 岸和田偶作

足形の果なくつづく雪女体

1 6 9  
59年3月

風邪ひいた顔も魅力であった頃

1 7 0  
59年6月「サークル檸檬」

内緒ごと花の下では言いにくし

1 7 0  
59年6月「サークル檸檬」

背番号1は孤独を強いるよう

1 7 1  
59年6月「サークル檸檬」

犬を見ているすしばらく犬時間

1 7 2  
59年6月「サークル檸檬」

## 5 『古稀薫風』

### ① 句集『古稀薫風』について

句集『古稀薫風』の奥付を記す。

平成七年十一月七日発行

著者 橘高薫風

発行人 冲山隆久

発行所 株式会社冲積舎

東京都千代田区神田神保町一・五二郵便番号一〇一

電話〇三・三三九一・五八九一 振替〇〇一三〇・七・一七七六三二

シライ・フォトタイプ＋互恵印刷／小高製本

題字は著者。装釘は戸田ヒロコ。B6判・一二七頁（索引一八頁を含む）。定価三千円。九九九句収録。その内、八一三句は過去の句集から再録したもの。すなわち、一八六句が、『愛染』以後の作品。

路郎の序・薫風のがき・経歴・田辺聖子の帯文を参考に載せておく。

#### 序

視野無限

この言葉に尽く

昭和四十年初夏のころ

麻生路郎 識

あとがき

身心ともに脆弱な私が古稀まで生きることの出来たのは川柳のお蔭で、麻生路郎先生をはじめとする恩師、先輩、仲間の庇護、支援を心から感謝いたします。

この句集を、青玄の伊丹三樹彦先生のご紹介で冲積舎から発刊出来たことをよろこび、冲山隆久社長のご指導に深くお礼を申し上げます。

九月九日

橘高薫風

#### 経歴

大正15年7月11日兵庫県尼崎市に生まれる  
桐生高等工業学校三年中退（現群馬大学工学部）

昭和30年1月川柳作句をはじめ

昭和32年麻生路郎先生に師事 川柳雑誌社編集部に入る

昭和40年川柳塔社創立委員として先生の遺志を継ぎ「川柳塔」を発行

昭和45年編集長に就任

昭和57年副主幹・副理事長に就任

平成2年理事長に就任

平成6年主幹に就任

社団法人 全日本川柳協会理事

日本現代詩歌文学館評議員

選者 朝日新聞なわ柳壇

山陽新聞柳壇

キリスト教月刊誌「声」川柳

大阪都市協会月刊誌「大阪人」川柳

大阪府警本部月刊誌「なにわ」川柳

西日本文字放送川柳教室

講師 N H K文化センター

N H K学園川柳入門

朝日カルチャーセンター

毎日文化センター

産経学園梅田第二

各川柳教室

田辺聖子の帯文。なお、この推薦文は、『喜寿薫風』の帯にも使用された。

薫風川柳はその号のようにさわやかですがすがしい。平淡だが高雅な味わいがある。氣韻に富む川柳といおうか。しかし決してかたくるしくなく、暖かだ。「桐一葉猫も座禅の向うむき」——人の世をいつくしみ、川柳でお人柄を練ってこられた。川柳歴を重ねられるにつれ、足どりかるく自在に句境を深められた。「地震熄んで一輪の薔薇毅然たり」しらべも流麗で、日々愛唱するに足る。句格は高いが、愛すべく貴むべき珠玉集といえよう。

② 『古稀薫風』所収の句で『橘高薫風川柳句集』未収録のもの

【例】 長崎行 四句のうち未収録の句。

かまぼこと平戸未練を持ち帰る 106 50年7月

句の下の数字は頁数。頁数の下に初出のわかっているものを示した。「50年7月」とあれば、「川柳塔」昭和50年7月号自選欄に掲載されたものであることを示す。(昭和50年6月号発表の句から、薫風作品は選を受けずに自選欄に掲載されるようになった)。句の異同も下に記した。

『有情』『檸檬』『肉眼』から再録した句・頁数も下に記した。次の例で言え、70は『愛染』の頁数。66は『肉眼』の頁数。

彼岸会の無音無明は亀にあり 70 『肉眼』66

『橘高薫風川柳句集』未収録の句数は、次のとおりである。  
過去の句集から再録した作品八二三句のうち、

『有情』の作品 一句

『檸檬』の作品 一四句

『肉眼』の作品 一七句

『愛染』の作品 四五句

『愛染』以後の作品一八六句(『愛染』には収録されなかった59年作の

友三人) (美し夜の) も含む) のうち四六句未収録。

すなわち、収録句数九九九句のうち一二三句が未収録である。

『古稀薫風』

二枚ずつ二枚ずつ切る熱海駅	13	『有情』	32
除夜を聞く一つの旅を終えしごと	23	『檸檬』	134
あわれ子もやがて知るべし父の恋	25	『檸檬』	144
雷蝶ステンドグラスからこぼれ	28	『檸檬』	149
蜂の歩くは落ち武者に似る	28	『檸檬』	149
憂鬱を伝染して帰る女かな	28	『檸檬』	141
愛別離苦テープの色も濃紫	28	『檸檬』	98
川の面の煙突の影音楽的	30	『檸檬』	87
黒髪を梳くバイオリン弾くごとく	31	『檸檬』	80
鼻の孔耳の孔まで元旦也	33	『檸檬』	85
螢飛ぶ一匹なれば人を悲しむ	35	『檸檬』	73
明石			
蛸壺へ人の子寝かす子守歌	36	『檸檬』	67
故郷に残る切株悔いのごとし	48	『檸檬』	13
わが影の障子の影も香林忌	48	『檸檬』	12
春愁の最たるは鳥歯を持たぬ	51	『檸檬』	42
ベトナムや都会の鳩の鉄のいろ	59	『肉眼』	29
蠟燭の教来し方の女人像	62	『肉眼』	37
受験子に昼夜階なす時間表	63	『肉眼』	37
天使と同じ羽根でクリスマスカードが着く	64	『肉眼』	43
お年玉不兌換紙幣ばかりなり	66	『肉眼』	45
四十過ぎ闇の深さが見え初めて	69	『肉眼』	59
能登から佐渡へ八句の一句			
さい果ての旅に見し滝海へ落つ	71	『肉眼』	63
晩涼の木に吊るされし歌謡曲	73	『肉眼』	67
一人旅切符切らるる音もよし	73	『肉眼』	67
望郷よ地図の上では三種	78	『肉眼』	85
菊の呼吸処女懐胎もありぬべし	78	『肉眼』	86

額縁を出て薔薇捨てし夫人像	8 3	『肉眼』	1 0 5
ベトナムの難民に似た瘦昼寝	8 8	『肉眼』	1 1 9
枯枝に鳥幾世の友情か	9 0	『肉眼』	1 2 5
黒い炎は人妻の掌の黒茶碗	9 1	『肉眼』	1 2 7
琴古く曲新しくいのちの譜	9 3	『肉眼』	1 3 1
当選をしたら蝶を裏返し	9 5	『肉眼』	1 4 0
穩健を徳となすなり福寿草	1 0 0	『愛染』	9 9
のけぞって見えた師走の青い空	1 0 1	『愛染』	1 0 0
鉄の火と芒の炎男と女	1 0 3	『愛染』	1 0 4
田中を刺し中曾根を刺す標本名黄金虫	1 0 4	『愛染』	1 0 4
胡座して仏のあぐらより涼し	1 0 4	『愛染』	1 0 5
帛省子に地酒の味が真新し	1 0 6	『愛染』	1 0 7
白い服の娘に与えしは白薔薇	1 0 7	『愛染』	1 0 8
スト権スト昨日は勤労感謝の日	1 0 8	『愛染』	1 0 9
盃の酒甕の酒より重し	1 0 8	『愛染』	1 1 0
緑陰におならしそうな羅漢さん	1 1 2	『愛染』	1 1 3
鶉もやがて切り絵の闇に紛れたり	1 1 2	『愛染』	1 1 4
醉眼に鞆綱の張りの十二筋	1 1 2	『愛染』	1 1 4
綻びを繕うごとく鳴くちちろ	1 1 2	『愛染』	1 1 4
ペン握る指のかたちも枯れはじめ	1 1 3	『愛染』	1 1 4
死後の肋は赤い鳥棲む鳥籠に	1 1 3	『愛染』	1 1 5
恋文の緘は水平線に見え	1 1 6	『愛染』	1 1 8
桃の花桃の実桃の核みなわたし	1 1 8	『愛染』	1 2 0
ものを書く姿勢に骨は安んずる	1 1 9	『愛染』	1 2 1
落日と夕日は違う別れ来て	1 2 2	『愛染』	1 2 6
最晩年充実紫陽花濃紫	1 2 2	『愛染』	1 2 6
氷挽く鋸友情も篤からん	1 2 3	『愛染』	1 2 6
紫の花何本も摘み難し	1 2 8	『愛染』	1 3 2
削られて以来丘には虹立たず	1 2 9	『愛染』	1 3 3

海風の風官鳥蟬の越天楽	1 2 9	『愛染』	1 3 4
一年生だけは帽子を着てくれる	1 3 1	『愛染』	1 3 6
牛が眼をつむると大平正芳か	1 3 2	『愛染』	1 3 7
蜂蜜に花の香りの遠い人	1 3 3	『愛染』	1 3 8
路郎選集校正しおり路郎忌に	1 3 4	『愛染』	1 3 9
河内天笑・野坂つき子さんへ			
月が出て蒼天笑う如くなり	1 3 7	『愛染』	1 4 3
銀杏の黄労働よりも透き通り	1 3 8	『愛染』	1 4 3
かたくなに句をつくらねば喪のごとし	1 3 8	『愛染』	1 4 4
選挙をば戦と呼ぶは平和かな	1 3 9	『愛染』	1 4 4
赤い駅青い駅あり人生に	1 3 9	『愛染』	1 4 5
いつまでも背もたれのない僕の椅子	1 4 0	『愛染』	1 4 6
やわらかい枕に義理がすたれ行く	1 4 1	『愛染』	1 4 7
雪霏々と滝の吐き出すものでなし	1 4 2	『愛染』	1 4 8
杯なめて木曜とらえどころなし	1 4 2	『愛染』	1 4 8
決断の兜をかむる顔になる	1 4 3	『愛染』	1 4 8
流木は岸見え出してから焦る	1 5 3	『愛染』	1 5 8
真実のほど雑草の花白し	1 5 3	『愛染』	1 5 8
来し方を溶かせば淡いむらさきか	1 5 6	『愛染』	1 6 2
りんどうの花の情熱こそ確か	1 5 7	『愛染』	1 6 3
梅が言う少し上手に齡とれと	1 5 8	『愛染』	1 6 4
正月元旦から物足らぬ物足らぬ	1 5 8	『愛染』	1 6 4
風邪ひいた顔も魅力であった頃	1 6 2	『愛染』	1 6 9
今年また孫からかかる初電話	1 6 2	『愛染』	1 7 0
書初め虎の一字に心足る	1 7 1	昭和61年1月	
考える人の指まで考える	1 7 1	昭和61年1月	
龍飛岬	1 7 1		
友三人鼎のごとし風の中	1 7 2	昭和59年8月	
甲吉・五楽庵氏と			



## 6 『師弟』

### ① 句集『師弟』について

川柳句集『師弟』の奥付を記す。

平成11年3月20日発行

編者 橘高 薫風

発行人 齋藤 俊輔

発行所 葉文館出版株式会社

本社 大阪市浪速区恵美須西2・9・15 〒105・0012

印刷所 凸版印刷株式会社

定価(本体1429円十税)

表紙絵は野尻弘。装幀は葉文館デザイン室。B6変型判・一一九頁。師である麻生路郎作品二五〇句と弟子である薫風作品二五〇句を合わせて五〇〇句収録。薫風作品は、『古稀薫風』から二一九句、『古稀薫風』以後の作品三一〇句が収録されているが、『古稀薫風』以後の作品に、(お元日われに白毫給われよ)が入っている。つまり、『古稀薫風』から二二〇句、『古稀薫風』以後の作品を三〇句収録している。『古稀薫風』(九九九句収録)から二二〇句を抽出した薫風の選句にも興味がそられる句集である。

薫風のあとがきを載せておく。

あとがき

最晩年賀状の宛名を書きながら、賀状に一句添えるようになって久しいとの感慨にふけり、川柳雑誌社の一員としての自覚を持ちはじめたから、はや四十二年経つことに気付いた。

麻生路郎先生が『川柳雑誌』の創刊号を出されたのが大正十三年、この世を去られたのが昭和四十年だから、こちらも四十二年に亘る真摯な歳月であ

った。私はこの偶然的の符合に大いに驚いた。

それで平成十一年三月二十日に開催する川柳塔社七十五周年記念川柳大会を機に、急拠、句集『師弟』の出版を思い立ったのである。

先生と句を並べることの烏滸がましさに躊躇しながら、麻生アトさんに申し出たところ、快くお許しを得ることが出来た。

まことに嬉しい限りで、大道をまっしぐらに進まれた先生と違って、私はということふらりふらり多くの仲間の介添えで凌いで来た修行の道程ながら、それでも万感の思いが押し寄せてくる。

世の中には文芸の世界に、師とか弟子というものがあるはずはないと言う人も多いが、私は路郎先生から、生きる上での魂のような、気骨ともいえるものを頂いた。これが師でなくて何であろう。

ただ期日に追われての不備な句集なので、完璧主義の先生の、あの苦虫を噛みつぶしたような顔を思い出さねばならないのが、この上なく辛い。

表紙は野尻弘画伯をお願いしたら即座に快諾を得た。路郎先生の晩年、『川柳雑誌』の表紙を飾って下さっていたのを思い出したのである。

画伯は古い雑誌を取り出し、路郎先生のイメージを新たに呼び起こして描いて下さった。

私としては望外の喜びで、この方は路郎先生も満足気に頷いて下さるに違いない。

心からお礼を申し上げます。

平成十年十二月

橘高 薫風

「川柳塔」平成11年6月号に、東野大八が『師弟』紹介文を執筆している。書き出しは、薫風のあとがきの引用なので省略する。

万感無量の句集

—橘高薫風編 「師弟・五百句」鑑賞 東野 大八  
(前半略)

川柳雑誌誌上における永年の常連寄稿家を自負する筆者は、万感無量の想いで、これまたお馴染深い野尻弘画伯装画のこの句集を撫でさすりながら呆然無為の一刻を過した。

川柳雑誌No.460は「麻生路郎追悼号」である。それを机上に取り出しながら、眼を通し、諸家満堂の悼文の数々を読み耽った。

「路郎先生は、短詩文芸における詩人としての非凡な素質をもちながら、柳誌柳社経営のためわざわざいされて、作品の上にそれを充分に発揮することができず、あたら珠玉を抱いて市井に埋没されたのではないか」(石原青竜刀)

「君も病院、僕も入院した、お互い早くなおるよう……と、はがきを出した。とたんに訃報が届いた。全く胸を打たれた。路郎君と僕とは、明治四十二年

夏の関西川柳家の句会から交際がはじまった。(中略) そのころから君は一本気で、川柳の主義主張もしっかりしていた。川柳雑誌を興すまでは、新興川柳の旗をにかけて五、六年は誌上で議論も多かった。川柳になってからは、同じ川柳(新興臭のない)傾向だったのでコンビになった」(岸本水府)

この二十歳台の頃の思い出を綴った水府先生のお見舞文は、この人の遺書となった。月余を出ずしてこの水府先生も死去されているからだ。

「薫風君がいな、あれはええ素質を持つてる。今に川雑を背負ってたつてくれるよ」

こう晩年の路郎先生は、青竜刀師同道で万代西五の先生宅を見舞った折、

そうベッドの上で述べ懐かれた、機嫌のよい路郎先生のお言葉だった。今もその一言を忘れないのだが、いまその薫風君が、川雑を継承する川柳塔主幹としてこの「師弟・五百句」の句集を編まれ、世に出されたことは、筆者としても望外の本懐として誠に喜びに堪えないところである。麻生路郎作品の最後の遺詠である三句のうちの「いろはおくり」は、文楽の「菅原伝授手習鑑」

の送り台詞からだし、「雲の峰」は、路郎先生が大好きだった夏目漱石の俳句「雲」からである。その末期の名句の今更ながら感無量の涙を催す筆者である。

② 『師弟』所収の句で『橘高薫風川柳句集』未収録のもの

【例】 雪うさぎ昭和の雪はもつと白 115 平成11年1月

句の下の数字は頁数。頁数の下に初出のわかっているものを示した。「平成11年7月」とあれば、「川柳塔」平成11年1月号に掲載されたものである。

二五〇句のうち、次の九句が未収録。『古稀薫風』以後の作品は、三〇句のうち、七句未収録。

『師弟』

古稀薫風

蜂の歩くは落武者に似る 72

古稀薫風以後の作品

寝姿も迷う形でいるらしい 103

椰子の木は太陽によし月によし 109 平成6年8月8日、本社句会  
「太陽」軸吟。

お元日われに白毫給われよ 109 『古稀』201

木犀と百米の匂いに居 110 平成7年11月

男親の一言やよし好きにせい 110 平成8年8月7日(水) 本社句会  
「好き」軸吟。

雪月花女いてこそ匂い立ち 110 平成8年9月9日(月) 本社句会  
「女」軸吟。

咳の数生き身も枯葉払うなり 111 平成9年2月

雪うさぎ昭和の雪はもつと白 115 平成11年1月

## 7 『喜寿薫風』

### ① 句集『喜寿薫風 自選三百句』について

句集『喜寿薫風 自選三百句』の奥付を記す。

平成十五年七月十七日発行

編者 橘高薫風

発行人 冲山隆久

発行所 株式会社冲積舎

東京都千代田区神田神保町一・五二郵便番号一〇一・〇〇五一

電話〇三・三三九一・五八九一 振替〇〇一三〇・七・一七七六三二

文昇堂印刷／松栄堂製本

装釘は伊丹啓子。B6判・二六九頁。扉に、父母に捧ぐ、とある。過去の句集から選んだ二六七句と、『橘高薫風川柳句集』以後の作品三三三句を合わせて、三〇〇句収録。定価（本体三千円＋税）

あとがきと略歴を載せておく。

あとがき

四恩の恵みを受け

存分に川柳をたのしみ

蒲柳の私が喜寿を迎える

ありがたいことです

平成十五年五月吉日

橘高薫風

### 橘高薫風略歴

〈本名〉

橘高きつたか薫かおる

〈本籍地〉

大阪市豊中市中桜塚三丁目十三番十五・一〇二号

〈現住所〉

大阪市豊中市中桜塚三丁目十三番十五・一〇二号

〈生年月日〉

大正十五年七月十一日

〈学歴〉

昭和十八年三月 兵庫県立尼崎中学校卒業

〈職歴〉

元旅館経営

現在マンション経営

〈川柳歴〉

昭和三十年一月 川柳作家として活動開始（現在に至る）

昭和五十年六月 日本川柳協会理事に就任（平成四年五月まで）

平成四年六月 社団法人日本川柳協会理事に就任（平成六年五月まで）

平成六年六月 社団法人日本川柳協会常務理事に就任（現在に至る）

平成七年六月 全日本川柳誌上大会特別委員長に就任

平成八年六月 全日本川柳誌上大会出版委員長に就任（現在に至る）

昭和三十二年一月 麻生路郎に師事

昭和三十三年二月 『川柳雑誌』編集に従事（昭和四十年九月まで）

昭和四十年十月 川柳塔社創立委員として「川柳塔」誌を発行（現在に至る）

昭和四十五年十一月 川柳塔社副主幹、副理事長に就任（平成二年九月ま

で）

平成二年十月 川柳塔社理事長に就任（平成六年五月まで）  
 平成六年六月 川柳塔社主幹に就任（平成十二年九月まで）  
 平成十二年十月 川柳塔社名誉主幹に就任（現在に至る）  
 昭和六十二年四月 日本現代詩歌文学館評議員（現在に至る）  
 平成六年七月 大阪川柳人クラブ副会長（現在に至る）

〈文化団体歴・選者歴〉

昭和五十年一月 キリスト教月刊誌「声」川柳（現在に至る）  
 昭和五十五年六月 朝日新聞なにわ柳壇（現在に至る）  
 昭和五十六年一月 山陽新聞柳壇（現在に至る）  
 昭和五十六年五月 NHKラジオ川柳選評（平成二年まで）  
 昭和五十六年十月 西日本文字放送川柳教室（昭和六十四年まで）  
 昭和六十年一月 大阪都市協会月刊誌「大阪人」川柳（現在に至る）  
 平成六年六月 大阪府警察本部月刊誌「なにわ」川柳（現在に至る）  
 平成六年六月 南海電鉄情報誌「サウスウェーブ」川柳（現在に至る）  
 平成八年十月 第十一回富山県国民文化祭川柳大会（選者）  
 平成十一年十月 第十回岐阜県国民文化祭（選者）

第一回全日本川柳誌上大会（選者）  
 第二回全日本川柳誌上大会（選者）  
 第五回全日本川柳誌上大会（選者）  
 第二十一回全日本川柳誌上大会（選者）  
 第二十三回全日本川柳誌上大会（選者）  
 第二十四回全日本川柳誌上大会（選者）

〈講師歴〉

昭和五十五年六月 朝日カルチャーセンター（現在に至る）  
 昭和五十六年六月 NHK文化センター大阪（現在に至る）  
 昭和五十六年六月 NHK学園川柳入門（現在に至る）

昭和五十六年十月 毎日文化センター（現在に至る）  
 昭和五十六年十月 産経学園梅田第二（現在に至る）  
 平成元年一月 豊中身障者福祉センターひまわり（現在に至る）  
 平成九年四月 NHKりんくう文化教室（現在に至る）  
 平成十二年七月 よみうり松坂屋大阪文化センター（現在に至る）

〈賞罰〉

昭和五十五年五月 第十二回三條東洋樹賞受賞  
 「時の川柳」を創立し主幹をつとめていた三條東洋樹が昭和四十二年二月私財を投じて創設した賞。その年度の柳界に功績のあった川柳作家と結社を表彰した賞であり、川柳界のノーベル賞とも称されていた。昭和五十八年十一月東洋樹が没するまで続き、十八人の川柳作家と二つの柳社が表彰された。東洋樹の川柳理念は十七音の定型、平易簡明な句姿、批判精神を重視する物であり、川柳界に大きな影響力を及ぼしていた。  
 平成十三年四月 春の叙勲木杯一組台付賜与さる。

〈川柳関係著作〉

昭和三十七年九月 川柳句集「有情」発刊  
 昭和四十年七月 「檸檬」発刊  
 昭和四十八年十一月 「肉眼」発刊  
 昭和六十年八月 「愛染」発刊  
 平成七年十一月 「古稀薫風」発刊  
 昭和五十四年七月 著書「麻生路郎」発刊  
 昭和五十八年七月 「なにわ川柳この一句」発刊  
 昭和六十年七月 「川柳に見る大阪」発刊  
 平成十一年三月 「師弟」発刊  
 平成十三年九月 「橘高薫風川柳句集」発刊  
 平成十四年三月 「橘高薫風川柳文集」発刊

『川柳塔』平成15年10月号に、編者が『喜寿薫風』について記した小文を再録する。

白日紅虹

栗原道夫

『喜寿薫風』には、『橘高薫風川柳句集』（平成十三年九月二十日発行。以下『川柳句集』と記す。）から二六七句、それ以外の句三三句、合わせて三〇〇句が収められている。『川柳句集』は、「乱れ髪」「有情」「檸檬」「肉眼」「愛染」「花径」の章に分かれている。『喜寿薫風』は、章立てがなされていない。それぞれの章から自選された句数は、以下のとおりである。

「乱れ髪」 一〇句

「有情」 二二句

「檸檬」 五〇句

「肉眼」 五〇句

「愛染」 七七句

「花径」 五九句

ほぼ『川柳句集』の所収順に配列されているが、次の二句だけ違っている。鼻先をつんつん歩く好きな人

235ページから、『川柳句集』以後の句が三二句収められている。次の句も『川柳句集』にはない句であるが、188ページに収められている。

元旦や昭和の雪はもつと白

この句は、形は異なるが「川柳塔」の平成十一年一月号に発表されたものなので、「花径」の句と並べているのだと思われる。「川柳塔」には、次の形が出ています。

雪うさぎ昭和の雪はもつと白

作者にお聞きしたところ、最初から、「元旦や」と「雪うさぎ」の二通りの句を作っていたということだ。

『川柳句集』以外の句で、このように初出時の句と異なった形の句が五句ある。最初の句が『喜寿薫風』に収められた句。下に年月を記したものが、

「川柳塔」初出時の句。

1 元旦や昭和の雪はもつと白

雪うさぎ昭和の雪はもつと白 11・1

2 葉隠れに武士道プラトニッククラブ

淡々と武士道プラトニッククラブ 14・6

3 喜寿元旦白日紅虹灯台よ

志摩波切にて

白日紅虹 灯台と喜寿よき友ぞ 14・12

4 老一字狼の尾を巻くごとく

老いぬれば狼の尾を巻くごとく 15・6

5 魂魄を天地に分ちグッドバイ

魂魄を天地に分ち香華かな 15・6

1は、平成十一年の卯年にちなんで作られた句。「雪うさぎ」だと、「雪」が重なり、「うさぎ」の白と「昭和の雪」との対比とも受け取れる。「元旦や」とすることによって、平成の薄汚れた雪から、昭和の、平成よりは清浄な寒々とした雪を追憶する句であることが明確になる。

2は、原句の「淡々と」という説明のことは避けたのだろう。

3は、「喜寿元旦」の句にするために、「よき友ぞ」ということを省いたのだと思われる。初出時にあった前書きの「志摩波切にて」も省かれている。

4は、「老いぬれば」だと平板。「老」の字の「ヒ」の最後のハネの部分が、老いを感じている作者には狼が尾を巻いているように見える。「老一字」と切ることによって、「老」の字を通して自分の老いを見つめるという立体的な句になった。

5は、「グッドバイ」によって、「魂魄を天地に分ち」の主体が、他人から自分になった。

これらの改作を見て、私が何よりも感じたのは、作者の自身の作品へのこだわりである。自身の作品への愛着と云ってもいい。

235ページからの三二句の三〇句は、「川柳塔」に掲載された句で、発表年月順に並んでいる。次の二句は、「川柳塔」未掲載の句。

僕僕と恋は少年に返えず (P253)

恋をするのももう煩わしいという心境を詠んだものか。お聞きしたところ、241ページの「葉隠れに武士道プラトニックラブ」があつて、出来た句だそう。

火の色と水の形に苅たち (P260)

「水の形」は、苅の形を水滴に見立てたということだ。正直言つて、お聞きするまで私には分からなかつた句。「たち」は複数を表す。

次のような句を読むと、先人の句が自然に思い浮かんでくる。

その昔今も昔のかき氷 (P245)

かき氷こころあたりはもと廓 栗

二句とも現在から往時を懐かしんでいる点では共通しているが、栗作品が世の変遷に重点を置いているのに対し、薫風作品は世の変遷に対して変わらないものを「かき氷」で象徴させている。

酒とろりとろり平成安愚楽鍋 (P247)

は、もちろん路郎の次の句を意識したもの。(〽は改行を示す。)

酒とろりとろり／大空のこころかも

「安愚楽鍋」は、牛鍋店を舞台にして明治初期の世相を描いた仮名垣魯文の作品。平成の世相を話題に気分良く酔っている作者の姿が目には浮かぶ鍋は当然、すき焼きだろう。

注 夕桜右大臣より年を取り (P257)

夕桜とんぼがへりがしてみたし 路郎

夕ざくら我七十の血の騒ぎ 栗

京都の知恩院の山門に左大臣と右大臣が居て、右大臣の方が年寄りだといふ。その右大臣よりも年を取ったという感慨を詠んだ。上五が決まらずにいたところ、路郎の「夕桜」を思い出して出来た句。私は、左大臣よりも位が下の右大臣よりも年を取ったと解釈し、物語を読んでいるような味わいがある句だと思つた。「夕桜」で切れているのだが、「お互い年を取ったなあ」と夕桜に語りかけているような気がする。童話的な次の句にも、たまらない魅力を感じた。

三日月で鉛筆削る山の家 (P255)

ここまで取り上げてきた句はすべて、『川柳句集』以外のものである。最近の薫風作品の傾向を探ることによって、自選句集『喜寿薫風』に少しでも近づけるのではないかと思つたからである。

『喜寿薫風』を通読した印象は穏やかさである。「静謐」「透徹」などのことばも浮かんだ。『喜寿薫風』には、「由紀夫の首といくばく距つ焼林檎」「横揺りにあしかが歩く金脈へ」のような、烈しく凄まじい句は収録されていない。現在の氏の心境が、自選するときにも影響を与えたのだろう。

この世の事は奈落にも底 (P244)

散る花に二人の孤独重ならず (P258)

句集の掉尾を飾る次の句を読んで、些かならぬショックを覚えたのは私だけではないだろう。

魂魄を天地に分ちグッドバイ

わがままな読者としては、白日に浮かぶ虹のような句(薫風先生、真っ白になつてもらつては困るのです。)を今後とも読み続けたいと願つているのである。

喜寿元旦白日紅虹灯台よ

(畢)

注 「夕桜右大臣より年を取り」……「川柳春秋(NHK学園)」73号(2004・4・1発行)の巻頭随想「夕桜」に、「私はまた昨年、久しぶりにいい花見をした。京都円山公園の有名なしだれ桜で、二代目が大樹になつてゐる。桜色した絢爛たる滝だ。八坂神社を石段下へ通り抜けるとき、夕桜右大臣より年を取り 薫風〽の句を得た。なかなかの出来とうぬぼれていたが、後日「雛まつり右大臣より年を取り」の句のあることを知る。げに怖ろしきは類想、年取ると鼻を折られることが多い。」とある。

「付言」読み返してみると、わがままな読者としての文章が些かならず面映ゆい。『喜寿薫風』は、薫風が父母に捧げた句集である。そのような視点から読み直さねばならない。

② 『橘高薫風川柳句集』以後の句

【例】三日月で鉛筆削る山の家 255 平成15年4月  
 句の下の数字は頁数。頁数の下に初出のわかっているものを示した。「平成15年4月」とあれば、「川柳塔」平成15年4月号に掲載されたものである。

『喜寿薫風』

元旦や昭和の雪はもつと白 188 平成11年1月  
 「元旦や」↑「雪うさぎ」  
 明月にひよいと内子座和蠟燭 235 平成13年11月  
 畳まれて目だけになった鯉のぼり 236 平成13年12月  
 初光赤兎馬老いて嘶かず 237 平成14年1月  
 醍醐寺にて写経  
 散る花に心経の字の一つずつ 238 平成14年3月 「字の」↑「字が」  
 「醍醐寺で写経」の前書  
 君と小蟹灯台まさにハイヌーン 239 平成14年4月  
 「小蟹」の後、一字空白  
 上巳節句  
 孫と行く春雪桃花赤ずきん 240 平成14年4月  
 「上巳節句」の前書  
 葉隠れに武士道プラトニッククラブ 241 平成14年6月  
 「葉隠れに」↑「淡々と」  
 恋文を候文で書いてみた 241 平成14年4月  
 ※芹摘んで芹摘んで女をうらむ 242 平成14年7月  
 ※路郎句集『旅人』に、「炭ついで 炭ついで 女をうらむ」がある。  
 さあみんなしつかり育て青田風 243 平成14年7月  
 この世のことは奈落にも底 244 平成14年7月  
 その昔今も昔のかき氷 245 平成14年8月

写真抱きしめる女も居なくなり 245 平成14年8月  
 蚊柱の下で別れた君も亡し 246 平成14年10月  
 「悼 樋口舟遊さん」の前書

酒とろりとろり平成安愚楽鍋 247 平成14年10月

皇孫愛子さま 二句

愛子さま日本の玉のごとおわす 248 平成14年11月

愛子さまはよ絵かきませ字かきませ 248 平成14年11月

喜寿元旦白日紅虹灯台よ 249 平成14年12月

〔白日紅虹 灯台と喜寿よき友ぞ〕で発表

一日を五つに分けて生きるなり 250 平成14年12月

妻 脳梗塞発作

妻ははや虚空を行けり魔界なり 251 平成15年1月

父ありき生生世世に母ありき 252 平成15年3月  
 「迎春苦楽」の前書

僕僕と恋は少年に返えず 253 平成15年4月

鯨呑も蚕食も世のありのまま 254 平成15年4月

三日月で鉛筆削る山の家 255 平成15年4月

物みな腐る早さに人もあり 256 平成15年5月

夕桜右大臣より年を取り 257 平成15年5月

散る花に二人の孤独重ならず 258 平成15年5月

春の風首は載つてただけのよう 259 平成15年6月

火の色と水の形に莓たち 260 平成15年6月

雪の浅間孀恋村や軽井沢 261 平成15年6月

老一字狼の尾を巻くごとく 262 平成15年6月

「老一字」↑「老いぬれば」

「ごとく」↑「ごとし」

魂魄を天地に分ちグッドバイ 263 平成15年6月

「グッドバイ」↑「香華かな」

改訂・増補『橘高薫風川柳句集』全句索引

発行日 平成二十年（二〇〇八）十月一日

編者 栞原道夫

住所 〒592・8349 堺市西区浜寺諏訪森町東二・二〇八・五

発行所 川柳塔社

住所 〒543・0052 大阪市天王寺区大道一・一四・一七  
花野ビル201号室

印刷所 RPSセンター